

# 北 高 田 遺 跡

- 四国横断自動車道(伊野～須崎間)建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 -

2000年3月

(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター



# 序

北高田遺跡があります土佐市域では近年、発掘調査が継続的に実施され多くの資料が蓄積されています。今回の調査では縄文時代晩期と弥生時代後期の遺構・遺物が数多く発見されました。弥生時代後期では竪穴住居跡、掘立柱建物跡、土坑などが検出され仁淀川流域では最大規模の集落であることが明らかとなりました。周辺には高地性集落である伊野町のバーガ森北斜面遺跡、銅矛が出土した土佐市の天崎遺跡などがあり、同時期の遺跡を含めた仁淀川流域の弥生社会復元に貴重な資料を得ることができました。

最後になりましたが、発掘調査に際しまして土佐市高田地区の皆様並びに日本道路公団の埋蔵文化財に対する深い御理解と御協力を賜ったことに心から謝意を表するとともに、発掘調査に従事して下さった作業員の皆様に心よりお礼申し上げます。

平成12年 3月

財団法人 高知県文化財団 埋蔵文化財センター

所長 河崎 正幸



# 例 言

1 本書は、財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センター（以下高知県埋蔵文化財センター）が平成10年度及び11年度に実施した四国横断自動車道（伊野 - 須崎間）建設に伴う北高田遺跡の発掘調査報告書である。

2 北高田遺跡は、高知県土佐市高岡町乙北高田および西山に所在する。

## 3 調査面積

平成10年度試掘調査:768m<sup>2</sup>

平成10年度本調査:5,400m<sup>2</sup>（ 区:2,570m<sup>2</sup>、 区:780m<sup>2</sup>、 区:1350m<sup>2</sup>、 700m<sup>2</sup>）

平成11年度試掘調査:150m<sup>2</sup>

## 4 調査期間

平成10年度試掘調査:平成10年5月25日～6月30日、同9月8日～9月18日、平成11年3月4日

平成10年度本調査:平成10年9月28日～平成11年3月31日

平成11年度試掘調査平成11年11月25日～12月1日

## 5 調査体制

### (1)平成10年度

統括	古谷碩志	高知県埋蔵文化財センター	所長
	西川 裕	"	調査課長
調査員	出原恵三	"	調査第3班長
	池澤俊幸	"	主任調査員
	久家隆芳	"	調査員
総務	大原裕幸	"	総務課主幹

### (2)平成11年度

統括	河崎正幸	高知県埋蔵文化財センター	所長
	西川 裕	"	調査課長
調査員	松田直則	"	調査第5係長
総務	大原裕幸	"	総務課主幹

6 本書の編集は出原が行い、執筆分担については本文目次に示した。

7 プラントオパール分析については、宮崎大学農学部教授藤原宏志先生にお願いし、玉稿を頂いた。



# 目 次

第 章 調査に至る経過（出原）	1
第 章 周辺の地理・歴史的環境（出原）	2
第 章 試掘調査（出原）	6
第 章 本調査の成果	
1 調査の方法（出原）	12
2 区の検出遺構と遺物	
(1) - A区（出原）	12
(2) - B区（池澤）	27
(3) - C区（久家）	37
3 区の検出遺構と遺物（池澤）	
(1) - A区	47
(2) - B区	53
4 区の検出遺構と遺物（久家）	
(1) - B区	56
(2) - C区	64
5 区の調査（出原）	
(1) - A区	74
(2) - B区	74
(3) - C区	86
第 章 考察	
1 北高田遺跡出土の縄文晩期土器（出原）	92
2 北高田遺跡出土の弥生後期土器について（久家）	96
3 高知平野における弥生時代の掘立柱建物と溝状土坑（池澤）	101
第 章 自然科学分析	
高知：北高田遺跡におけるプラント・オパール分析	112
遺物観察表	117

# 挿図目次

- Fig. 1 北高田遺跡と周辺の遺跡分布図  
Fig. 2 調査区及び試掘グリッド位置図  
Fig. 3 試掘グリッド1・2・4・6～8セクション図  
Fig. 4 試掘グリッド10～13・16・18セクション図  
Fig. 5 試掘グリッド21・23・25・30・31セクション図及びグリッド2・13出土遺物実測図  
Fig. 6 本調査区位置図  
Fig. 7 A区検出遺構全体図  
Fig. 8 A区基本層準  
Fig. 9 SB5平面図及びエレベーション  
Fig. 10 SB4平面図及びエレベーション  
Fig. 11 SK1平面図・エレベーション及び出土遺物実測図  
Fig. 12 SK2平面図・エレベーション及び出土遺物実測図  
Fig. 13 SK2出土遺物実測図  
Fig. 14 SK2出土遺物実測図  
Fig. 15 SK3平面図・エレベーション及び出土遺物実測図  
Fig. 16 SD3平面図・エレベーション及び出土遺物実測図  
Fig. 17 SD4・5平面図・エレベーション及びSD4出土遺物実測図  
Fig. 18 SD4出土遺物実測図  
Fig. 19 SD5出土遺物実測図  
Fig. 20 SB3 - P3 (87) 及び遺物包含層( 層 ) 出土遺物 (85・86・88～91) 実測図  
Fig. 21 B区検出遺構全体図  
Fig. 22 B区東壁セクション  
Fig. 23 SB8・9平面図・エレベーション及びSB8 - P6出土遺物実測図  
Fig. 24 SB10、SA2平面図及びエレベーション  
Fig. 25 SK10平面図・セクション・エレベーション及び出土遺物実測図  
Fig. 26 SK10出土遺物実測図  
Fig. 27 SK15平面図・エレベーション及び出土遺物実測図  
Fig. 28 SD16平面図・セクション・エレベーション及び出土遺物実測図  
Fig. 29 SD17平面図・セクション・エレベーション及び出土遺物実測図  
Fig. 30 SD17出土遺物実測図  
Fig. 31 SD19平面図・セクション  
Fig. 32 ピット及び遺物包含層出土遺物実測図  
Fig. 33 C区検出遺構全体図  
Fig. 34 C区基本層準  
Fig. 35 ST1平面図・セクション及び中央ピットセクション  
Fig. 36 ST1出土遺物実測図  
Fig. 37 SB10平面図・エレベーション  
Fig. 38 SB11平面図・エレベーション  
Fig. 39 SD13平面図・エレベーション及び出土遺物実測図  
Fig. 40 SD14平面図・セクション・エレベーション及び出土遺物実測図  
Fig. 41 SD15平面図・セクション・エレベーション及び出土遺物実測図  
Fig. 42 P6平面図・エレベーション及びP1～4・6出土遺物実測図  
Fig. 43 C区包含層出土遺物実測図  
Fig. 44 A区検出遺構全体図  
Fig. 45 A区基本層準  
Fig. 46 SB1平面図及びエレベーション  
Fig. 47 SB2平面図・セクション及びエレベーション  
Fig. 48 SB3平面図及びエレベーション  
Fig. 49 SD2平面・遺物出土状況図・セクション及びエレベーション  
Fig. 50 SD1平面・遺物出土状況図・セクション及びエレベーション  
Fig. 51 SB2出土柱根実測図  
Fig. 52 SD1・SD2及び遺物包含層出土遺物実測図  
Fig. 53 B区検出遺構全体図  
Fig. 54 B区基本層準  
Fig. 55 SD18平面・遺物出土状況図・セクション及びエレベーション  
Fig. 56 SD18及び遺物包含層出土遺物実測図  
Fig. 57 B区検出遺構全体図  
Fig. 58 B区基本層準  
Fig. 59 SB11平面図・エレベーション及び出土遺物実測図  
Fig. 60 SK4平面図・セクション・エレベーション及び出土遺物実測図  
Fig. 61 SK5・6平面図・セクション・エレベーション及び出土遺物実測図  
Fig. 62 SK7平面図・セクション及び出土遺物実測図  
Fig. 63 SD6平面図・セクション・エレベーション



- 及び出土遺物実測図
- Fig.64 SD 7 平面図・セクション・エレベーション  
及び出土遺物実測図
- Fig.65 SD 8 平面図・セクション・エレベーション  
及び出土遺物実測図
- Fig.66 SD 9 平面図・セクション・エレベーション  
及び出土遺物実測図
- Fig.67 C区検出遺構全体図
- Fig.68 C区基本層準
- Fig.69 SB12平面図及びエレベーション
- Fig.70 SB13平面図及びエレベーション
- Fig.71 SK 8 平面図・セクション・エレベーション
- Fig.72 SK 8 出土遺物実測図
- Fig.73 SK 9 平面図・セクション及び出土遺物実測  
図
- Fig.74 SX 1 平面図・出土遺物実測図
- Fig.75 SD11平面図・セクション・エレベーション  
及び出土遺物実測図
- Fig.76 SD12平面図・セクション・エレベーション  
及び出土遺物実測図
- Fig.77 P 5・6 及び B・C区包含層出土遺物実  
測図
- Fig.78 A区調査区平面及びセクション図
- Fig.79 B区調査区平面及び西壁セクション図
- Fig.80 B区 層出土土器実測図（縄文晩期土器）
- Fig.81 B区 層出土土器実測図（縄文晩期土器）
- Fig.82 B区 層出土土器実測図（縄文晩期土器）
- Fig.83 B区 ~ 層出土土器実測図（縄文晩期  
土器）
- Fig.84 B区 ~ 層出土土器実測図（縄文晩期  
土器）
- Fig.85 B区出土の磨製石斧実測図
- Fig.86 B区出土の砥石・叩石実測図
- Fig.87 C区調査区平面及び西壁セクション図
- Fig.88 C区出土土器実測図（縄文晩期土器）
- Fig.89 C区出土土器実測図（縄文晩期土器）
- Fig.90 C区出土土器実測図（弥生土器）
- Fig.91 C区出土の石器実測図
- Fig.92 C区出土の石器実測図
- Fig.93 壺形態分類図
- Fig.94 甕形態分類図
- Fig.95 高杯形態分類図
- Fig.96 鉢形態分類図
- Fig.97 器台形態分類図
- Fig.98 高知平野の弥生時代の掘立柱建物
- Fig.99 高知平野の掘立柱建物の平面規模
- Fig.100 北高田遺跡 弥生時代集落の概念図
- Fig.101 掘立柱建物を有する遺跡の分類概念図

# 写真図版目次

PL 1	北高田遺跡周辺の航空写真（1960年代）	PL39	B区・A区出土の弥生土器
PL 2	調査前風景	PL40	C・B・C区出土の弥生土器
PL 3	〃	PL41	〃
PL 4	試掘グリッド - 1（G1・2・4・6・10・11・13・14）	PL42	〃
PL 5	試掘グリッド - 2（G15・16・18・21・22・23・24・25）	PL43	B・C区出土の弥生土器
PL 6	試掘グリッド - 3（G13・26・28・29・30・31・33・35）	PL44	C・B・C区の弥生土器
PL 7	A区検出遺構全景、同東壁セクション	PL45	～ 区の石器
PL 8	A区壁セクション、同SK 1 遺物出土状況	PL46	B区 層出土の縄文晩期浅鉢
PL 9	同SK 1 完掘状況、SK 2 遺物出土状況	PL47	区出土の縄文晩期深鉢
PL10	同SD 3 遺物出土状況	PL48	区出土の縄文晩期深鉢・同深鉢
PL11	同SD 4 遺物出土状況	PL49	区出土の縄文晩期土器
PL12	同SD 5 遺物出土状況、同SD 5 遺物出土状況	PL50	区出土の磨製石斧
PL13	同SD 5・SB 5 完掘状況、B区検出遺構全景	PL51	区出土の打製石斧と石錘
PL14	SD19及びSP 3 完掘状況・SD17遺物出土状況		
PL15	SD17遺物出土状況、C区検出遺構全景		
PL16	同ST 1 完掘状況、同ST 1 セクション		
PL17	同SD14遺物出土状況、同SD15遺物出土状況		
PL18	同P 6 遺物出土状況、A区検出遺構全景		
PL19	SB 1・SD 1 検出状況及びA区西壁、同SD 2 遺物出土状況		
PL20	SD 2 遺物出土状況、同SB 2 完掘状況		
PL21	B区検出遺構全景、同SD18		
PL22	B区検出遺構全景、同東壁セクション		
PL23	同SD 7 遺物出土状況		
PL24	同SD 7 セクション、同SD 9 遺物出土状況		
PL25	C区検出遺構全景、同SK 8 遺物出土状況		
PL26	同SK 8 完掘状況、同SK 9 遺物出土状況		
PL27	同SD11遺物出土状況、同SD12遺物出土状況		
PL28	・ 区各遺構（SK 4・5・8、SD 7・15）遺物出土状況		
PL29	B区各遺構（SK10、SD16・17）遺物出土状況		
PL30	B区完掘状況、同西壁セクション		
PL31	C区完掘状況、同西壁セクション		
PL32	・ ・ 区遺物出土状況		
PL33	A区出土の弥生土器		
PL34	〃		
PL35	〃		
PL36	〃		
PL37	B・A区出土の弥生土器		
PL38	A区出土の柱根・弥生土器		

## 第 章 調査に至る経過

瀬戸内側と南四国を結ぶ大動脈となる四国横断自動車道（高松 - 須崎間）は、国土開発幹線自動車法制定により、1966年7月に予定路線となった。以後1970年に南国 - 須崎間、翌71年には大豊 - 南国間の基本計画決定となり、77年には大豊 - 南国間実施計画認可（第7次区間）と路線発表がなされた。ここに高知県においても、高速自動車道の建設に伴う緊急発掘調査が埋蔵文化財行政の重要な項目として日程に登って来たのである。

大豊 - 南国間について高知県教育委員会は、1973年・76年に実施した分布調査結果に基づき、82年に土佐市山田町飼古屋岩陰遺跡、83年には南国市の口ミノウ谷古墳の発掘調査に着手した。路線が四国山地を通る大豊 - 南国間においては、調査件数は少なかったが、山麓部から平地を走る南国 - 伊野間（第10次区間）になると調査件数は俄然増加し大規模化していった。南国 - 伊野間については、1993年の南国市栄工田遺跡、94年の長畝古墳群など5件の緊急発掘調査を実施している。

伊野 - 須崎間（第11次区間）については、1990年に施行命令、91年に路線発表となった。高知県教育委員会は、日本道路公団高松建設局（現、四国支社）と協議を行い、95年から計画路線内の試掘調査を実施することになった。調査の実施については、高知県教育委員会と受託契約を結んだ高知県文化財団埋蔵文化財センターが担当することになった。試掘調査の結果、高知県文化財団埋蔵文化財センターでは、八田神母谷遺跡を95年度から、八田奈呂遺跡と飛田坂本遺跡を96年度から、居徳遺跡群を97年度から、西鴨地遺跡と北原遺跡及び北高田遺跡を98年度から本調査に着手した。ここで報告する北高田遺跡は、道路公団の用地取得と植え物の関係から対象地域約4万㎡にたいして98年5月25日から4次にわたる試掘調査を実施した。

1次調査:98年5月25日から6月16日 1～17グリッド

2次調査:98年9月8日から9月18日 18～30グリッド

3次調査:99年3月4日 31・32グリッド

4次調査:99年11月25～12月1日 33～37グリッド

2次調査が終わった段階で、本調査を必要とする範囲のおおよそのまとまりを掴むことができたので、土佐市道高田 - 鳴川線と同島ノ前 - 高田線の間及び、市道島ノ前 - 高田線の東側について～区の調査区を設定し98年10月1日から本調査に着手した。各調査区の面積は以下の通りである。  
区:2570㎡、 区:780㎡、 区:1350㎡、 区:700㎡。

# 第 章 周辺の歴史・地理的環境

## 1. 地理的環境

北高田遺跡は、土佐市高岡町の市街地中心部の西方1.3kmに所在し、通称西山と称される独立丘陵の西裾部および低湿地に埋没する自然堤防状に立地している。標高は約8mを測る。土佐市高岡町は、高知県のほぼ中央部、南四国最大の平野である高知平野の西部に位置している。高知平野の西部は、四国の最高峰石槌山(1,982m)に源を発する四国有数の河川仁淀川の沖積作用によって形成せられたものであるが、仁淀川を挟んで左岸の春野町に展開する吾南平野に対して、右岸に広がる高岡町付近の平野は高東平野と呼ばれている。河口までは、約4kmを測り西から東に向かって広がりを見せる東西に長い平野である。平野の北側には虚空山系の南縁に位置する起伏量100m未満の丘陵地が迫っているが、この虚空山系には西日本外帯の地質構造上著名な仏像構造線が東西に走り、北の秩父帯と土佐市域の大部分を載せる四万十帯とを劃している。一方南側は横瀬山系が東西に伸びて海岸部と隔てられているが、横瀬山系の北側裾部に添うように波介川が蛇行して流れ仁淀川に合流している。

北高田遺跡周辺平野部の微地形は、旧中州群、自然堤防、旧流路、後背湿地などからなっているが、最も広い面積を有するのは旧中州群である。標高11mの土佐市吹越を扇頂にして、標高7.5mの同市辻、野尻、中島を結ぶ線を扇端にして半径1.7kmの扇状地形態を作り出している。現在の市街地中心部はこの上に載っており、野田遺跡、天神遺跡、林口遺跡など縄文時代から中・近世にかけての遺跡が扇状地形の西縁部に添うように分布している。旧中州群に次いで広い面積を占めている微地形は、後背湿地である。旧中州群の堆積物によって閉塞されている部分、特に波介川流域から北高田遺跡周辺、さらに北部の居徳地区など広域に及んでいる。現在でも常習水害地として知られる氾濫源性の低地である。波介川の河床勾配は、改修後の現在でも1000分の0.2であり、周辺の山地から流れ出す水は捌け口を失い冠水状態となるのである。低湿地帯にはところどころに独立丘陵や自然堤防が島状に存在しており、縄文時代、弥生時代の遺跡の立地するところとなっている。北高田遺跡、居徳遺跡群、倉岡遺跡などを挙げるができる。

このような微地形は、後氷期の海面上昇に伴って生じたものであるが、本平野の標高マイナス10m～マイナス23m付近に洪積層に属する基底礫層のあることがボウリング調査によって明らかとなっている。最終氷期における本平野の高度を知ることができる。市街地中心部にある高岡高校では、地表下10～18m付近までが沖積世堆積物、16～20m付近に海成層、この海成層直上に厚さ1mの音地火山灰(アカホヤ)の堆積が確認されている。以上のように、この地域は、後氷期の海水面停滞以後、仁淀川本流の砂礫堆積と支流である波介川の細粒物質の堆積と拮抗しながら微地形が作り出されてきたのである。後氷期以降の海面変動をかなり良好に反映している。

### 参考文献

川沢啓三「自然編」『土佐市史』高知県土佐市 1978年

貞方 昇「仁淀川下流沖積平野の地形形成」『西日本外帯・多雨地域における平野地形の特性に関

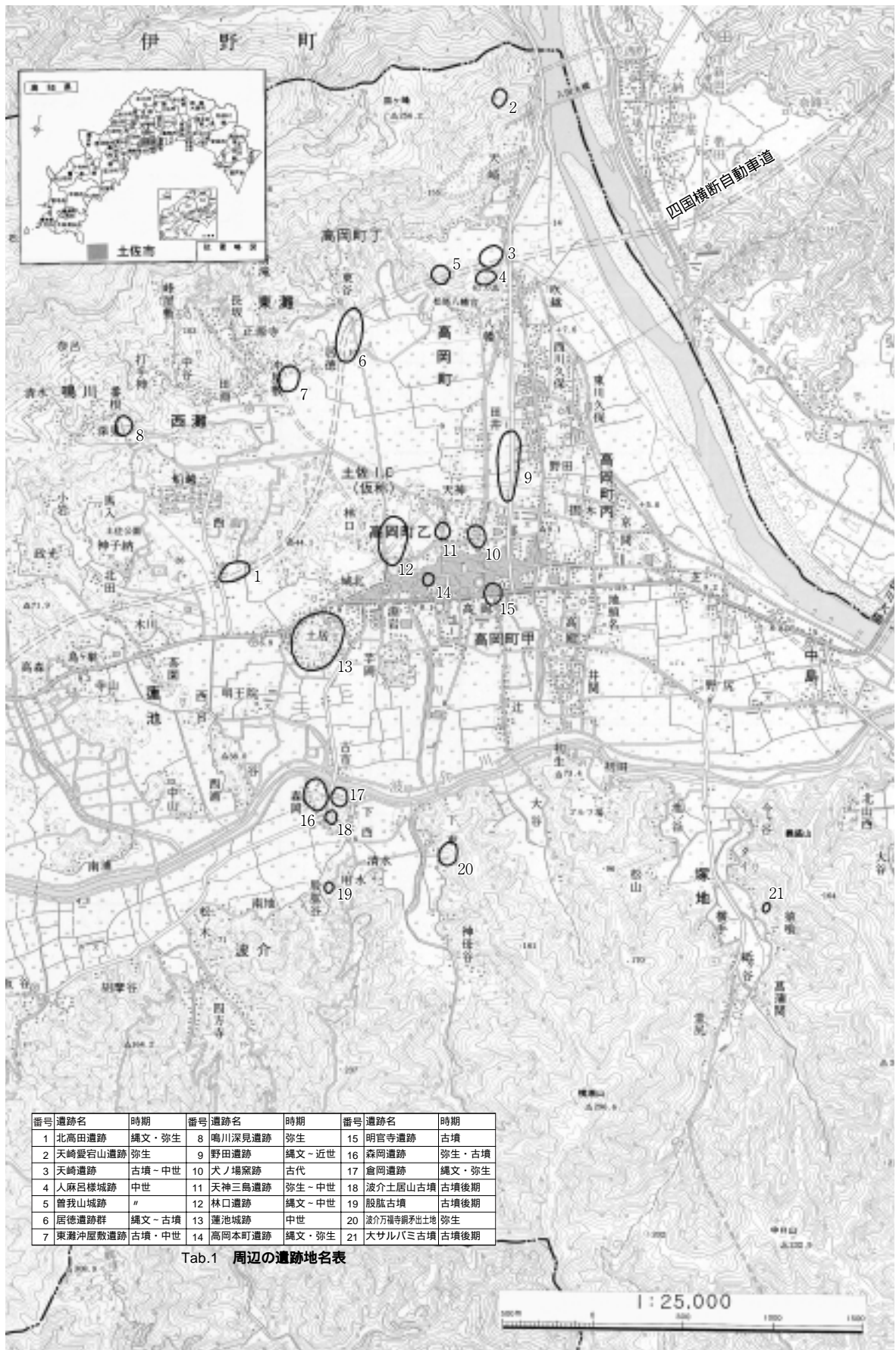


Fig. 1 北高田遺跡と周辺の遺跡分布図

## 2. 歴史的環境

仁淀川流域では、上流に上黒岩岩陰遺跡、中流に佐川町の不動ガ岩屋洞穴遺跡や城の台遺跡がある。不動ガ岩屋洞穴遺跡からは、草創期の細隆起線文土器、有舌尖頭器、矢柄研磨器などが出土している。早期のものとしては、黄島式土器と蔦島式系の厚手無文土器や打製石鏃や石錐、また自然遺物としてタカラガイとイモガイ製の垂飾品などが出土している。打製石器の石材は在地のチャートが多く使われているが、少量ながら姫島山の黒曜石が認められる。同じ早期でも県東部に位置する飼古屋岩陰遺跡（土佐山田町）では、サヌカイトが主体を占めており、すでに地域性が顕在化しているのは興味深い。城の台遺跡も早期の洞穴遺跡である。シカ・イノシシ・タヌキ・アナグマなどの獣骨が出土しており、特に直良信夫命名のサカワオオカミは有名である。現段階においては、仁淀川中・上流域は南四国の黎明期の内容を最も良く把握できる地域として位置付けることができる。

しかしながら、下流の平野部においては、縄文時代草創期から中期にかけての遺跡の分布を認めることはできない。僅かに、西方の波介川上流の土佐市西鴨地徳安から尖頭器が1点出土しているだけである。これは、前述したように沖積平野の形成過程と関連しており、中期頃までは安定した生活環境が整っていなかったものと考えられる。高知県下における当該期の遺跡分布は、海岸段丘や主要河川の中・上流域に見られ沖積平野への進出はほとんど見られないのである。

後期になると、高知平野全体に本格的な遺跡の分布が見られるようになり、当地域においても野田遺跡や林口遺跡、居徳遺跡群が営まれるようになり、仁淀川左岸においても西分増井遺跡や山根遺跡が出現する。野田遺跡や林口遺跡は自然堤防や旧中州上に立地しており、居徳遺跡群の場合は低丘陵上に立地したであろう生活址からの斜面堆積を示すものである。これらの遺跡出土の土器は、後期でも古相の中津式や宿毛式に属するものは認めらず、いわゆる縁帯文成立期かそれ以降の時期から始まっている。これは当地域のみならず高知平野全体に見られる特徴である。西分増井遺跡や田村遺跡からは打製石斧が多く伴っている。このころから沖積平野を生業の基盤とした稲作を含む農耕が一般化しはじめたものと考えられる。晩期は、居徳遺跡群のように後期から継続して営まれる遺跡と倉岡遺跡や北高田遺跡のように新たに出現する遺跡とがある。特に居徳遺跡群においては、晩期中頃から終末期にかけての多量の遺物が出土している。特に全国的にも類例のない木胎漆器や弥生時代以降に一般化するものとは形態的・手法的に全く異なるタイプの鍬2点が出土するなど注目を集めている。このような晩期の良好な資料は、高知平野東部では殆ど見出し得ないものである。

弥生前期になると遺跡数は晩期より減少する傾向にある。明確な遺跡としては居徳遺跡群と野田遺跡を挙げることができる。前者からは遠賀川式土器と大陸系磨製石器が出土しており、後者からは前期末葉の土器が確認されている。仁淀川下流域における前期の遺跡は、春野町の仁ノ遺跡や西分増井遺跡群、山根遺跡、伊野町の八田神母谷遺跡などをあげることができるが、南四国の土器編年で見ると前期 - b期または - c期から始まっている。東部の田村遺跡が前期 - a期から開始

されるのとは異なっている。東部に比べて晩期の遺跡が多く分布する西部が、東部よりも弥生文化が遅れて成立するのはいったい何に起因するのか、今後追究しなければならない重要な課題である。続く中期前半の遺跡は未確認である。再び弥生時代の遺跡分布が見られるようになるのは、中期末すなわち畿内第 様式段階である。当該期は、南四国全体に遺跡数が飛躍的に増加し、田村遺跡においても南四国最大の拠点集落としての体裁を整え始める。この背景には中部瀬戸内からの強力なインパクトがあり、東部においては凹線文土器が盛行し様式的転換が図られるが、西部では櫛描文を駆使した極めて地域色の濃厚な土器が展開し東部とは異なる土器文化圏を形成する。その典型を伊野町のバーガ森北斜面遺跡等に求めることができる。この傾向は後期前半まで見られ、北高田遺跡や天崎遺跡が該当する。しかし、後期後半になると地域性は薄れるようである。

当地域の弥生文化を語るとき避けて通れないものに青銅器と磨製石剣がある。すでに周知のように南四国は後期になると矛形祭器と銅鐸が対峙的に分布し、高知平野東部が両者の混在地域となっている。当地域は、矛形祭器の分布圏内にあり、波介万福寺遺跡より広型銅矛 式と中広型が1本ずつ計2本、やや西方になるが須崎市の飛田坂本遺跡から中広形銅矛が2本、仁淀川左岸の春野町西畑フケ遺跡から中広形銅矛1本と型式不明の1本の計2本、やや上流域では伊野町波川から中広形銅矛が1本、日高村小村神社に中広形銅矛が2本、さらに1997年天崎遺跡の発掘調査中に4本の中広形銅矛が出土した。天崎遺跡の4本は、中世に再埋納されたものではあるが、立地する環境からみてもともと当地に埋納されていたものと見てまちがいない。飛田坂本遺跡の2本を除いた11本が仁淀川水系からの出土である。またこれらの銅矛に先行して、仁淀川左岸の伊野町八田からは細形銅剣 式が1本、同じく天神溝田遺跡から中細銅剣と中広銅戈が1本ずつ出土している。さらに波介川流域より銅剣形石剣が1本出土している。銅剣とそれを模倣した銅剣形石剣が近接地から出土する特異な例である。高知県ではこのような例が、西隣の須崎湾にも見られる。このように当地域は、須崎湾岸とともに細形銅剣・中細形銅剣の分布圏を形成し、ついで南四国の西半分を席卷する矛形祭器の分布圏に包括され、県東部の銅鐸分布圏と対称的な青銅器分布圏を形成する。この両者の対称的な構図が土器をはじめとする日常的な遺物にどのように投影されるのかは、当地域の集落遺跡の調査を通して明らかにし得るものである。

続く古墳時代は、前期・中期に属する古墳は全く認められない。後期にいたって波介川流域に小円墳が散在する程度である。前期・中期古墳が認められないのは高知平野全般の傾向であるが、東部においては、後期にいたると南国市周辺に比較的多数の古墳が営まれるようになり、当該期の集落も見られるが、当地域にはそのような動向の顕在化は認められない。

#### 参考文献

岡本健児「考古古代編」『土佐市史』高知県土佐市1978年

岡本健児「高知県発見の銅剣・銅戈・石剣について」『高知の研究』清文堂1983年

出原恵三「南四国中央部の縄文土器」『遺跡』34号 遺跡発行会1993年

高知県埋蔵文化財センター『居徳遺跡群 平成10年度現地説明会資料』1998年

高知県埋蔵文化財センター『居徳遺跡群 鋤出土について記者発表資料』1999年

## 第 章 試掘調査

調査対象地の地目は水田とハウスであるが、全体に低湿地である。土佐市道高田 - 鳴川線より西をA区、土佐市道高田 - 鳴川線と同島ノ前 - 高田線の間をB区、市道島ノ前 - 高田線より東をC区として、37地点に試掘グリッド(5m×5m)を設けた。

### 1 . A区:G18・19 (Fig. 2・4)

現代耕作土の下は、厚さ1mの客土があり、その下から旧耕作土が認められた。旧耕作土の下層は粘土層の堆積が続いている。遺物は全く認められなかった。

### 2 . B区:G 1 ~10、21 ~28 (Fig. 2 ~ 5)

G 1 ~ 3 は、耕作土下に厚さ60cm前後の粘土層( ~ 層)が堆積し、その下層に弥生時代中期末の遺物包含層( 層)が存在する。 層は、現地地表下80cmで層厚は20~30cmを測る。G 2 では、 層と ` 層に分層できた。 層上面が弥生時代後期の遺構検出面となっている。 層以下の層準は粘土層で、 層からは炭化物が認められたが、人工遺物は存在しない。G 2 の 層上面で溝状遺構(SD 2)を検出し、検出面から弥生後期前葉の土器と石鏃( 2)が出土した。

G 4 ~ 6 は、地表下に厚さ150cmの客土がある。G 4・6の 層は、G 1 ~ 3の遺物包含層に対応する層準と考えられるが、遺物の出土は認められなかった。以下の層準は粘土である。

G20~22は、耕作土下に厚さ10cm前後の客土があり、粘土・シルト層( ~ )を挟んで 層の遺物包含層がある。 層は上述の 層に対応する層準であるが、遺物は弥生土器細片が極少量出土したにすぎない。 層を除去した後、 層上面を精査し、更にグリッドを拡張して精査したが遺構は認められなかった。

G 9・23~27は、G 1 ~ 3と同様な堆積が見られ、地表下80cm前後のところでは弥生時代中期末の良好な遺物包含層が存在し、ピット、土坑、溝などの遺構も確認した。安定した基盤層==生活面が存在する。またG 7・8・10では現地地表下

40~50cmの深度で弥生時代後期の遺物包含層の堆積が認められた。しかしG28は、遺物包含層が存在せず耕作土より下層は粘土が厚く堆積している。

### 3 . C区:G11 ~17・29 ~37 (Fig. 2・5)

農道の北側のG15~17は、耕作土の下層は粘土が厚く堆積しており、各層準は北に向かって傾斜している。 ~ 層からは、縄文晩期、後期の土器片が十数点出土したが、包含層を形成するものではない。谷状の落込みに向かって傾斜しているものと考えられる。南側のG12では、現地地表下30~40cmの深度で弥生時代後期の土器を含んだ 層がある。層厚は20~30cmで、その下層は風化した蛇紋岩の地山となっている。G13・14・30においてもG12の 層と同じ層準を確認したが、B区で認められたような基盤層は存在しない。G11・29・30の 層下には腐植土の堆積が見られ、その下層には粘土層が南に向かって傾斜堆積を示し、粘土層の間には崖錐性の堆積物(G30 - 層)認めら



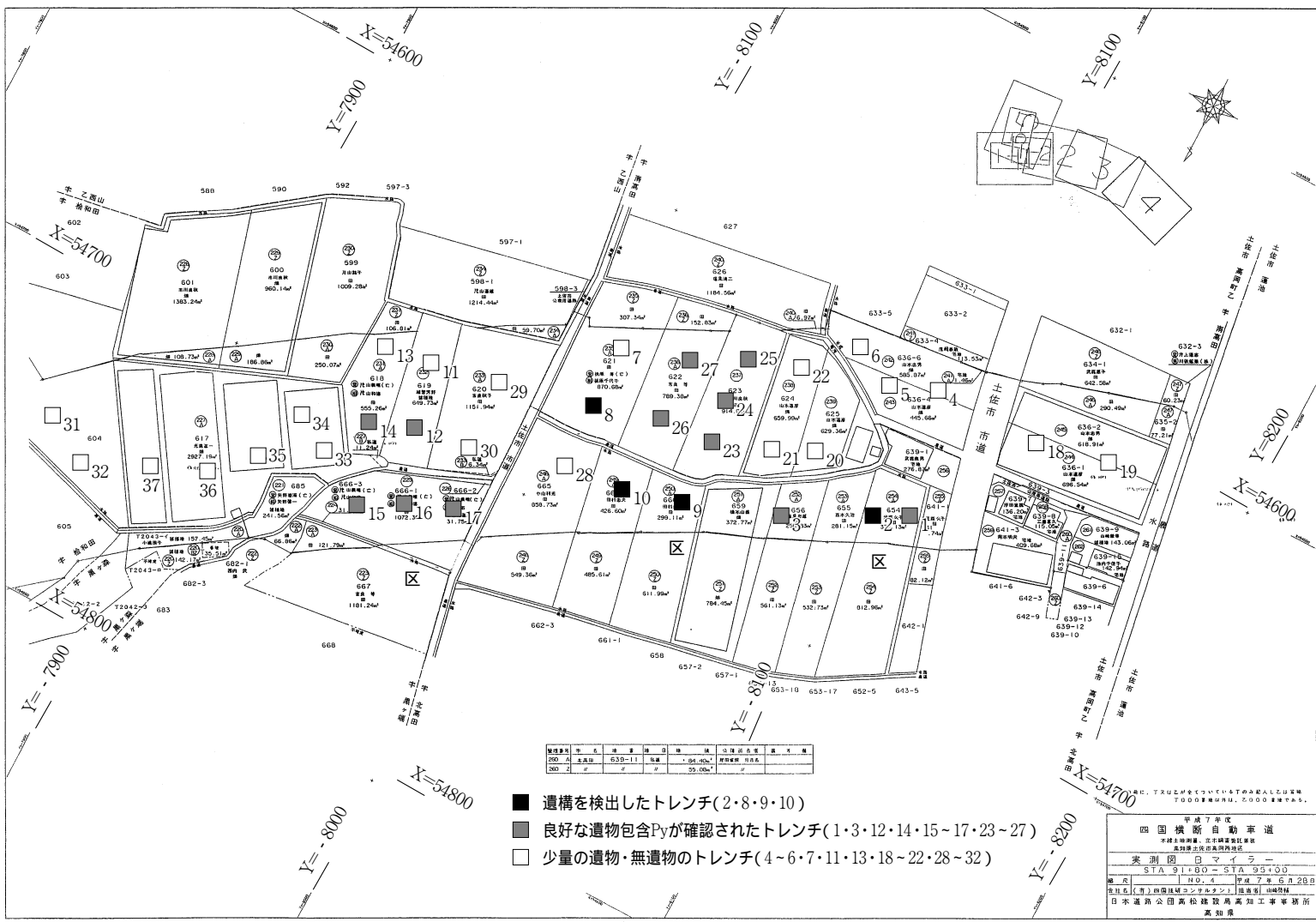
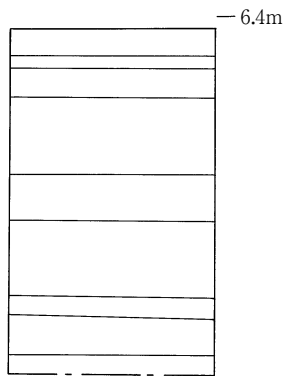
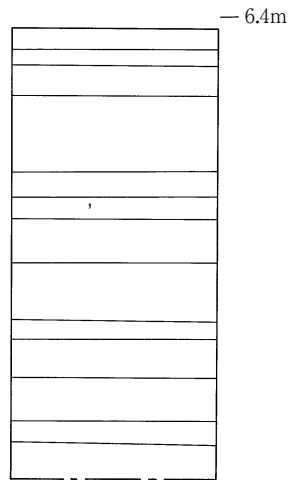


Fig. 2 調査区及び試掘グリッド位置図



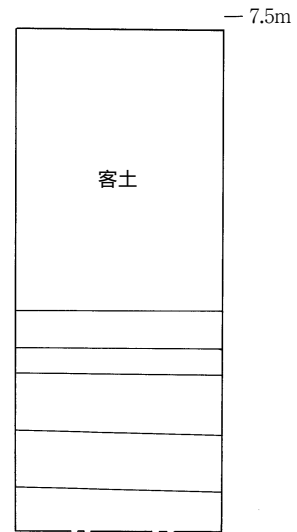
G1 東壁

- : 耕作土
- : 暗灰色粘土
- : 淡 "
- : 黄灰色 "
- : 茶色 " (遺物包含層)
- : 茶黄色 " (無遺物層)
- : 青灰色 " ( " )
- : 暗青灰色 " (炭化物を含む)
- : 灰青色 " (無遺物層)



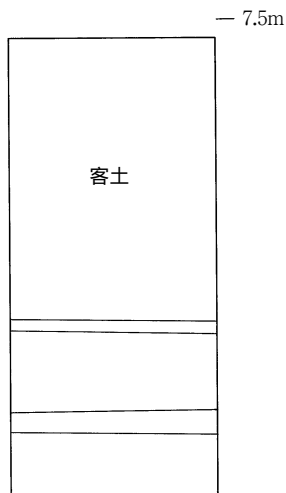
G2 東壁

- : 耕作土
- : 暗灰色粘土
- : 淡黄色 "
- : 黄灰色 "
- : 茶色 " (遺物包含層)
- : 淡茶色 " ( " )
- : 茶黄色 " (無遺物層)
- : 青灰色 " ( " )
- : 暗青灰色 " (炭化物を含む)
- : 灰青色 " (無遺物層)
- : に炭化物が混入
- : 灰色粘土 (無遺物層)
- : 黒灰色 " (炭化物を含む)



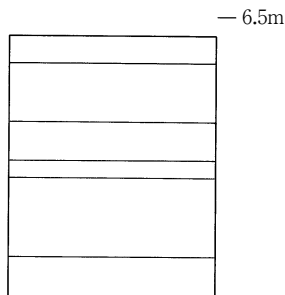
G4 東壁

- : 淡茶色シルト~粘土 (無遺物層)
- : 茶色粘土
- : 茶黄色 "
- : 青灰色粘土 (炭化物を含む)



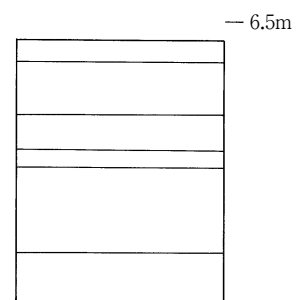
G6 東壁

- : 灰褐色粘土
- : 黄褐色シルト~粘土
- : 茶色粘土
- : 茶黄色粘土



G7 北壁

- : 耕作土
- : 黄灰色粘土
- : 灰褐色粘土
- : 灰黄色粘土 (無遺物層)
- : 黄茶色シルト ( " )
- : 青灰色粘土 ( " )

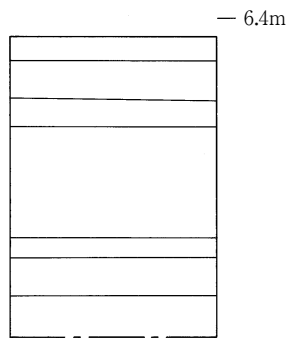


G8 北壁

層準はTR7と同じ

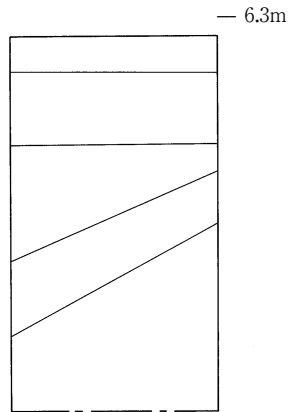


Fig. 3 試掘グリッド1・2・4・6~8セクション図



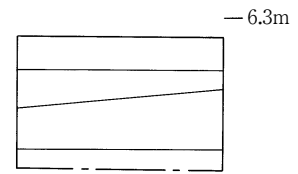
G10 南壁

- : 耕作土
- : 灰黄色シルト
- : 茶灰色シルト (遺物包含層)
- : 黄褐色粘土 (無遺物層)
- : 黄灰色粘土
- : 灰黄色 "
- : 灰色 "



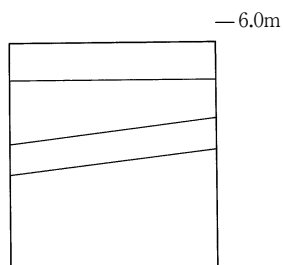
G11 西壁

- : 耕作土
- : 客土
- : 腐食土
- : 灰色粘土 (炭化物を含む)
- : 青灰色粘土 (無遺物層)



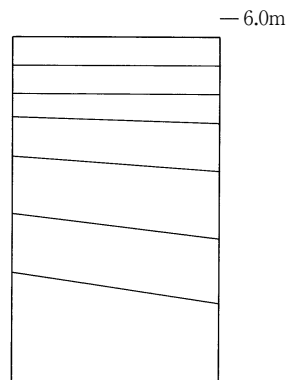
G12 西壁

- : 耕作土
- : 灰色粘土
- : 灰褐色の礫混じりの粘土 (弥生後期の遺物包含層)
- : 地山



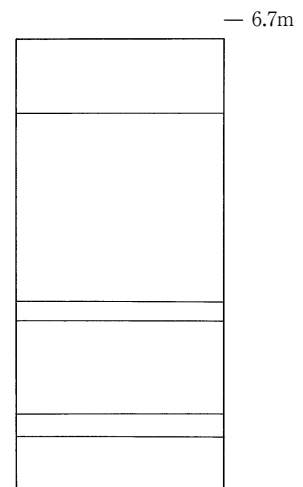
G13 西壁

- : 耕作土
- : 客土
- : 腐食土
- : 茶褐色粘土 (弥生遺物包含層)
- : 淡黄色粘土 (無遺物層)



G16 西壁

- : 耕作土
- : 黒褐色粘土
- : 暗灰色粘土
- : 灰褐色粘土
- : 茶黄色 "
- : 灰茶色 "
- : 暗青灰色 "

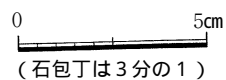
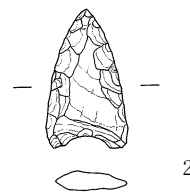
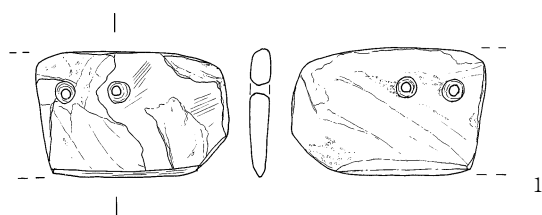
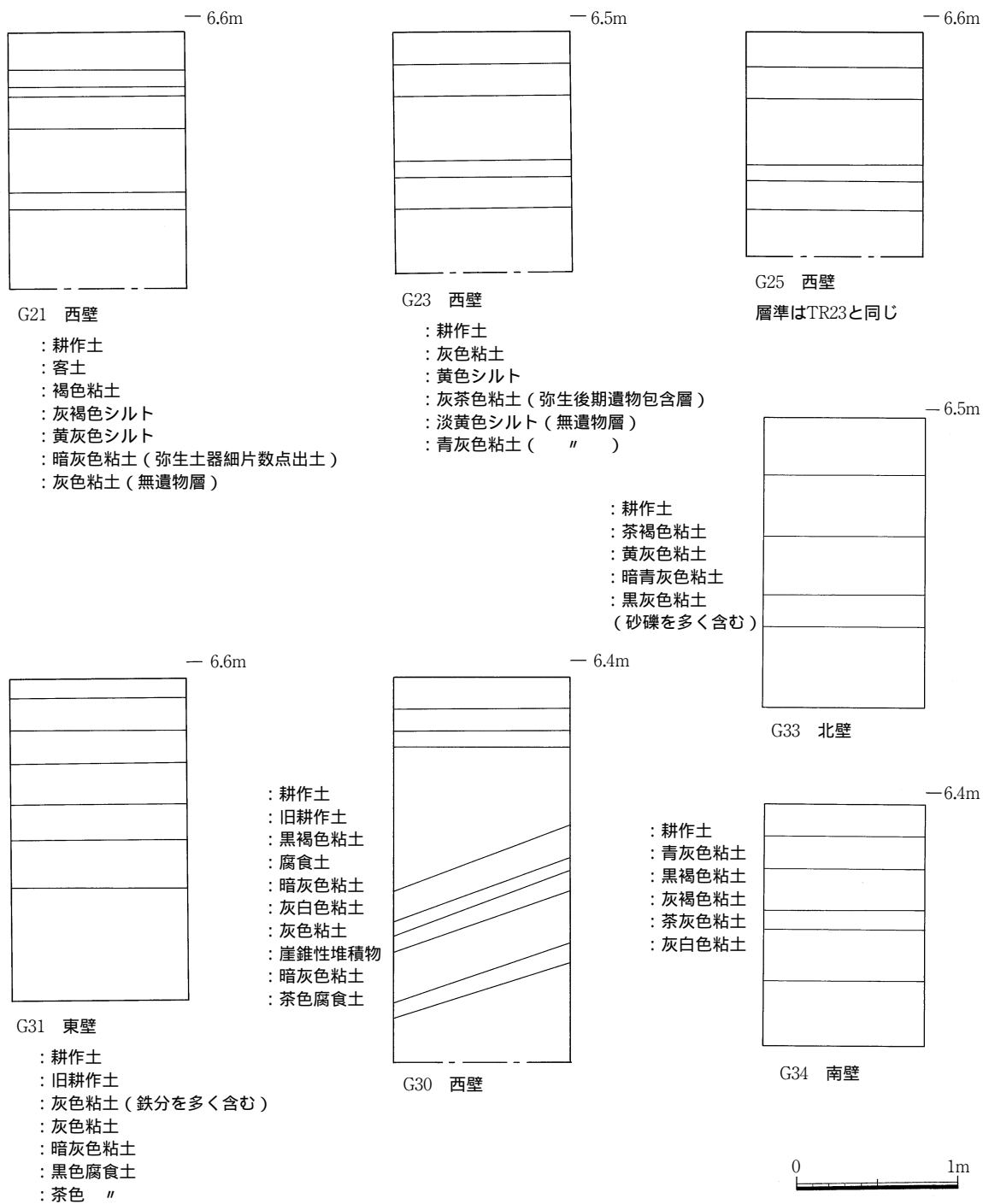


G18 東壁

- : 耕作土
- : 客土
- : 旧耕作土
- : 灰褐色粘土
- : 灰色粘土
- : 黒灰色粘土
- : 灰色粘土



Fig. 4 試掘グリッド10・13・16・18セクション図



(石包丁は3分の1)

Fig. 5 試掘グリッド21・23・25・30・31セクション図及びグリッド2・13出土遺物実測図

れる。層から下層はかなり激しい湧水が見られた。南側にも深い谷状地形が形成されている。

G31～37は、耕作土下に粘土や腐植土層の厚い堆積が見られ、安定した基盤層の形成は認められない。

#### 4. 小結

調査対象地とその周辺部は、現在では平坦な地表を形成しているが、試掘調査によって、旧地形はかなり複雑な状況を呈していることが明らかとなった。全体を通して、当該地は低湿地であり長い期間をかけて粘土やシルトが堆積してできた沖積層を形成している。おそらく付近一帯が南を流れる波介川の遊水地帯となっていたことが考えられる。その中においてB区の大部分からは、比較的良好な遺物包含層とピットおよび溝状の遺構の存在が確認されたが、この地点は微高地を形成しており、弥生時代後期前半の一時期に限り生活空間を提供していたものと思われる。しかしB区においても、弥生時代後期前半を過ぎると全く生活痕跡を留めることなく現代の水田面に到っている。現水田面直下には竹材を利用した暗渠の跡が数多くあったが、これらは近代以降になされたものであろう。

C区は、丘陵が沖積地に埋没しているが、西部の南側斜面部に限って縄文晩期の遺物包含層が確認された。市道島ノ前 - 高田線に直行する農道がかつての尾根を形成していたことが判明した。尾根を挟んで南北に深い谷状地形が形成されている。今日では、削平を受けて痕跡を留めていないが、縄文時代晩期にはこの尾根上に何らかの活動空間があり、斜面に遺物が投げ込まれたものと考えられる。

以上の試掘調査結果に基づき、B区の西南部と東北隅の水田一筆を除いた全てとC区の市道島ノ前 - 高田線に直行する農道の南北を本調査の対象にすることとした。

# 第 章 本調査の成果 - 検出遺構と遺物 -

## 1 . 調査の方法

本調査は、便宜上Fig. 6 に示したように ~ 調査区 ( 区:2570m<sup>2</sup>、 区:780m<sup>2</sup>、 区:1350m<sup>2</sup>、 区:700m<sup>2</sup> ) を設定し、さらに 区はA・B・C、 区はA・Bに、 区はB・C区に細区分した。各調査区とも遺物包含層直上までは重機を用いて掘削し、それより下層は手作業で進めた。調査区に公共座標に基づいて4mメッシュ設け、西から東に向かって1・2・3...、北から南にA・B・C...として遺構の平面実測及び遺物の取り上げを行った。

## 2 . 区の検出遺構と遺物

### ( 1 ) A区

基本層準 ( Fig. 8 )

層:黄灰色粘土層で、層厚は20cm以上を測る。調査区の北部では認められない。無遺物層である。

層:淡灰色粘土で、層厚は0 ~ 5 cmを測る。調査区の南北端と中央部付近では認められない。水田の可能性はある。

層:黄褐色シルト層で、部分的に途切れている。北部では20cm以上の層厚を有するが、南では0 ~ 5 cmを測る。弥生後期前半の遺構が掘り込まれている。

層:暗灰褐色粘土層で、層厚は0 ~ 20cmを測る。弥生時代後期前半の遺物包含層で炭化物も多く含まれる。

層:灰黄色シルト層で、層厚は25 ~ 50cmを測る。無遺物層である。

層:暗灰色粘土層で、層厚は5 ~ 25cmを測る。無遺物層である。

層:暗茶褐色粘土層で、層厚は5 ~ 15cmを測る。

層:現代水田耕作土で、層厚は5 ~ 25cmを測る。

検出遺構と遺物

#### a 掘立柱建物

SB 5 ( Fig. 7・9・20 )

調査区のほぼ中央部に位置する。梁間 ( 3.2m ) 1間、桁行 ( 4 m ) 2間の規模を有し、長軸の方向はN - 27° - Eである。掘形は総じてほぼ円形で、径30 ~ 40cmを測り、P 1、P 3 ~ 5からは柱痕跡が検出できた。径20 ~ 30cmの柱を想定できる。柱の深さは30 ~ 60cmである。柱埋土は暗茶色粘土で、各柱穴共に弥生土器の細片が出土したが、図示し得たのはP 3出土の大型壺口縁部 ( 87 ) のみである。弥生後期前葉に属する。なお、SB 5の長軸に併行して溝状土坑SD 5があるが、なんらかの関連性が考えられる。

SB 4 ( Fig. 7・10 )

調査区の北部に位置する。梁間 ( 3.2m ) 1間、桁行 ( 6.5m ) 3間の規模を有し、長軸の方向はN - 21° - Eである。掘形は総じてほぼ円形で、径20 ~ 60cmを測り、P 6 とP 8は切り合っている。

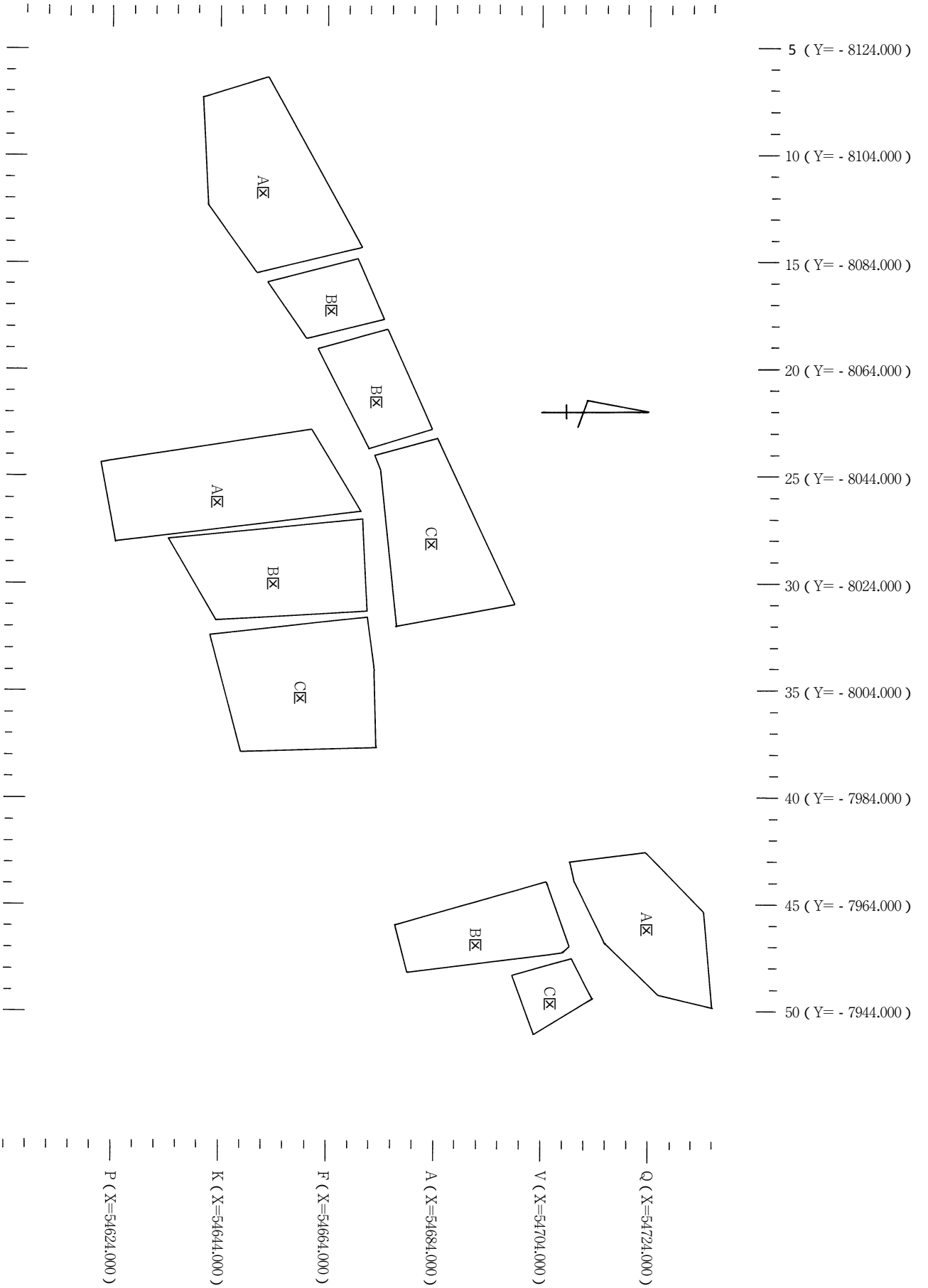


Fig. 6 本調査区位置図 (S=1/1000)

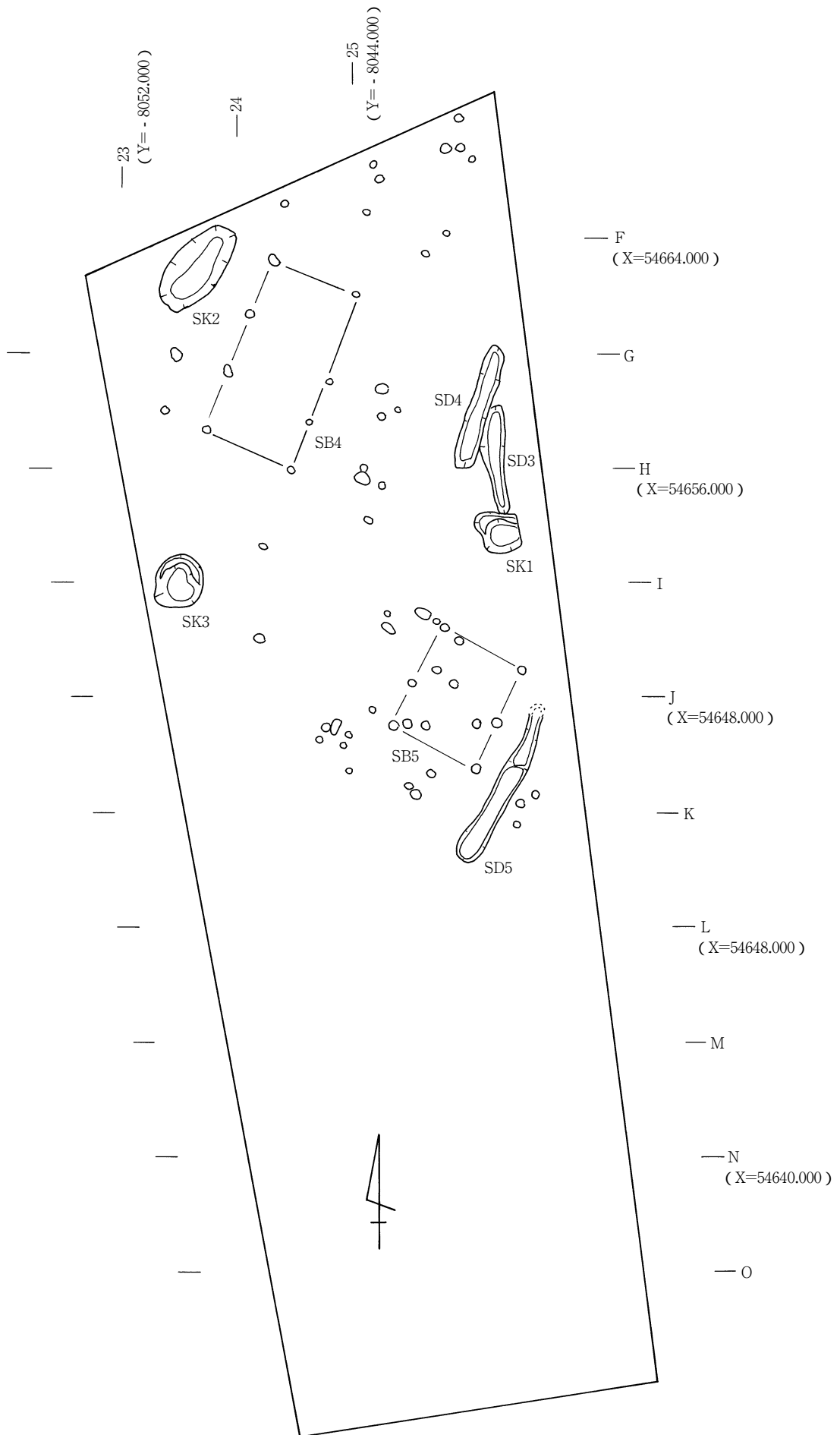


Fig. 7 A区検出遺構全体図 (S=1/200)



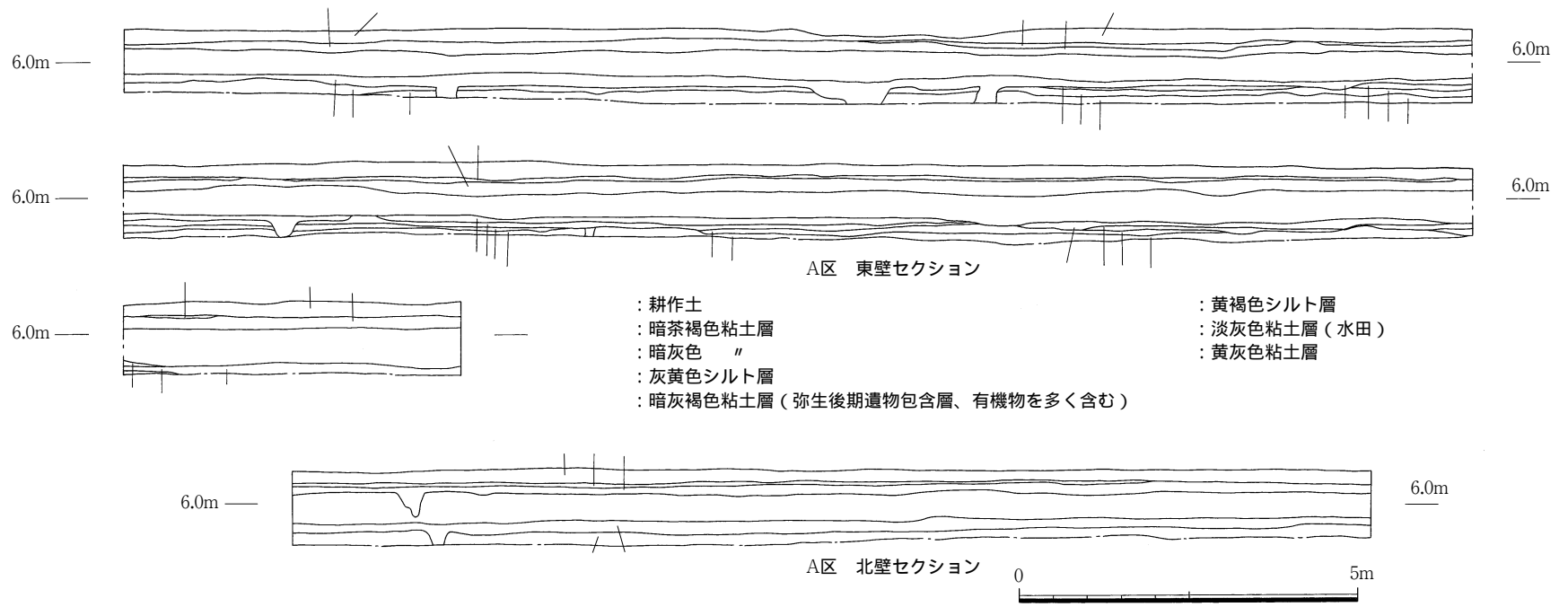


Fig. 8 A区基本層準

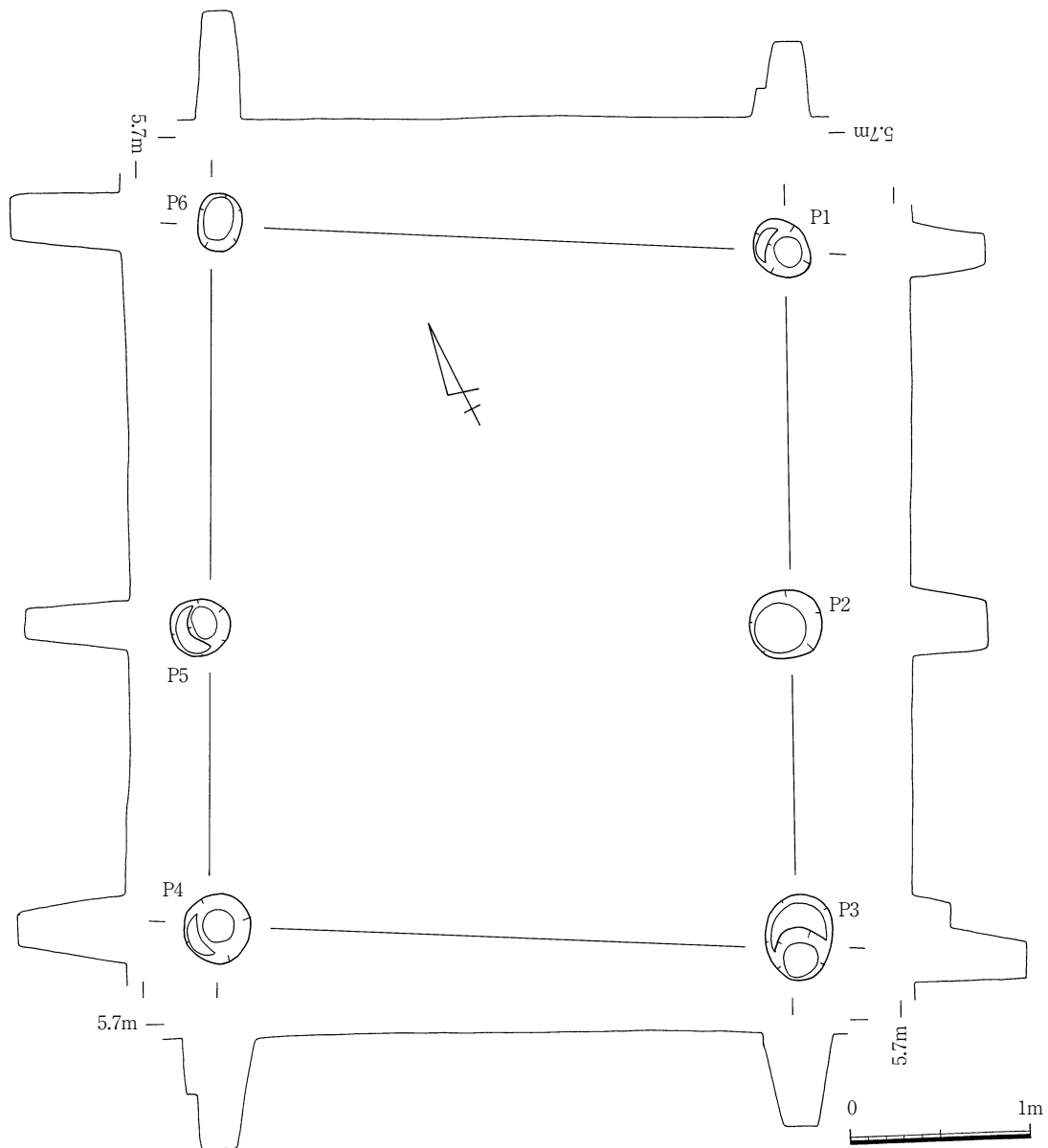


Fig. 9 SB 5 平面図及びエレベーション

柱の深さは15cm～60cmである。柱間は、P1とP2の間が最も広く3.15mを測る。埋土は暗茶色粘土で、弥生土器細片が少量出土しているが図示できるものはない。

b 土坑 (Fig. 7・11)

SK 1 (Fig. 7・11)

調査区の北よりに位置し、溝状土坑SD 3と切り合っているが先後関係は不明である。大部分が調査区外に出ており、全体の形状を知ることはできないが、最大幅1.3m前後、長さは2.0m以上を測る。北側は二段に掘り込まれており狭いテラス状の段部を有す。深さは20cm前後で断面舟底状を呈す。埋土は暗茶色粘土の単純一層である。遺物は、埋土中より弥生後期前葉の壺・甕片が出土している。7は大型壺である。

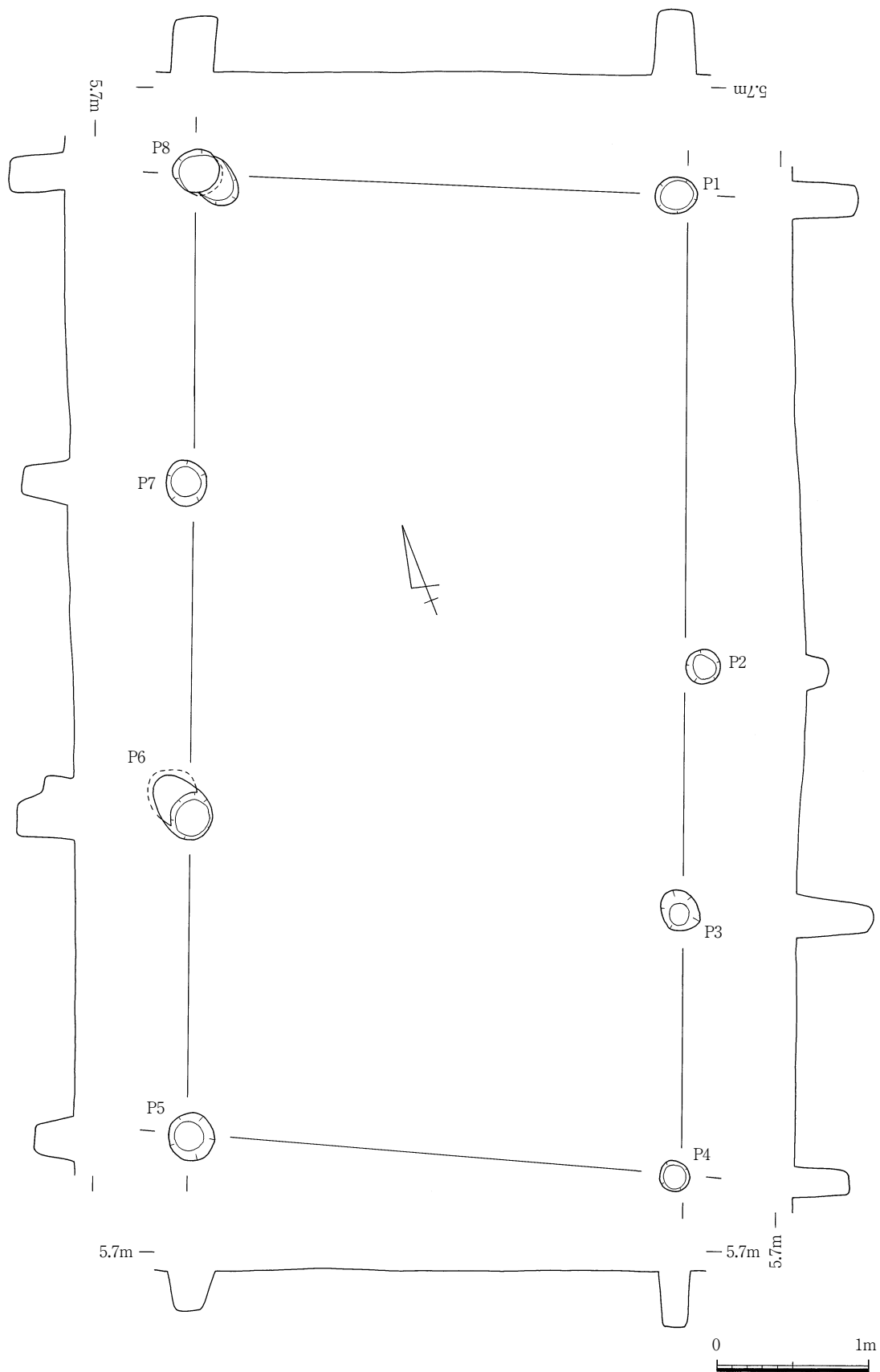


Fig.10 SB 4 平面図及びエレベーション

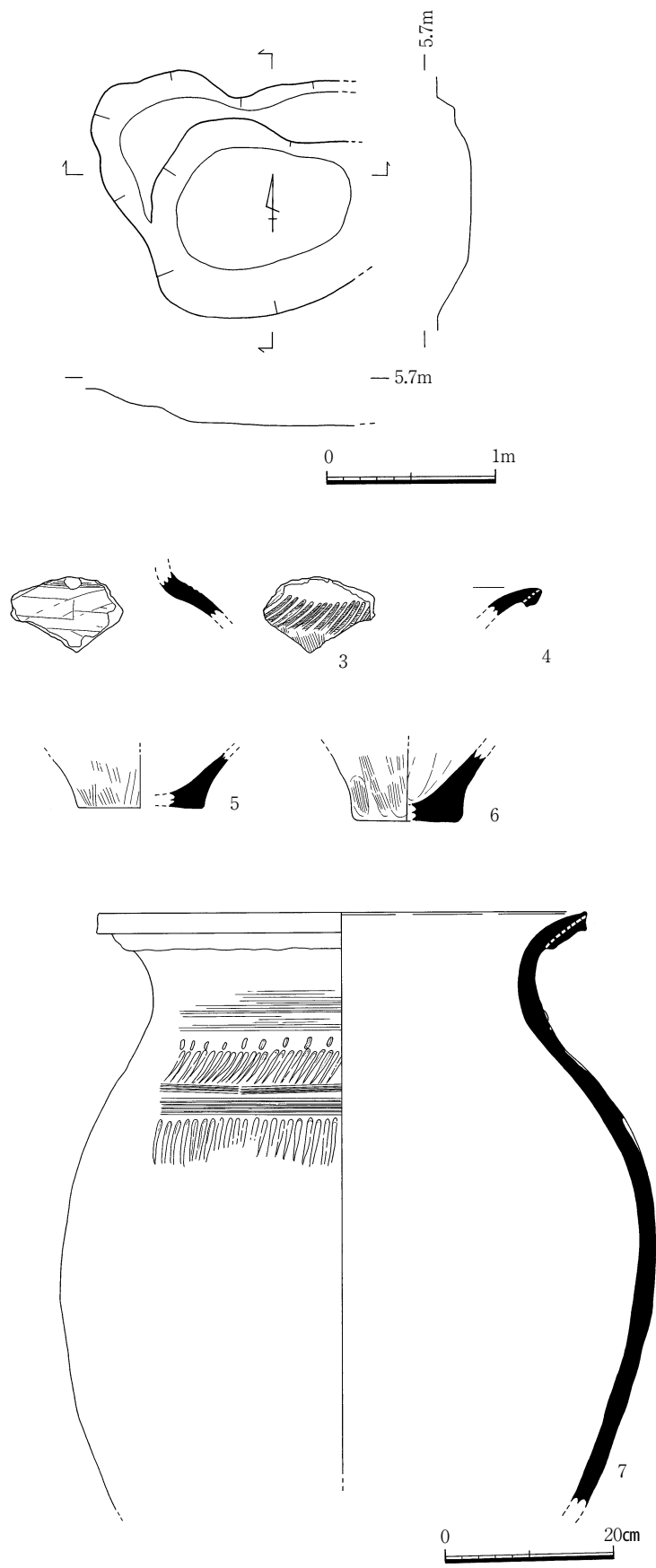


Fig.11 SK 1 平面図・エレベーション及び出土遺物実測図

SK 2 ( Fig.7・12~14 )

調査区の北端に位置する。長楕円形のプランを呈し、長さ3.5m、幅1.8m、深さは最も深いところで0.9mを測る。北西側の壁が比較的緩やかに立ち上がるのに対して、南東側の壁は急勾配である。埋土は 層:灰褐色シルト~粘土、 層:灰褐色粘土で炭化物を多く含む。 層:暗灰色粘土で炭化物を多く含む。遺物は 層上層と 層から多量に出土しているが、床面出土のものはない。口縁部で見ると広口壺を中心に長頸壺、直口壺など16点、甕12点、鉢1点、高杯1点、器台の可能性のあるものが1点出土している。図示し得たものは、壺口縁部(8~14)、壺胴部(27・28)、脚付壺(34)、甕口縁部(18~20・22~26・33・35・36)、高杯(37)、鉢(39)、器台のとなる可能性のあるもの(38)などを挙ることができる。壺は25や28のように繁縟なまでに櫛描き文で飾り立てるものが見られる。石器は叩き石(40・41)が出土している。弥生後期前葉に属する。なお、SK 2は、SB 4に近接し長軸方向を共有していることから両者の関連性が考えられる。

SK 3 ( Fig.15 )

調査区の西壁近くにある。

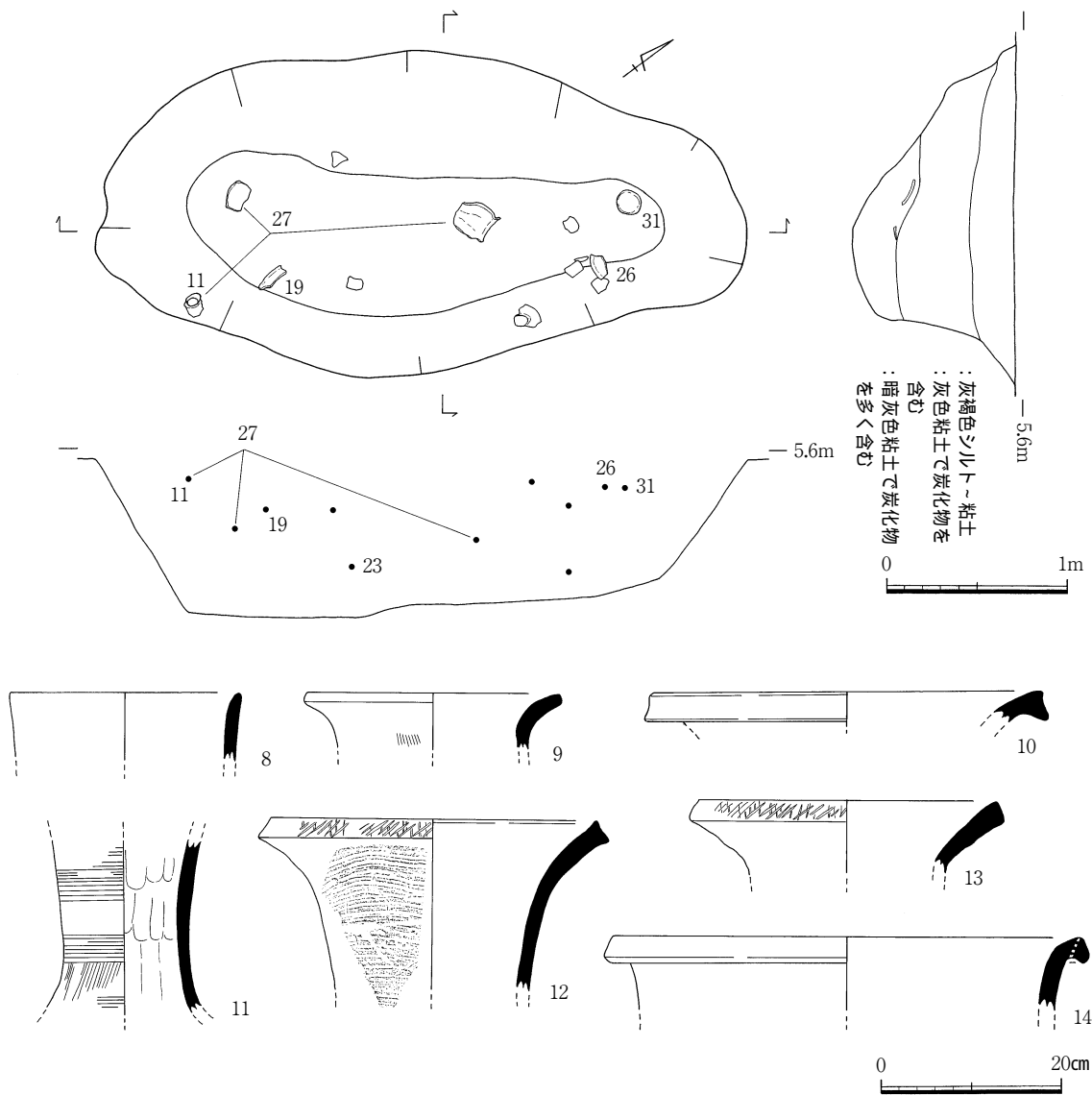


Fig.12 SK2 平面図・エレベーション及び出土遺物実測図

隅丸方形のプランを有し、長さ1.85m、幅1.6m、深さは20cm前後を測る。北側の壁は段状になっている。埋土は灰茶色単純一層で埋土中より弥生土器片が数点出土している。図示し得たのは広口壺口縁部(43)、甕(42)、底部(44・45)、叩き石(46)のみである。弥生後期前葉に属する。

c 溝状土坑

SD3 (Fig.7・16)

調査区の東壁側にあり、一部をSD4に切られている。長さ3.85m、幅0.75m、深さ15cm前後を測り、床面は水平である。埋土は灰茶色粘土の単純一層で炭化物を多く含む。遺物は、遺構の中央部付近から出土しているが、床面出土のものはない。図示したものは、細頸壺(47)、長頸壺(48)、甕(49)、底部(50~53)である。出土土器の多くが火を受けて煤けている。SD3が途中まで埋まった後、使用済みの土器を廃棄したものと考えられる。弥生後期前葉に属する。

SD4 (Fig.7・17・18)

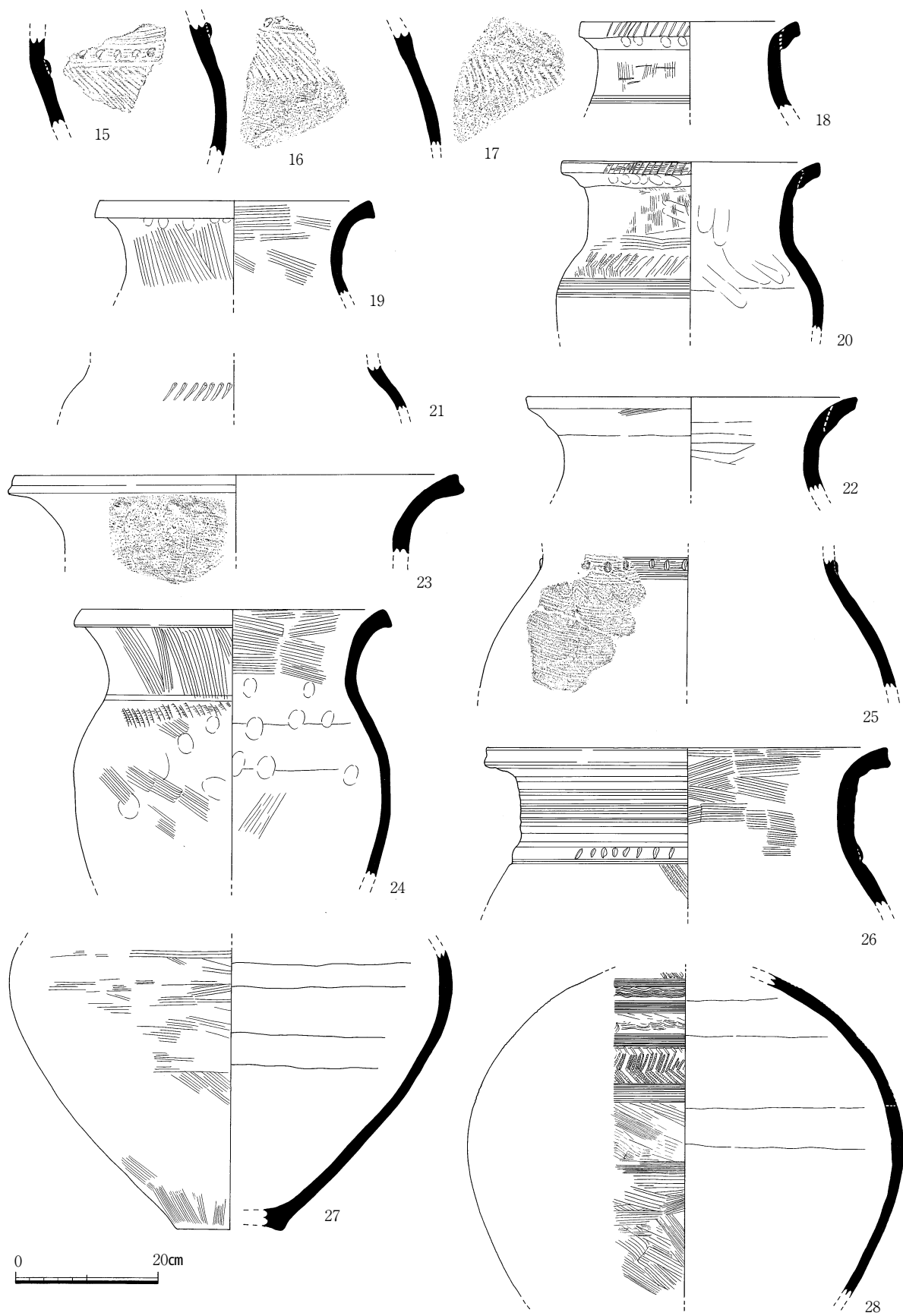


Fig.13 SK 2 出土遺物実測図

南端でSD 3を切っている。長さ4.35m、幅0.7m、深さは40~45cmを測り僅かに舟底状を呈す。

埋土は 層:灰色シルト~粘土で炭化物を含む。 層:暗灰色粘土である。この種の遺構では、最も多くの遺物が出土している。遺物は中央部に集中しており、中・上層出土のものが多く床面には見られない。口縁部の点数で見ると壺が6点、甕が9点出土しており、これらの多くが煤けまたは被熱変色している。図示し得たものは、壺(54・56)、甕(55~68)である。SD 3と同様の廃棄パターンが考えられる。弥生後期前葉に属する。

SD 5 (Fig. 7・17・19)

SD 3に近接し長軸方向を共有している。長さ6.2m、最大幅0.9mを測る。床面は南側半分が30cm前後であるのに対して、北側は15cm前後と浅くなっている。埋土は灰茶色粘土単層で炭化物を多く含んでいる。遺物はやはり中央部に集中しており、南端部からも少し出ている。床面出土のものではなく中・上層からの出土である。遺物は、口縁部の点数で見ると壺が4点、甕が10点出土しており、図示し得たものは、広口壺(71・74)、長頸壺(73・76)、短頸壺(75)、甕(77・78・82)、

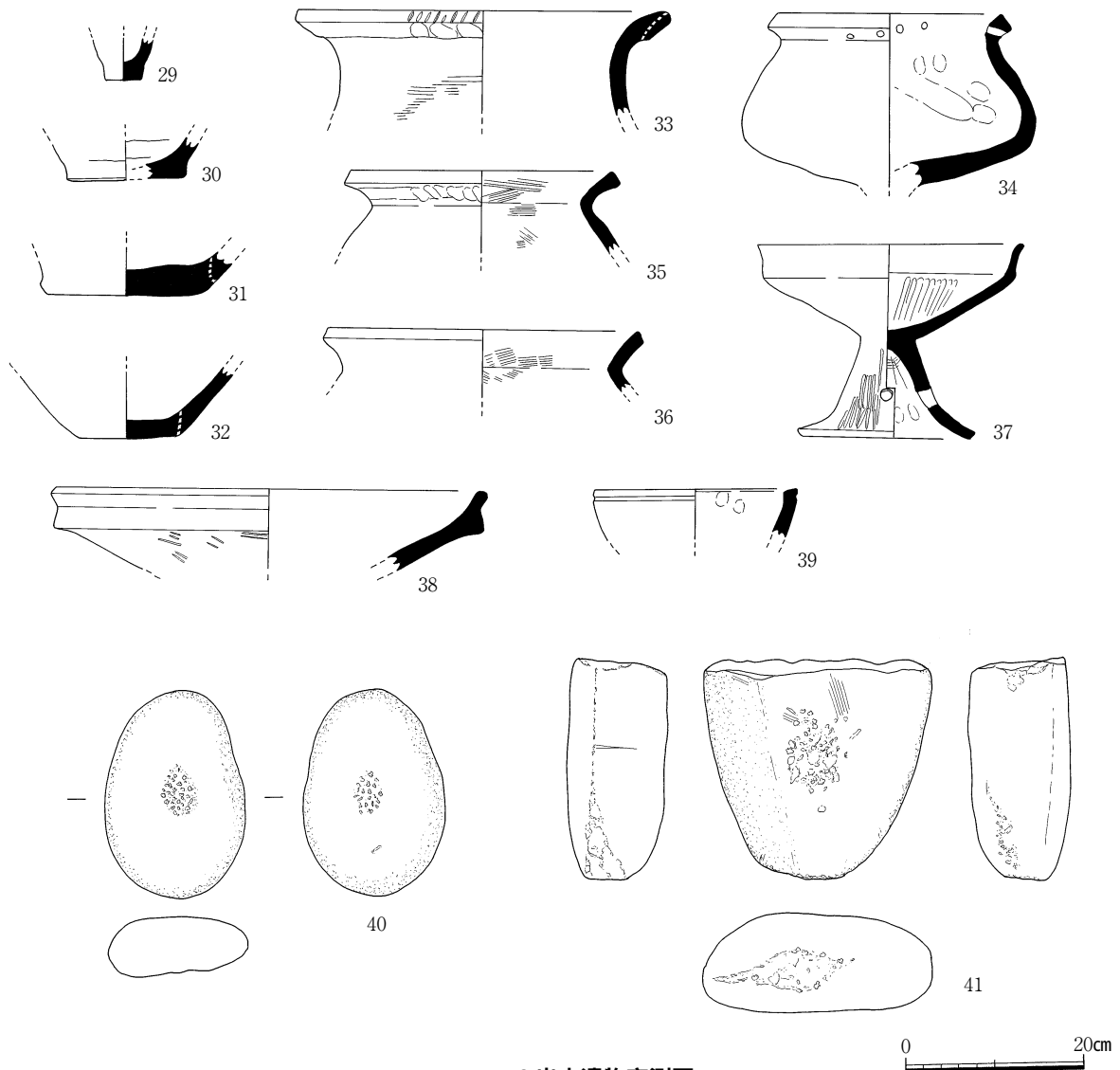


Fig.14 SK 2 出土遺物実測図

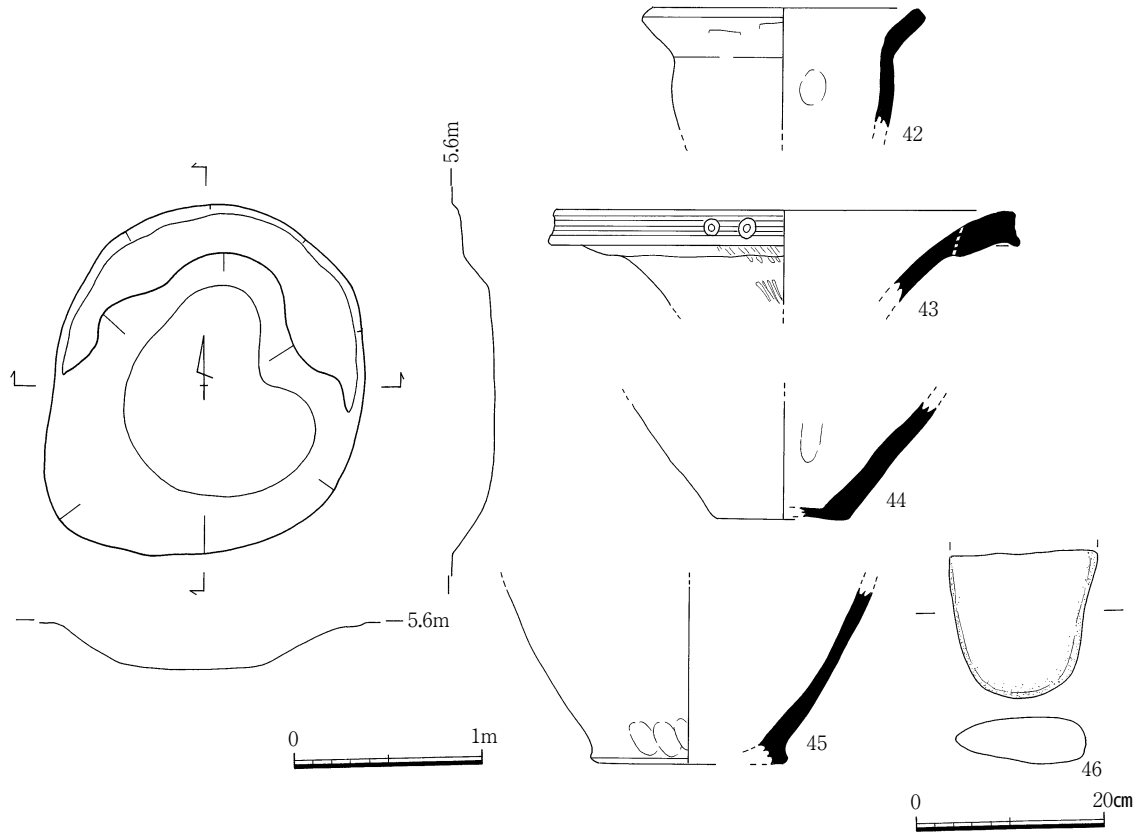


Fig.15 SK3 平面図・エレベーション及び出土遺物実測図

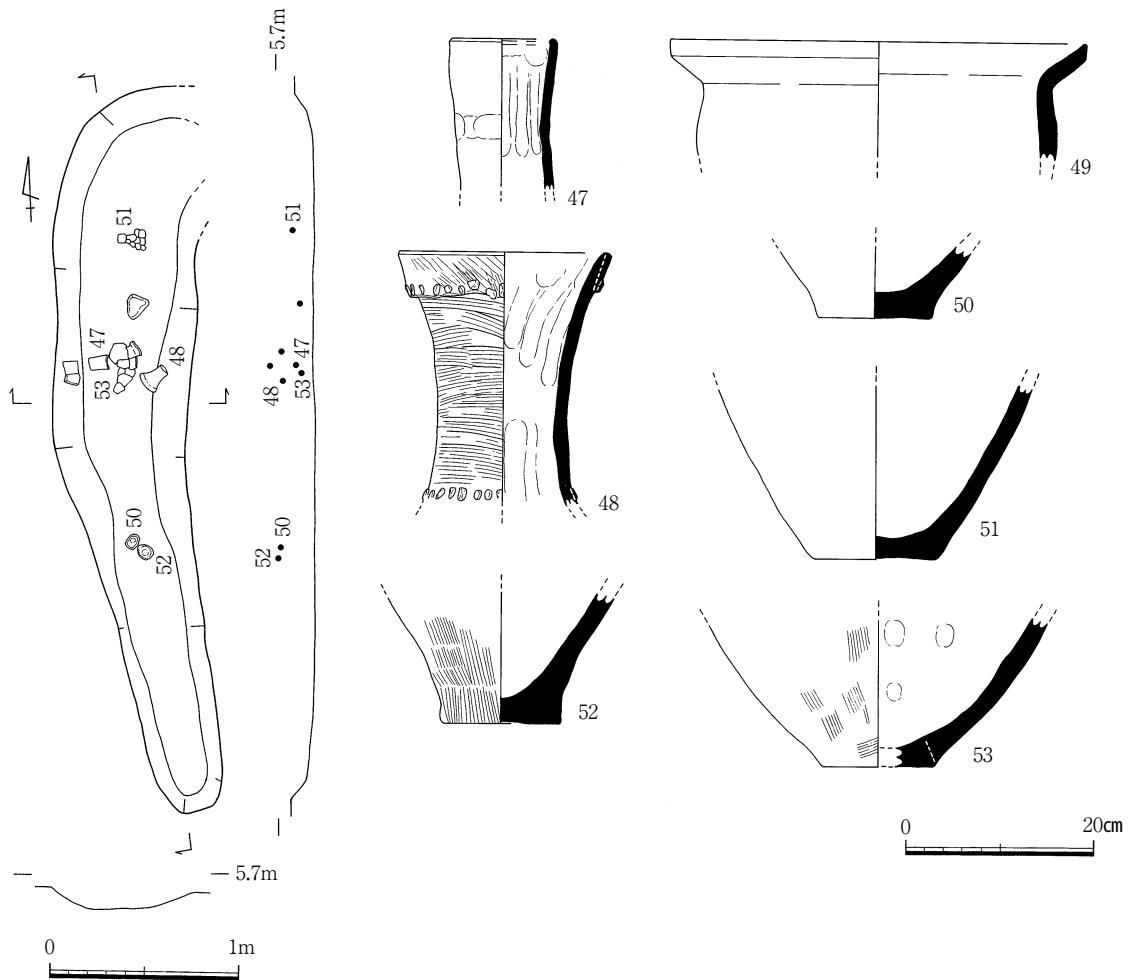


Fig.16 SD3 平面図・エレベーション及び出土遺物実測図



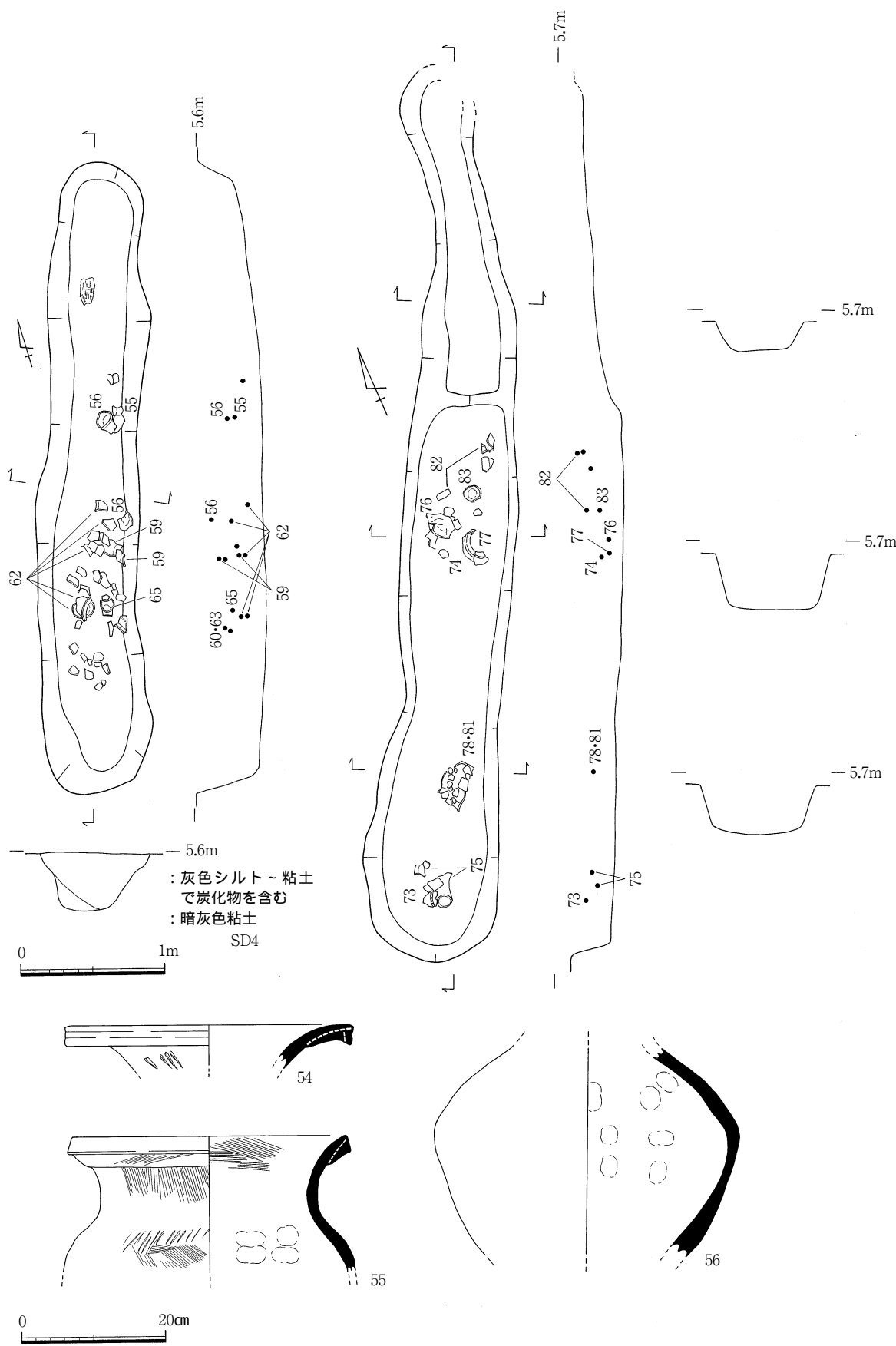


Fig.17 SD4・5平面図・エレベーション及びSD4出土遺物実測図

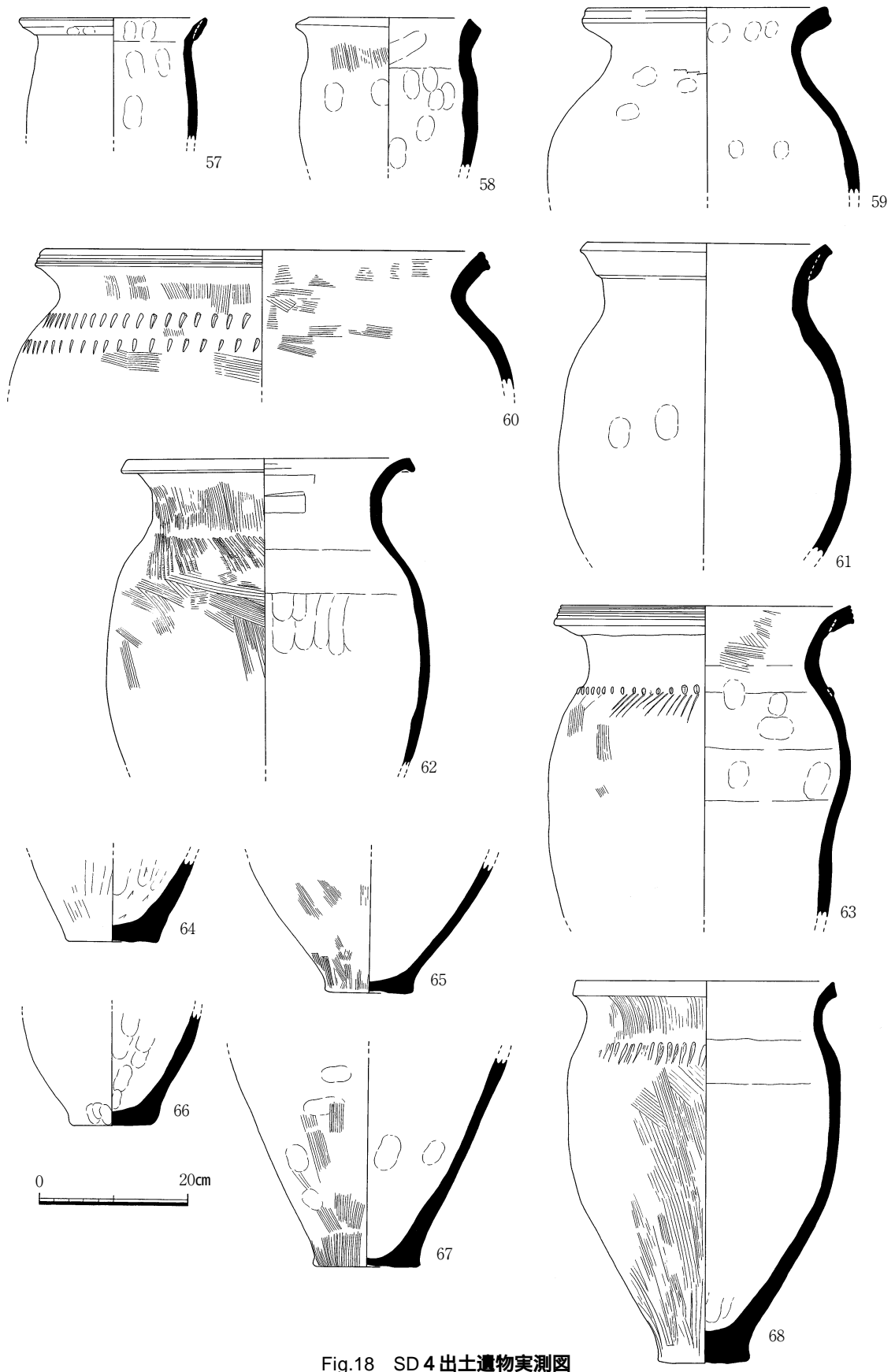


Fig.18 SD 4 出土遺物実測図

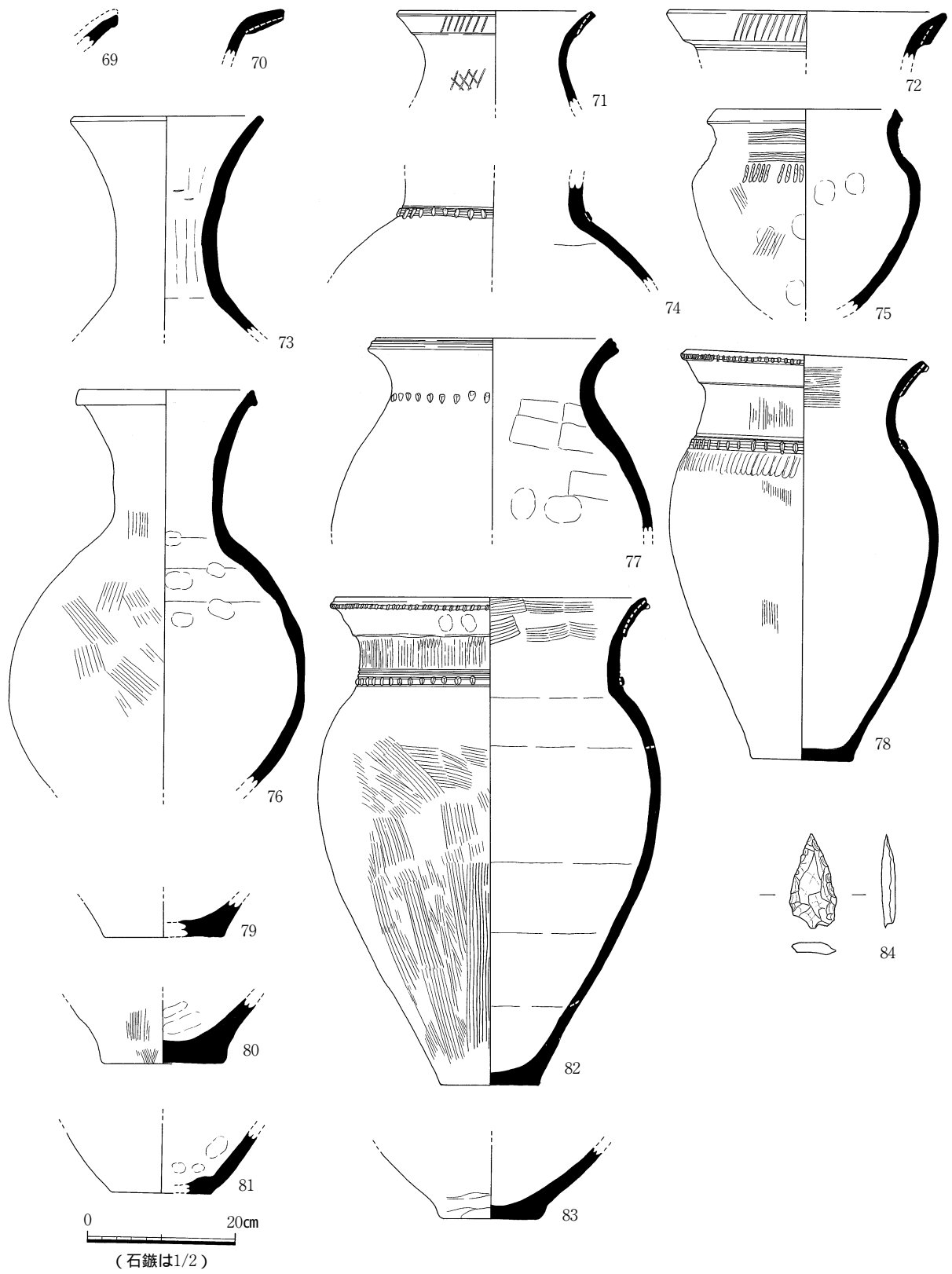


Fig.19 SD 5 出土遺物実測図

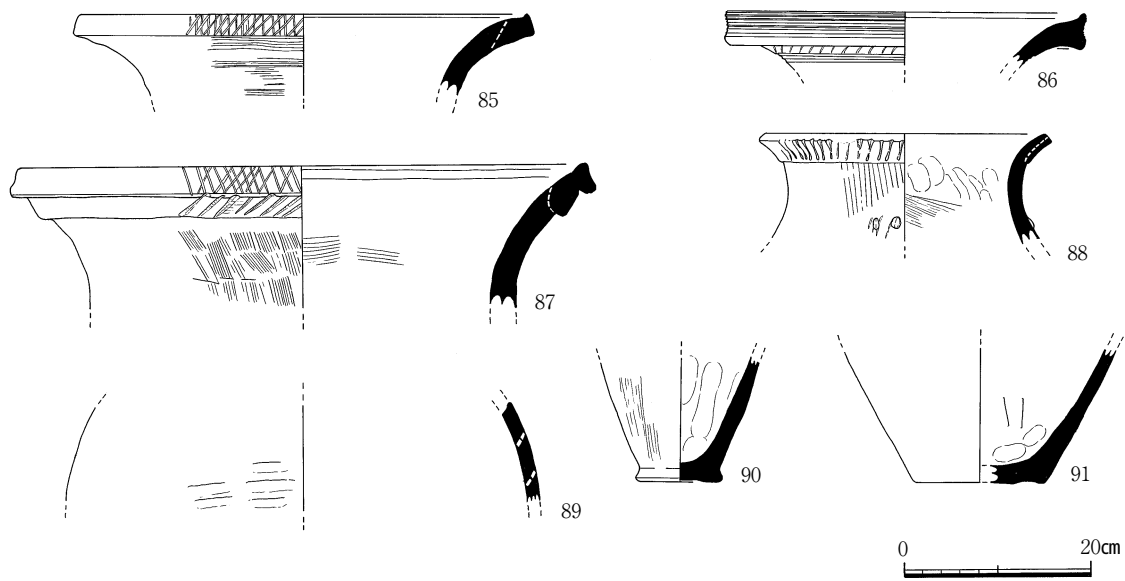


Fig.20 SB5 - P3 (87) 及び遺物包含層 ( 層) 出土遺物 (85・86・88~91) 実測図

底部 (79~81・83) などである。甕のほとんどと短頸壺 (75) は焼けている。この他、サヌカイト製の石鏃が1点 (84) 出土している。SD3・4と同様の廃棄が考えられる。弥生後期前葉に属する。

d 遺物包含層出土の遺物 (Fig.20)

遺物包含層 ( 層) 出土の遺物は、極めて少ない。図示し得たものは6点である。89は、 層上面で検出したもので、胴部外面に叩きが認められる。弥生後期に属する。他はすべて、 層中より出土した弥生後期前葉の壺 (85・86) 甕 (88) などである。

( 2 ) B区

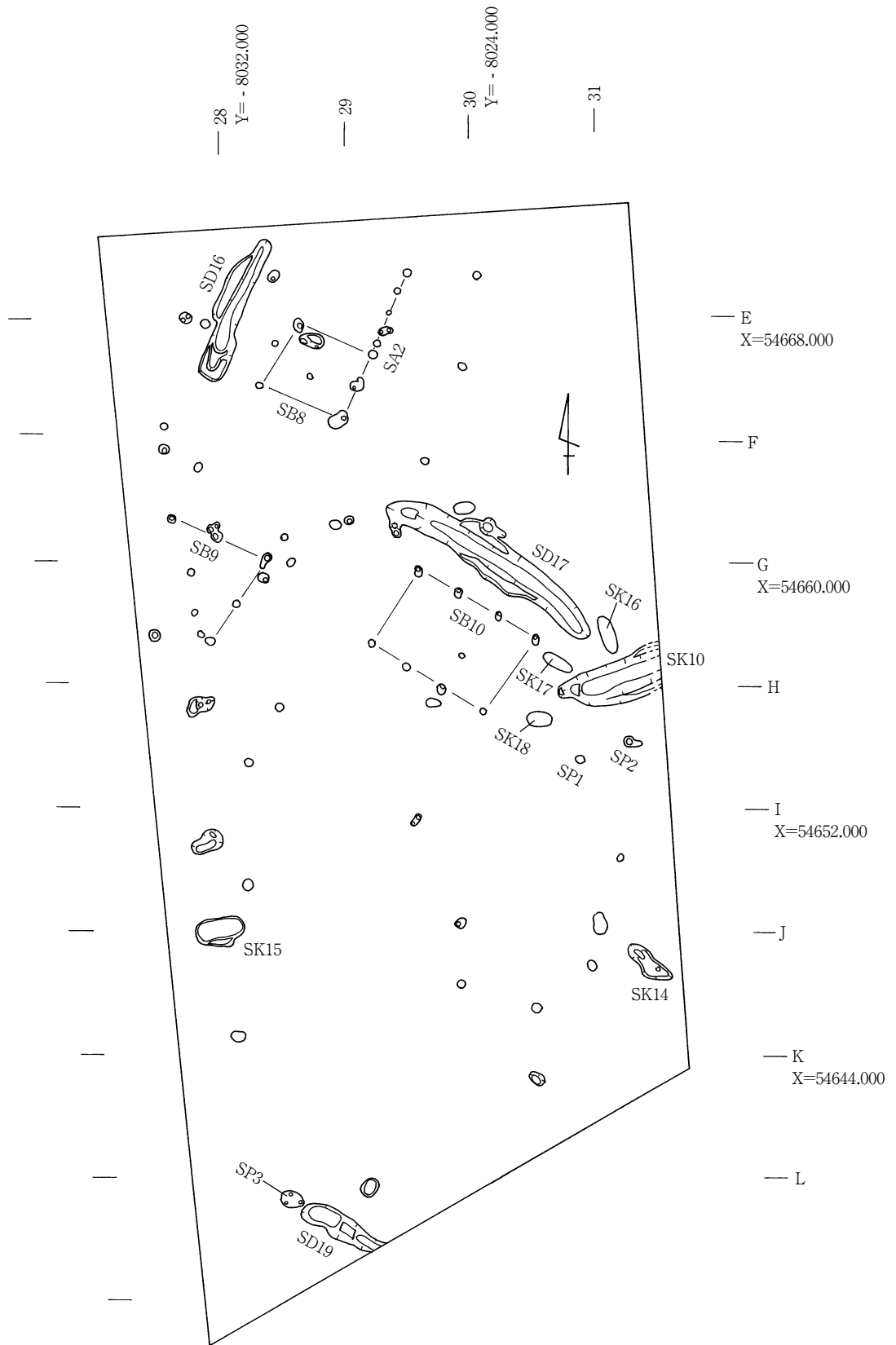


Fig.21 B区検出遺構全体図 (S=1/200)

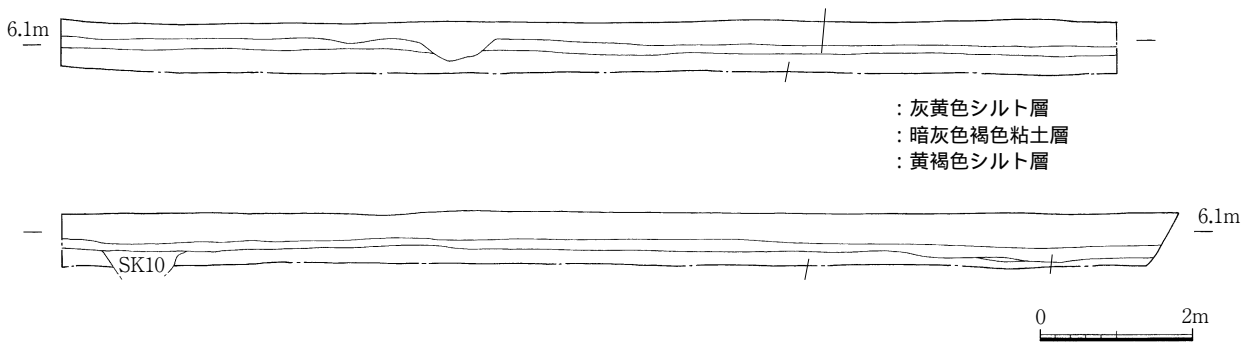


Fig.22 B区 東壁セクション

### 基本層準 ( Fig.22 )

層準は A区に準ずる。 B区では調査前に覆土を除去したので、 層以下の層準を図示する。

A区で観察できた、 層はみとめられないが、その他の基本的な層準の土質、包含物および堆積の状態は、 A区と通ずるものであった。 層は ~ 区で弥生包含層となっている層に相当し、各遺構は同層の直下で検出された。遺構埋土も隣接区と同様である。地山は南へ緩傾斜し、南北両端の標高差は十数cmを測る。

### 検出遺構と遺物

#### a 掘立柱建物

##### SB 8 ( Fig.23 )

調査区北部で検出した南北2.3m、東西2.9mの建物で、1間×2間または1間とみられる。SA 2と接するか、或いは重複している。位置関係からみて、SD16を伴うと考えられる。遺物はP 6より92が出土した他、細片が2点出土した。

##### SB 9 ( Fig.23 )

調査区西部で検出した2間×2間とみられる建物である。柱穴は浅いものがある。出土遺物は皆無である。

##### SB10 ( Fig.24 )

調査区中央部で検出した1×3間の建物で、2.8m×4.4mを測る。今次検出した建物中、桁行が最長である。比較的にみて、柱筋は直線的に通る、梁間は一定で、各柱穴の規模・形態は揃い、何れも一定の深さがあることを指摘できる。柱穴の半数で、南側の小段部あるいは外傾が看取できる。出土遺物は皆無である。SD17を伴うとみられる。

#### b 柱穴列

##### SA 2 ( Fig.24 )

SB 8に連結、又は重複する柱穴列で、4間、2.5mを測る。P 1より未製石鏃136が出土している。

#### c 溝状土坑

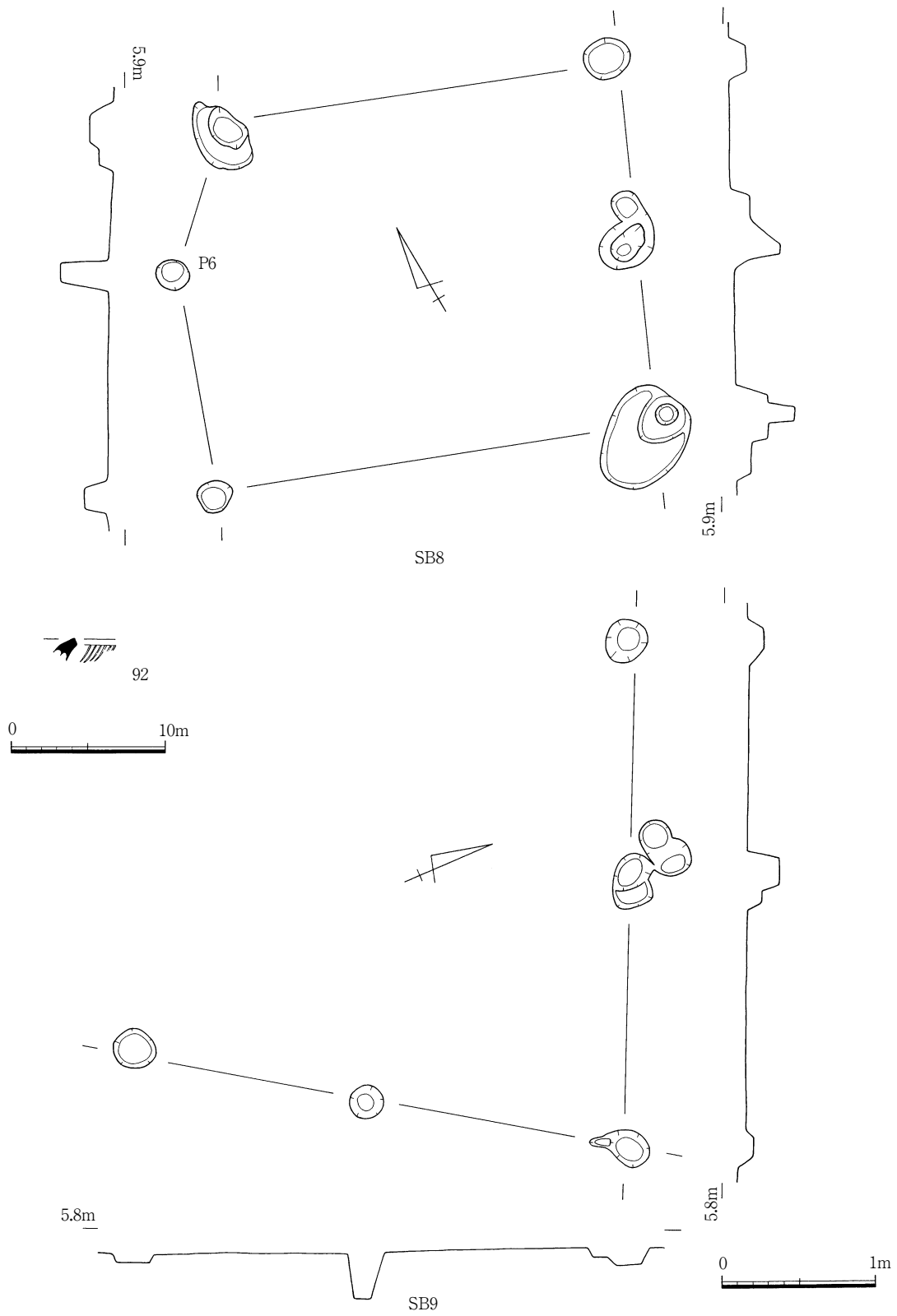


Fig.23 SB 8・9平面図・エレベーション及びSB 8 - P 6 出土遺物実測図

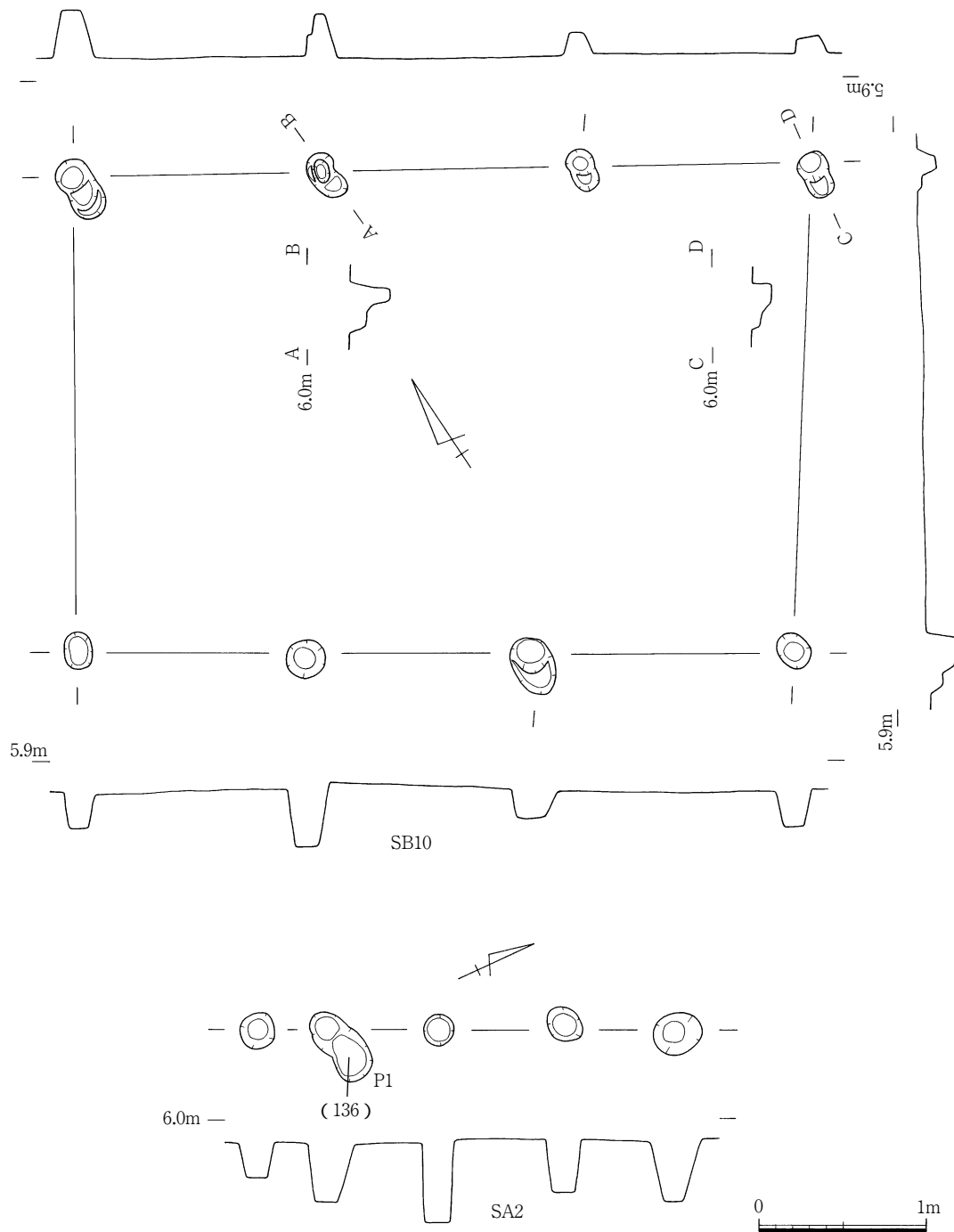


Fig.24 SB10、SA2平面図及びエレベーション



細長い土坑の一群である。

SD16 ( Fig.28 )

SB 8 西側で検出した長さ4.8mの溝状土坑で、西側と南端にテラス状の段を持つ。遺物の多くは底面から数cm～十数cm浮いていた。出土遺物には壺( 108・109・110・111・112・113 ) 甕( 107・114 ) がある。口縁部点数は壺3点、甕3点である。

SD17 ( Fig.29・30 )

SB10の北側で検出した溝状土坑で、長さ7.7m深さ62cmと、今次検出した類似遺構の中では比較的大きい。平面形はやや弓なりで、両側にテラス状の段や傾斜変化ラインをみとめ、西端にも段部を有す。横断面は舟底状ないし逆台形を呈す。北側テラス部と西端部でそれぞれ深さ約8cmのピットが検出されたが、SD17との前後関係は不明である。遺物は主に埋土中層より出土すると共に、遺存度の高いものは東部と西端より多く出土した。西端段部上の埋土中には、炭化物の集中が認められた。出土遺物には壺( 123・124・125 ) 甕( 119・120・121・122・126・127 ) がある。口縁部には壺4点、甕7点がある他、高杯脚部が1点出土している。

SD19 ( Fig.31 )

調査区南端に所在し、調査区外へ延びる溝状土坑で、検出した幅、深さは比較的に小規模である。狭い段部を有す。出土遺物は細片9点のみと少ない。なおSP3は、本遺構と関連する可能性を考慮し、併せて図示した。

SK10 ( Fig.25 )

当調査区から東隣のC区に跨る長さ6.64mの溝状土坑である。西端と両側に比較的狭い段を持つ。周囲西側には深さ4.1～9.9cmの楕円形の遺構やピットが検出されているが、関係は不明である。残存度良好な土器は最下層中に多かったが、底面からは数cmほど浮いていた。出土遺物には壺( 93 ) 甕( 94・95・96・97・98・99 ) がある。口縁部の出土点数は壺3点、甕6点である。十数～20cm大の円礫も出土しており、緑色の結晶片岩質のもの1点、晶質石灰岩質のもの2点である。

#### d 土坑

SK14 ( Fig.21 )

調査区南東部で検出した不整形プランの遺構で、長さ1.72m、幅0.64m、深さ約11cmを測る。北端でさらに20cm落ち込み、南東部には直径18cmで深さ30cmのピットがある。埋土はマンガン粒を含む褐灰色粘土である。出土遺物は皆無である。

SK15 ( Fig.28 )

調査区西南部で検出した遺構で、長さ1.6mの小判形にテラスが付いた平面形を呈す。全幅0.97m、深さは16cmで底面は平坦である。床面の小ピットの深さは5cmを測る。埋土はマンガン粒を含む褐灰色粘土である。38点の弥生土器片が出土しているが、口縁部は甕1点( 106 ) である。

SK16 ( Fig.21 )

SK10・SD17間で検出した長さ1.32m、幅0.46mの楕円形の遺構で、深さは9cm、床面は平坦である。埋土はマンガン粒を含む褐灰色粘土である。出土遺物は皆無である。

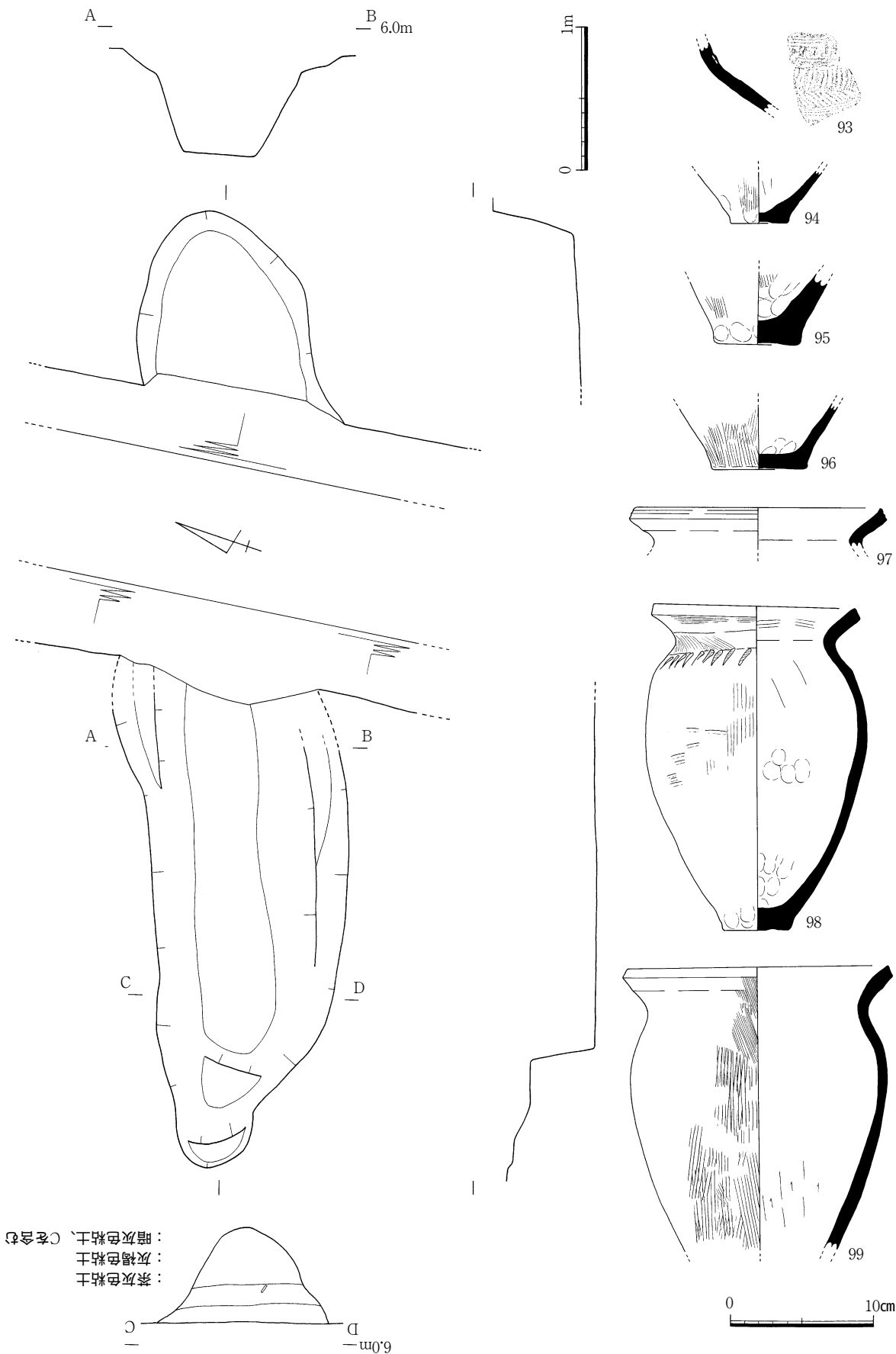


Fig.25 SK10平面図・セクション・エレベーション及び出土遺物実測図

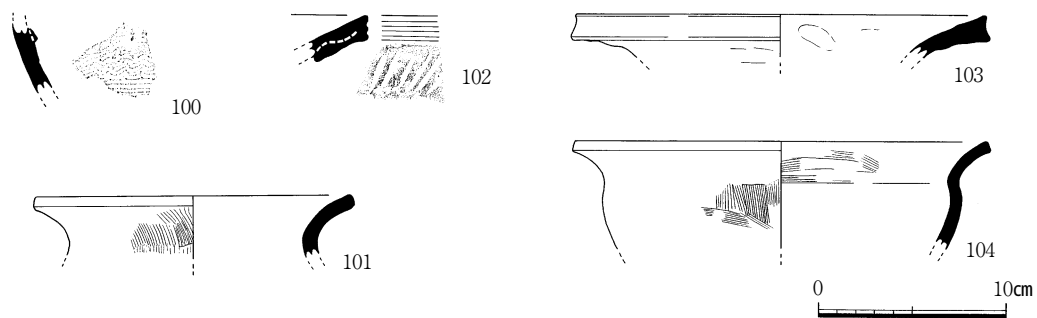


Fig.26 SK10出土遺物実測図

SK17 (Fig.21)

SK10・SB10間で検出した長さ1.02m、幅0.36mの整った楕円形を呈する遺構で、深さ10cmを測り、床面は平坦である。埋土はマンガン粒を含む褐灰色粘土である。出土遺物は皆無である。

SK18 (Fig.21)

SK10の西で検出した長さ0.8m、幅0.44mの楕円形の遺構で、深さは4.1cmと浅く、床面は平坦である。埋土はマンガン粒を含む褐灰色粘土である。出土遺物は皆無である。

eピット

SP 1 (Fig.21)

SK10の南で検出した。平面形は直径25cmの円形で深さは54cmを測り、上部に段を持つ。出土遺物は皆無である。

SP 2 (Fig.21)

SK10の南で検出した。平面形は直径30cmの円形にテラス状の突部が付き、深さは29cmを測る。埋土中層より弥生土器細片3点が出土している。

SP 3 (Fig.21・31)

SD19の端部に近接する。平面形は長径68cmの円形を呈し、深さ10cmで、4箇所2～7cmの落ち込みがある。出土遺物は皆無である。

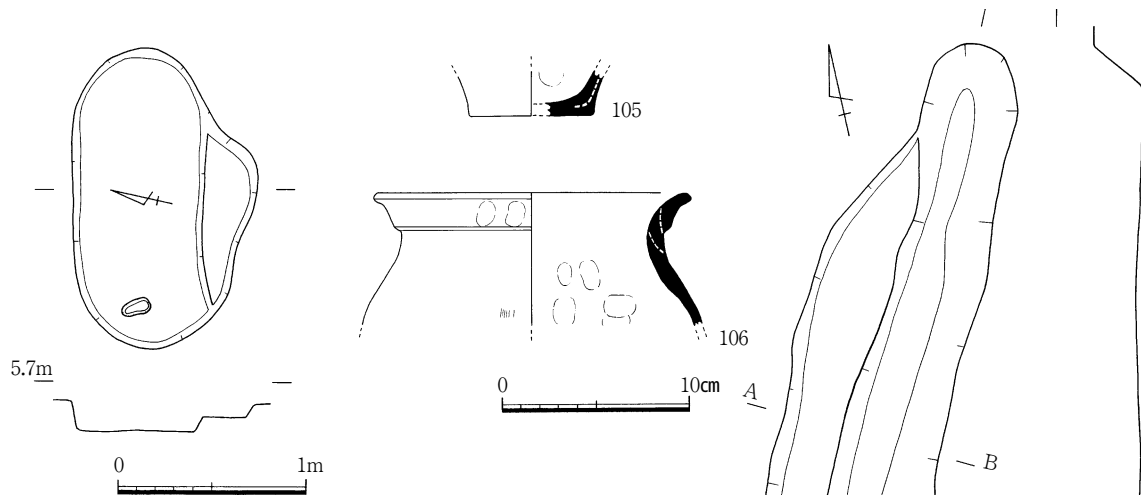


Fig.27 SK15平面図・エレベーション及び出土遺物実測図

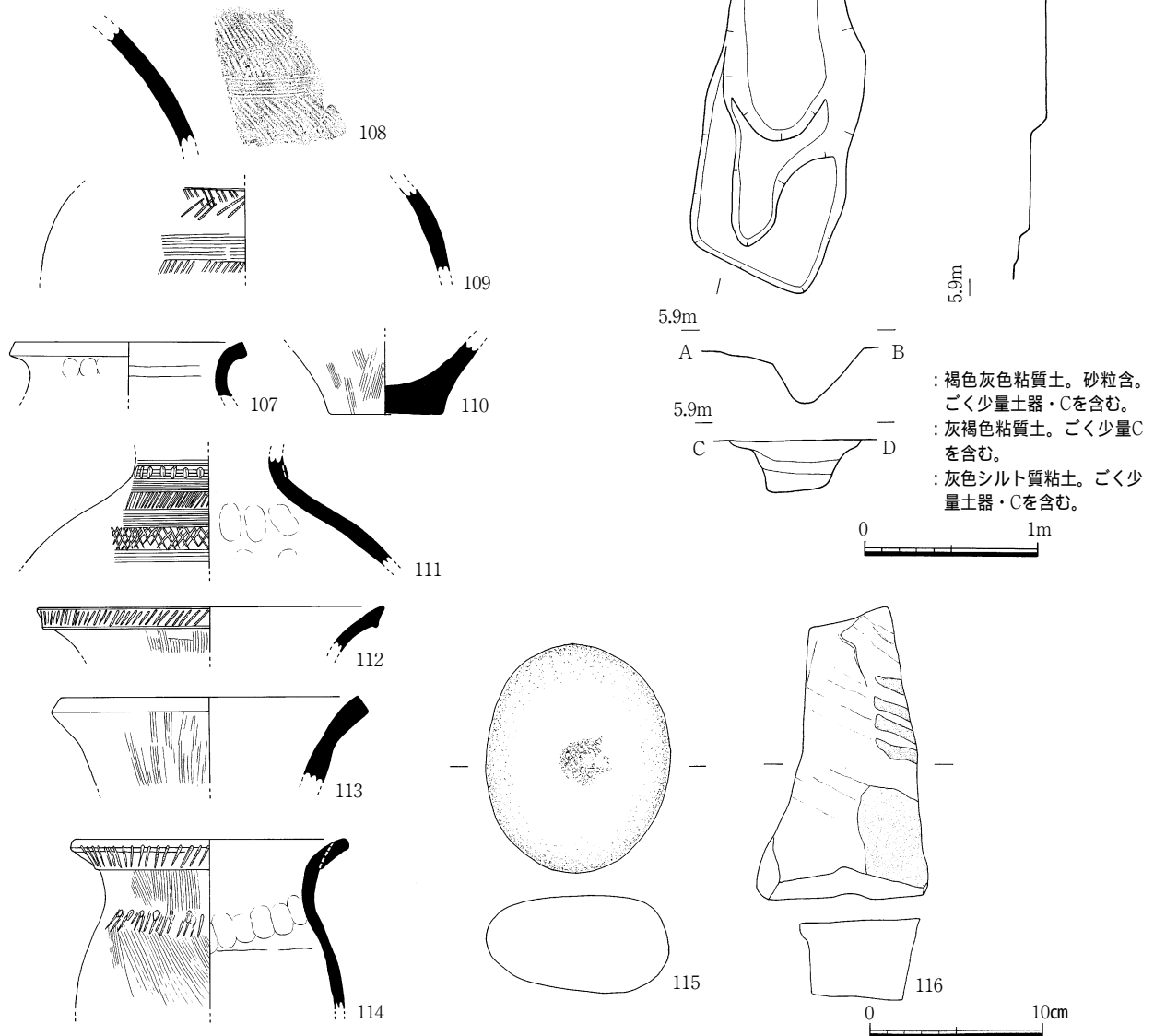


Fig.28 SD16平面図・セクション・エレベーション及び出土遺物実測図

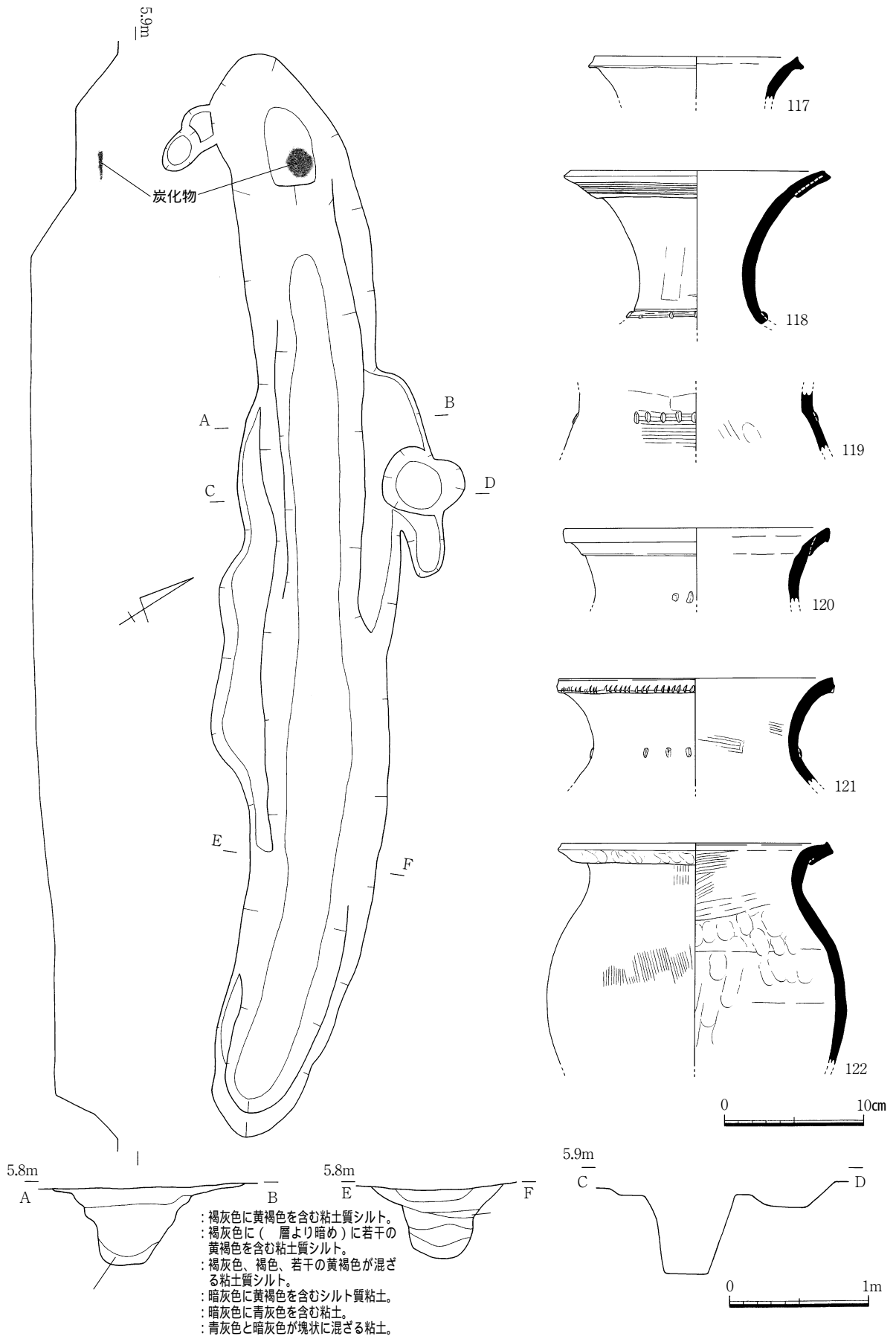


Fig.29 SD17平面図・セクション・エレベーション及び出土遺物実測図

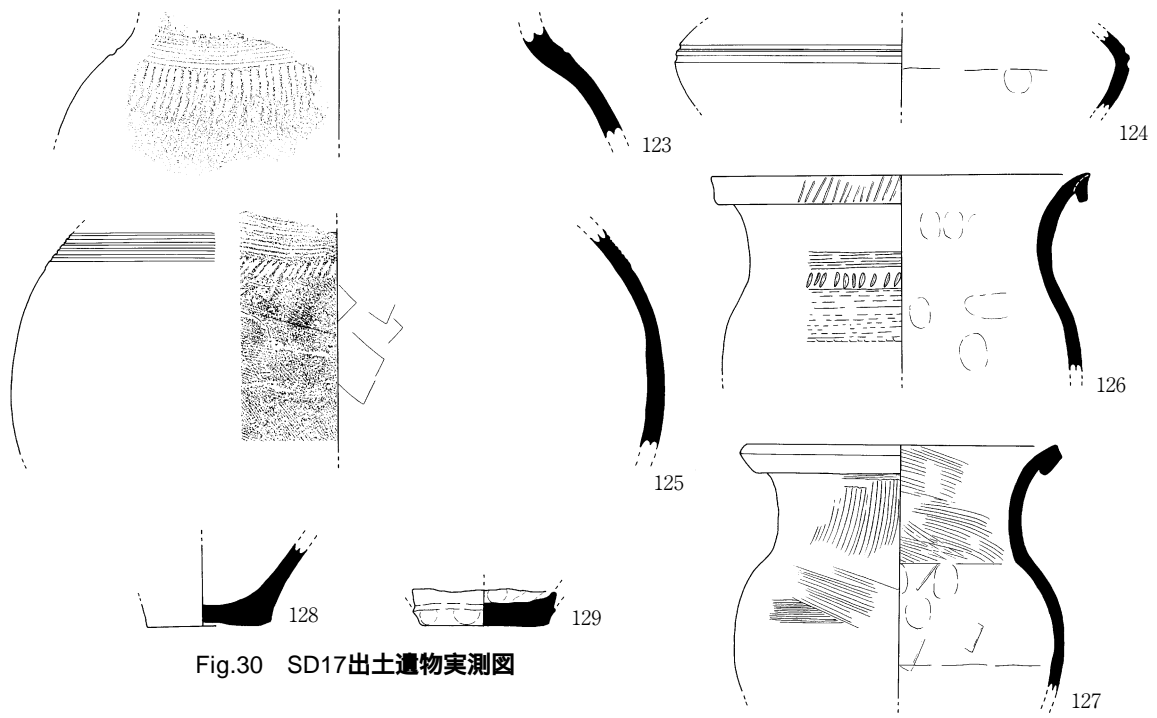


Fig.30 SD17出土遺物実測図

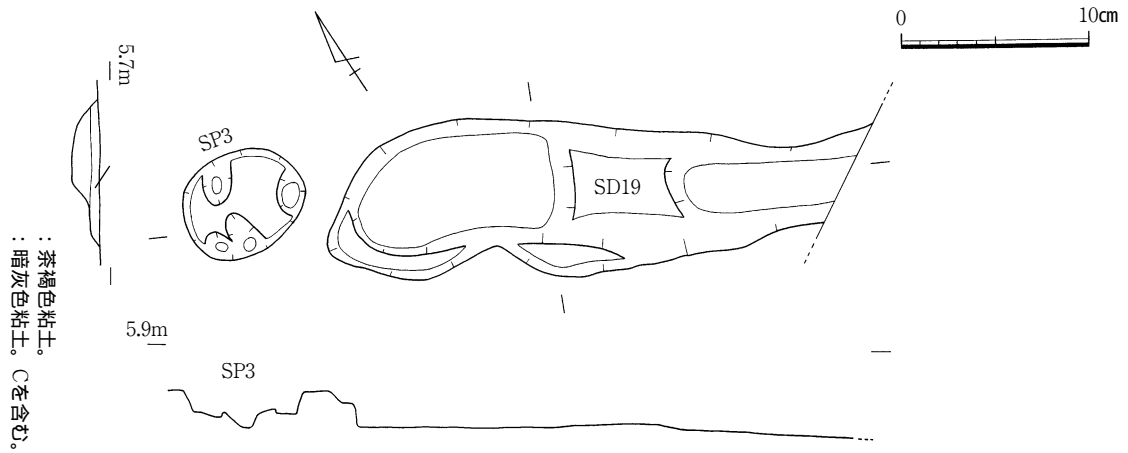


Fig.31 SD19平面図・セクション・エレベーション

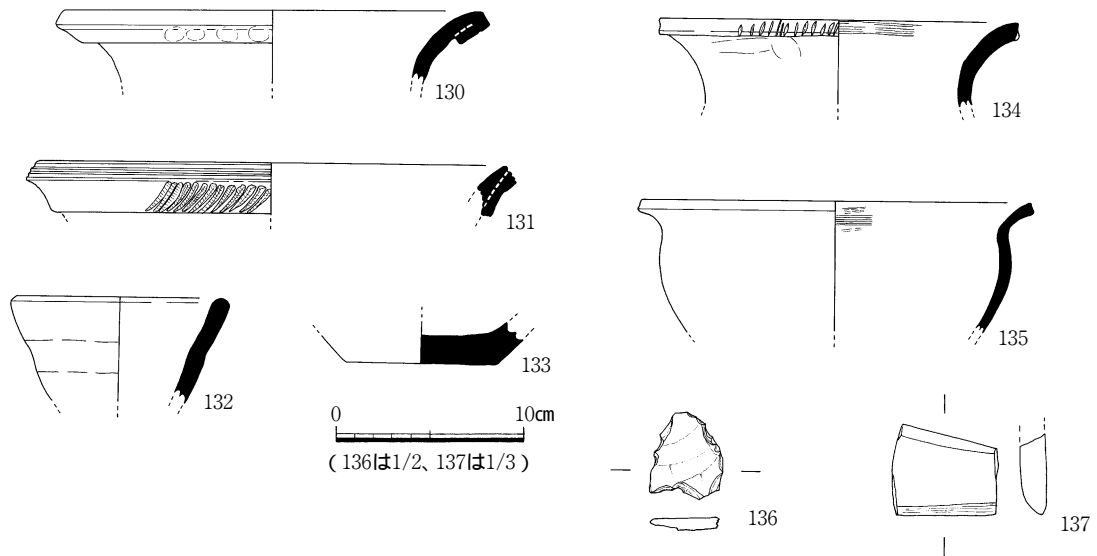


Fig.32 ビット及び遺物包含層出土遺物実測図

(3) C区

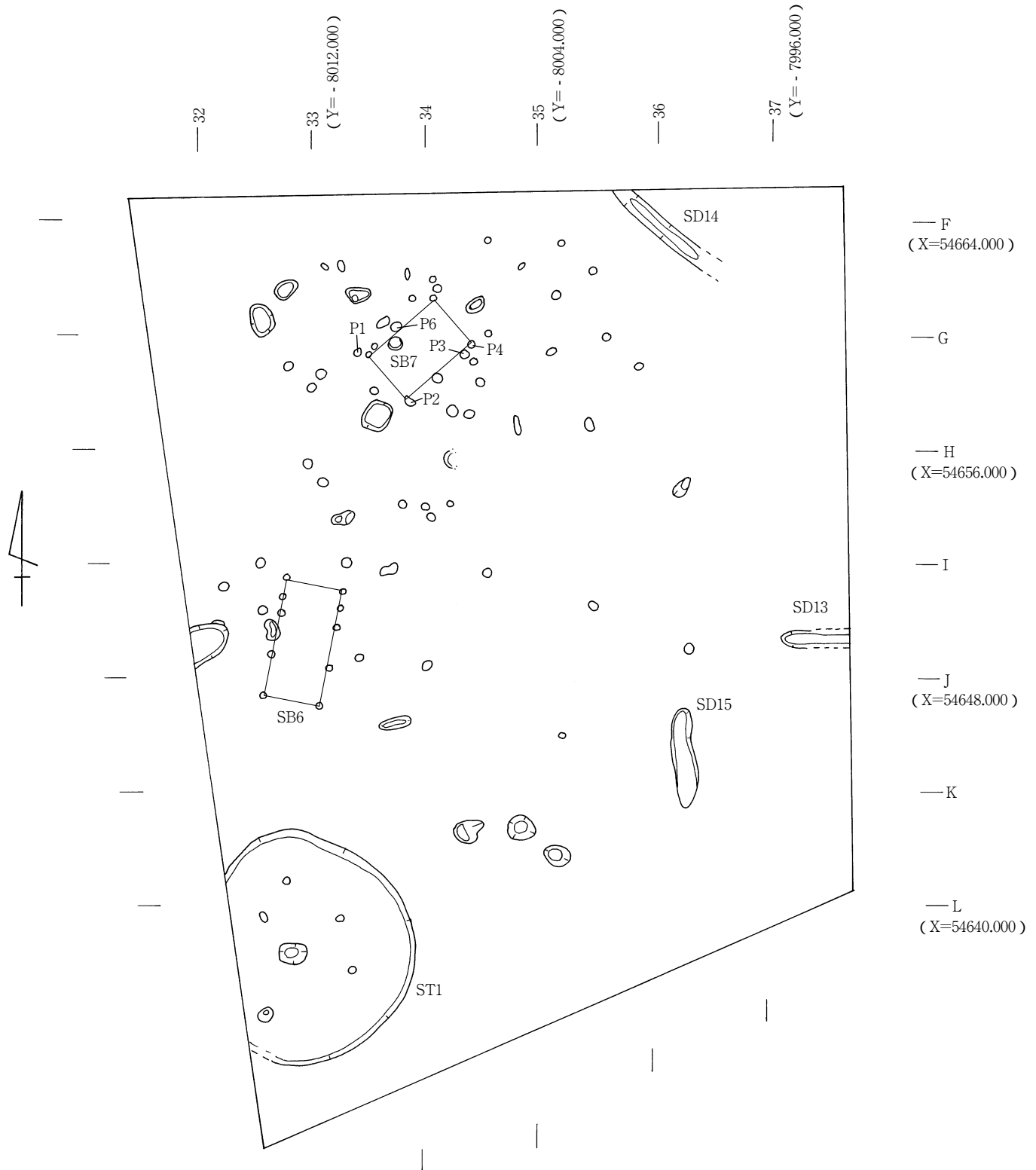


Fig.33 C区検出遺構全体図 (S=1/200)

基本層準 ( Fig.34 )

層：黄色シルト層で地山である。

層：茶灰色粘土層で弥生時代後期初めの遺物包含層である。層厚は10～20cmである。北部に比較すると南部のほうが厚く堆積する。

層：灰黄色シルト～粘土層で層厚は約20cm以下である。調査区の南端部付近にしか存在しない。

層：黄色砂層であり、一部にしか存在しない。

層：現代の水田耕土で、層厚は10～40cmを測る。

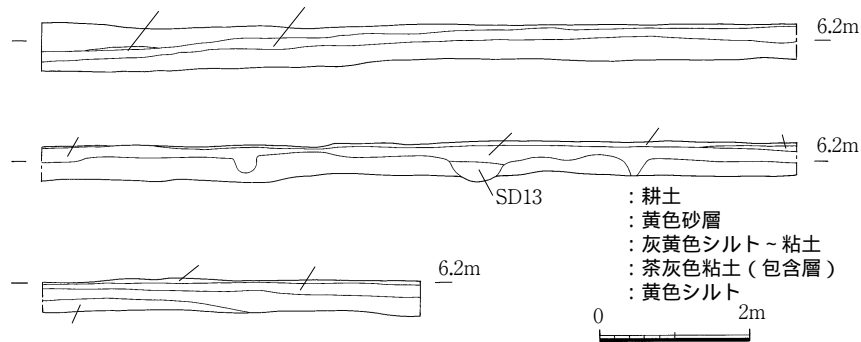


Fig.34 C区基本層準

#### 検出遺構と遺物

##### a 竪穴住居

##### ST 1 ( Fig.35 )

調査区の南西部において検出した。今回の調査で唯一の竪穴住居である。直径約8.3mの平面形不整形の竪穴住居である。埋土は 層：褐灰色粘土層、 層：灰色粘土層、 層：炭化物を多く含む灰色粘土層である。炭層は床面の中央部やや南よりに長径約2.5m、短径約2.1mの平面形不整形に分布していた。中央ピットは炭層が分布する北よりに位置し長径約1m、短径約0.75mの平面形楕円形を呈する。深さは0.34mである。 層：灰色粘土層、 層は炭層である。床面上に5基のピットを検出したが、P1は長軸0.55m、短軸0.5m、深さ0.9mと深い、他のP2～5は直径も0.3m前後であり、深さ0.1m以下と非常に浅い。

出土遺物は壺 ( 138・140・142・143・144・145・146 ) 甕 ( 139・141 ) 高杯 ( 153 ) である。138・139・149・151は中央ピット 層 ( 炭層 ) からの出土である。144は搬入品である。細かい波状文と櫛描きの直線文を交互に配置する。胎土は細かい砂粒を多く含む。焼成は他のものと比較して良好である。また、長径4～5cmの川原石が2点出土している。

ST 1は弥生時代後期前葉である。



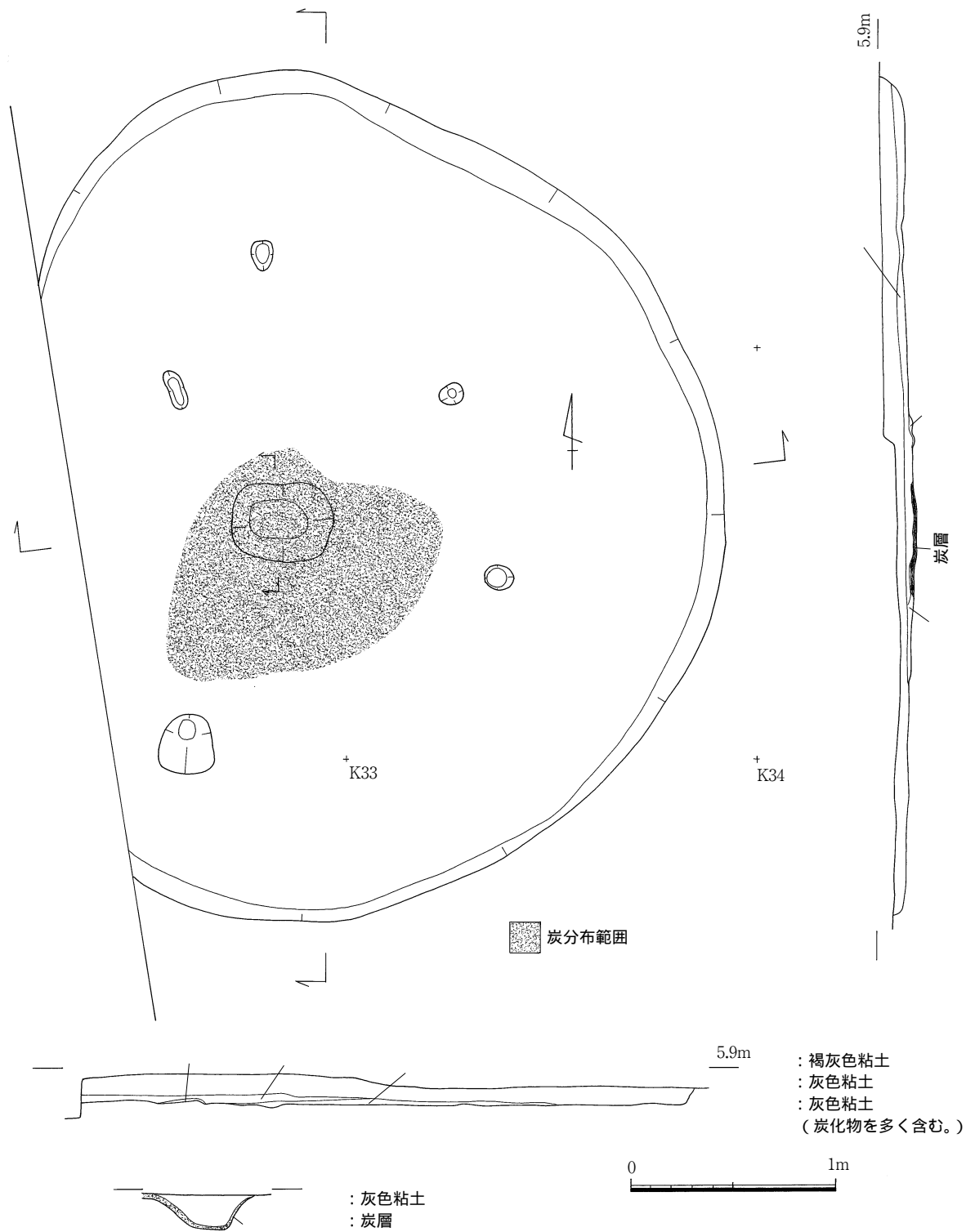


Fig.35 ST1平面図・セクション及び中央ピットセクション

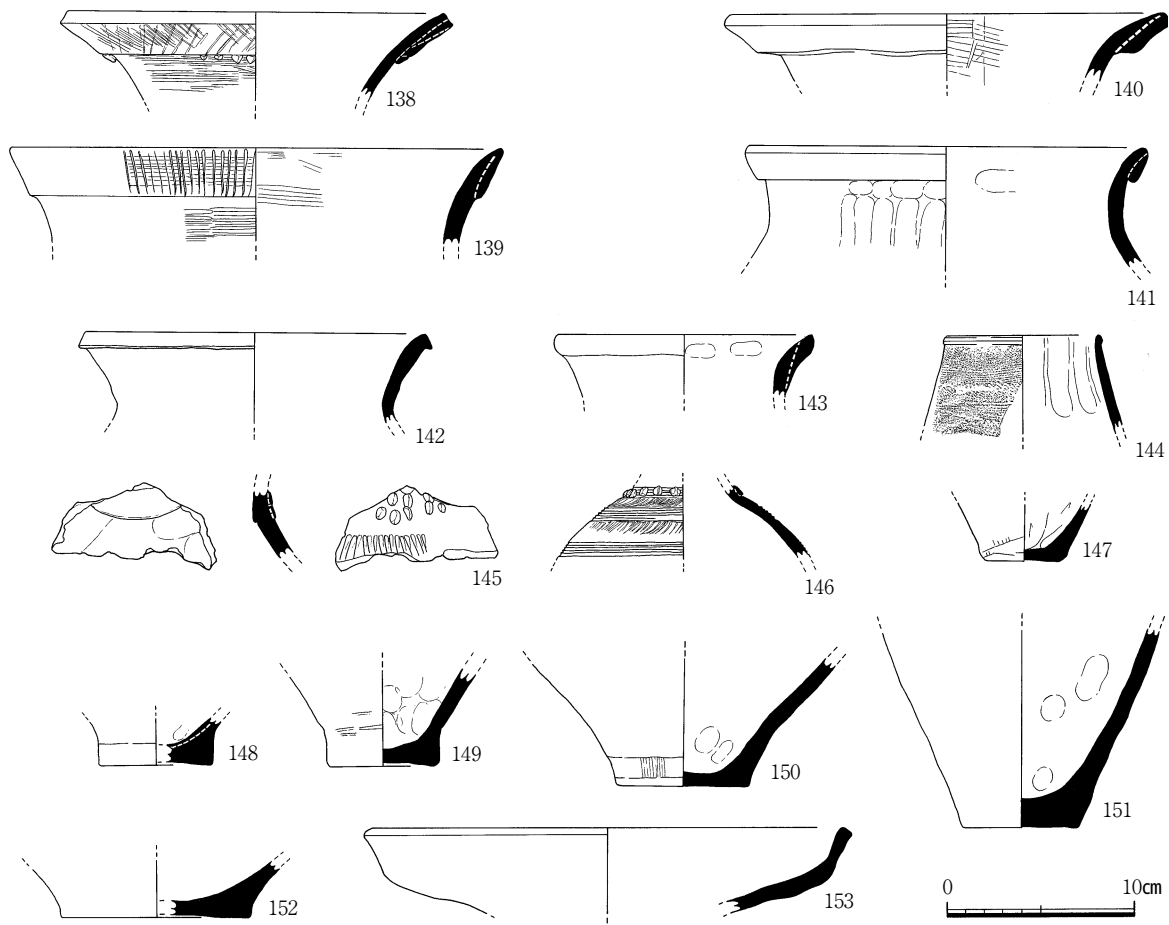


Fig.36 ST1出土遺物実測図

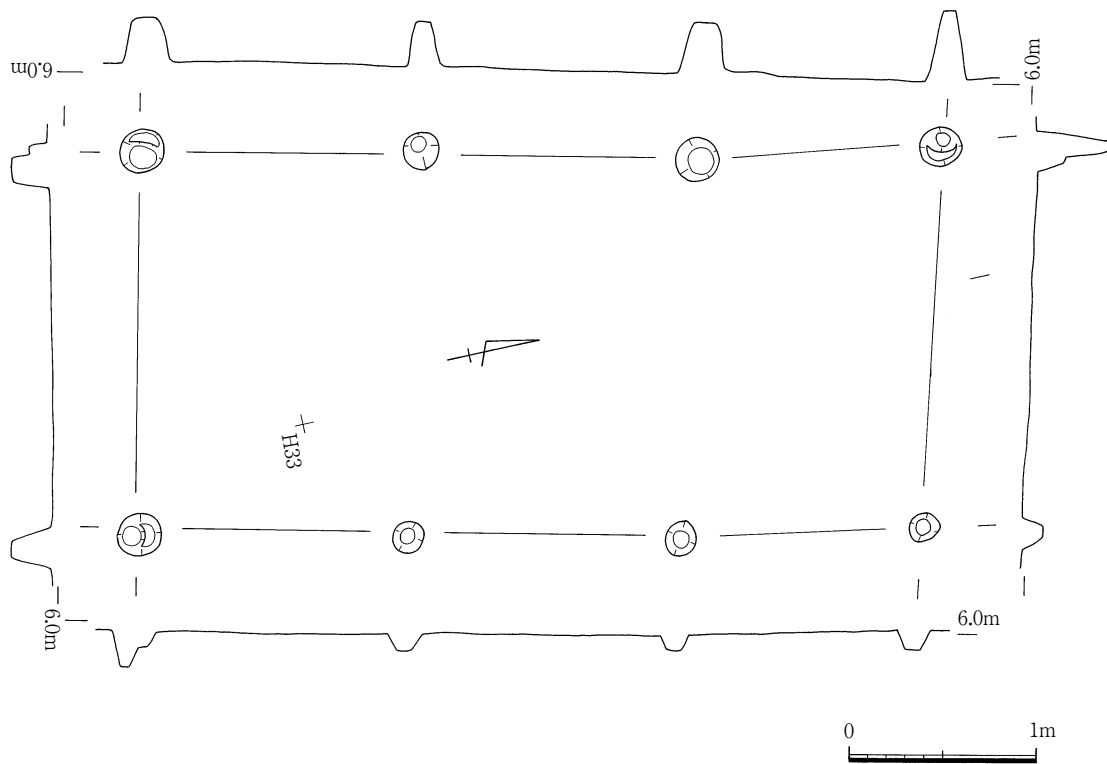


Fig.37 SB 6 平面図・エレベーション

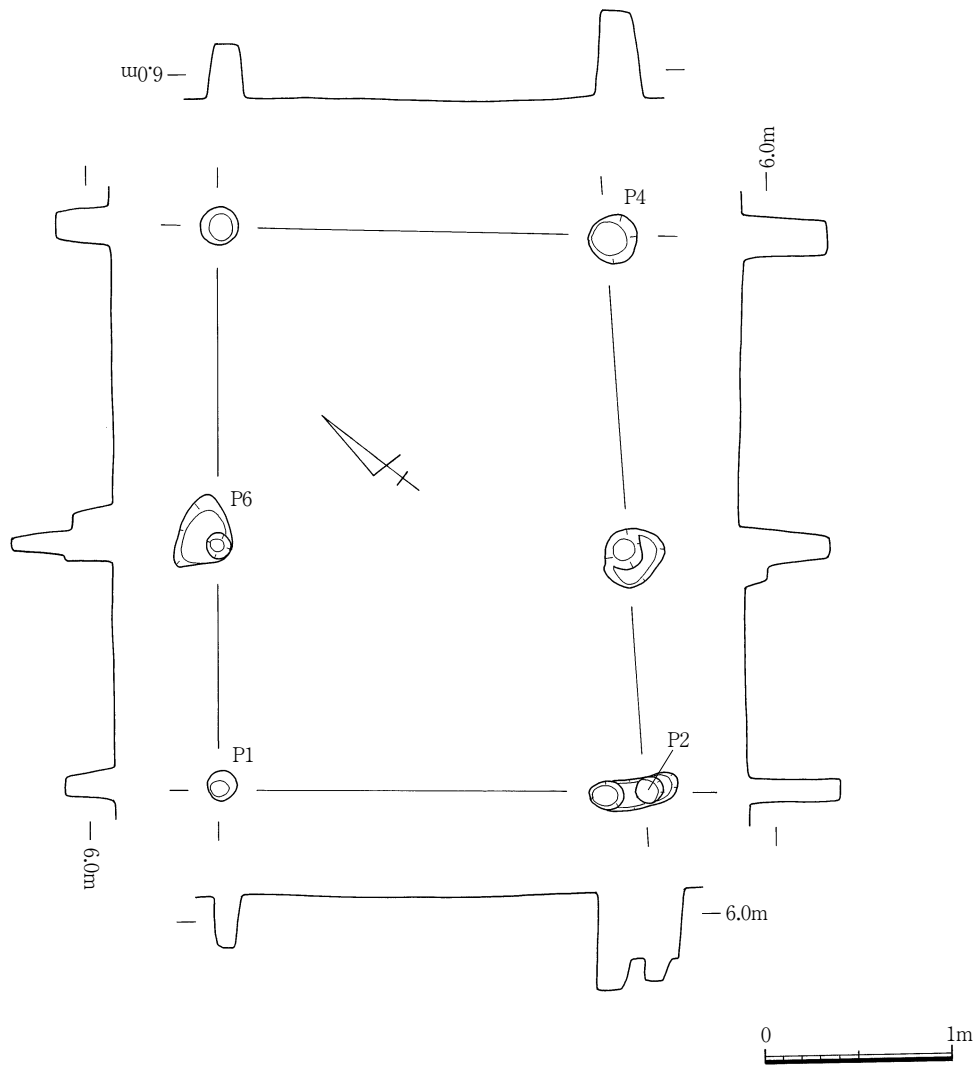


Fig.38 SB7平面図・エレベーション

### b 掘立柱建物

#### SB6 (Fig.37)

調査区の西部中央に位置する。梁間(2.0m)1間、桁行(4.2m)3間の規模を有し、長軸方向はN-13°-Eである。柱穴の掘形は円形であり、径30~50cmを測る。また、東側の柱穴は20cm前後と浅く、西側の柱穴は50~70cmと深い。

SB6は弥生時代後期前葉である。

#### SB7 (Fig.38・Fig.42)

調査区の北部中央に位置する。梁間(2.2m)1間、桁行(2.9m)2間の規模を有し、長軸方向はN-53°-Eである。両側柱の中央に位置する柱穴は2つとも一旦平坦面を持つ形態である。柱穴の深さは30~54cmと全体的に深い。

P1からは小型の壺(176)が1点出土した。口縁部外面に幅約1.2cmの粘土帯を貼付する。粘土帯外面に列点文を施す。頸部外面に櫛描直線文を施し、櫛描直線文直下に列点文を施す。外面は被熱

により変色し、および煤が付着する。P2からは底部(177)が、P3からは底部(178)が、P4からは砥石(180)がそれぞれ出土している。P6は長軸0.4m、短軸0.35mの規模を有する平面形不整形のピットである。埋土中層から長頸壺(179)と河原石が9個出土した。河原石は長径3~5cm大の大きさのものである。断面形は扁平なものが多く、球形を呈したものはない。柱を抜き取った後、半分程度埋め戻し、長頸壺と河原石を埋設したものと考えられる。SB7は北高田遺跡では最も標高が高い地点に位置することを考慮に入れるとこの建物の性格について興味深い。

SB7は弥生時代後期前葉である。

### c 溝状土坑

SD13 (Fig.39)

調査区の東部やや南よりで検出した溝状土坑である。東は調査区外へのびる。検出長2.4m、幅0.7m、深さは約0.2mを測る。遺物は壺(154~156)、砥石(157)が出土している。

SD13は弥生時代後期前葉である。

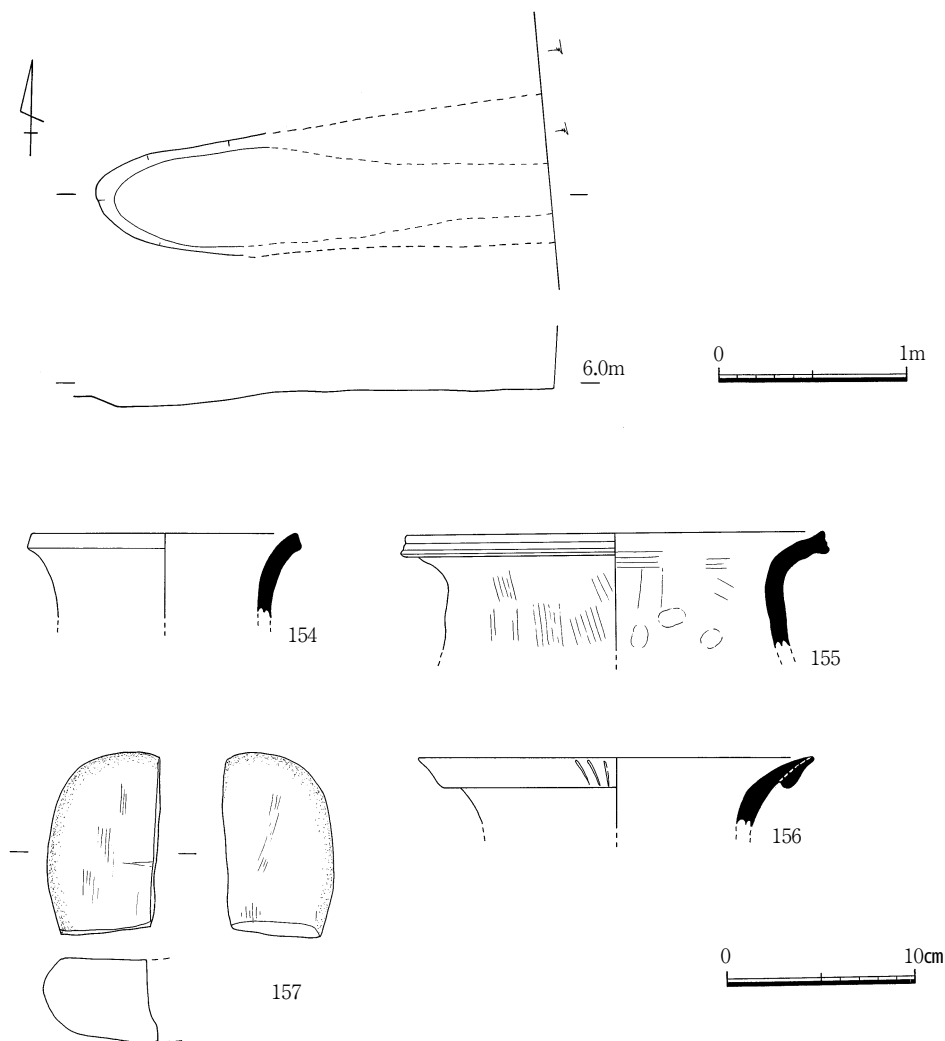


Fig.39 SD13平面図・エレベーション及び出土遺物実測図

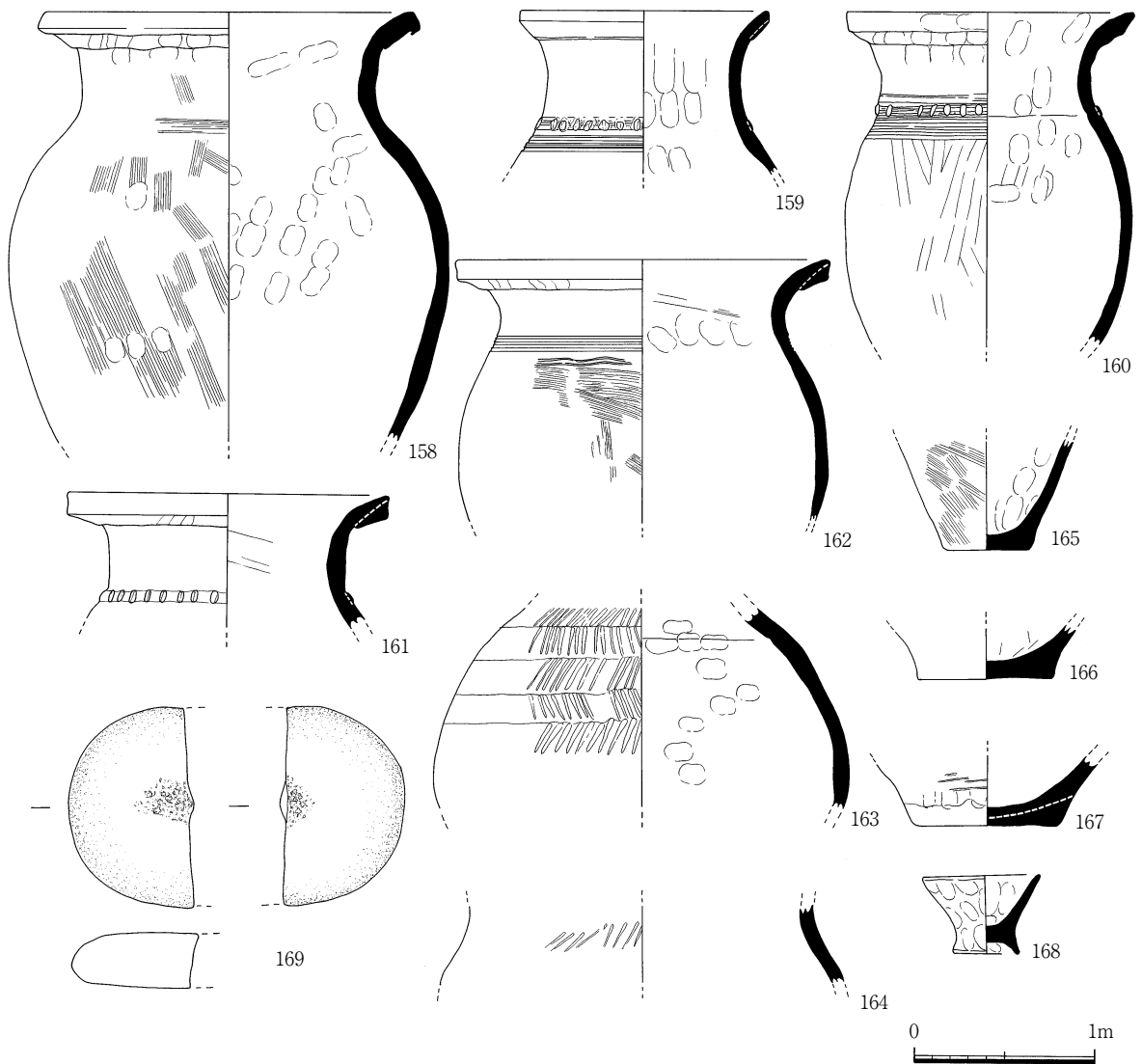
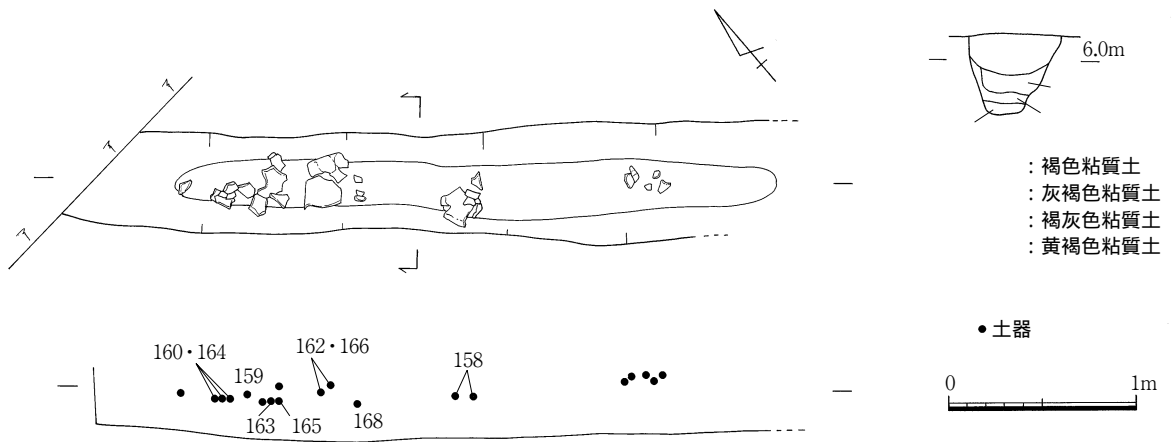


Fig.40 SD14平面図・セクション・エレベーション及び出土遺物実測図

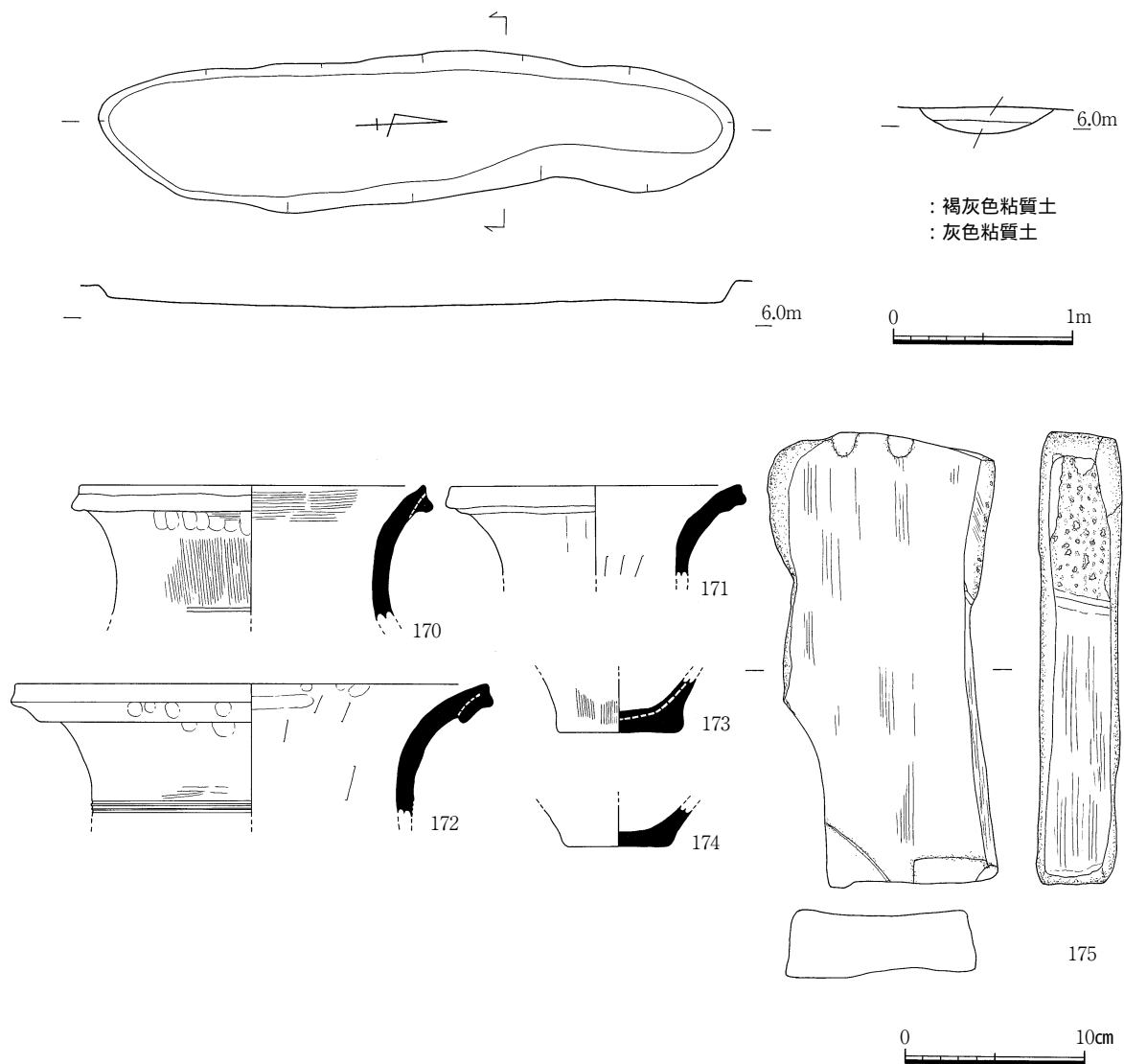


Fig.41 SD15平面図・セクション・エレベーション及び出土遺物実測図

SD14 ( Fig.40 )

調査区北部東よりで検出した溝状土坑である。北は調査区外にのびる。検出長3.5m、幅0.6m、深さ0.4mを測る。出土遺物は壺 ( 161・162・163・164 ) 甕 ( 158・159・160 ) 底部 ( 165~167 ) 小型土器 ( 168 ) 叩き石 ( 168 ) である。遺物は床面直上からの出土はなく、中層から上層にかけてからの出土である。また、P 6 同様、長径 4 cm の川原石が 1 点出土した。158は甕である。頸部は短く直立気味に立ち上がり、口縁部は大きく外反する。口縁部外面には幅約 2 cm の粘土帯を貼付し、口唇部をヨコナデする。外面はハケ調整を内面はナデ調整を施す。外面に煤が付着する。160は甕である。口縁部はなで肩から緩やかに外反する。口縁部外面に粘土帯を貼付し、ヨコナデすることで粘土帯は断面形が扁平な三角形を呈する。胴部と頸部の境に櫛描直線文を施し、櫛描直線文上に楕円形浮文を貼付する。外面に煤が付着する。外面はハケ調整を、内面はヘラナデ調整を施す。162は甕である。口縁部はなで肩から緩やかに外反する。口縁部外面に粘土帯を貼付し、ヨコナデすること

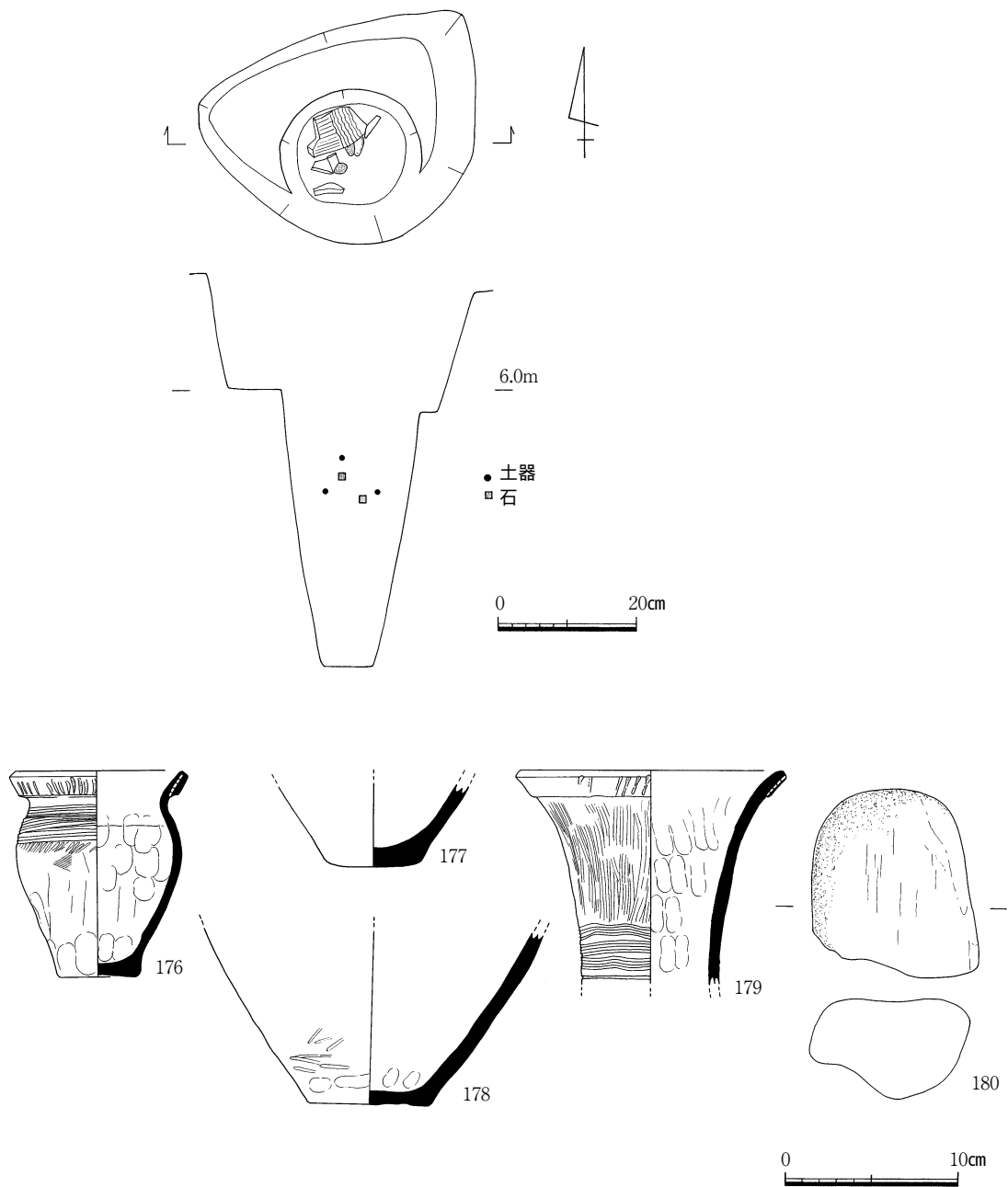


Fig.42 P6平面図・エレベーション及びP1～4・6出土遺物実測図

で粘土帯は断面形が扁平な三角形を呈する。頸部に櫛描直線文を施す。内面ナにはデ調整を、外面にはハケを施す。

SD14は弥生時代後期前葉である。

SD15 ( Fig.41 )

調査区南部東よりで検出した溝状土坑である。長さ3.5m、幅0.8m、深さ0.15mを測る。埋土は層：褐灰色粘質土、層灰色粘質土である。断面形は緩やかに立ち上がる。出土遺物は壺（170～172）底部（173・174）砥石（175）である。

SD15は弥生時代後期前葉である。

d 遺物包含層出土の遺物 ( Fig.43 )

181は壺の口縁部である。幅約2cmの粘土帯を口縁端部に貼付する。粘土帯の下端に円形浮文を隙間なく貼り付ける。また、頸部には櫛描直線文を施す。182は甕の口縁部である。幅約2cmの粘土帯を口縁端部に貼付する。粘土帯には右上がりの列点文を施す。外面には煤が付着する。肩部にも粘土帯と同様に右上がりの列点文施され、さらにその上には円形浮文を貼付する。184は壺である。断面扁平な三角形状に粘土帯を口縁端部に貼付し、頂点付近に刻み目を施す。外面に若干煤が付着する。器壁は厚くしっかりとした印象を受ける。

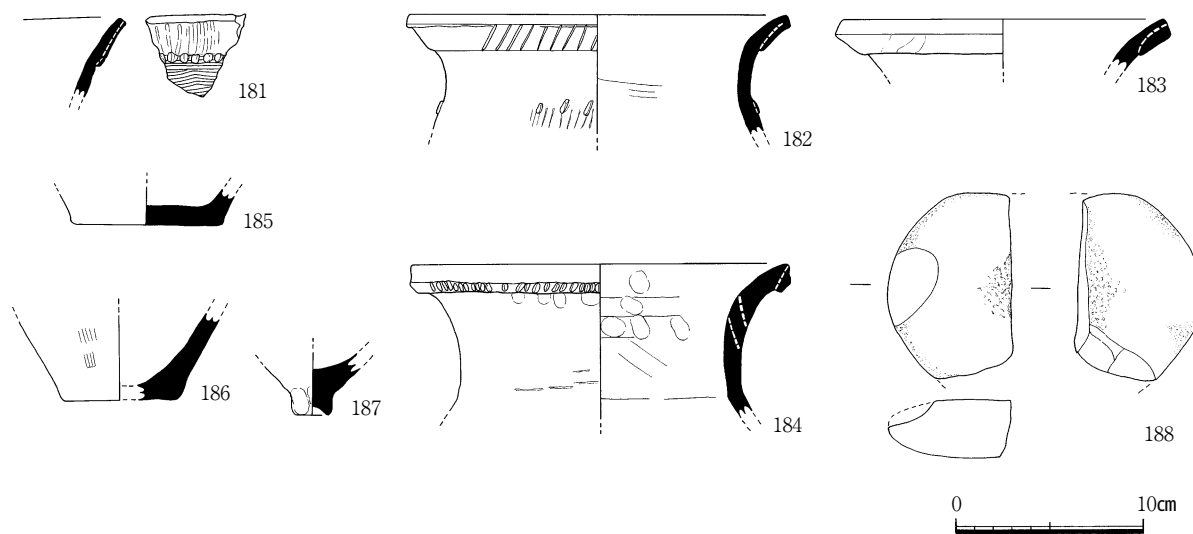


Fig.43 C区包含層出土遺物実測図



### 3. 区の検出遺構と遺物

#### (1) A区

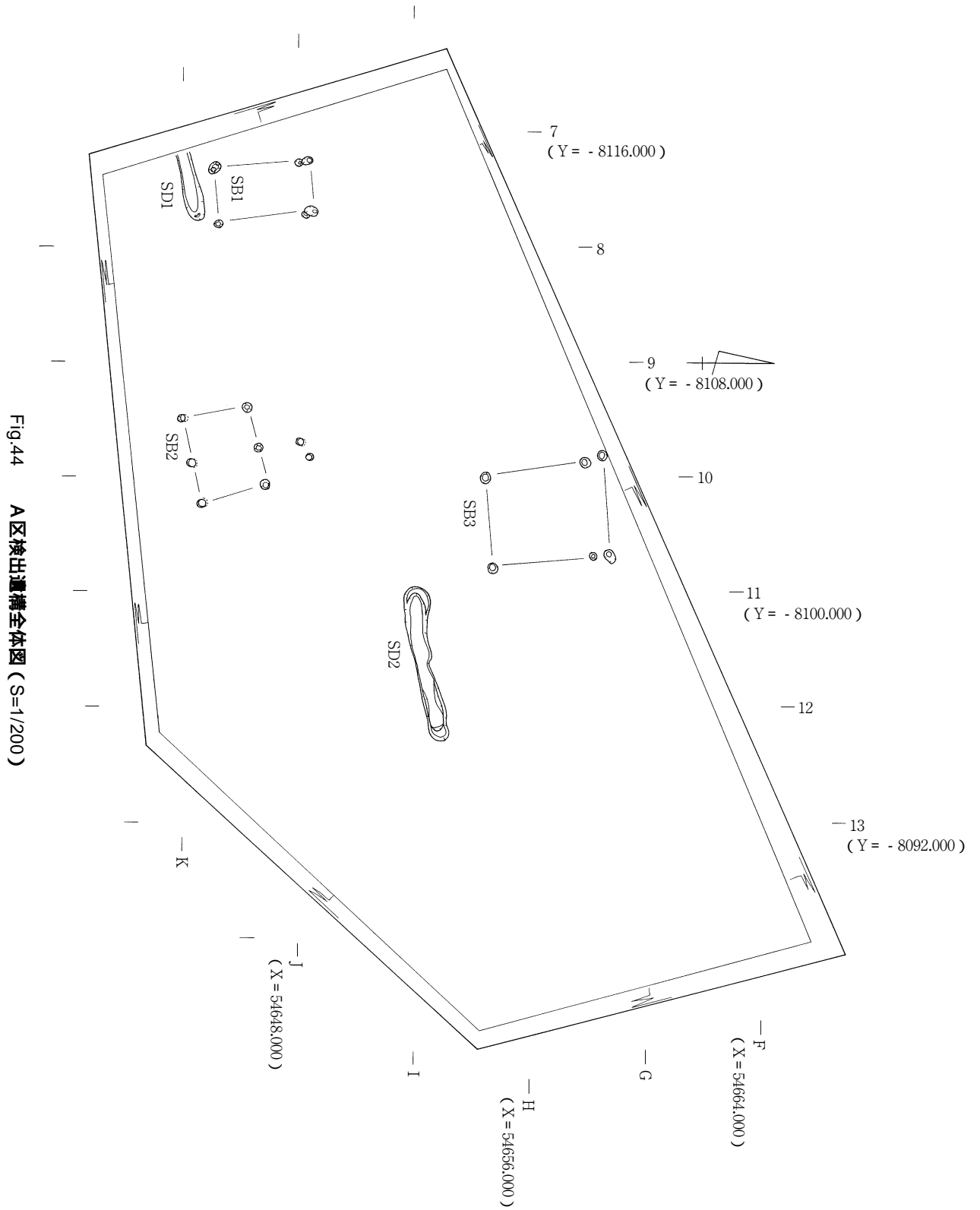


Fig.44 A区検出遺構全体図 (S=1/200)

### 基本層準 ( Fig.45 )

基本的に他区と同様である。地山は南へ緩傾斜しており、南東部は比較的湿潤であった。 Fig.45 でみれば、南北両端の標高差は数cmである。

地山：黄灰色シルト質粘土にマンガン粒・鈹物集積を多含。

層：褐灰色粘土にマンガン粒含む。弥生遺物包含層。 ~ 区の同包含層に対応する。

層：黄灰色シルト質粘土に鈹物集積含む。

層：褐灰色シルト質粘土。

層：耕作土。

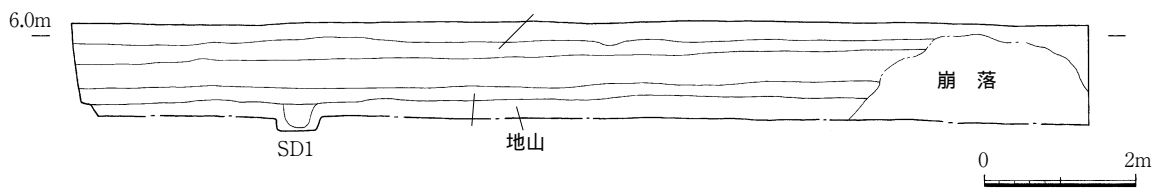


Fig.45 A区基本層準 (西壁)

### 検出遺構と遺物

#### a 掘立柱建物

##### SB 1 ( Fig.46 )

A区西端で検出した1間×1間とみられる建物で、1.8m×3.4mを測る。北側の柱穴は大小2基がセットになっているが、切合い関係は不明である。柱穴は内傾する。50cm南にSD1を伴う。P1より弥生土器小片が10点出土している。

##### SB 2 ( Fig.47 )

A区南部で検出した1間×2間とみられる建物で、2.2m×2.8mと3.0mを測る。南側の柱穴はやや外傾する。P4には柱根(189)が残存しており、最大径11.3cmを測る。他はP6から190が出土しているのみである。

##### SB 3 ( Fig.48 )

A区中央北部で検出した1間×1間の建物で、3.2mと3.5m×4.1mを測る。北側の柱穴が2基セットであることにはSB1との共通点を指摘できる。石鏃(202)が地山面にめり込んだ状態で出土したが、関連は不明である。

#### b 溝状土坑

##### SD 1 ( Fig.50 )

A区西端で検出した溝状土坑で、調査区外に延びる。SB1に近接する。端部に狭い段を有す。出土遺物は、土器片総数16点と少なく、識別可能な口縁部は壺(192)のみである。

##### SD 2 ( Fig.49 )

A区中央で検出した溝状土坑で、全長5.48mを測る。最寄りの遺構はSB3で、L字状の位置関

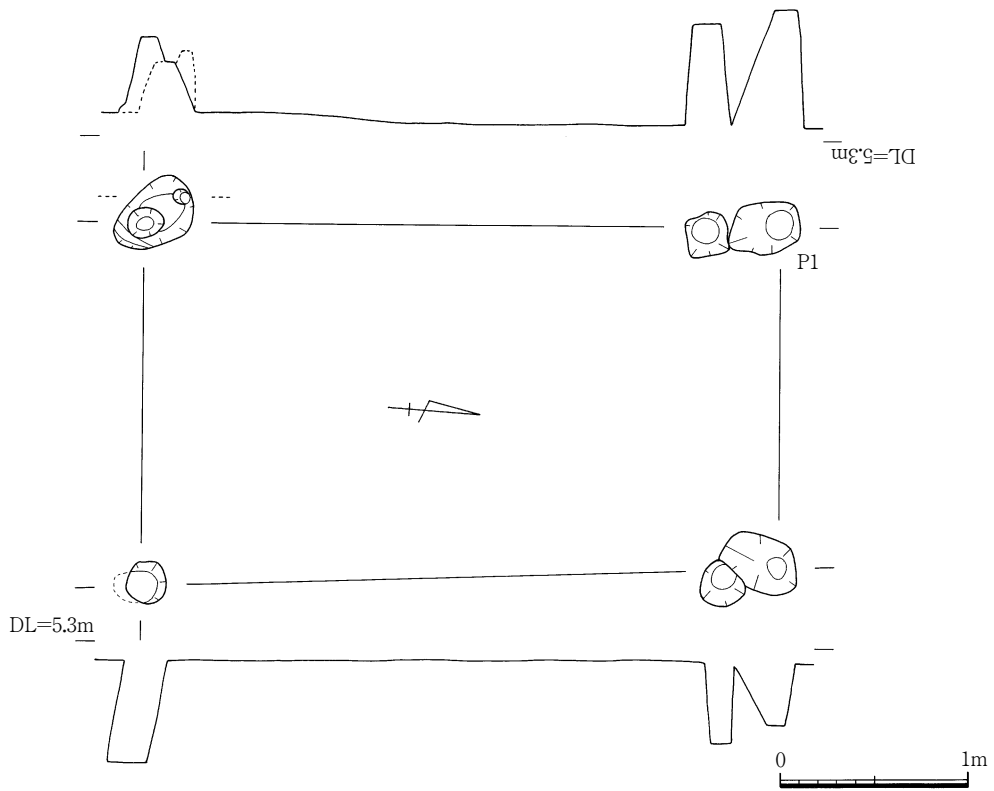


Fig.46 SB 1 平面図及びエレベーション

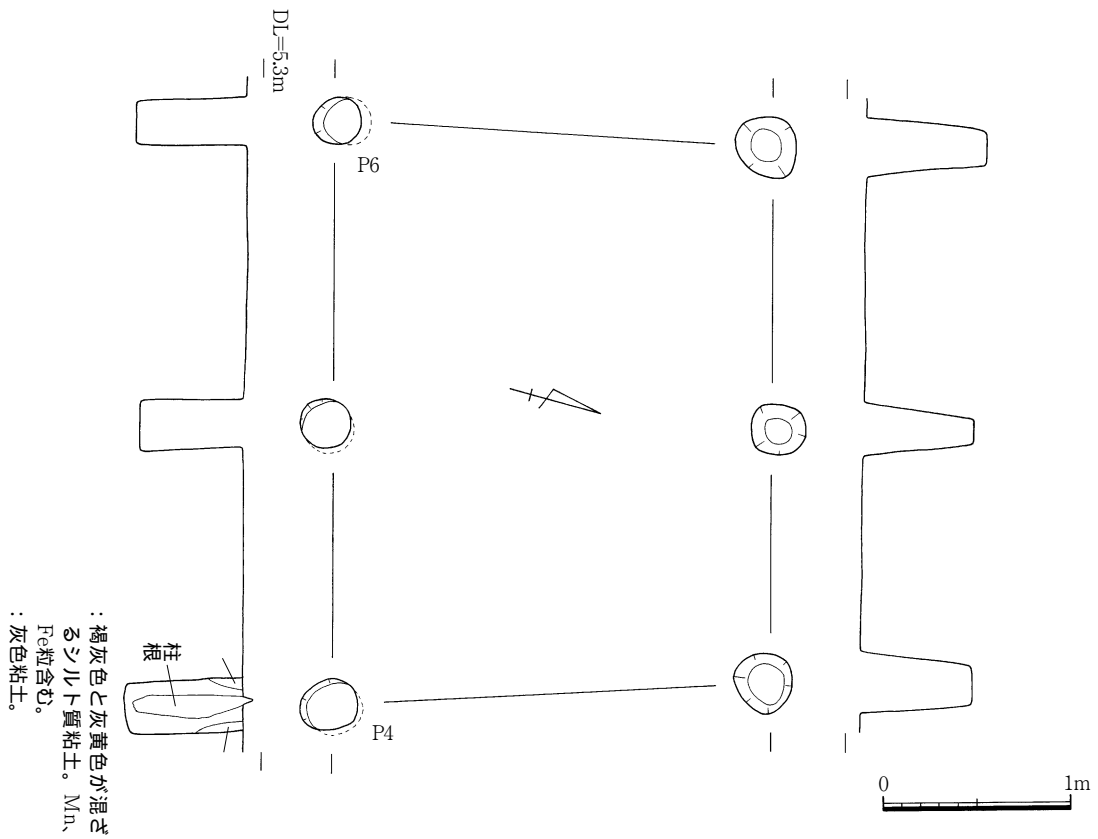


Fig.47 SB 2 平面図・セクション及びエレベーション

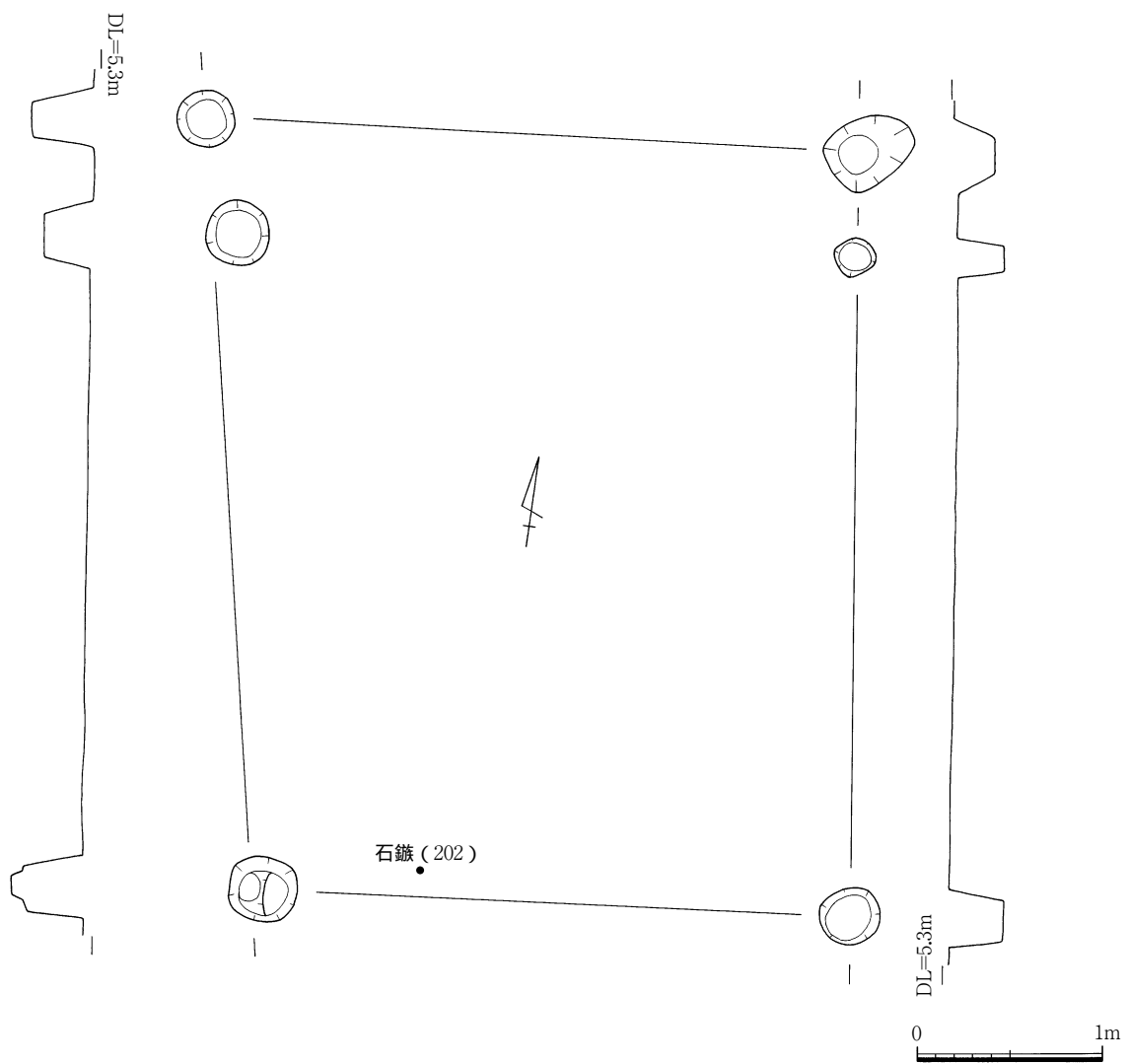


Fig.48 SB 3 平面図及びエレベーション

係である。平面形はやや湾曲しており、両端に弱い段を持つ。出土遺物はSD 1 より多く、壺 (193・194・195)、甕 (196・197・198)、口縁部点数は壺 2 点、甕 3 点である。石鏃 (201) が 1 点出土している。

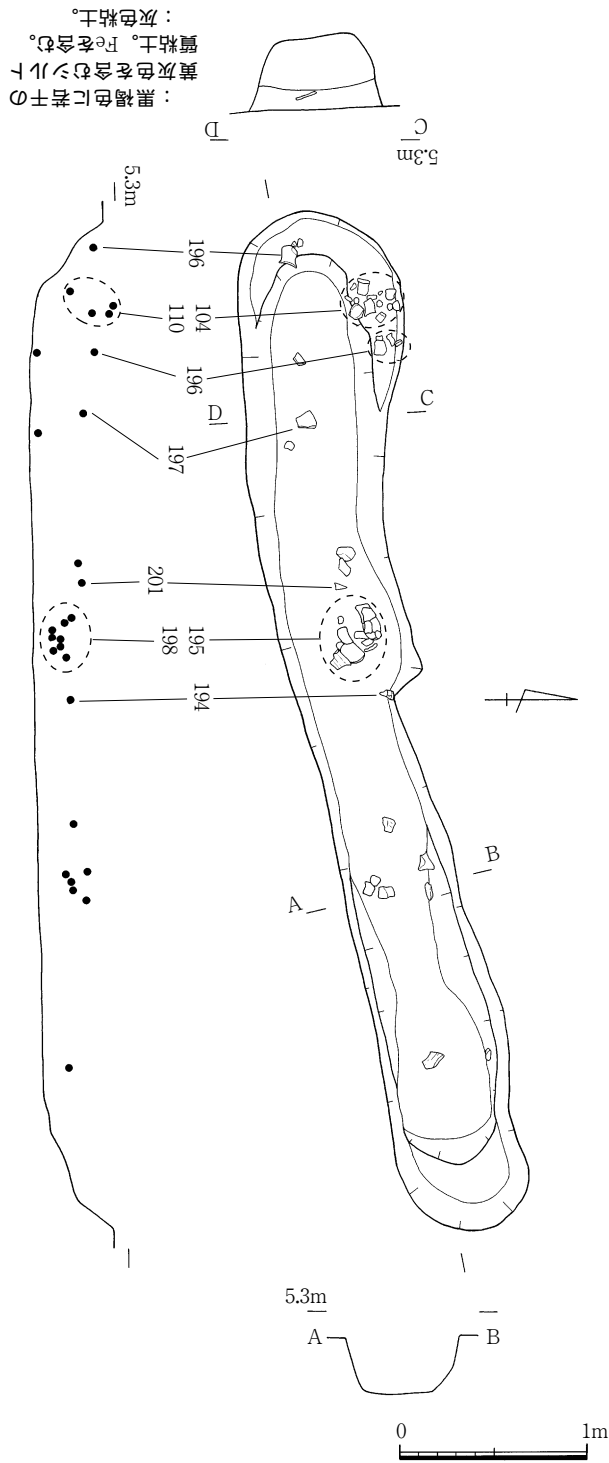


Fig.49 SD2 平面・遺物出土状況図・セクション  
及びエレベーション

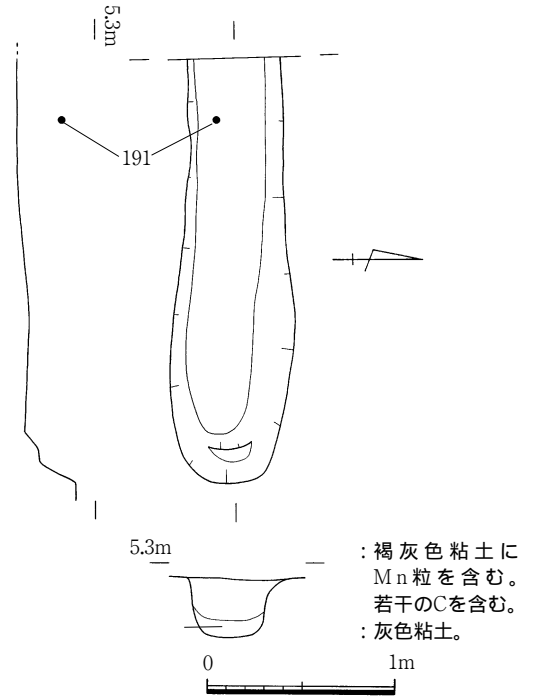


Fig.50 SD1 平面・遺物出土状況図・  
セクション及びエレベーション

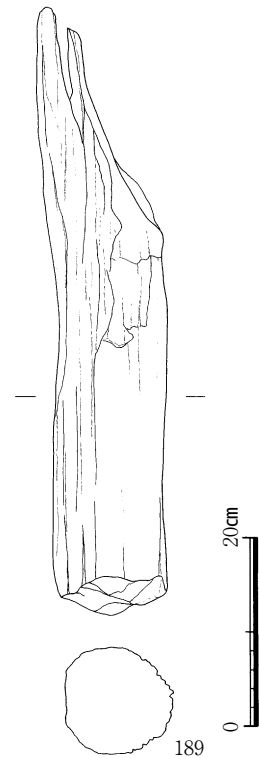


Fig.51 SB2 出土柱根実測図

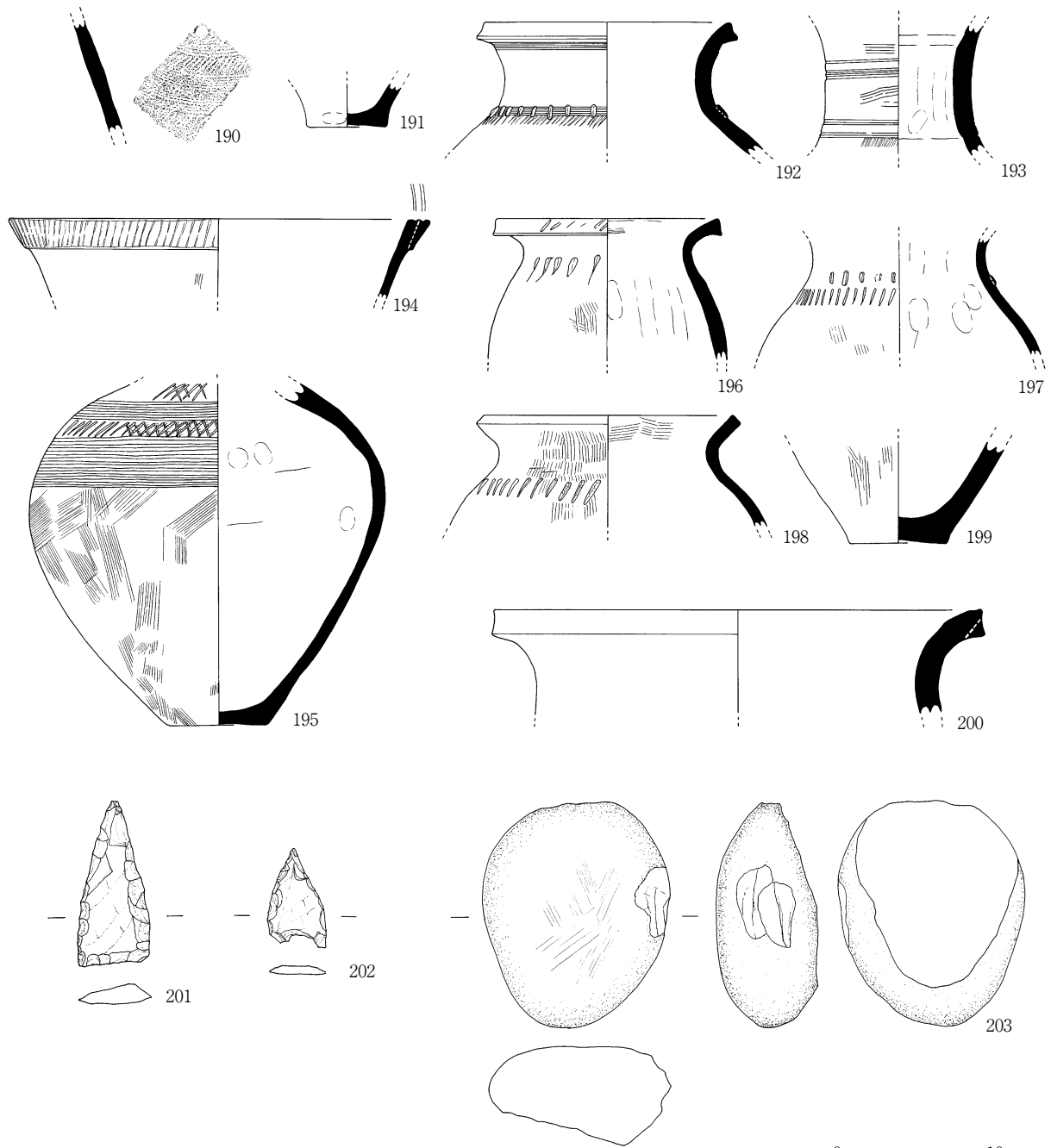


Fig.52 SD 1・SD 2 及び遺物包含層出土遺物実測図

(201、202は1:2)

(2) B区

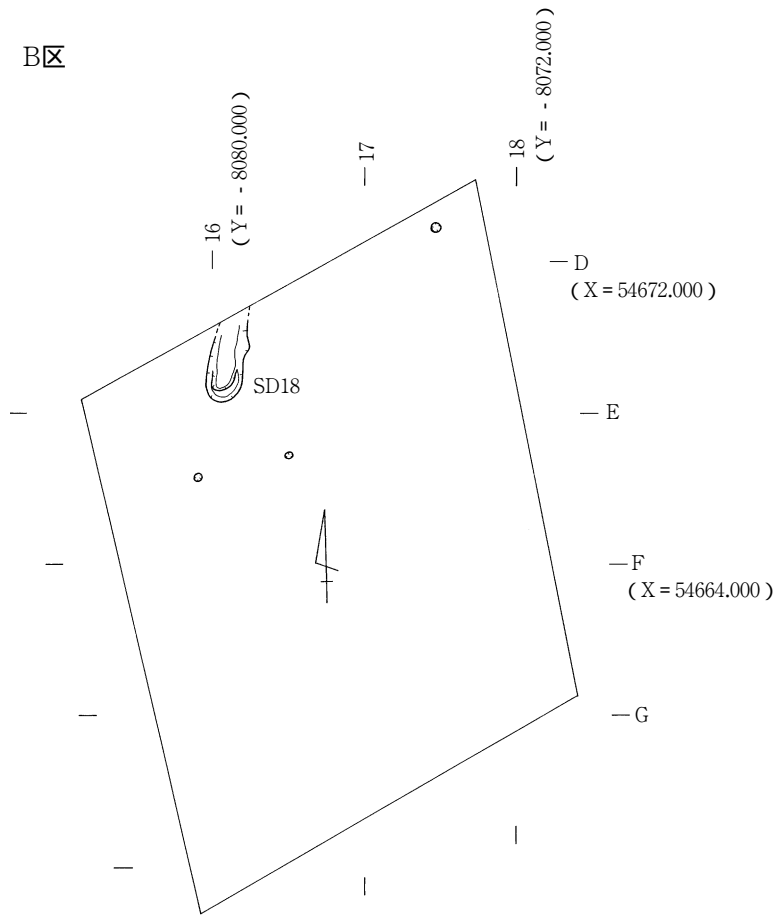


Fig.53 B区検出遺構全体図 (S=1/200)

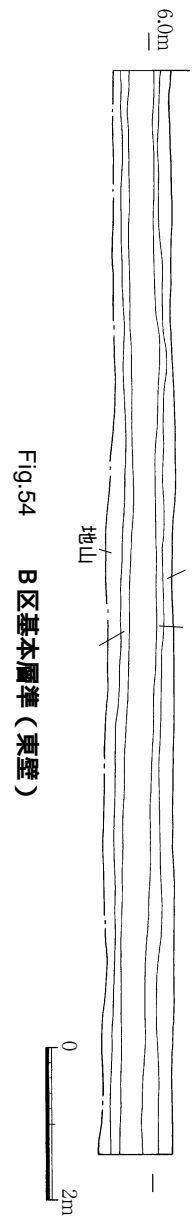


Fig.54 B区基本層準(東壁)

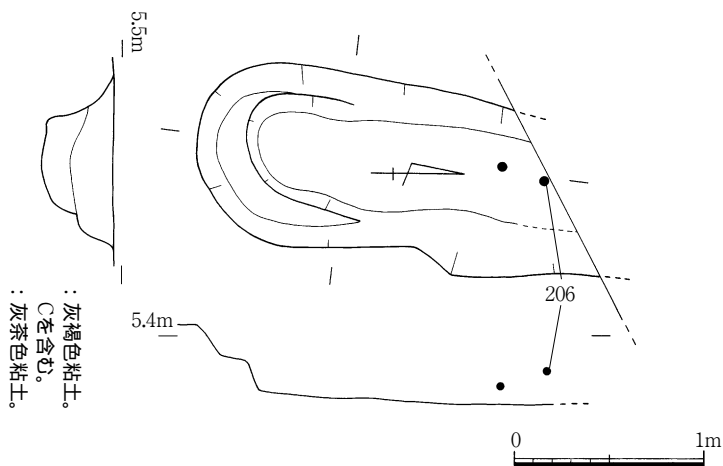


Fig.55 SD18平面・遺物出土状況図・セクション及びエレベーション

基本層準 ( Fig.54 )

A区と同様である。地山は南へ向かってごく緩やかに傾斜しており、Fig.54で見れば、南北両端の標高差は数cmを測る。南部は比較的湿潤であった。

検出遺構と遺物

a 溝状土坑

SD18 ( Fig.55 )

B区北壁際で検出した溝状土坑で、調査区外に延びる。端部に段を有し、遺物は主に 層下層より出土している。南側で検出した2基のピットとの距離は約2mである。出土遺物には壺 ( 204・206・208 )、甕 ( 207 ) がある。口縁部点数は壺3点、甕1点である。他に図示した壺の底部1点、胴部3点が出土している。

b ピット

B区で検出した3基のピットは直径10~15cm、深さ42~51cmを測り、出土遺物は皆無である。

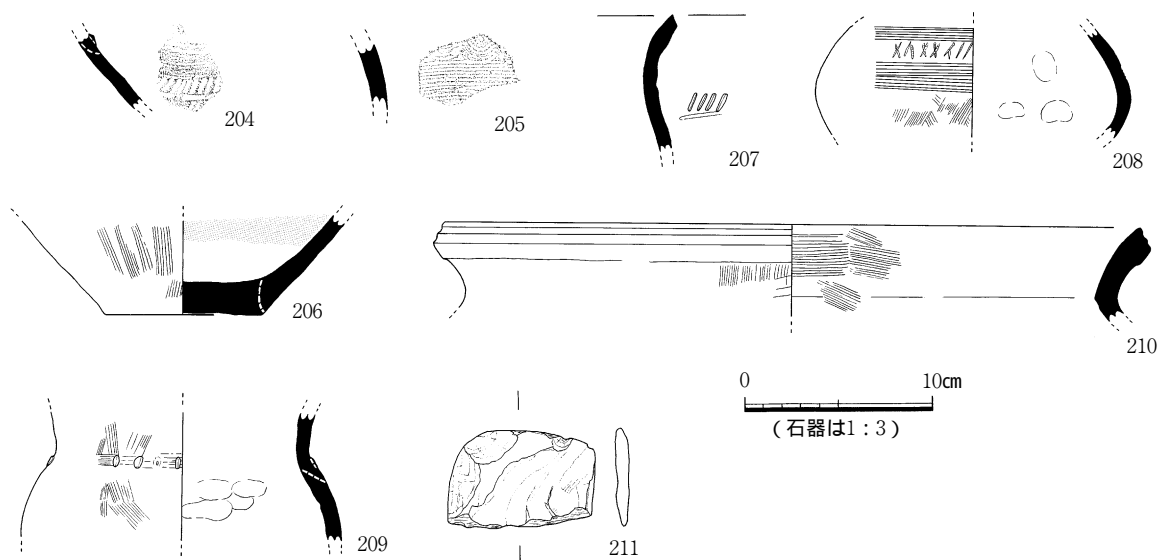
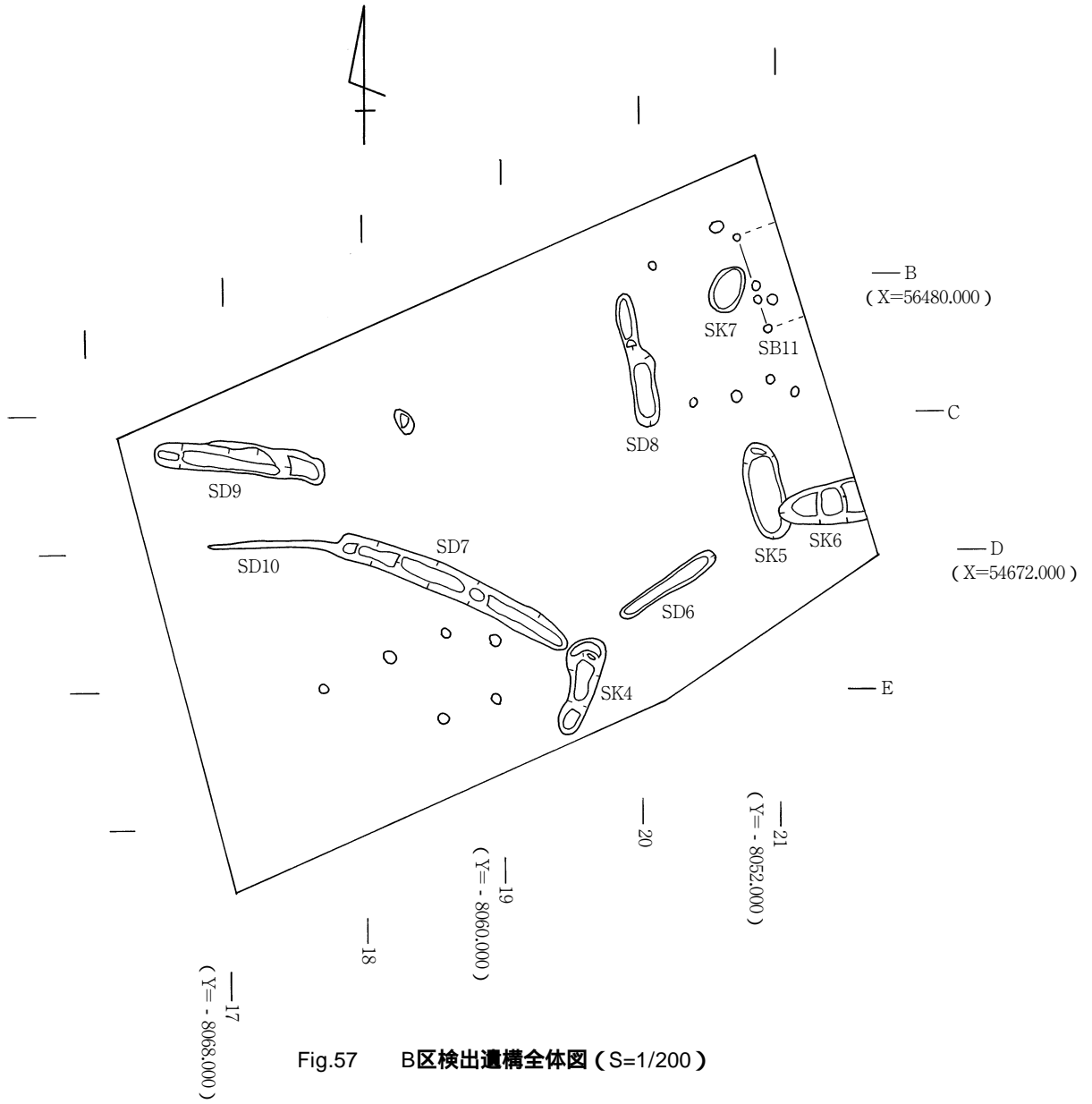


Fig.56 SD18及び遺物包含層出土遺物実測図



#### 4. 区の検出遺構と遺物



(1) B区

基本層準 (Fig.58)

- 層：灰色粘土である。
- 層：褐灰色粘土で調査区の西部にのみ存在する。
- 層：灰色粘土で黄色粘土がブロック状に混じる。SK6の埋土である。
- 層：青灰色粘土である。
- 層：灰色粘土である。
- 層：青灰色粘土である。
- 層：青灰色粘土で近現代の用非水路の埋土である。
- 層：緑灰色粘土で近現代の用非水路の埋土である。
- 層：灰黄色粘土で地山である。
- 層：褐灰色粘土で遺構埋土である。
- 層：灰色粘土で遺構埋土である。
- 層：褐灰色粘土で弥生時代後期初めの遺物を包含する。
- 層：にぶい黄橙色粘土層であり、層厚は30~40cmを測る。
- 層：現代の水田耕土で、層厚は10~25cmを測る。

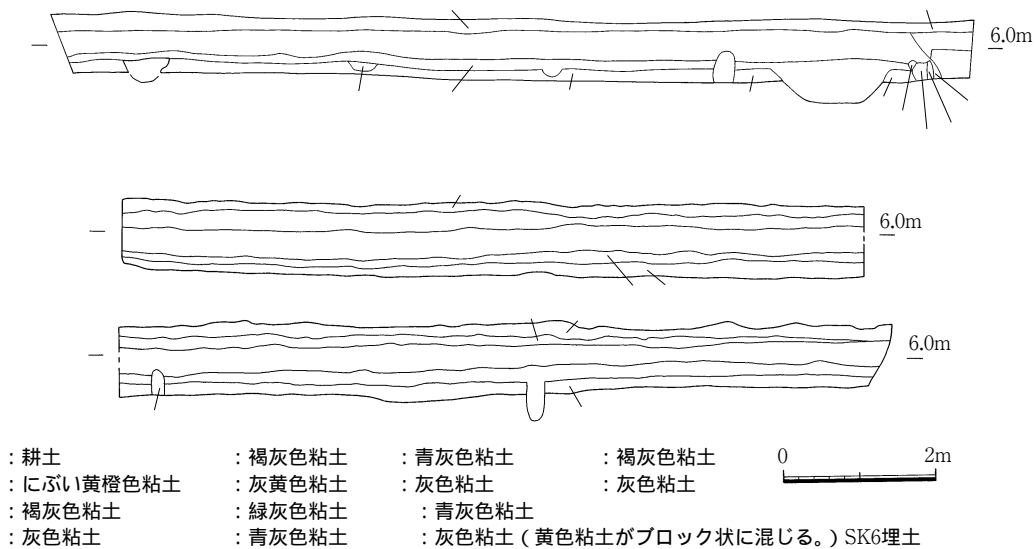


Fig.58 B区基本層準

検出遺構と遺物

a 掘立柱建物

SB11 (Fig.59)

調査区の北東部に位置する。建物の西半分が調査区外へのびているため、規模は明らかではない。長軸方向はN - 17° - Wである。P1から壺(212)と鉢(213)が出土している。

SB11は弥生時代後期前葉である。

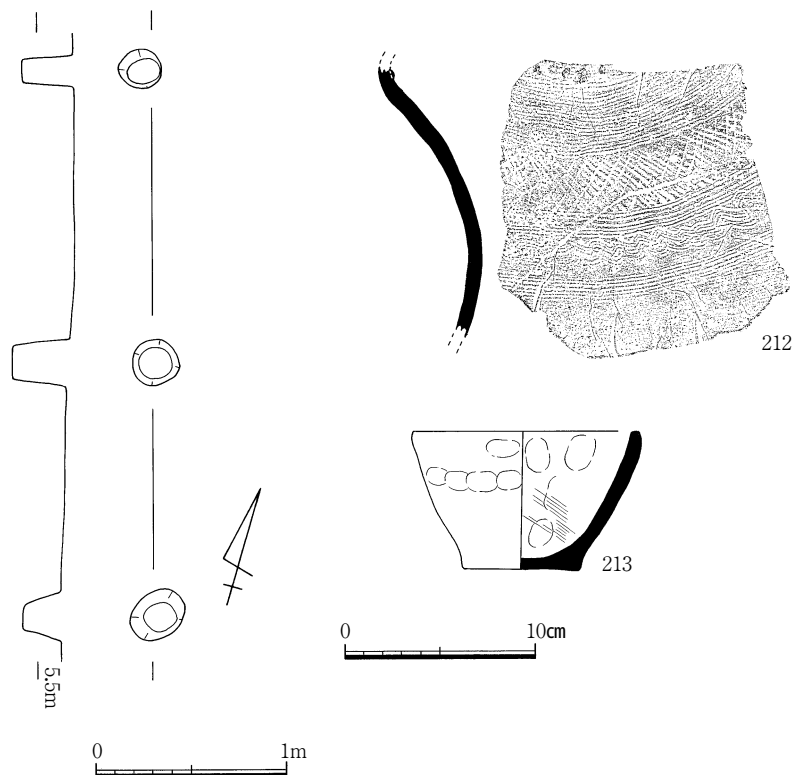


Fig.59 SB11平面図・エレベーション及び出土遺物実測図

#### b 土坑

##### SK 4 (Fig.60)

調査区の南部中央に位置する。平面形は不定形を呈する。長軸約2.8m、幅約0.7~1.2mを測る。長軸の両側にテラス状の平坦部を有し、北側のテラスから甕(217)が据え置かれたような状態で出土した。217は肩部に最大径を有し、口縁部外面に幅約2cmの粘土帯を貼付する。頸部と体部の境付近に櫛描直線文を施し、櫛描直線文の上端には楕円形浮文を櫛描直線文の下端には列点文を配する。外面は被熱により変色する。その他の出土遺物として、壺(214)、甕(215~217)がある。

SK 4は弥生時代後期前葉である。

##### SK 5 (Fig.61)

調査区南東部に位置する。長軸約2.8m、短軸約1.1m、深さ約0.3mの平面形楕円形の土坑である。短軸北側にテラス状の平坦面をもつ。SK 6に切られる。出土遺物は壺(218)、石包丁(224)である。218は壺である。口縁部外面にやや幅広の粘土帯を貼付する。口唇部に円形浮文を施し、頸部から肩部にかけて櫛描直線文を施す。また、肩部には楕円形浮文を貼付する。

SK 5は弥生時代後期前葉である。

##### SK 6 (Fig.61)

調査区南東部に位置する。東は調査区外にのびる。SK 5を切る。出土遺物は壺(221・222)、甕(219・220)である。

SK 6は弥生時代後期初めである。

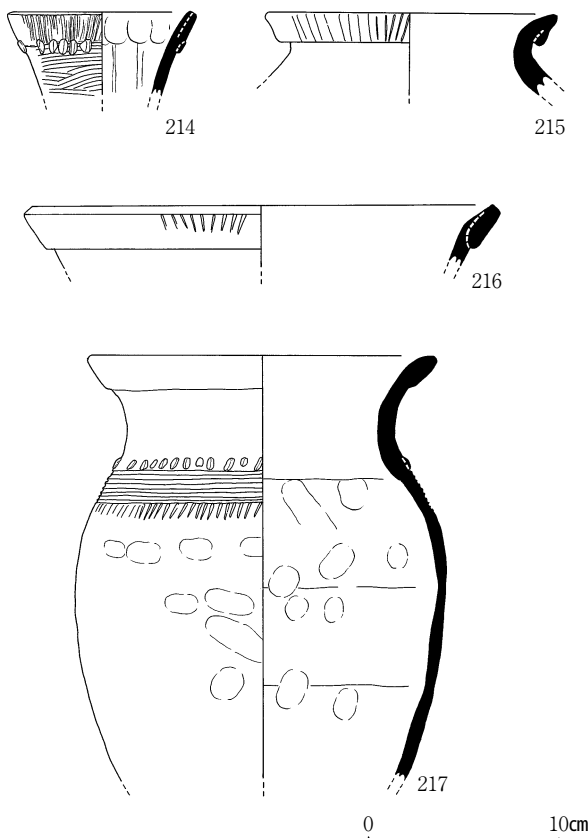
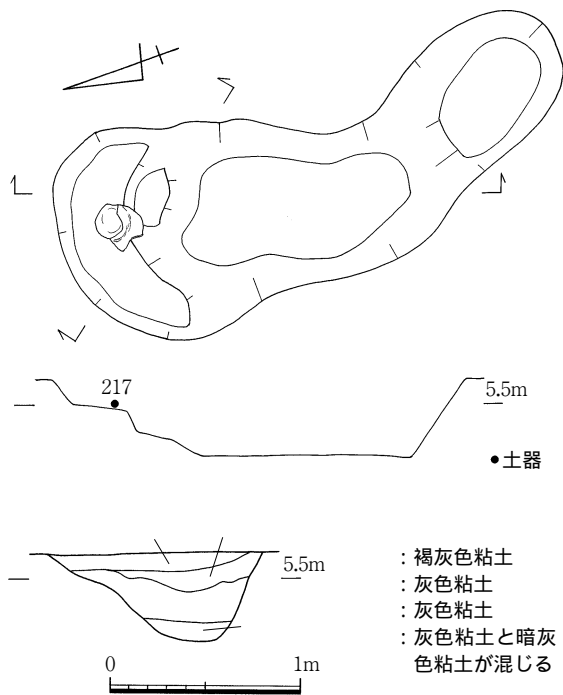


Fig.60 SK 4 平面図・セクション・エレベーション及び  
出土遺物実測図

#### SK 7 (Fig.62)

調査区北東部に位置する。長軸1.3m、短軸1.0mの規模を有する。埋土は灰色粘土である。出土遺物は壺(227)、甕(225・226)、底部(228)がある。

SK 7は弥生時代後期前葉である。

#### c 溝状土坑

#### SD 6 (Fig.63)

調査区南部やや東よりに位置する。長軸3.3m、短軸0.5mを測る。長軸の東側にテラス状の平坦部を有する。断面形は逆台形を呈する。出土遺物は壺(229)、鉢(230)、底部(231・232)がある。

SD 6は弥生時代後期前葉である。

#### SD 7 (Fig.64)

調査区の中央部やや西よりに位置する。長軸7mの規模を有した大型の溝状土坑である。幅約0.25mの浅い溝を検出したがSD 7に伴うかは明確ではない。断面形は逆台形を呈する。長軸側にテラスの有段部を伴う可能性もあるが、判然としない。遺物は西半部に偏在して出土しており、床直上のものではなく床面からやや浮いた状態で出土した。出土遺物は壺(233~235)、甕(236~238)、甑(239)、底部(240~243)がある。233は壺である。頸部全面に退化した凹線文が巡る。頸部と肩部の堺には突帯を貼りつける。235は壺である。口縁部の内外面に粘土帯を貼付する。口唇部には2個1組の円形浮文を貼付し、貼土帯外面に列点文を施す。その他に、図示しなかったが叩石が1点出土している。

SD 7は弥生時代後期前葉である。

#### SD 8 (Fig.65)

調査区の北東部に位置する。SB11の柱軸

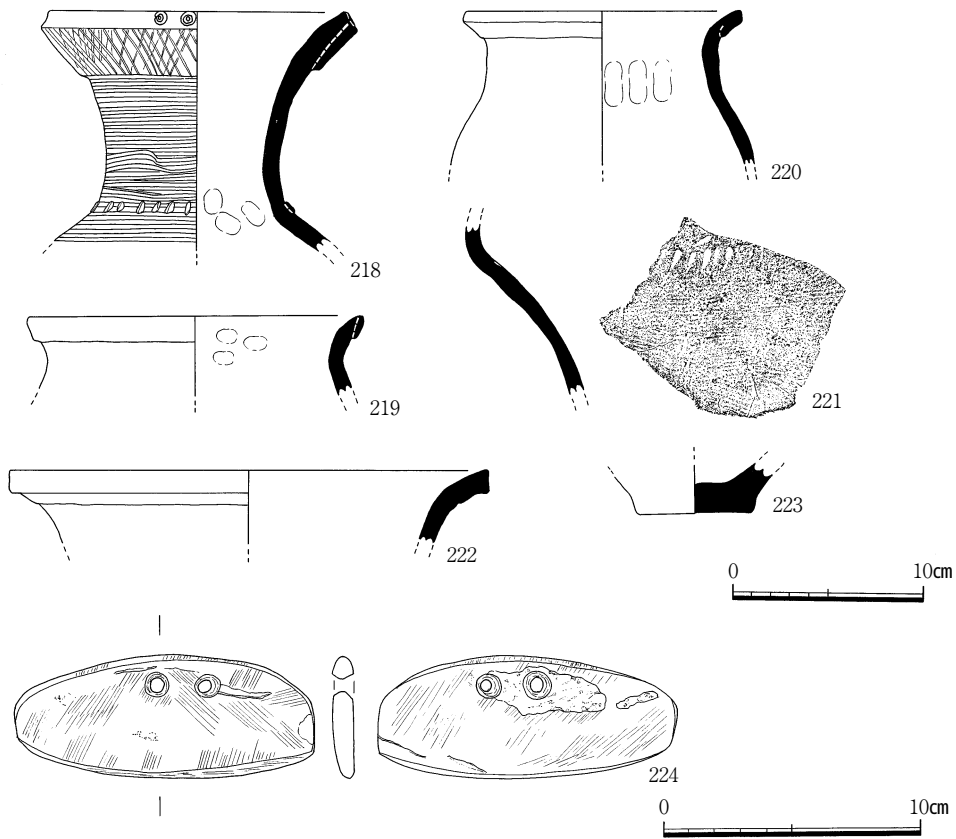
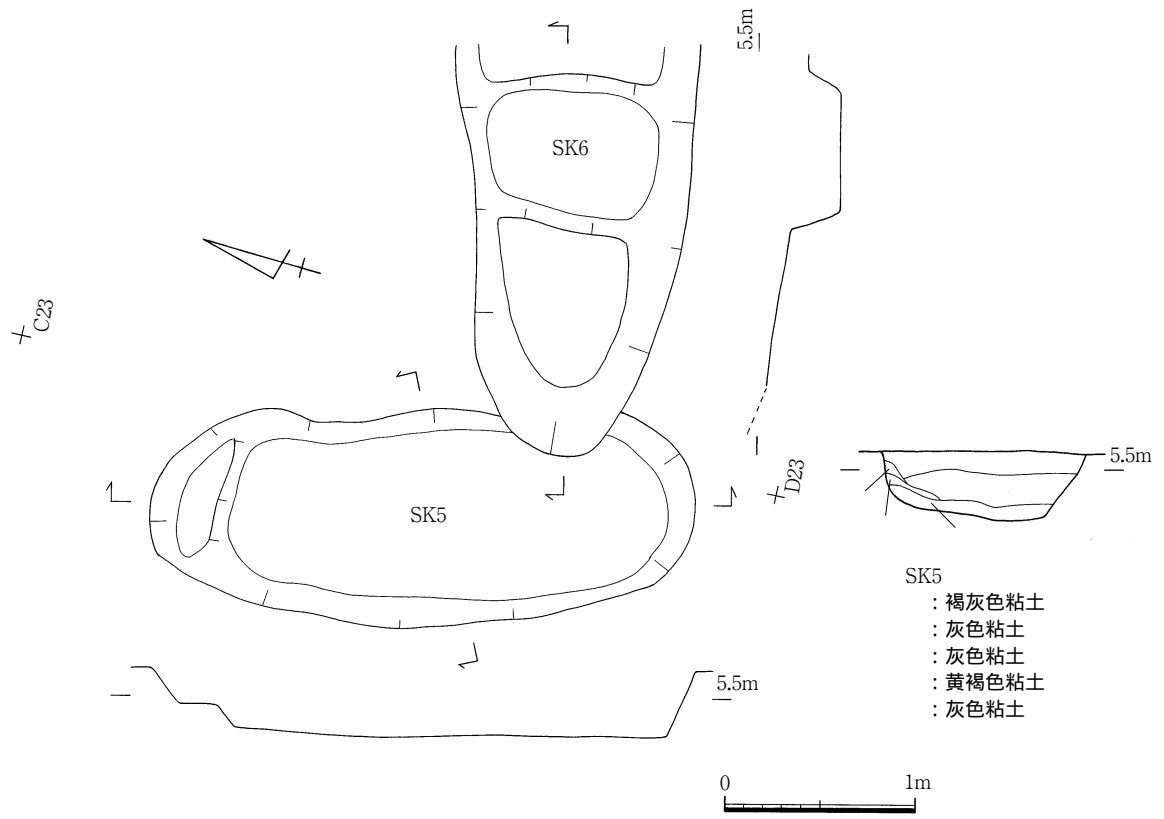


Fig.61 SK 5・6平面図・セクション・エレベーション及び出土遺物実測図

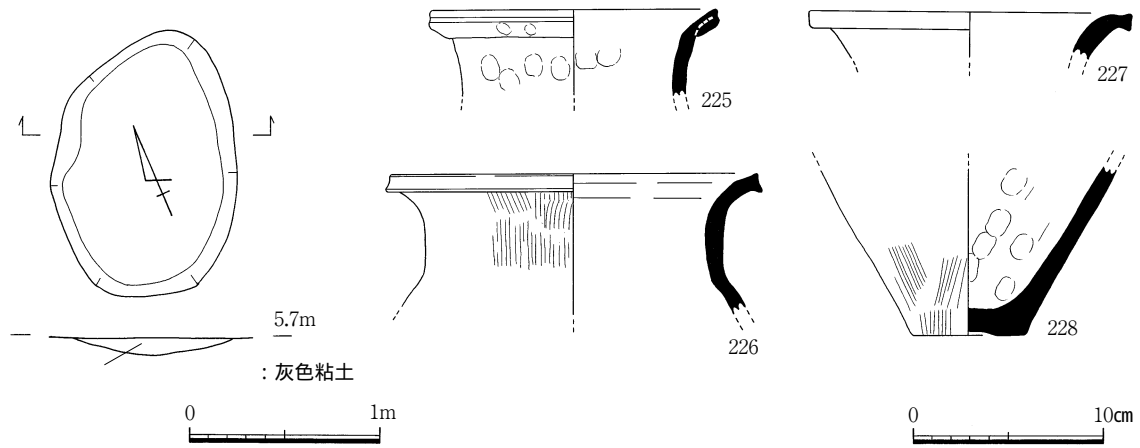


Fig.62 SK7平面図・セクション及び出土遺物実測図

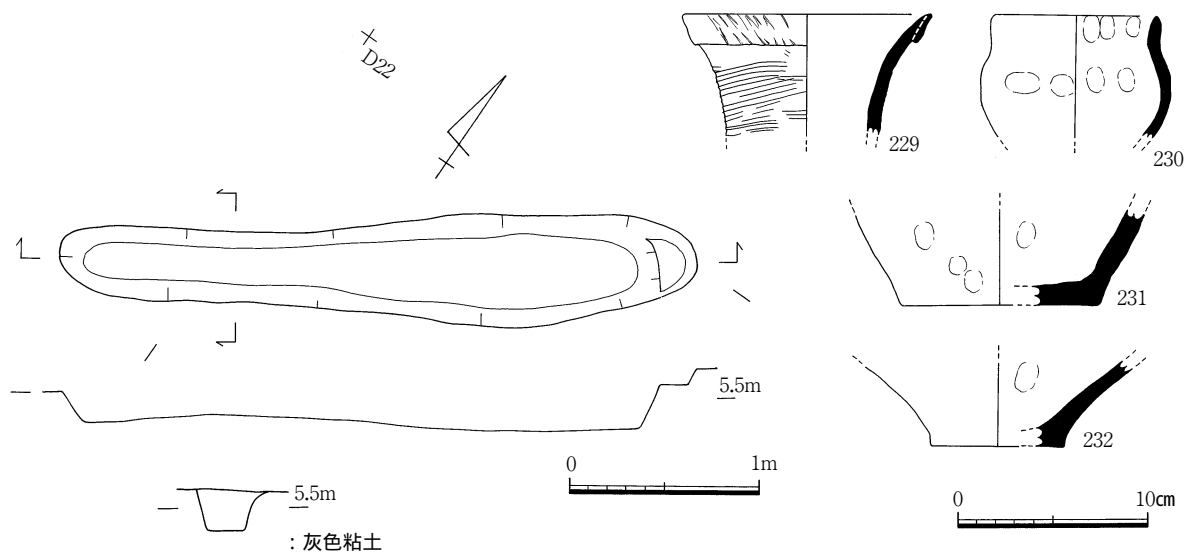


Fig.63 SD6平面図・セクション・エレベーション及び出土遺物実測図

方向とほぼ一致する。埋土は：褐灰色粘土、：灰色粘土（灰白色粘土が混じる。）：灰色粘土である。出土遺物で図示できるものは叩き石（244）1点のみである。

SD8は弥生時代後期前葉である。

SD9 (Fig.66)

調査区の北西部に位置する。長軸5m、短軸0.9mを測る。短軸東側にテラス状の平坦部を有する。埋土は：暗褐灰色シルト粘土、：褐灰色シルト粘土、：灰色粘土（暗灰色粘土が混じる。）出土遺物は壺（245～248）底部（249～251）が出土している。

SD9は弥生時代後期前葉である。

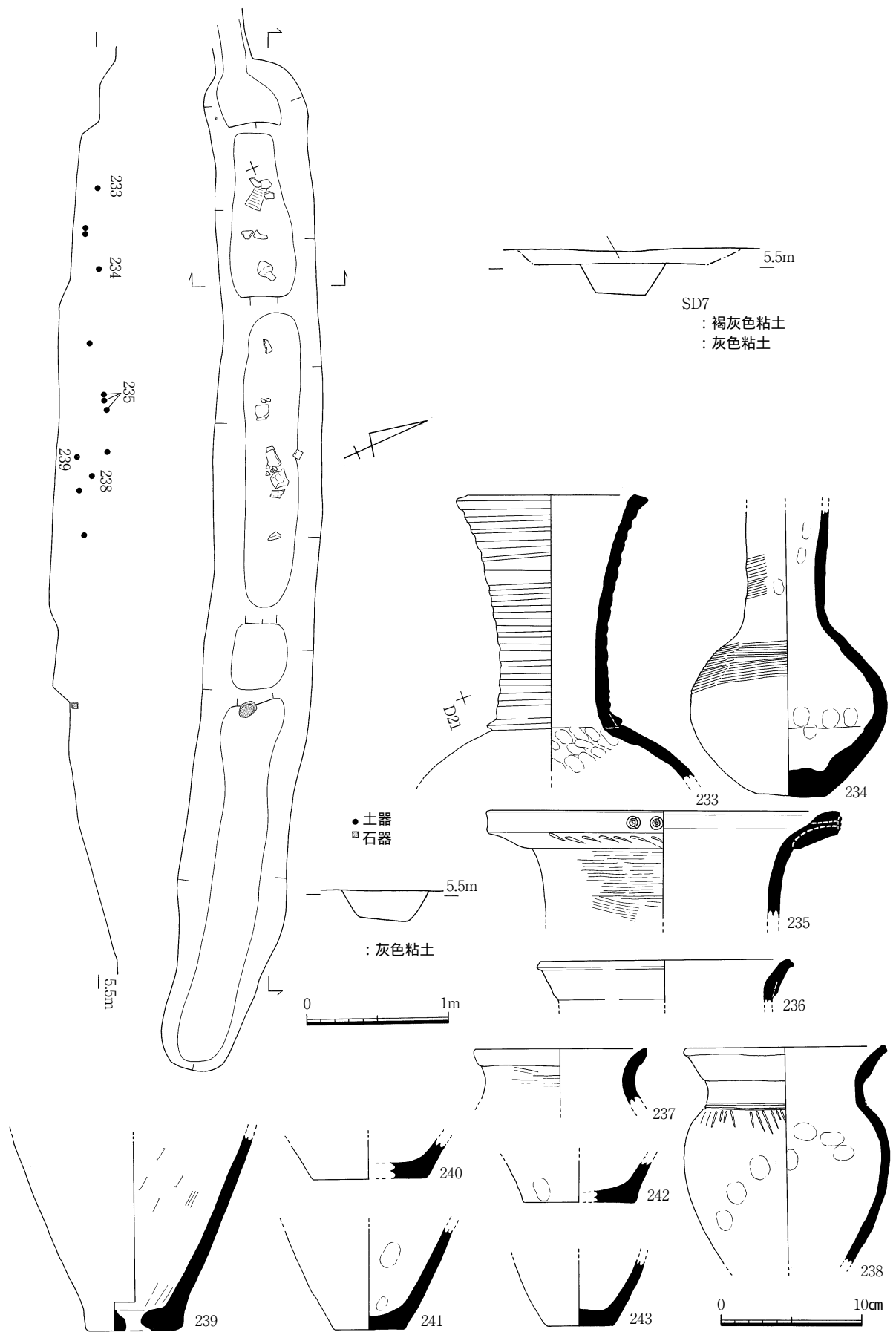


Fig.64 SD7 平面図・セクション・エレベーション及び出土遺物実測図

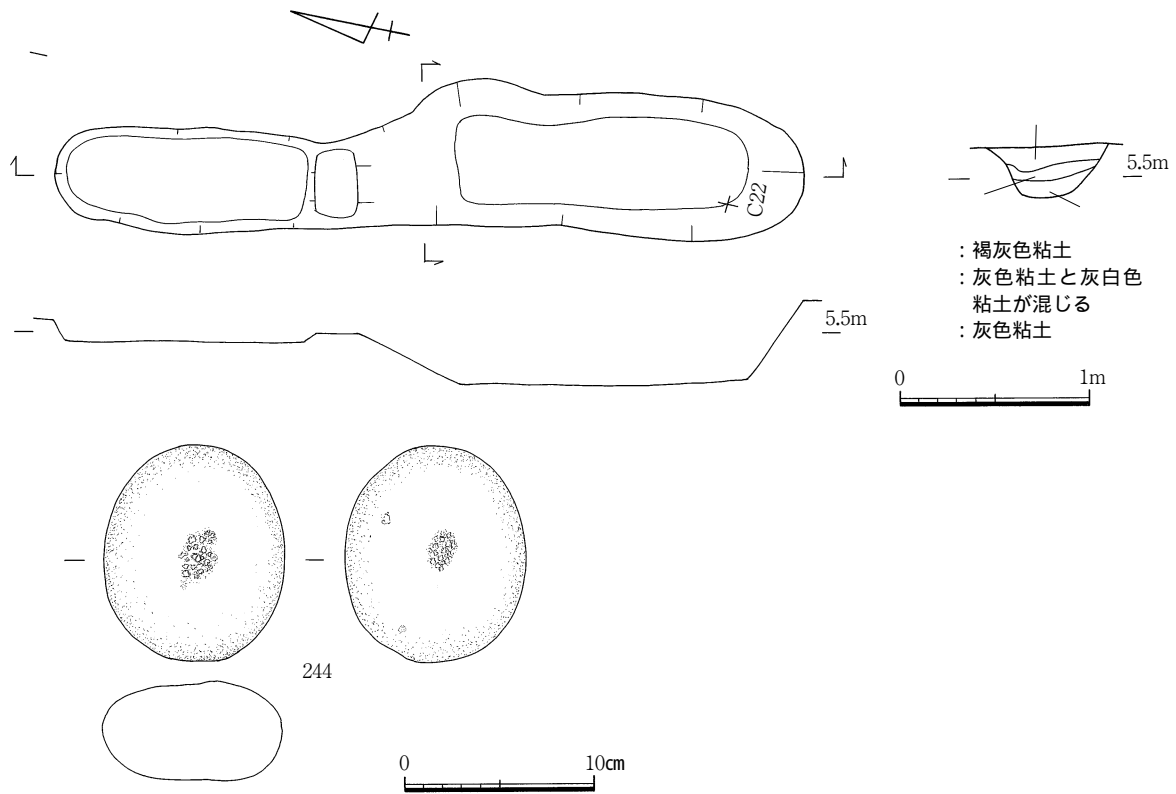


Fig.65 SD 8 平面図・セクション・エレベーション及び出土遺物実測図



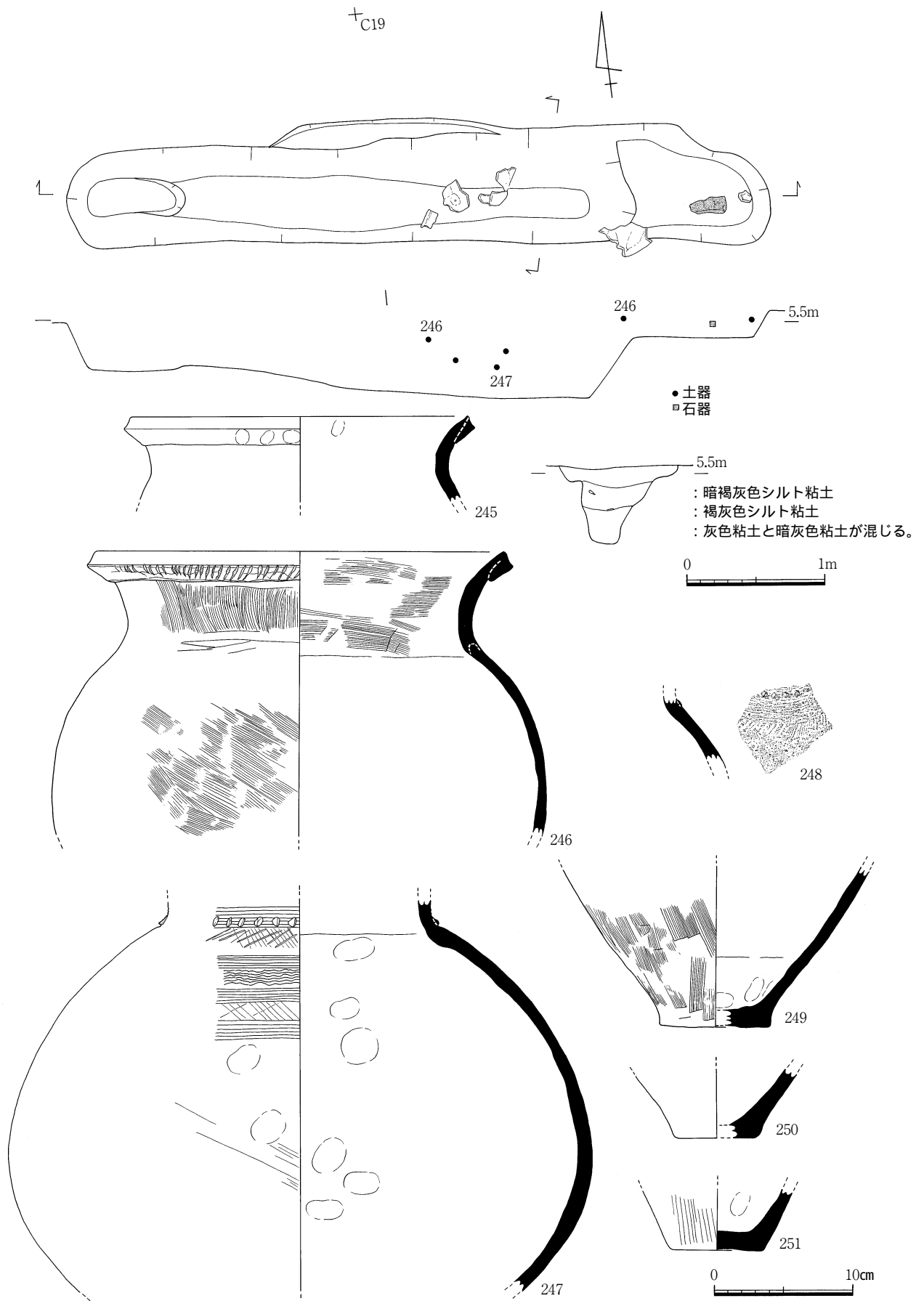
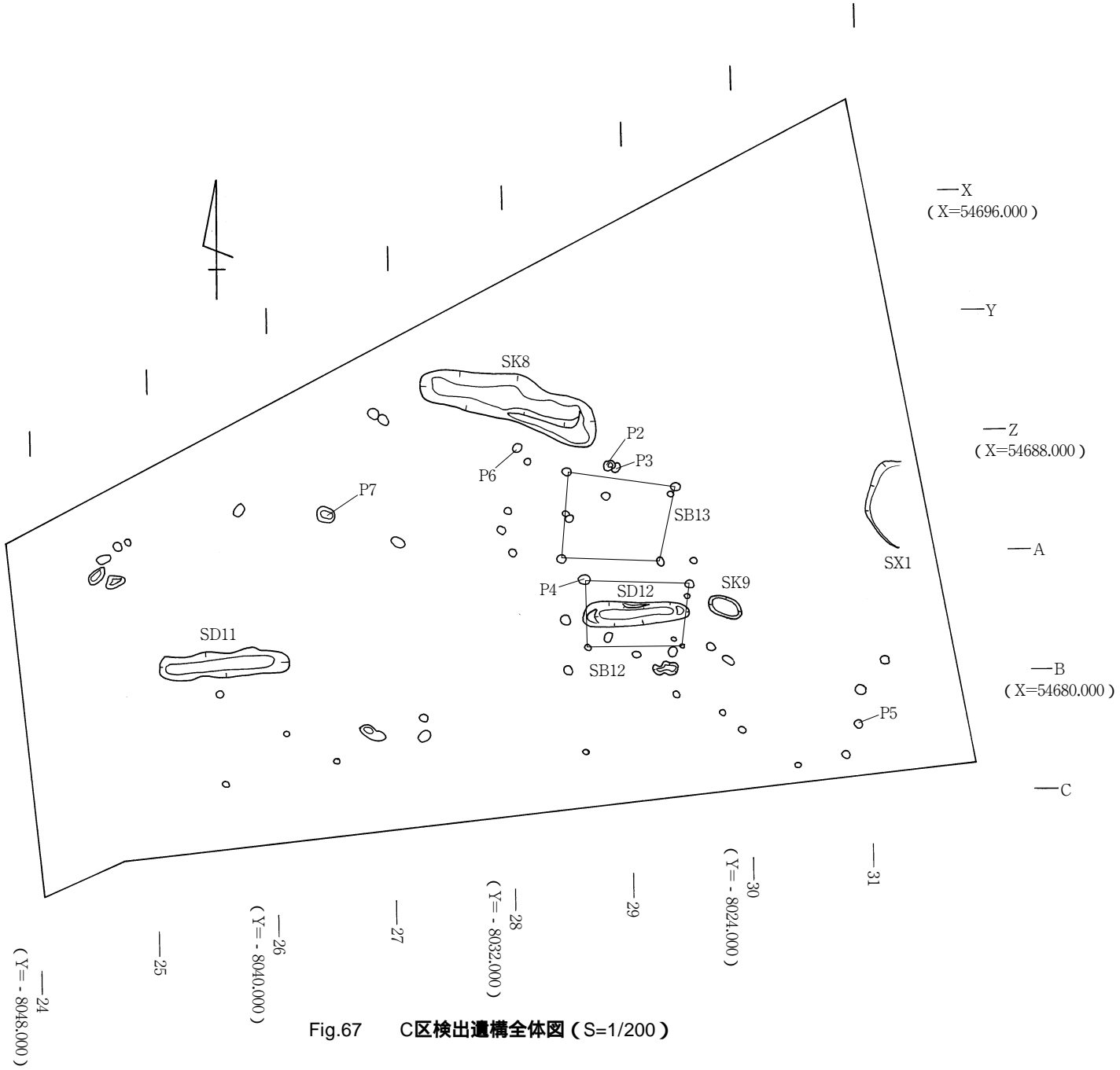


Fig.66 SD9 平面図・セクション・エレベーション及び出土遺物実測図

(2) C区



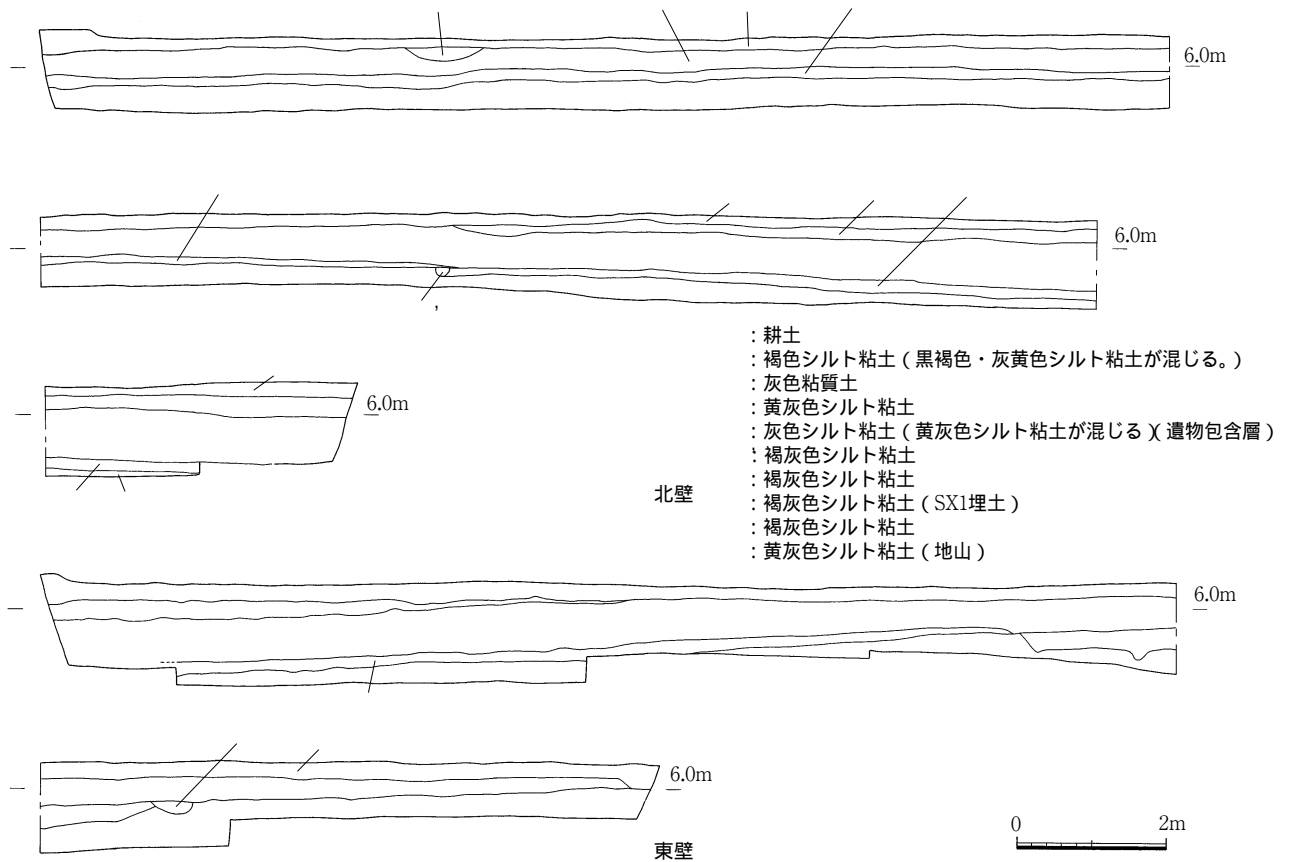


Fig.68 C区基本層準

基本層準 ( Fig.68 )

層：黄灰色シルト粘土で地山である。

層：褐灰色シルト粘土である。

層：褐灰色シルト粘土SX1の埋土である。

層：褐灰色シルト粘土である。

層：褐灰色シルト粘土である。

層：灰色シルト粘土で弥生時代後期初めの遺物を包含する。層厚10cmである。

層：黄灰色粘土である。

層：灰色粘質土である。

層：褐色シルト粘土である。

層：現代の水田耕土である。層厚は10～30cmである。

## 検出遺構と遺物

### a 掘立柱建物

SB12 ( Fig.69 )

調査区の中央部やや東よりに位置する。梁間 ( 2.2m ) 1間、桁行 ( 3.4m ) 1間の規模を有し、長軸方向はN - 0 ° である。

SB12は弥生時代後期前葉である。

SB13 ( Fig.70 )

調査区の中央部やや東よりに位置する。梁間 ( 2.9m ) 1間、桁行 ( 3.3m ) 1間の規模を有し、長軸方向はN - 3 ° - Eである。

SB12は弥生時代後期初めである。

### b 土坑

SK 8

調査区の北部やや東よりに位置する。長軸6.2m、短軸1.5mを測る。南東部にテラス状の平坦部をもつ。埋土は 層：褐灰色粘土、 層：褐灰色粘土 ( 灰白色粘土ブロックが混じる。 ) 層：灰色粘

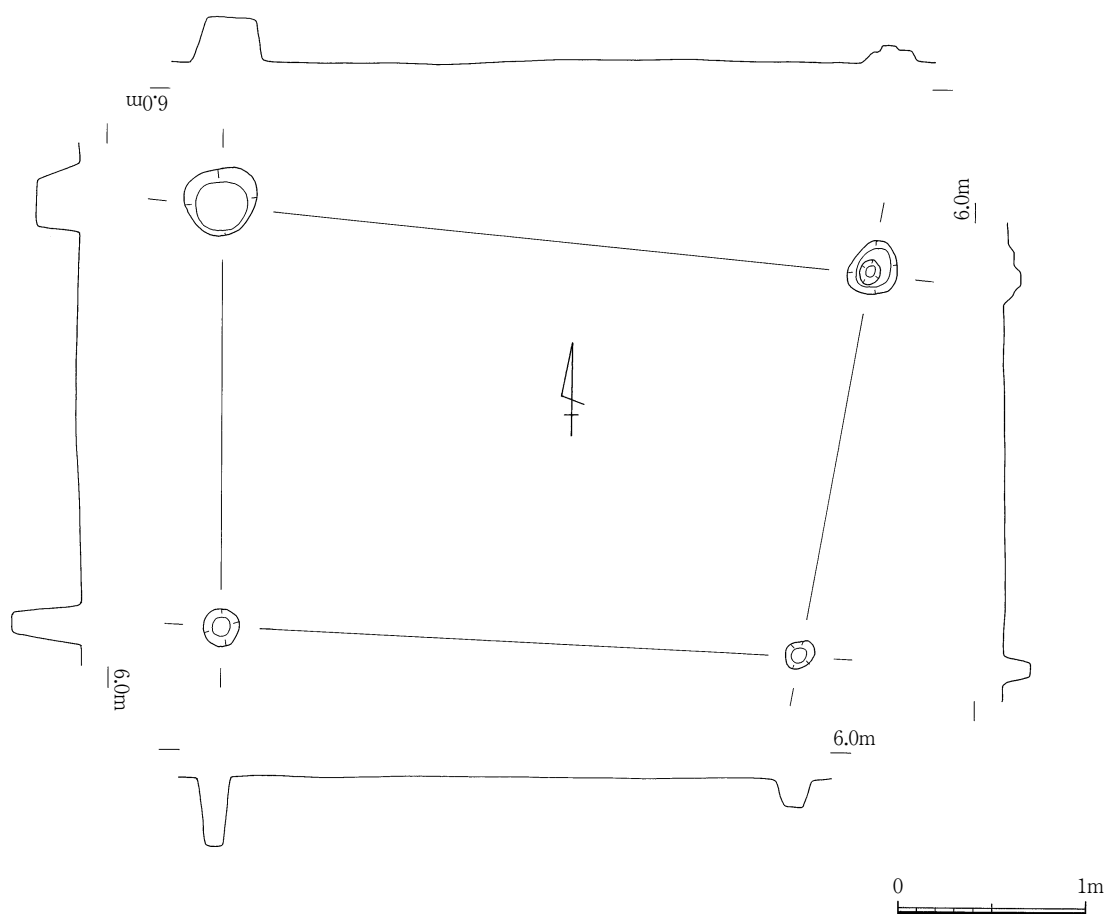


Fig.69 SB12平面図及びエレベーション

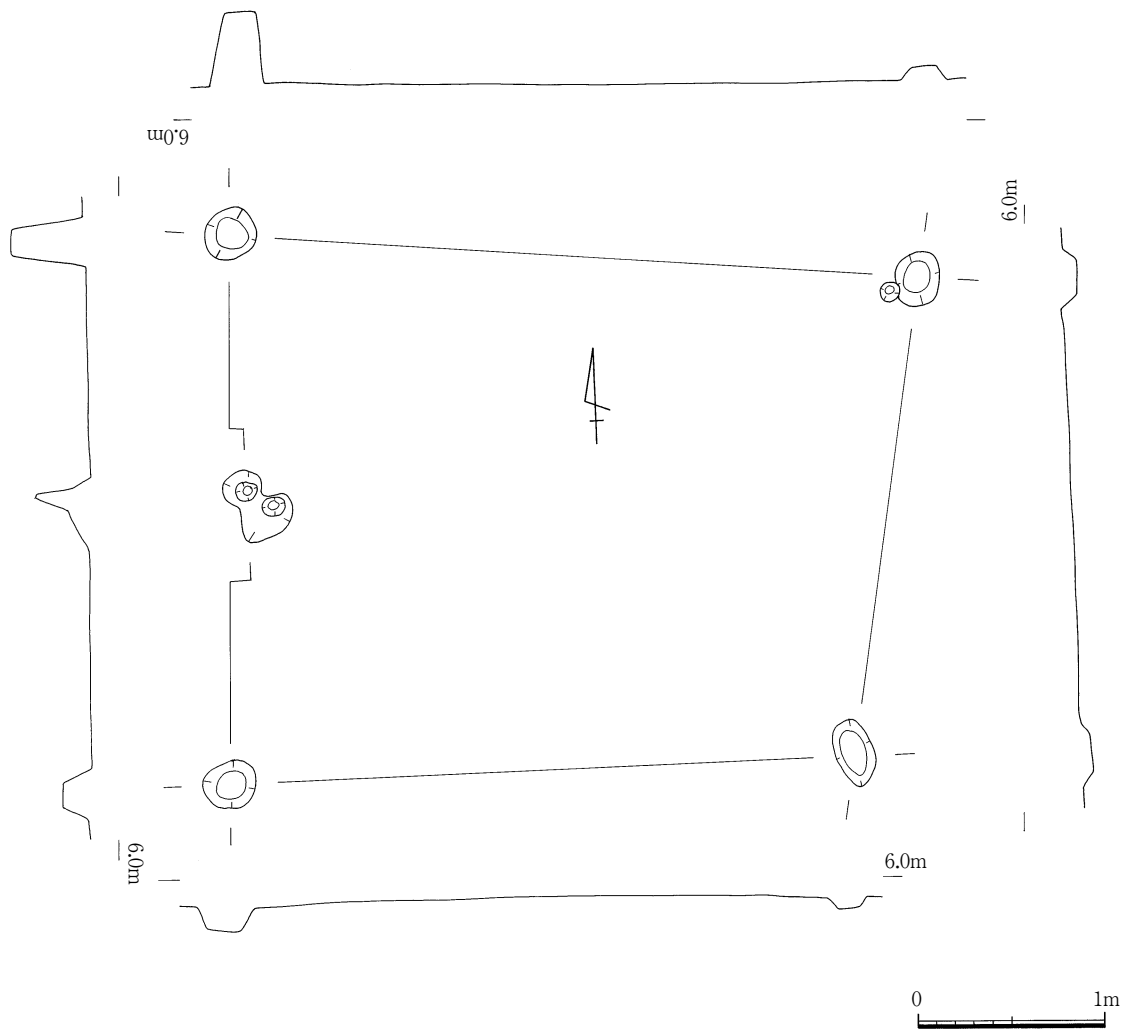


Fig.70 SB13平面図及びエレベーション

土である。遺物は床面直上での出土はなく、床面からやや浮いた状態で出土した。出土遺物は壺(264~267)、甕(252~263)底部(268)、鉢(269)が出土している。252は甕である。肩部に最大径を有し、口縁部は頸部から緩やかなカーブを描きながら外反する。頸部全面に櫛描直線文を施す。肩部に楕円形浮文を貼付する。また、櫛描直線文下端に列点文を配する。外面に煤が付着する。257は甕である。口径29.0cmを測り大型に属する。肩部に最大径を有し、口縁部は緩やかに「S」の字状に外反する。口縁部外面には幅約3cmの粘土帯を貼付する。粘土帯外面には上下から交互に列点文を施す。頸部全面は櫛描直線文で飾る。また、肩部に楕円形浮文を貼付する。櫛描直線文の下端には口縁部の粘土帯外面同様、交互の列点文を施す。外面は被熱により変色する。261は甕である。粘土帯を口縁部に貼付し、下端に刻み目を施す。体外外面はハケ状原体により器面を平滑にする。外面には煤が付着する。264は壺である。頸部はやや短く外反する。口縁端部を若干上方に摘みあげる。口縁部外面にはタテハケ調整を施し、肩部外面には櫛描直線文が巡る。また、口縁端部および肩部に円形浮文を貼付する。円形浮文は上から指頭で押さえて貼付する。

SK 8は弥生時代後期前葉である。

SK 9

調査区南東部に位置する。長軸1.15m、短軸0.65mを測る。埋土は 層：褐灰色粘土である。出土遺物は壺（270）が出土している。

SK 9 は弥生時代後期前葉である。

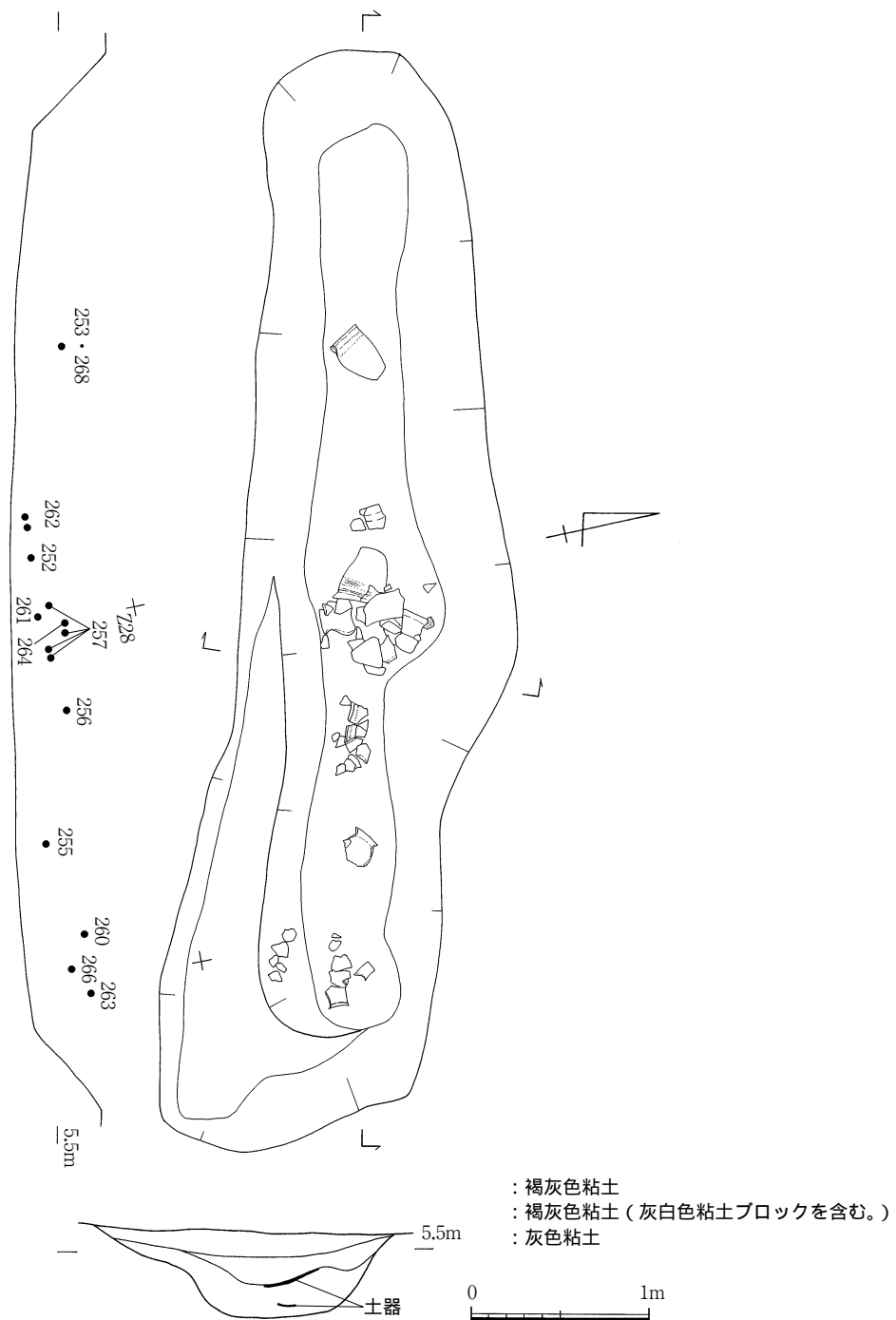


Fig.71 SK 8 平面図・セクション・エレベーション

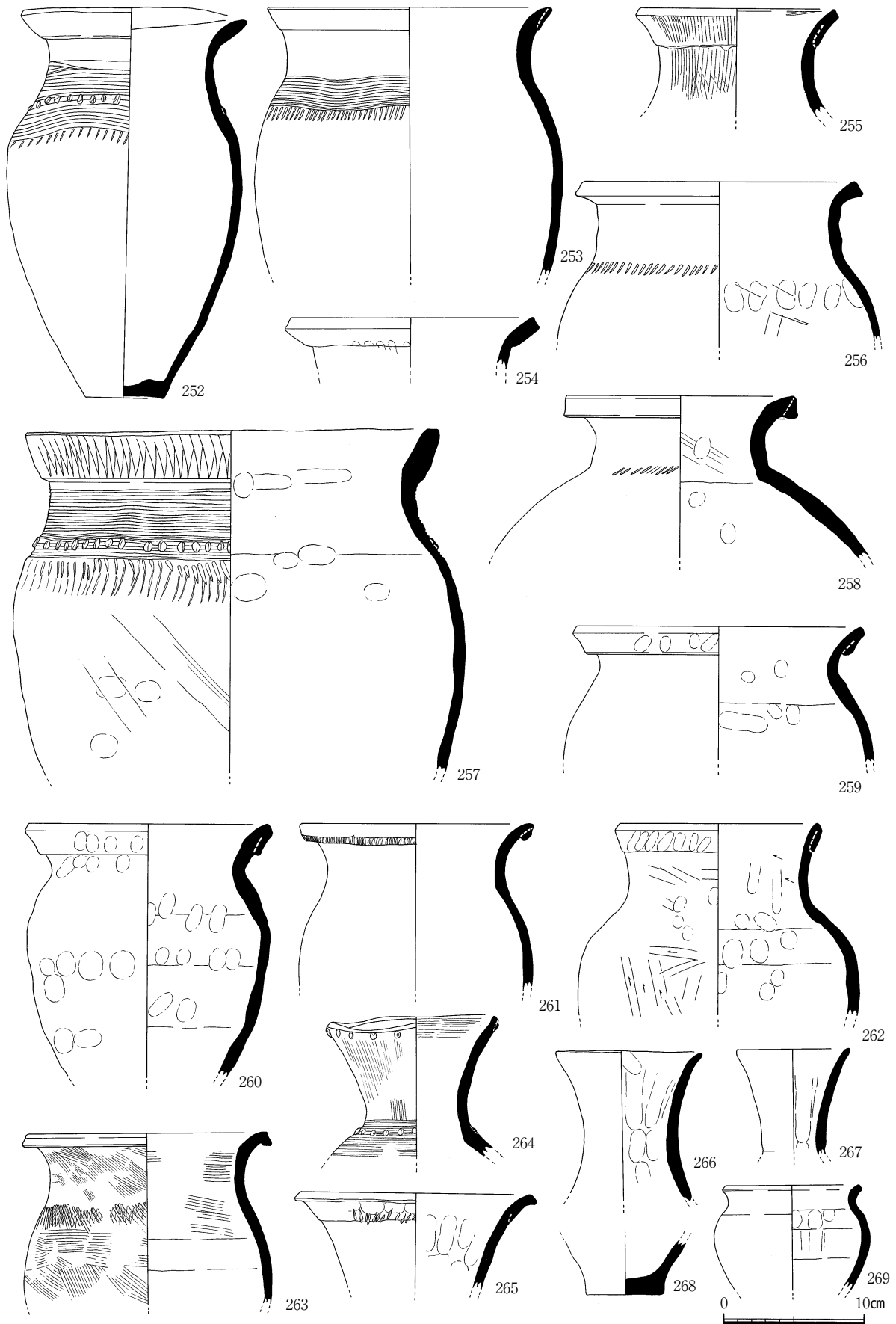


Fig.72 SK 8 出土遺物実測図

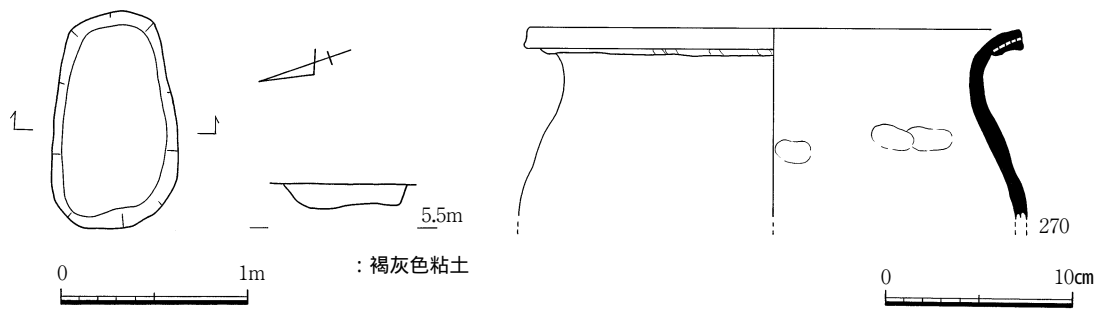


Fig.73 SK9 平面図・セクション及び出土遺物実測図

c 溝状土坑

SD11 (Fig.75)

調査区の西部に位置する。長軸4.3m、短軸0.7mを測る。埋土は 褐灰色粘土、黄褐色粘土、褐灰色粘土、層：黄褐色粘土、層：灰色粘土（灰白色粘土がブロック状に混じる。）出土遺物は壺（272～274）底部（275～278）が出土している。

SD11は弥生時代後期前葉である。

SD12 (Fig.76)

調査区の中央部やや東よりに位置する。長軸3.5m、短軸0.7mを測る。短軸側と長軸北側にテラス状の平坦面をもつ。埋土は 褐灰色粘土である。出土遺物は壺（ ）甕（ ）底部（283）叩き石（284）が出土している。

SD12は弥生時代後期前葉である。

d 遺物包含層出土の遺物

292は壺である。口縁部に粘土帯を貼付する。粘土帯の上端（口唇部）は平坦面をなし、凹線文を施す。粘土帯には列点文を施す。肩部にも列点文を施す。294は壺である。口縁部に粘土帯を貼付する。粘土帯の上端（口唇部）はヨコナデにより平坦面をなす。粘土帯の下端を指押さえつける。295は壺である。口縁部に粘土帯を貼付し粘土帯外面に列点文を施す。

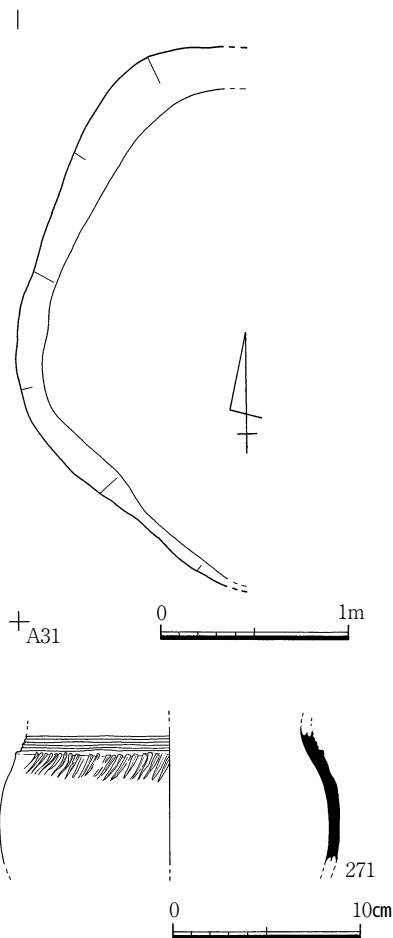


Fig.74 SX1 平面図・出土遺物実測図



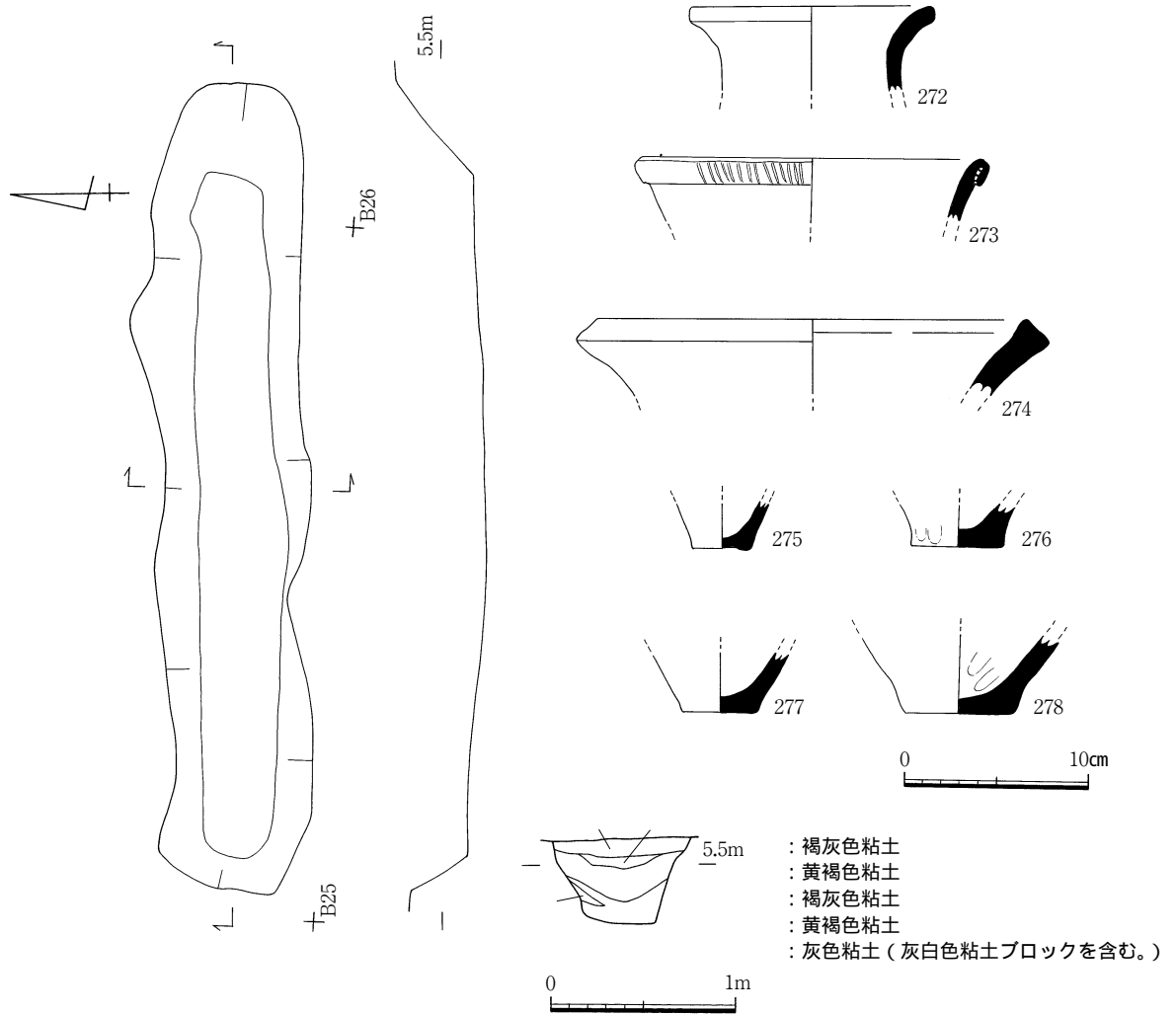


Fig.75 SD11平面図・セクション・エレベーション及び出土遺物実測図

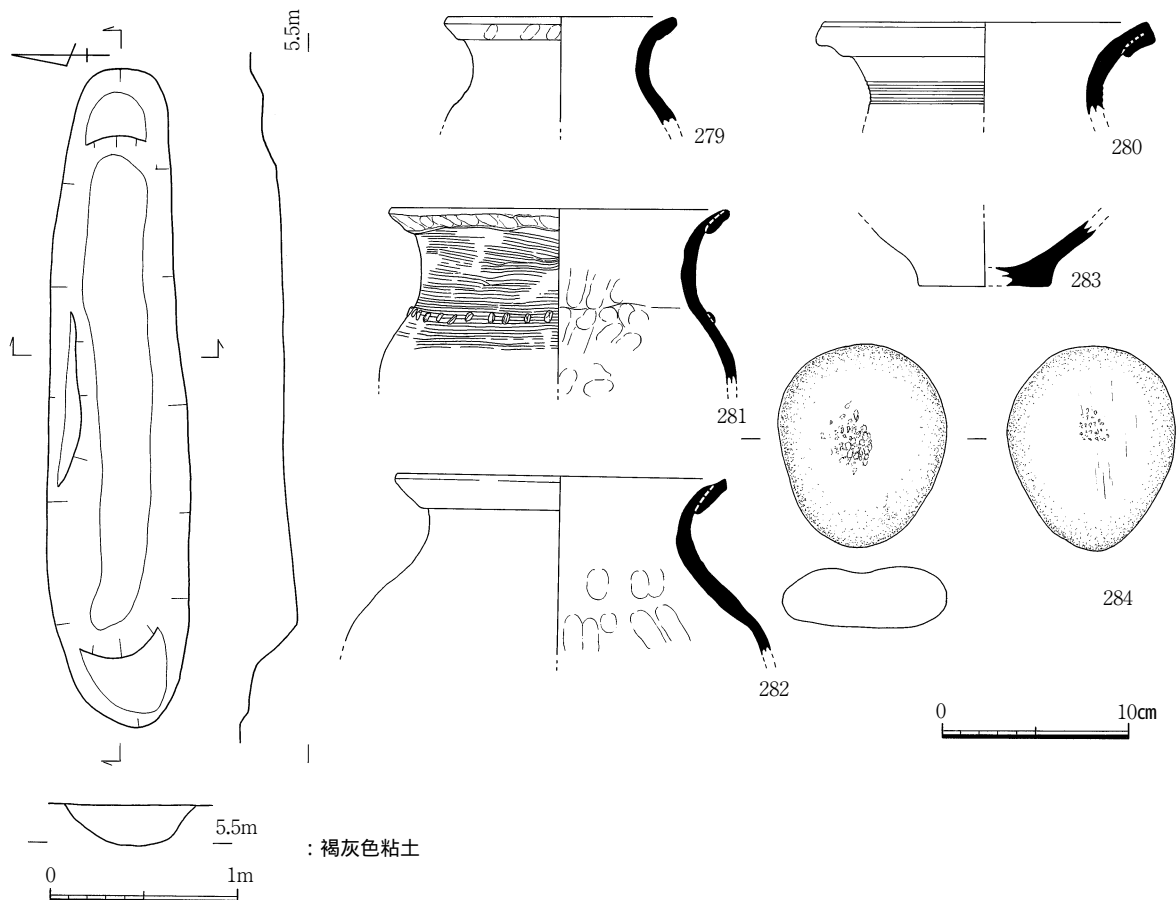


Fig.76 SD12平面図・セクション・エレベーション及び出土遺物実測図

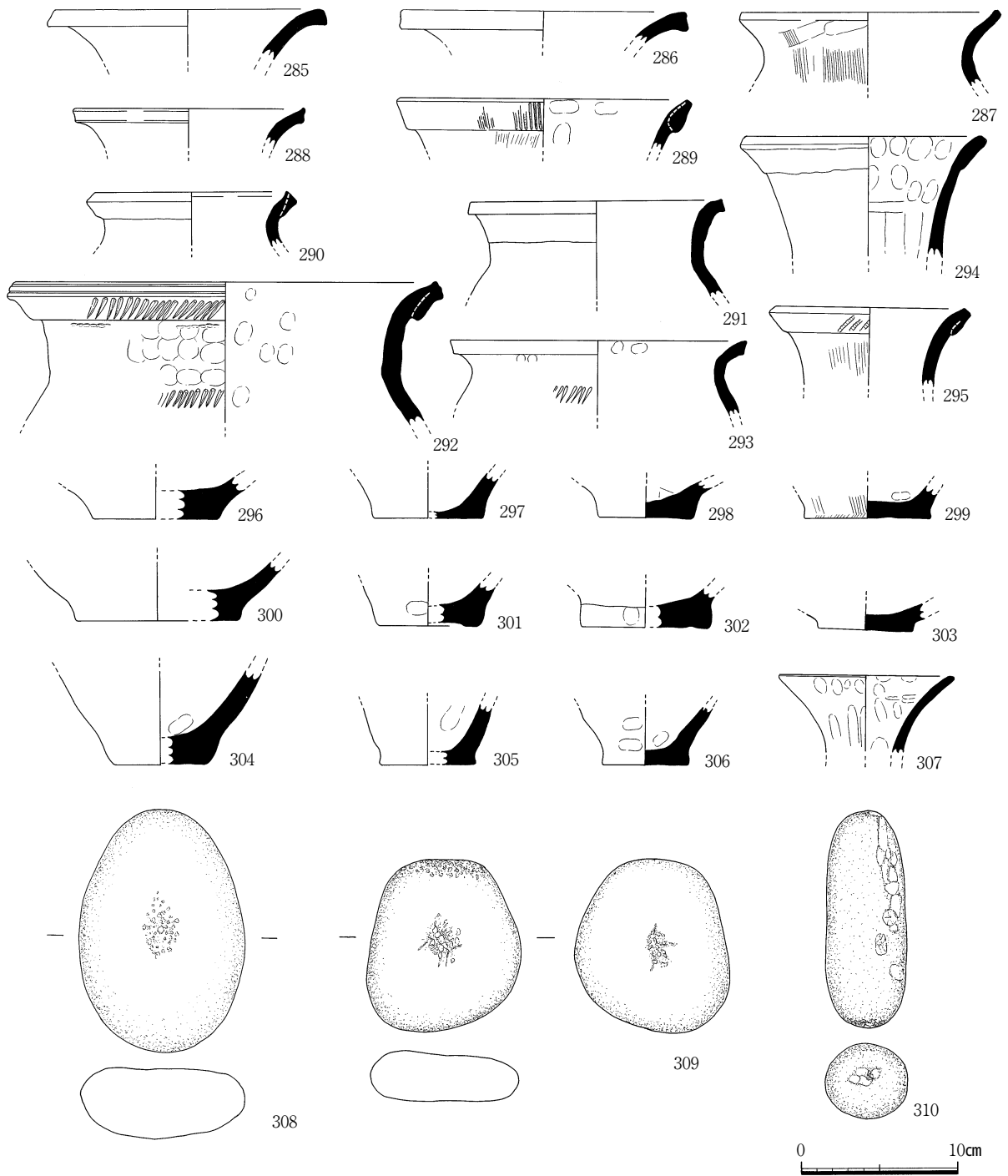


Fig.77 P5・6及びB・C区包含層出土遺物実測図

## 5. 区の調査

### (1) A区 (Fig.78)

農道を挟んで北側の調査区である。農道沿いの南側は表土直下が蛇紋岩の風化礫の岩盤となっているが、北部は深い谷状に落込み粘土層が厚く堆積している。基本層準は以下の通りである。

- 層:黒色粘土 (2 ~ 3 cm大の風化礫を含む)
- 層:黒灰色粘土 ( " )
- 層:灰色粘土 ( " )
- 層:淡灰色粘土 ( " )
- 層:淡灰褐色粘土
- 層:灰褐色粘土 (2 ~ 3 cm大の風化礫を含む)
- 層:灰茶色粘土 ( " )
- 層:黄灰色粘土
- 層:茶灰色粘土
- 層:灰黄色粘土
- 層:耕作土

各層準ともに北に向かって傾斜堆積をしている様子がよく分かる。 ~ には少量の縄文・弥生土器の細片が出土している。

### (2) B区

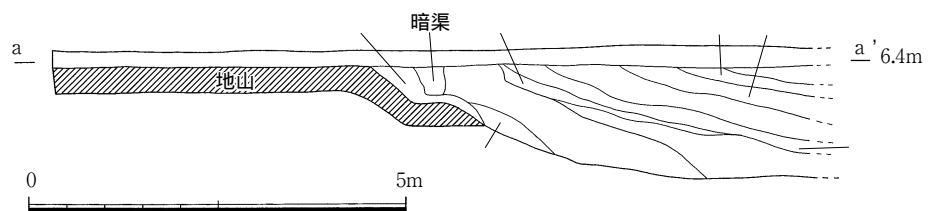
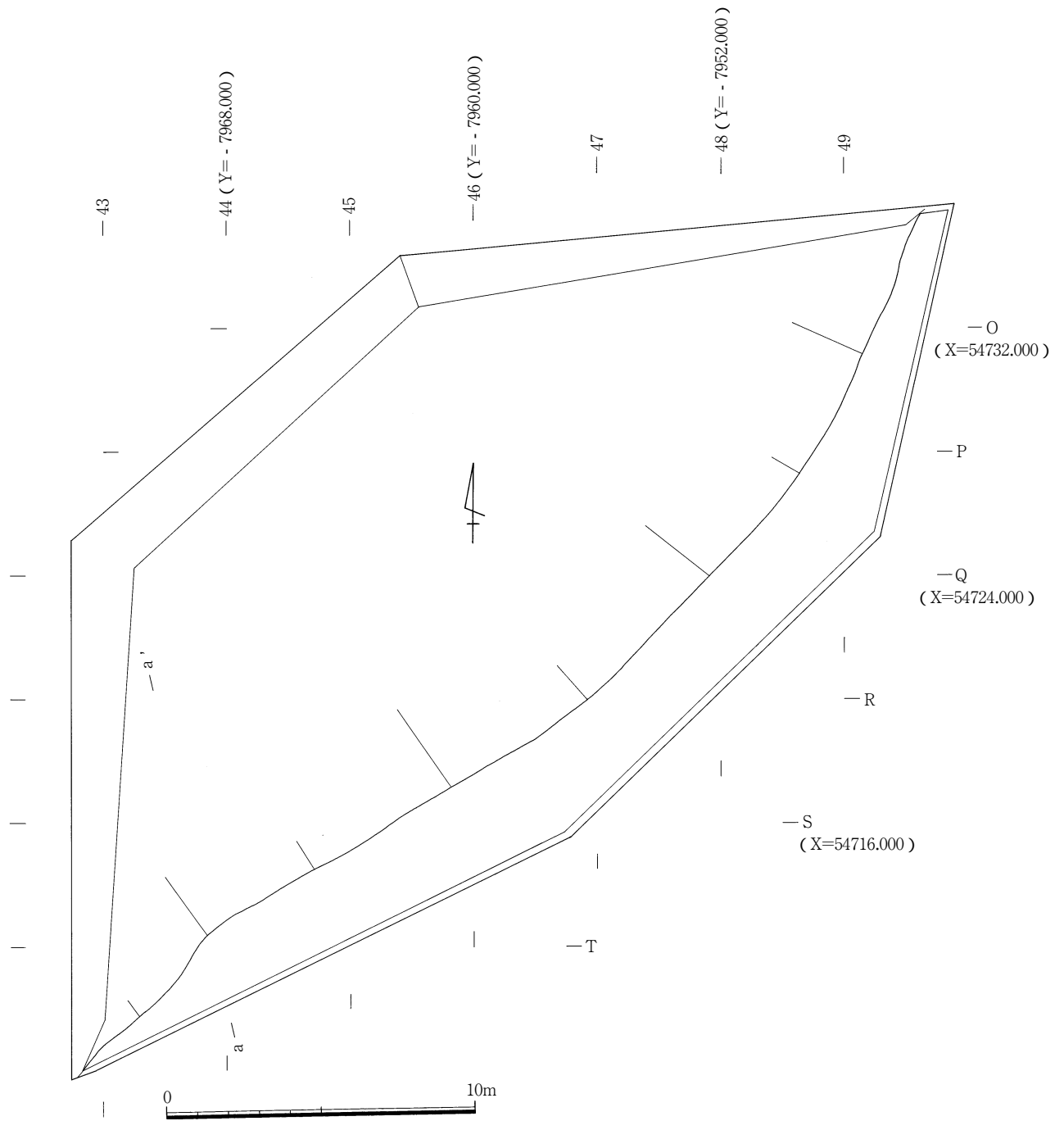
農道を挟んで南側の調査区である。A区とは反対に北側が風化礫の岩盤となっており、南に向かって急傾斜している。南部は深い谷状に落込み粘土層が厚く堆積している。

基本層準 (Fig.79)

- 層:暗灰色粘土 (1 ~ 5 cm大の風化礫を含む)
- 層:黒灰色粘土 (1 ~ 5 cm大の風化礫を含む。縄文晩期土器、炭化物を多く含む)
- 層:暗灰色粘土 (縄文晩期の深鉢 類のみを少量含む)
- 層:灰色粘土 (縄文晩期土器を多く含む)
- 層:灰黄色粘土 (縄文晩期土器を多く含む)
- 層:茶灰色粘土 (縄文晩期土器、弥生後期土器を含む)
- 層:黒褐色粘土
- 層:耕作土

遺物の出土状況

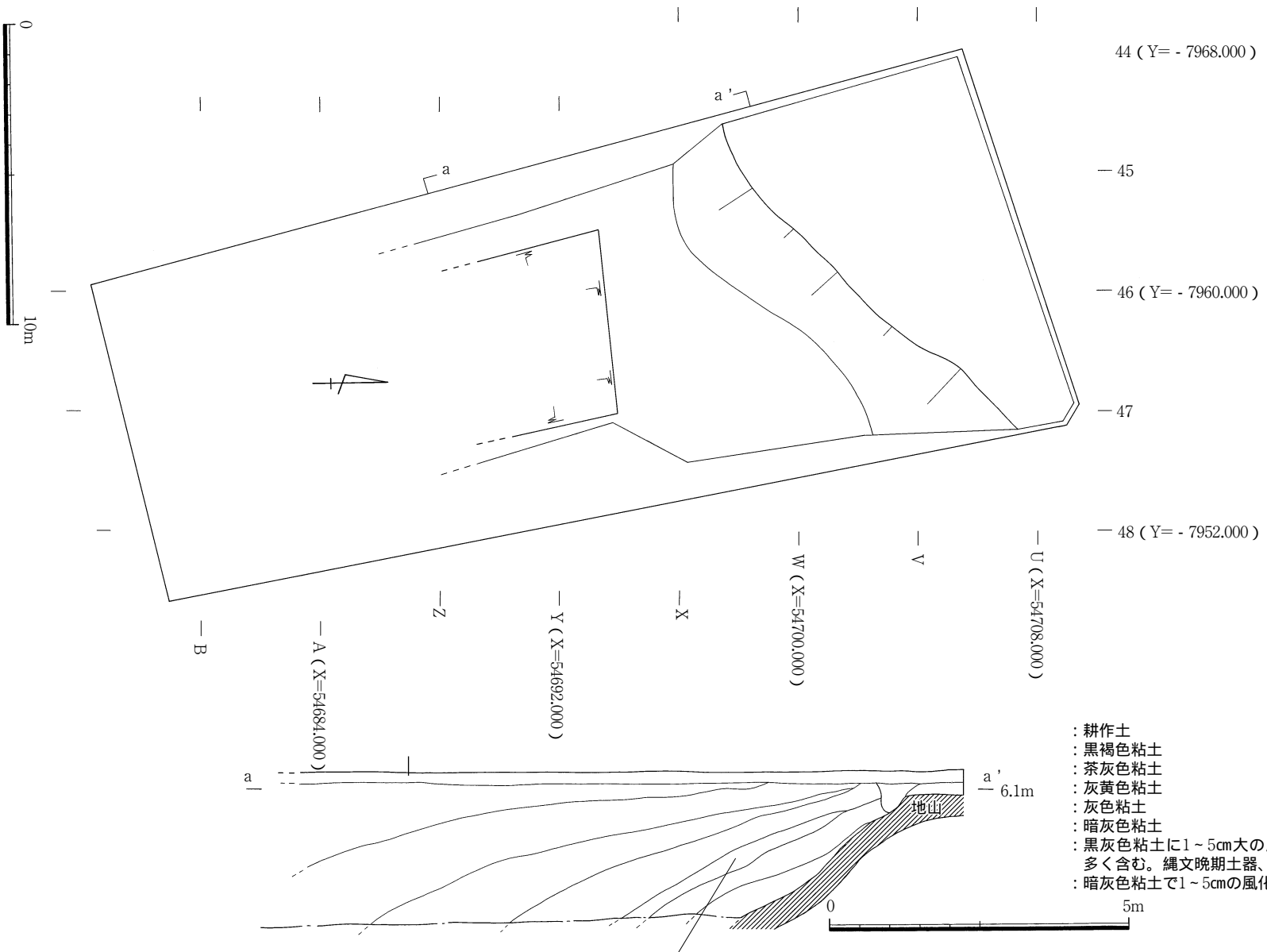
B区からは多量の縄文晩期土器・石器、弥生後期土器が出土している。すべて斜面堆積であるが、 層出土の遺物は、刻目突帯文土器や弥生土器を含まず、晩期中葉の時期的にまとまりのある遺物として把握することができると思う。 層は弥生土器が含まれるなど新旧混在しており層位的に取上げることができなかった。ここでは、 層とそれ以外の層 (斜面堆積) とに分けて述べ



- |                         |                        |
|-------------------------|------------------------|
| : 耕作土                   | : 淡灰褐色粘土               |
| : 灰黄色粘土                 | : 淡灰色粘土 (2~3cmの風化礫を含む) |
| : 茶灰色粘土                 | : 灰色粘土 ( " )           |
| : 黄灰色粘土                 | : 黒灰色粘土 ( " )          |
| : 灰茶色粘土 (2~3cm大の風化礫を含む) | : 黒色粘土 ( " )           |
| : 灰褐色粘土 ( " )           |                        |

Fig.78 A区調査区平面及びセクション図

Fig. 79 B区調査区平面及び西壁セクション図



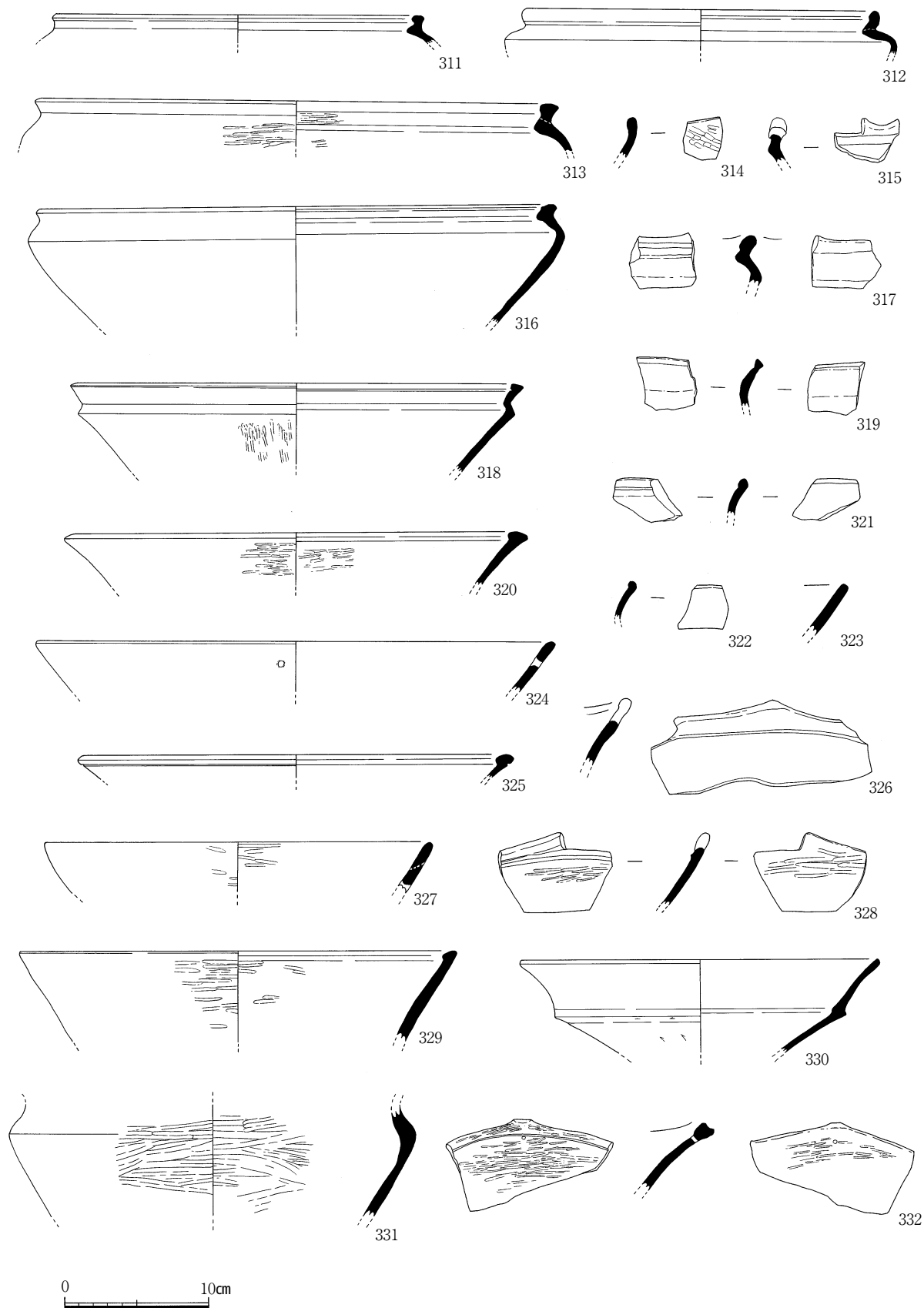


Fig.80 B区 層出土土器実測図(縄文晩期土器) 浅鉢 類(311~313・315・317) 同 類(316) 同 類(318) 同 a類(320・325・332) 同 b類(329) 同 類(328) 同 a類(321・322・326) 同 b類(319) 同 c類(330) 同 類(323・324) 同 類(314・327)

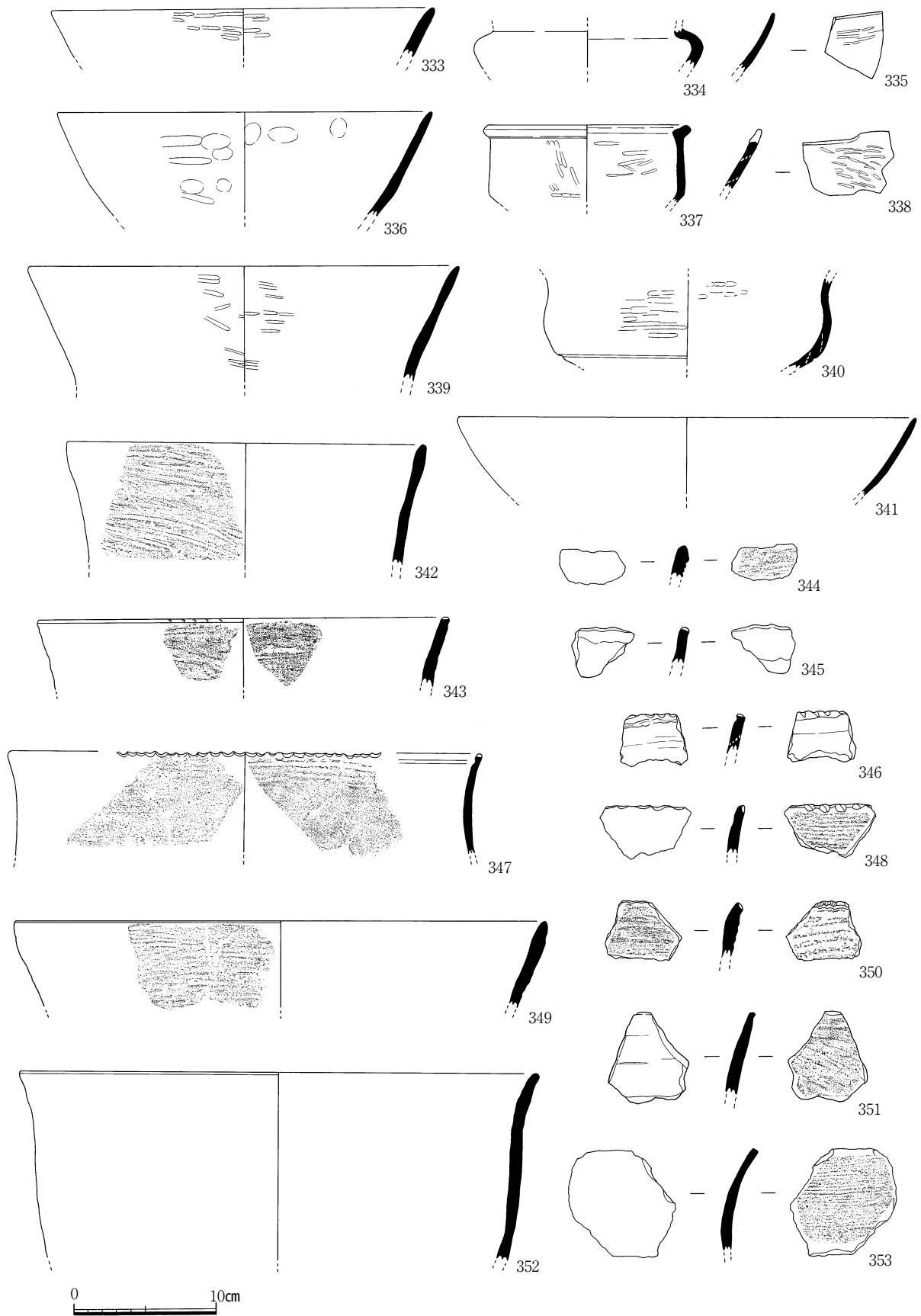


Fig.81 B区 層出土土器実測図(縄文晩期土器)

浅鉢 類(333・336・338・339) 同 類(335・341)

深鉢 A類(343・347・348・350) 同 B類(342・344・349・351~353) 同 A類(345・346)



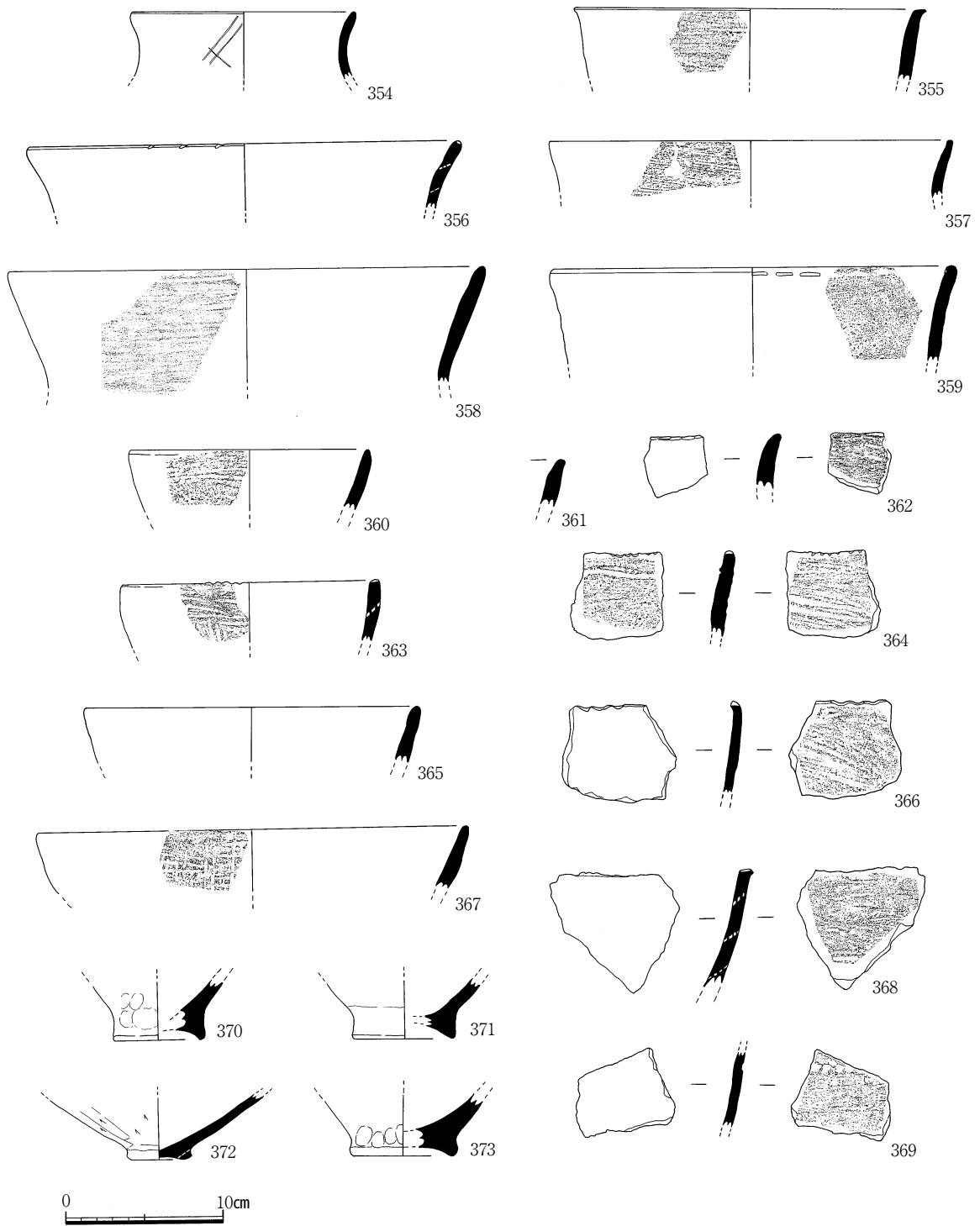


Fig.82 B区 層出土土器実測図(縄文晩期土器) 深鉢 A類(356・359・362・364) 同 B類(354・355・357・358) 同 A類(363・366・368) 同 B類(360・361・365・367)

ることとする。縄文晩期の浅鉢と深鉢については、層出土のものを基準に形態分類を行った。器種組成や各形態の比率、特徴などについては考察で述べることにする。

層出土の縄文晩期土器 (Fig.80~82)

浅鉢 (Fig.80・81・82)

全て黒色磨研土器である。全体の形状が分かるものはないが、主として口縁部の形態から ~ 類に大分類することができる。

類:最大径を上胴部に有し、短い頸部に口縁部が付く。口縁部は玉縁状に肥厚、蝶ネクタイ状や鱗状の突起を持つものがある。頸部内面に稜を有して屈曲するものと丸味を帯びて外反するものがある (311・312・313・315・317)。

類:最大径を上胴部に有し、短く外反する口縁部が付く (316)。

類:胴部が直線的に外方に立ち上がり、上胴部と口縁部がクランク情に屈曲して立ち上がる。(318)

類:口縁部に向かって大きく外反しながら立ち上がる。口縁部が大きく玉縁状に肥厚する a 類 (320・325・332)、断面三角に肥厚する b 類 (329)、僅かに蒲鉾状に肥厚する c 類からなる。

類:外方に立ち上がり、口縁部付近で僅かに内湾する。口縁部は僅かに内側に肥厚し、鱗状突起を有するものもある (328)。

類:口縁部が外反し、端部が内側に肥厚する。端部の肥厚が玉縁状の a 類 (321・322) と三角形の b 類 (319) がある。わずかに肥厚する c 類 (330・326) がある。

類:体部が直立気味に立ち上がる (337)。

類:口縁部に向かって直線的に立ち上がり、鉢状を呈す。(323・324・333・336・338・339)

類:ボール状を呈す (314・327・335・341)。

浅鉢の底部で図化できたものは 1 点 (372) である。僅かに上げ底を呈し、外面は下 上のヘラ削りが見られる。

深鉢 (Fig.81・82)

全体の形状が分かるものはないが、主として口縁部の形態、突帯の有無などから ~ 類に大分類することができる。

A類:上胴部から外反あるいは外反気味に立ち上がり、口唇に刻目を施す。口縁部内面に沈線を有するものが見られる (343・347・348・350・356・362・364)。

B類: A類と同様の形態をなし、口唇刻のないもの (342・344・349・351~355・357・358・359)。

A類:口縁部に向かって直口ないしは内湾して立ち上がる。口唇に刻目を施す。口縁部内面に沈線を施すものはない (345・346・363・366・368)。

B類: A類と同様の形態をなし、口唇刻のないもの (360・361・365・367)。

354の外面には細いヘラ状原体で格子状の文様を描き、369は上胴部外面に 状の列点文を巡らしている。深鉢の底部で図化できたものは370・371・373の3点のみである。共に上げ底である。

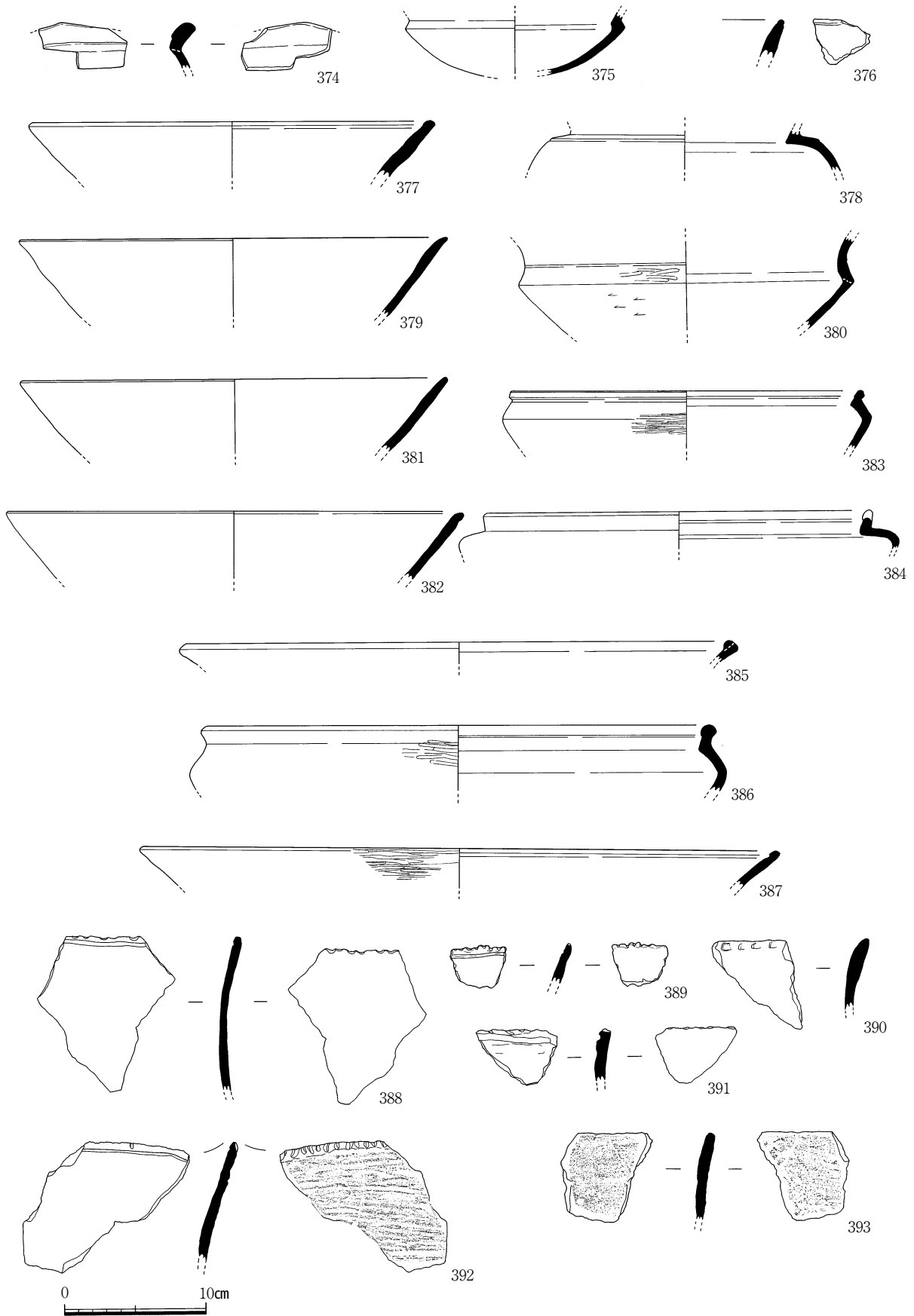


Fig.83 B区 ~ 層出土土器実測図(縄文晩期土器) 浅鉢 類(384・386) 同 類(374・383) 同 a類 (385) 同 c類(377) 同 類(379・381・382・387) 同 c類(377) 深鉢 A類(388・389・391・392) 同 B類(390・393) 同 B類(376)

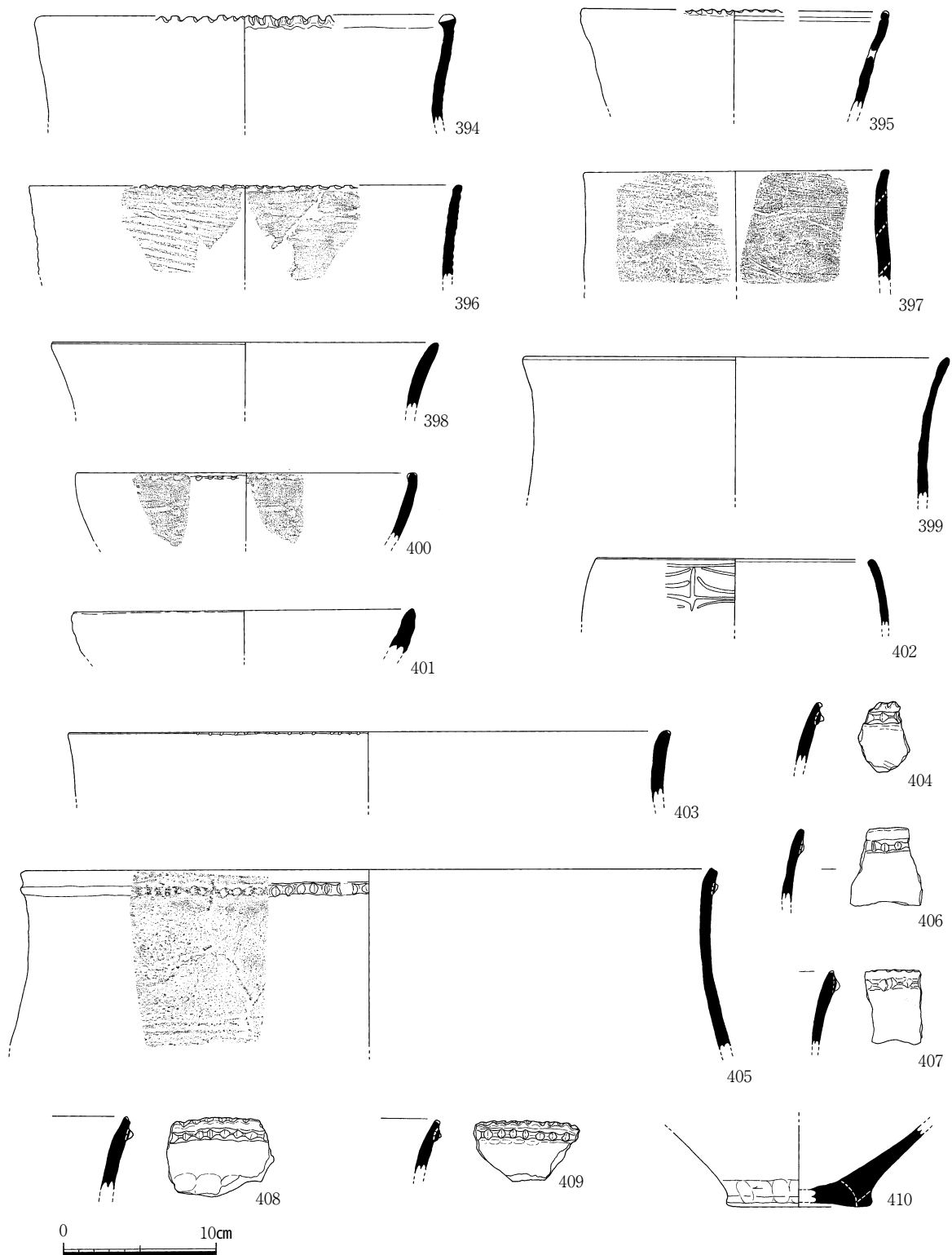


Fig.84 B区 ~ 層出土土器実測図(縄文晩期土器) 浅鉢 類(402)、深鉢 A類(394~396・403)、同 B類(397~399)、同 A類(400)、同 B類(401)、同 類(404~409)

斜面堆積出土の縄文晩期土器 (Fig.83・84)

浅鉢 (Fig.83・84)

類 (384・386)、類 (374・383)、a類 (385)、c類 (377)、類 (379~382・387) が出土している。387は口縁部内面ににぶい沈線が施されている。この他、層に見られなかった有文浅鉢類 (402) が出土している。

深鉢 (Fig.83・84)

A類 (388・389・391・392・394~396・403)、B類 (390・393・397~399)、A類 (396)

B類 (376・401) の他に層では見られなかった刻目突帯文土器の類 (404~409) が出土している。この他、底部が1点 (410) 出土しているが弥生土器の可能性もある。

石器

磨製石斧 (Fig.85 - 412~417)

6点出土している。412が緑色片岩である他はすべて蛇紋岩製である。412は、扁平な転石を利用したもので小判形を呈し、一方の主面に大きな剥離面を残している。蛇紋岩製のものも転石を利用したもので、全面丁寧な研磨痕が認められるが剥離痕も随所に残っている。全体の形状を明らかにできるものはないが、残存部から基部形態は尖基または円基をなし刃部に向かって広がるタイプである。断面は総じて扁平であるが416はかなりの厚みを持っている。これらの重量を正確示すことはできないが、完形品であれば200~300gに納まるものがほとんどであろう。ただ416は800g程の大型品となる。これら蛇紋岩製の石斧はすべて刃部、基部あるいは両方が欠損している。欠損の状態からみて、使用中あるいは製作過程においてではなく、本来の使用時とは無関係な方向から(主面に対して直角)力が加えられ欠損している。本来の使用目的とは異なる意識的な行為によって欠損廃棄されたものである。このような廃棄は、縄文後晩期の栄工田遺跡<sup>(1)</sup>でも認められる。石斧の廃棄のあり方として注目すべき現象である。

叩き石 (Fig.86 - 420・421)

2点ともに河原石を利用したものである。420は石英粗面岩で一方の主面中央部に、421は側縁部に使用による叩き痕跡が認められる。

砥石 (Fig.86 - 418・419)

2点ともに砂岩製である。418は一面、419は二面使用している。

以上の石器は、磨製石斧 (Fig.85 - 417) が斜面堆積である以外はすべて層出土である。

(1) 松村信博『栄工田遺跡』(財)高知県文化財団埋蔵文化センター 1995年

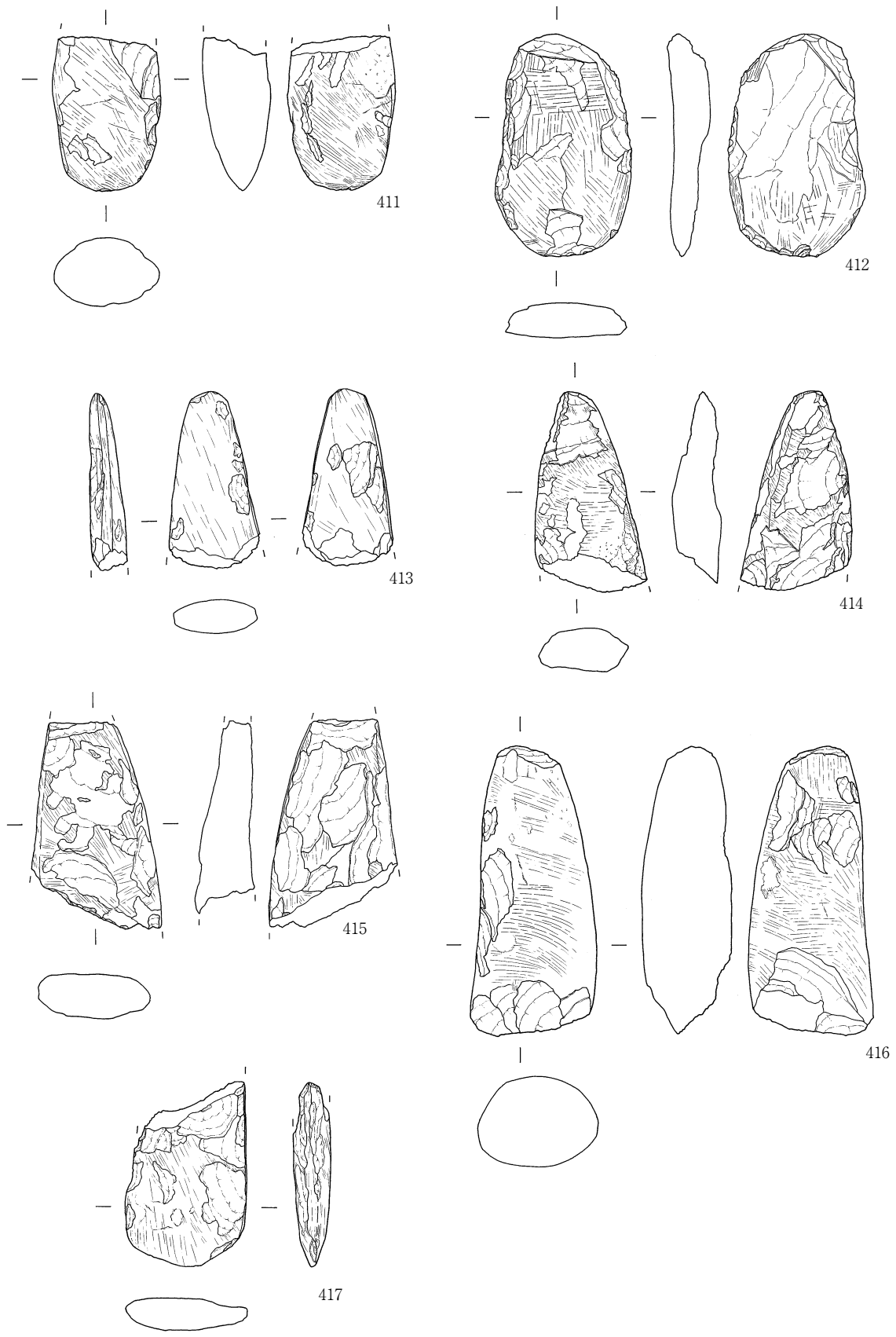


Fig.85 B・C区出土の磨製石斧実測図

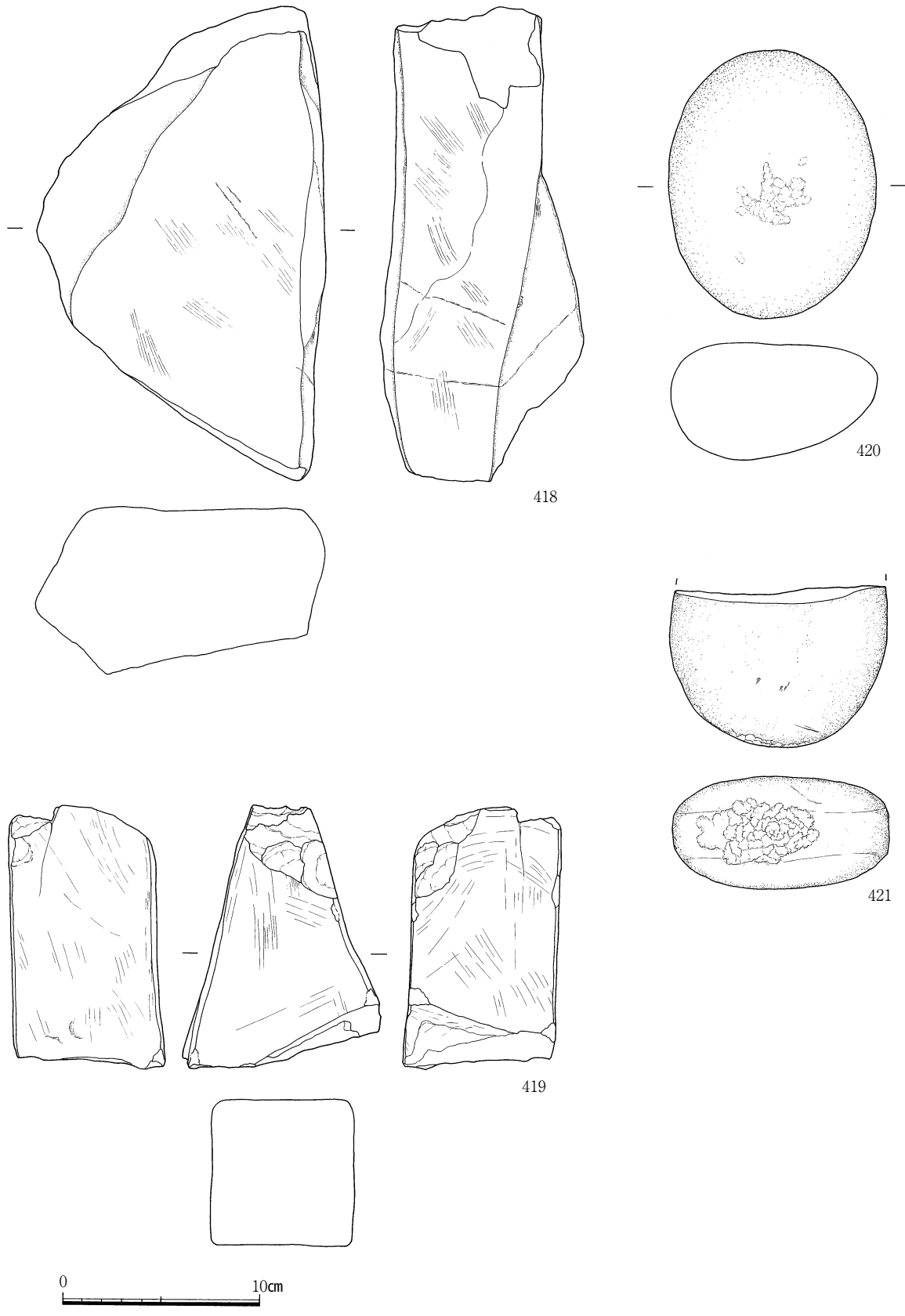


Fig.86 B区出土の砥石(418・419)、叩石(420・421)実測図

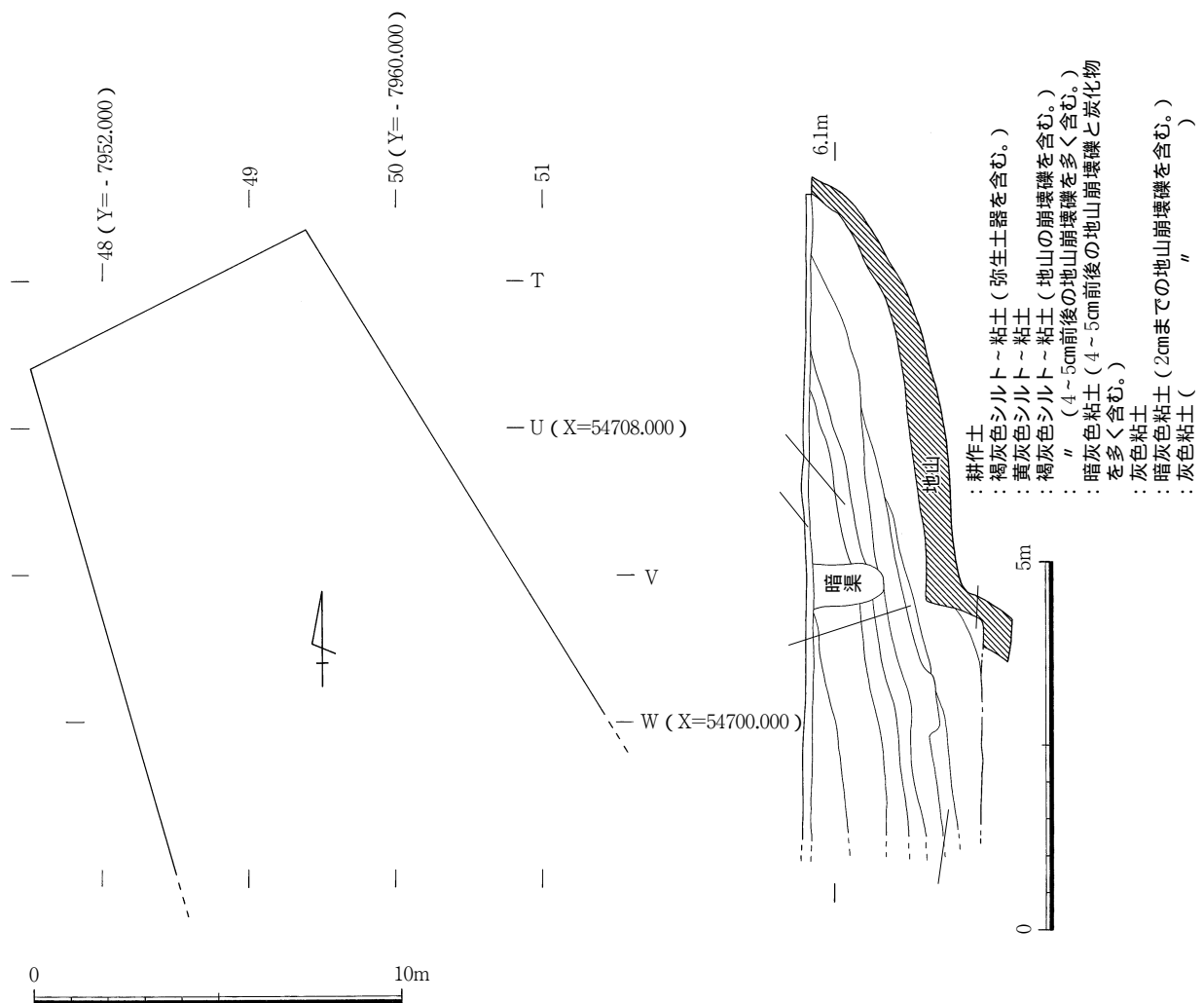


Fig.87 C区調査区平面及び西壁セクション図

### (3) C区

B区の東隣の調査区である。西北隅の一部に B区から連なる岩盤の一部が見られるが大部分が粘土が堆積した谷状地形をなしている。縄文晩期・弥生後期の遺物が出土しているが層位的に遺物を取上げることはできなかった。

基本層準 (Fig.79)

層:灰色粘土 (2cmまでの地山崩壊礫を含む)

層:暗灰色粘土 (2cmまでの風化礫を含む)

層:灰色粘土

層:暗灰色粘土 (4～5cm前後の地山崩壊礫と炭化物を多く含む。)

層:褐灰色シルト～粘土 (4～5cm前後の地山崩壊礫を多く含む。)

層: " (地山崩壊礫を含む)

層:黄灰色シルト～粘土。

層:灰褐色シルト～粘土

層:耕作土



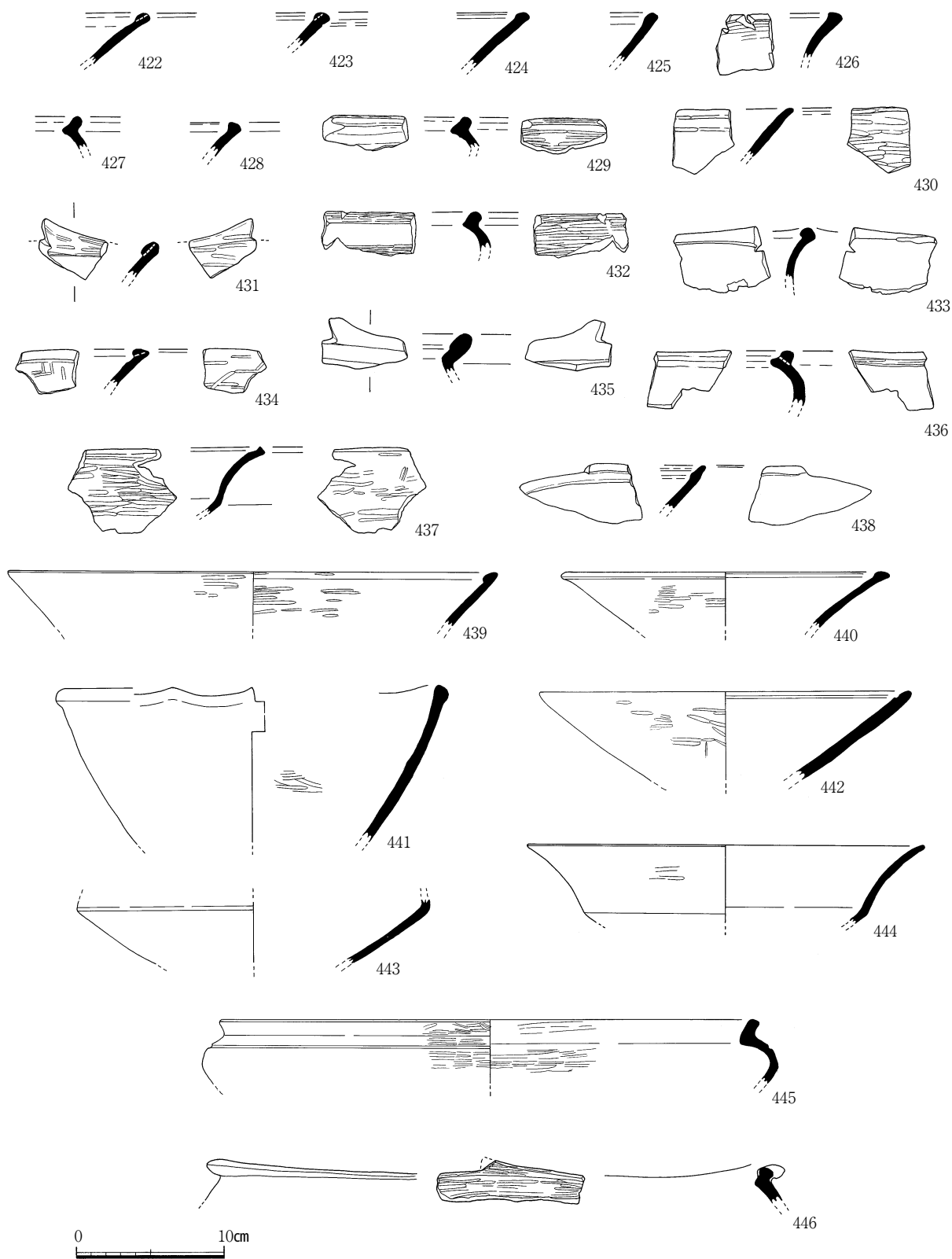


Fig.88 C区出土土器実測図(縄文晩期土器) 浅鉢 類(445) 同 類(427・429・432・435・436・446) 同 a類(431) 同 b類(428・434・439・440) 同 c類(422~425・438) 同 a類(426・433) 同 b類(437) 同 c類(444) 同 類(430・442) 同 類(441)

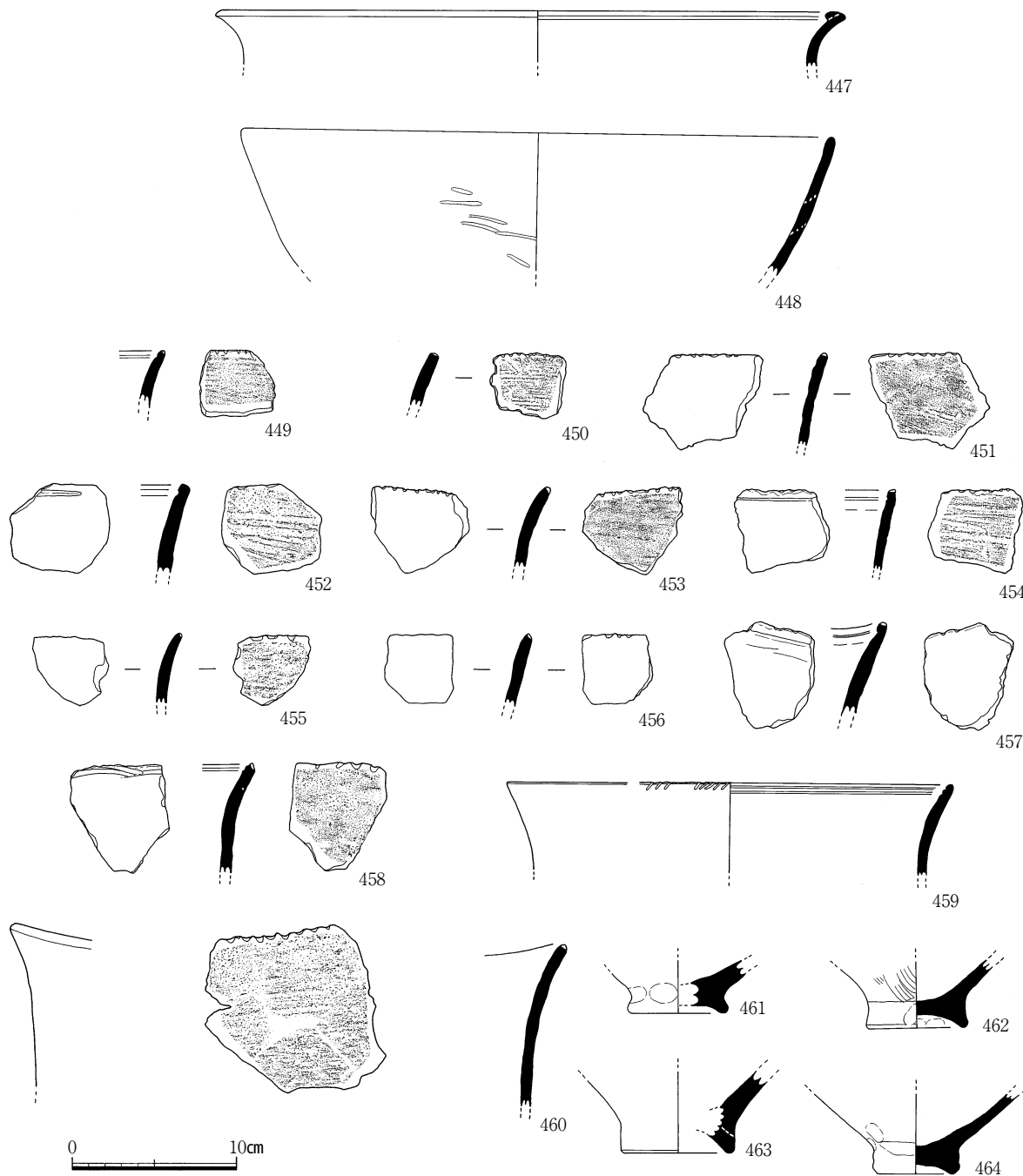


Fig.89 C区出土土器実測図(縄文晩期土器) 浅鉢 a類(447)、同 類(448)、深鉢 A類(449~460) 遺物の出土状況

~ 層からは縄文晩期土器・石器、 層からは弥生後期土器が出土している。縄文晩期の土器は、B区の 層のように安定した層準として捉えることができなかった。したがって、斜面堆積資料として把握する。

斜面堆積出土の縄文晩期土器

浅鉢 (Fig.88・89)

類(445) 類(427・429・432・435・436・446) a類(431) b類(428・434・439・

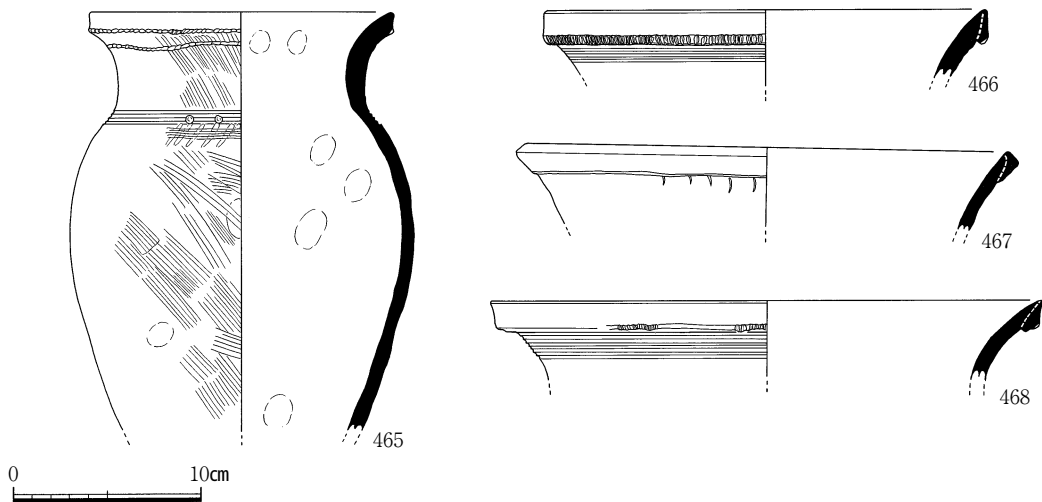


Fig.90 C区出土土器実測図(弥生土器) 弥生土器甕(465~468)

440) c類(422~426・438) a類(426・433・447) b類(437) c類(444) 類(430・442) 類(441・448)が見られる。431・433・435は口縁部に鱗状突起を、438は台形状突起有する。441は波状口縁を呈し、442は口縁部内面に沈線を巡らす。

#### 深鉢 (Fig.89)

A類(449~460)と底部(461~464)出土している。

#### 弥生土器 (Fig.90)

甕(465~468)が出土している。 ~ 区の諸遺構出土の土器と同時期の後期中葉のものである。465と466は外面が激しく煤けている。

#### 石器

##### 磨製石斧 (Fig.85・91)

411は変成蛇文岩、469・470は蛇紋岩製ですべて基部が欠損している。

##### 打製石斧 (Fig.91)

471はほぼ完形、472は基部が欠損しているが、刃部にむかって幅が広がるタイプである。前者は四万十帯の硬質頁岩、後者は三波皮帯の緑色変岩である。

##### 石錘 (Fig.91)

473・474ともに打欠き石錘で、473は275g、474は178gを測る。前者は弱変成緑色岩、後者は石英粗面岩である。

##### 砥石 (Fig.91)

475は、砂岩製で一面を使用している。

##### 叩き石 (Fig.92)

476・477共に両主面の中央部に使用痕が認められる。476が585g、477が554gで、両者共に石英粗面岩である。

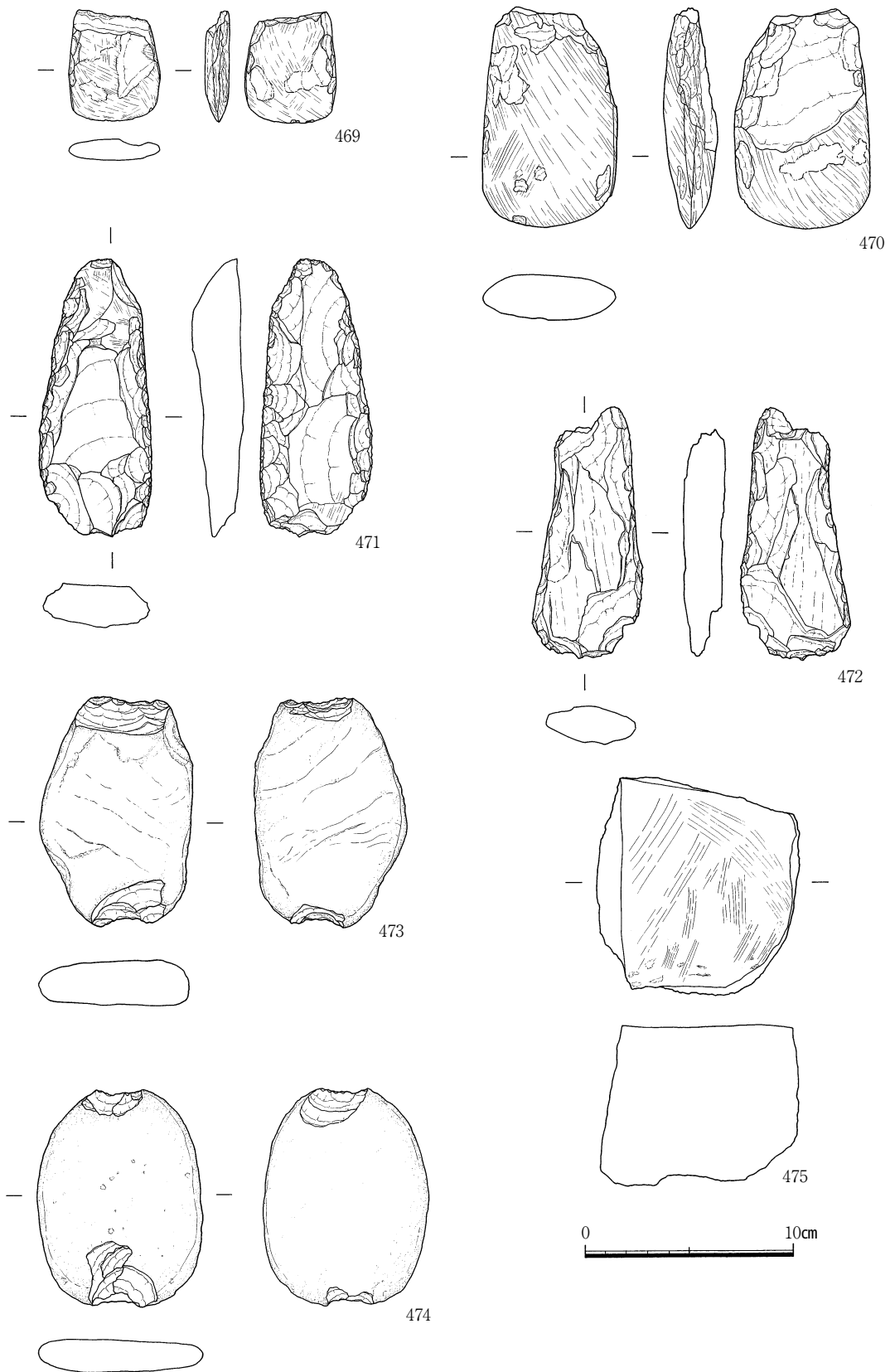


Fig.91 C区出土の石器実測図 磨製石斧(469・470)、打製石斧(471・472)、石鐘(473・474)、砥石(475)

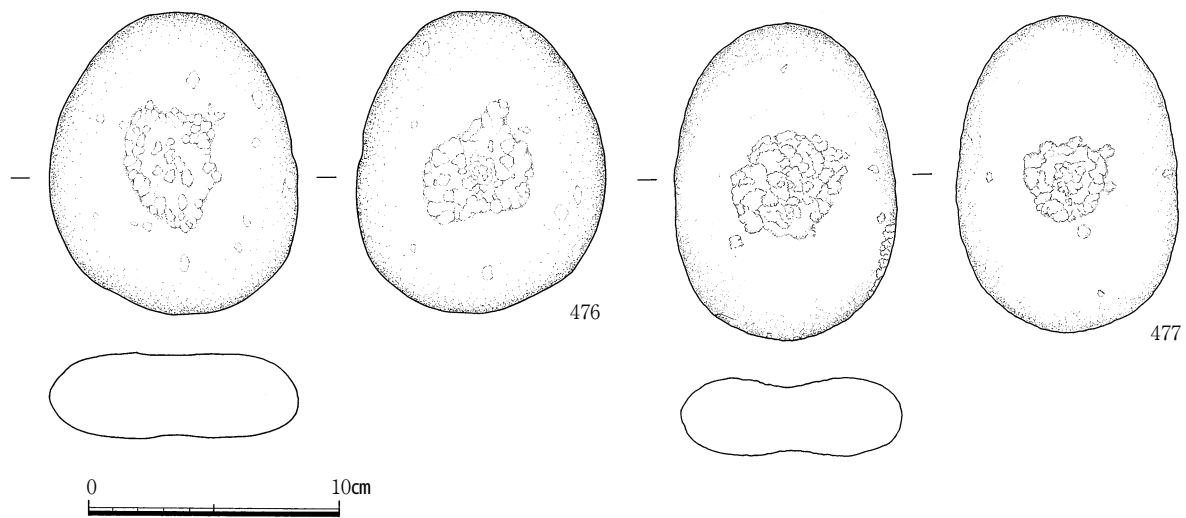


Fig.92 C区出土の石器実測図 叩石(476~477)

# 第 章 考察

## 1. 北高田遺跡出土の縄文晩期土器

第 章で見たように B・C区からはまとまった縄文時代晩期の土器が出土した。これらは全て斜面堆積であるが、B区 層の土器は比較的一括性の高いものと判断することができる。ここでは、先に行った分類をもとに B区 層出土の土器を中心に諸特徴の抽出や編年の位置付けを試みたい。

### (1) 深鉢

B区 層出土の深鉢口縁部は細片を含めて88点である。すでに見たように形態的には口頸部が緩やかに外反する 類と直口ないし内湾気味に立ち上がる 類から成っている。 類が70点(79.5%)、 類が18点(20.5%)で、構成比率は約4:1である。比較的短めの口縁部が「く」字状に屈曲するタイプは見られない。さらに口唇刻みの有無によってA類とB類に分けることができたが、 類においてはA類:B類は49点(70%):21点(30%)で、口唇刻みを有するものが7割を占める。一方 類はA類:B類が10点:8点とほぼ伯仲している。 類共に口唇刻みを持つものが多数を占めているが、これらの刻みは、深くしっかりと施されるものは見られず総じて細くて弱い、施文の間隔も個体によって著しいバラツキが見られる。施文原体は棒状のものが多いが篋、指など変化に富んでいる。施文方向も口唇部に対して直角、斜め、平行(横0字)などさまざまである。口唇形態は丸く納めるものが多いが、面取りしたもの(357)や端部を外方に摘み出すもの(355・368)少数見られる。深鉢で特に注目すべき点は A類に限って10点、約2割りのものに口縁部の内面に沈線が施されることである(347)。また359のように短沈線を巡らす例もある。文様を持つものは極めて少ないが、354に極細線による格子状沈線、369の頸胴部界に 状の列点文が見られる。底部は7点出土しており、全て上げ底で外面に指頭圧痕が施される。

器面調整は、磨耗が激しく観察に耐えられないものもあり、口頸部と胴部を統一的に捉えられるものはほとんどない。口頸部を中心に見ると、 類は 内外二枚貝条痕の例が11点(15.7%)、 外面二枚貝条痕で内面ナデの例が31点(44.3%)、 内外面ナデが28点(40%)である。ナデの中にはハケ状原体によるものが散見される。 類は が見られず、 が8点(44.4%)、 が10点(55.6%)である。器面調整には 類と 類の間に違いが認められる。なお胴部片の369には削りが見られるが、削りの例は僅少である。

B区斜面堆積からは 類の他に刻目突帯文の 類が見られる。 類: 類は52点(89.7%):6点(10.3%)で、 類のA類とB類との比率は39点(75%):13点(25%)、 類におけるそれは3点:3点で伯仲している。 A類に施される刻目は、394や395などのように 層出土のものに比べて大きく深いものが見られる。口縁部内面の沈線は39点中6点(23.1%)に施されている。 類の口頸部の器面調整は、内外面二枚貝条痕が見られず、内外面ナデ調整が半数以上を占めている。 類は9点出土している。全て口唇部から下がった位置に刻目突帯を貼付し、7点が口唇部にも刻目を施している。施文原体は、棒、篋、半さい竹管状工具が見られD字の施文が多い。

C区からは、 類: 類が42点(87.5%):6点(12.5%)で出土している。 類のA類:B類は30点

(71.4%) :12点 (28.6%) 類のそれは4点:2点である。C区では波状口縁を持つもの(453・457・460)が見られる。

この他深鉢は断面や内面に粘土紐の接合痕の認められるものがある(368・397)。2～3cmの粘土紐を内傾接合によって成形している。深鉢は約35%に煤けや被熱が認められる。

## (2) 浅鉢

B区 層出土の浅鉢口縁部は細片を含めて47点である。これらの浅鉢は、330・332など数点を除いて全てがいわゆる黒色磨研土器であり、また器形のバリエーションが豊富であることを第一の特徴として挙げるができる。先に行った形態分類に基づいて構成比率を見れば、類が6点(12.8%)、類が1点(2.1%)、類が1点(2.1%)、類が4点(8.5%)、類が5点(10.6%)、類が8点(17.0%)、類が1点(2.1%)、類が17点(36.2%)、類が4点(8.5%)である。単純に外方に立ち上がる類が全体の3分の1以上を占め最も多く、次いで短な頸部から胴部が強く張り出す類と口縁部が外反する類がそれぞれ1割余りを占めている。類の口縁部内面はすべて大きく肥厚するa類である。胴部の張りは317のように弱いものもあるが全体としては強い部類に入ることができよう。・類は1点ずつの出土である。前者は刻目突帯文土器期に見られる「く」字状に屈曲するタイプに繋がるものであり、後者は比較的古相に属する。・類も全体形状を知ることができないが、口縁部内面の肥厚に特徴がある。類は口縁部の長さや立ち上がりの角度にばらつきがあるが一括した。口縁部形態はa・b・c類がありa類が多い。類も全体形状を知ることができないが、南溝手遺跡の浅鉢D類<sup>(1)</sup>、或いは美良布遺跡で分類したクランク状に屈曲して口縁部が長く伸びる浅鉢類<sup>(2)</sup>のような器形を想定することができよう。しかしこれらの遺跡を含めて各地において類のようなタイプが主体を占める例は見られない。刻目突帯文土器出現以前の段階では、各地域において・類が構成の中心となっている。類が突出する層の構成比率はそのような点では特異である。口縁部には鱗状(317・328)、喋ネクタイ状(315)、山形の突起(326・338)を持つものが見られるが、それほど多くはない。

次にB・C区の斜面堆積出土のものを見ておく。B区斜面は、刻目突帯文を含むなど安定した層準ではないが、浅鉢の構成比ではやはり類が最も多く7点(26.9%)を占めている。次いで、類、類となっており、おおよその構成比率は層と変わらない。ただ古相の器形である375や檀原系の文様を持つ有文浅鉢(402)、胴張りの強い類(384)などと共に、胴張りの弱い類(386)や層の類(316)よりも完成した「く」字状口縁部に近い383も見られるなど新旧入り乱れている。C区は、類が4割り以上と最も多く、次いで類6点(20.0%)、類5点(16.7%)となっている。類の中では口縁部内面の肥厚が弱いc類が多い。

器面調整は、総じて極めて丁寧な篋磨きが施され、磨きの単位が細く横方向であることを基本にしているが。形態別に特徴を見ると類の胴部内面には横位の削り、類の胴部外面は縦方向の篋磨きが施されている。また、磨きの下地に二枚貝条痕が見られるもの(318)や削り痕跡があるもの(326・355～338)、類の330は篋磨きを行わず削り+ナデで仕上げている。これらの胎土は、後述する深鉢に比べて極めて精緻である。雲母・角閃石・石英粒を含む例が多く認められるなど深鉢とは異なった胎土である。また、314は内面が、426・434は外面が、326は内外面が激しく煤けている。

(3) B区 層出土晩期土器の編年的位置付け

以上 B区出土の縄文晩期土器について述べた。このような特徴を持つ土器群は、南四国の縄文晩期土器編年のどのような位置に置くことができようか。南四国における晩期の資料は僅少であるが、岡本健児氏によって編年的研究が進められてきた。図示したように岡本氏は晩期を前半と後半とに大別し、前半を2小期、後半を4小期に組まれている<sup>(3)</sup>。この内、後半の中村・倉岡以降は突帯文土器であり、B区 層出土の一群は、それ以前に位置付けなければならない。前半の姫野々上町式<sup>(4)</sup>は、深鉢に後期末の凹線文の影響が残る段階であり、次ぎの八反坪式<sup>(5)</sup>は、基本的に深鉢に刻目がない段階のものである。両者とも B区 層出土の土器より古相の特徴を示している。従って今次資料は、岡本氏が「大半の深鉢は口唇に刻目を持ち、これに伴う黒色磨研系の浅鉢は、口縁の長く伸びるものまた胴を張り出すもの」<sup>(3)</sup>とされた倉岡 式に併行させることが最も妥当である。倉岡 式土器のタイプサイトとなった土佐市倉岡遺跡は、工事中に偶然発見されて短期間の調査を行ったものであり、倉岡 式土器の内容についても上記したこと以外には十分なことが解っていない。B区 層出土の資料は、量的にもまとまっており、倉岡 式の実態を示すものとして捉えることができよう。

ここで改めて倉岡 式土器の特徴を要約すれば以下になる。深鉢は 外反口縁の 類と砲弾状の 類が見られおおよそ 類: 類=4:1の割合で存在している。後者は八反坪式には見られなかった形態であることから倉岡 式において登場する形態である。 口唇刻目の出現。

	縄文晩期前半		縄文晩期後半			
畿内	滋賀里		滋賀里 b		船橋	長原
高知県	姫野々 上町	八反坪	倉岡	中村 倉岡	中村	入田B
瀬戸内		黒土B			黒土B	
北九州				菜畑9 ~12層	夜白	夜白

註3)より転載

刻目は細く弱く施され、施文手法、原体ともに変化に富んでいる。このバリエーションの豊富さは、晩期における口唇刻目出現期の様相を反映しているものと考えられる。 A類の2割りに見られる口縁部内面沈線を挙げることができる。この種の沈線は、沢田式<sup>(6)</sup>など中部瀬戸内の刻目突帯文土器に見られる特徴であり、南四国においては中村 式や入田B式に認められる<sup>(7)</sup>。突帯文以前の段階の香川県の永井遺跡<sup>(8)</sup>や愛媛県久万町の笛ヶ滝遺跡出土の深鉢<sup>(9)</sup>に類似の施文を見ることができる。瀬戸内地域との関係の中で位置付けなければならない手法である。 器面調整において二枚貝条痕とともにナデ調整のものがかなり見られるようになる。

浅鉢は、ほとんどが黒色磨研土器で形態にバリエーションが豊富である。 主要な形態は胴張りの 類、口縁部外反の 類、鉢状に開大きく開く 類であるが、 類が3割以上を占めている。

口縁部形態を無視して類似した形態の 類を含めると5割以上を占めることになる。当遺跡では、口縁部が大きく開き長く伸びる形態が多く用いられたことを示している。 口縁部形態では ~ 類については内面肥厚するものが目立つ。口縁部突起には鱗状、喋ネクタイ状、山形が見られる。

(4) 晩期中葉の提唱

倉岡 式土器は、瀬戸内や近畿など他地域との関係で見ればどのような編年的位置付けをするこ



とが可能であろうか。すでに周知のように家根祥多氏は、晩期中葉の「滋賀里 b 式の内容を正確に把握する最適な資料」として篠原式を提唱され、篠原式を古、中、新の3段階に区分された<sup>(10)</sup>。この研究は近年の晩期中葉土器編年の基軸になりつつあり、南溝手遺跡の編年的研究を行った平井泰男氏も篠原式諸段階との比較を行っている<sup>(11)</sup>。倉岡 式と篠原式は地域性的の問題もあり直に併行関係を論ずることは適切では無いかも知れないが、浅鉢 類などの肥厚した口唇部形態から篠原式新段階の特徴に近い。中部瀬戸内との関係では、やはり浅鉢に刻目突帯文土器直前型式の谷尻式土器<sup>(11)</sup>に近い特徴を持ちながらも南溝手遺跡河道2出土土器、すなわち船津原式の新段階<sup>(12)</sup>として捉えるのが妥当であろう。しかしながら深鉢については、口唇刻みの無いものも一定量占めるなど古い様相も伺える。また深鉢の器面調整に削りがほとんど認められない点は篠原式と大きく異なるところである。今後良好な資料の蓄積を待って、地域性をも把握した上で併行関係の整合性を図っていきたい。倉岡 式土器が、最近各地域において明らかになりつつある晩期中葉に属するものであることには間違いない。

すでに述べたように岡本氏は南四国の晩期土器を前半と後半とに大区分されたが、後期末葉の特徴を残す姫野々上町式の段階から刻目突帯文土器の間を埋める資料が充実しつつある現状においては、この間の諸型式を、晩期中葉の土器群として把握することを提唱したい。すなわち、姫野々上町式を晩期前葉、八反坪式と倉岡 式を晩期中葉、倉岡 式からの刻目突帯文土器の段階を晩期後葉として捉えたい。(出原恵三)

#### 註

- 1) 平井泰男 川崎新太郎 久保恵理子『南溝手遺跡』1 岡山県教育委員会 1995年
- 2) 出原恵三 『美良布遺跡』香北町教育委員会 1991年
- 3) 岡本健児 「土佐考古学の諸問題」『高知の研究』1 清文堂 1983年
- 4) 岡本健児 山本哲也『高知県葉山村埋蔵文化財発掘調査報告書 - 姫野々上町・新土居宇津ヶ藪遺永野遺跡 - 』葉山村教育委員会 1984年
- 5) 岡本健児他「玉屋式・八反坪遺跡と出土遺物」高知県土佐町教育委員会 1981年
- 6) 高畑知功他『百間川沢田遺跡』2 1985年
- 7) 出原恵三「四国西南部における弥生文化の成立」『文化財学論集』1994年
- 8) 渡部明夫・安藤清和「永井遺跡」『四国自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』9 香川県埋蔵文化財センター 1990年
- 9) 犬飼徹夫「愛媛県での縄文晩期土器の覚書」『愛媛考古学』13 愛媛考古学協会 1995年
- 10) 家根祥多「篠原式土器の提唱」『平成4年度科学研究費補助(総合A)研究成果報告書(課題番号04301049)縄文晩期前葉 - 中葉の土器編年』1994年
- 11) 高畑知功「谷尻遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告書』11 岡山県教育委員会 1976年
- 12) 平井泰男「縄文時代晩期中葉の土器について」南溝手遺跡』1 岡山県教育委員会 1995年

## 2. 北高田遺跡出土の弥生後期土器について

### 1. はじめに

今回の調査で出土した土器群は、口縁部外面の粘土帯を貼付し、櫛描直線文・浮文などを施す神西式土器<sup>1</sup>と呼ばれているものと類似する特徴をもっている。神西式土器は断片的な資料が多かったが、今回は量的にもまとまった資料を得ることができたことは大きな成果の一つである。しかも大半が土坑など遺構出土であり、時期的には遺構の切り合いもほとんどないことから一時期あるいはきわめて短期間に限定できる。

以下ではまず形態分類をおこなったうえで、伊野町バーガ森北斜面遺跡出土資料<sup>2</sup>と比較検討を行い、編年的位置付けを行う。

### 2. 形態分類

#### 壺

A類:広口壺である。口縁部の外反度によりA - 1類とA - 2類に細分する。

A - 1類:口縁部が大きく外反する。

( Fig.12 - 12、 Fig.12 - 13、 Fig.19 - 76、 Fig.20 - 85、 Fig.20 - 87、 Fig.29 - 118、 Fig.36 - 138、 Fig.36 - 140、 Fig.41 - 171、 Fig.43 - 183、 Fig.61 - 218、 Fig.72 - 264、 Fig.77 - 292、 Fig.77 - 294 )

A - 2類:A - 1類より外反度がきつく、口縁端部は水平近くまで外反するもの。

( Fig.12 - 10、 Fig.15 - 43、 Fig.17 - 54、 Fig.20 - 86、 Fig.26 - 103、 Fig.77 - 285、 Fig.77 - 286 )

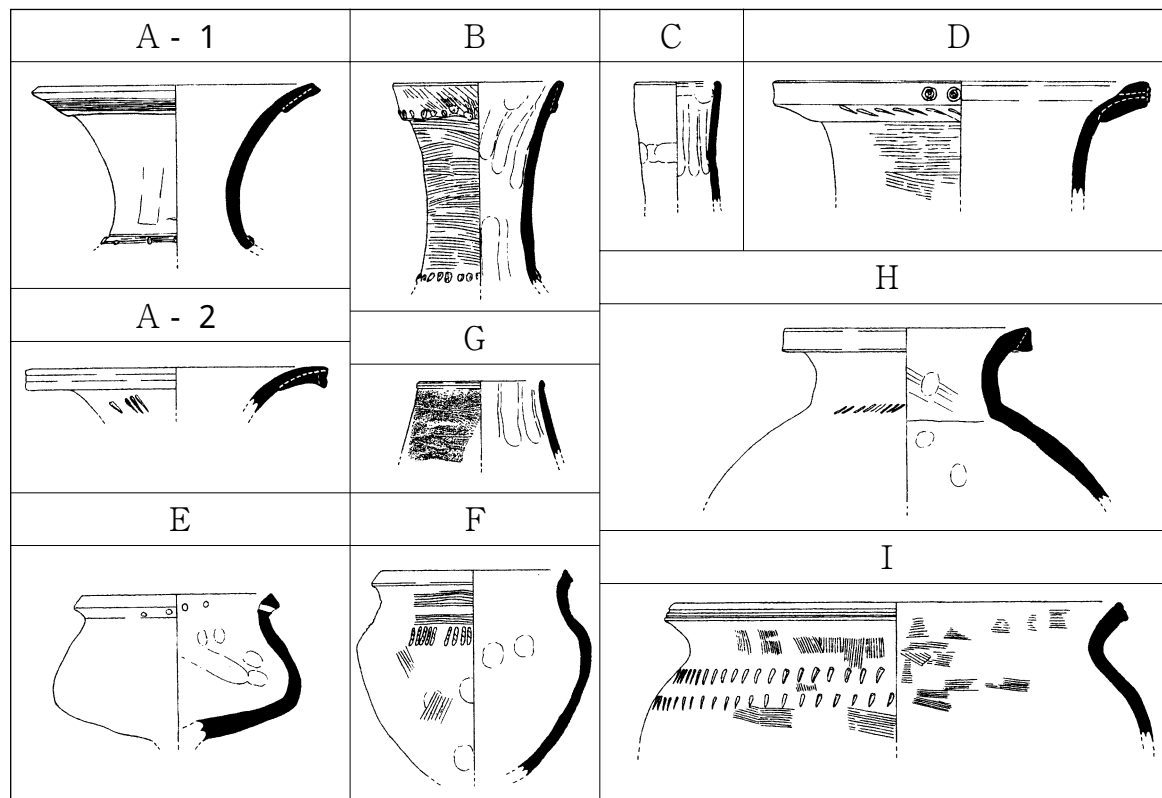


Fig.93 壺形態分類図

B類:長頸壺である。

( Fig.16 - 48、 Fig.19 - 73、 Fig.42 - 179、 Fig.43 - 181、 Fig.60 - 214、 Fig.63 - 229、 Fig.64 - 233、 Fig.72 - 265、 Fig.72 - 266、 Fig.72 - 267、 Fig.77 - 295 )

C類:細頸壺である。口縁部は直立する。( Fig.16 - 47 )

D類:直立した頸部から口縁部が大きく外反する。口縁端部には内外面に粘土帯を貼付して肥厚させるもの。( Fig.64 - 235 )

E類:上胴部に最大径を有し、口縁部が短く外反するもの。( Fig.14 - 34 )

F類:肩部に最大径を持ち、口縁部が緩やかに外反するもの。( Fig.19 - 75、 Fig.63 - 230、 Fig.72 - 269 )

G類:口縁部が内傾し、直線的に立ち上がるもの。( Fig.36 - 144 )

H類:頸部は短く、口縁部が大きく外反するもの。( Fig.72 - 258 )

I類:頸部はあまりしまらず、口縁部が「く」の字を呈するもの。( Fig.18 - 60、 Fig.56 - 210 )

甕

A類:肩部に最大径を有し、口縁部が「S」字状に緩やかに外反するもの。頸部の形状により細分可能であるが、ここでは一括する。

( Fig.11 - 7、 Fig.13 - 18、 Fig.13 - 19、 Fig.13 - 20、 Fig.13 - 22、 Fig.13 - 23、 Fig.13 - 24、 Fig.13 - 26、 Fig.14 - 33、 Fig.17 - 55、 Fig.18 - 61、 Fig.18 - 62、 Fig.18 - 63、 Fig.19 - 71、 Fig.19 - 78、 Fig.19 - 82、 Fig.20 - 88、 Fig.27 - 106、 Fig.27 - 114、 Fig.29 - 120、 Fig.29 - 121、 Fig.29 - 122、 Fig.31 - 126、 Fig.31 - 127、 Fig.36 - 141、 Fig.40 - 158、 Fig.40 - 159、 Fig.40 - 160、 Fig.40 - 162、 Fig.40 - 161、 Fig.42 - 176、 Fig.43 - 182、 Fig.43 - 184、 Fig.60 - 217、 Fig.61 - 220、 Fig.64 - 238、 Fig.66 - 245、 Fig.66 - 246、 Fig.72 - 252、 Fig.72 - 253、 Fig.72 - 256、 Fig.72 - 257、 Fig.72 - 259、 Fig.72 - 260、 Fig.72 - 261、 Fig.72 - 263、 Fig.73 - 270、 Fig.76 - 279、 Fig.76 - 280、 Fig.76 - 281、 Fig.76 - 282、 Fig.77 - 293、 Fig.90 - 465 )

B類:口縁部が「く」の字状を呈するもの。

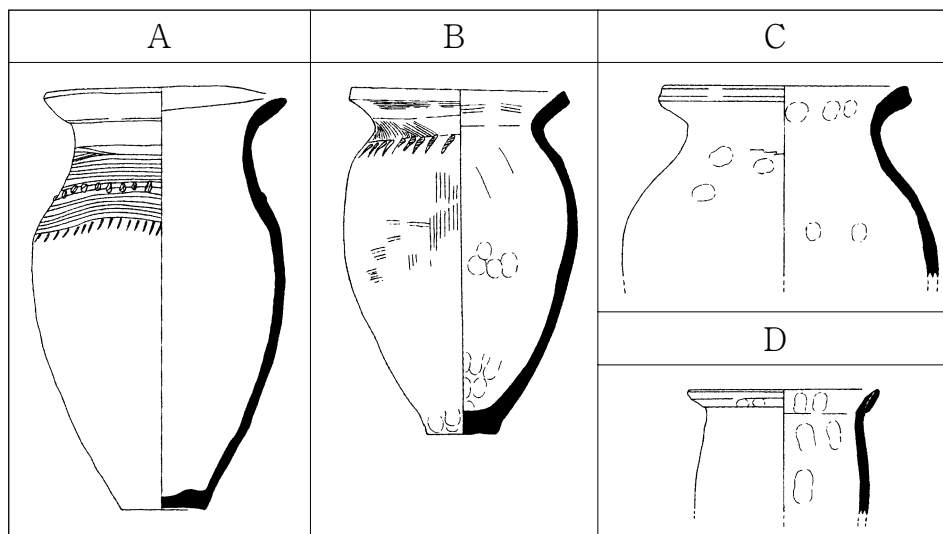


Fig.94 甕形態分類図

( Fig.14 - 35、 Fig.14 - 36、 Fig.18 - 68、 Fig.25 - 97、 Fig.25 - 98、 Fig.25 - 99、 Fig.52 - 196、 Fig.52 - 198 )

C類:口縁部が緩やかに外反するもの。( Fig.18 - 59、 Fig.19 - 77 )

D類:筒状を呈する体部に外反する口縁部がつくもの。( Fig.18 - 57、 Fig.18 - 58 )

### 高杯

A類:口縁部が短く外上方にのび、口縁端部を丸くおさめる。( Fig.36 - 153 )

B類:口縁部は短く外上方にのびる。脚部は緩やかにひろがり、脚部に円孔を穿つ。( Fig.14 - 37 )

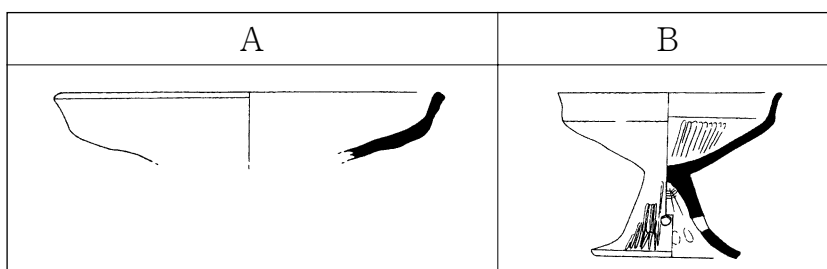


Fig.95 高杯形態分類図

### 鉢

A類:口縁部が「く」の字に外反するもの。( Fig.15 - 42、 Fig.16 - 49、 Fig.26 - 104、 Fig.32 - 135 )

B類:口縁部が内湾気味に立ち上がるもの。( Fig.59 - 213 )

C類:口縁部が外上方に直線的にのびるもの。( Fig.32 - 132 )

D類:口縁部が内湾気味に立ち上がるもの。端部は平坦面をなす。( Fig.14 - 39 )

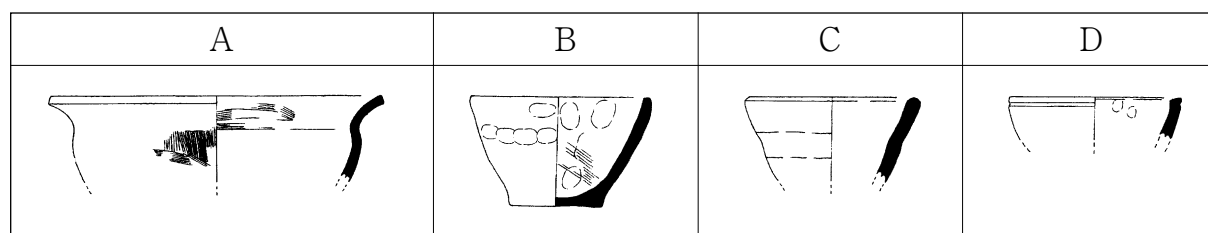


Fig.96 鉢形態分類図

### 器台

A類:口縁部の一部しか出土しておらず全体の形態は不明である。

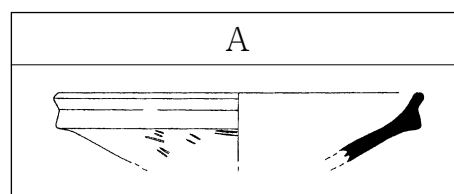


Fig.97 器台形態分類図

## 3 . 北高田遺跡出土土器群の特徴

器種構成は壺・甕・鉢・高杯・器台である。組成比では壺45%、甕47%、鉢9%、高杯2%、器台1%となる<sup>3</sup>。壺、甕の構成比はほぼ同じであり、両者を合わせると90%以上を占める。甕全体のなかでの類型別組成比をみるとA類が90%弱を占める。下ノ坪遺跡の器種組成比と比較すると、甕の割合は約50%と両遺跡ともほぼ同じであるが、壺の割合は多く、その一方で高杯の割合が少ない。

もともと神西式土器系の土器群のセットに高杯が含まれていないことに起因すると考えられる。

北高田遺跡出土土器群の特徴である口縁部外面粘土帯貼付と文様について若干述べてみると、口縁部外面への粘土帯貼付手法は様々なバリエーションがあることがわかる。粘土紐を貼付し、指頭によるナデにより断面形が三角形を呈するもの、幅広の断面形が長方形の粘土帯を貼付するもの等、20前後の手法に細分可能である。

文様は櫛描直線文・浮文・列点文などを組み合わせることにより、口縁部外面の粘土帯・頸部・肩部・胴部に施される。肩部についてみると文様の有無を判別できる資料の約7割に何らかの文様が施される。列点文のみのものが最も多く、以下、櫛描直線文+浮文、櫛描直線文、櫛描直線文+浮文+列点文が続く。また、櫛描直線文のなかにはハケ状を呈するものが一部に認められる。

#### 4. 編年的位置付け

神西式土器の様相が比較的明らかとなっているバーガ森北斜面遺跡出土資料（中期 期新段階）<sup>4</sup>と比較すると形態および文様などで違いを指摘することができる。形態ではバーガ森北斜面遺跡出土資料では口縁部が水平近くまで大きく外反し、最大部径も口縁部に有するものがある。一方、北高田遺跡出土資料では口縁部が水平近くまで外反するものはなく、頸部が短く緩やかに外反するものが多い。文様では断面三角形の微隆起突帯、棒状浮文が消滅する一方で楕円形浮文が主体を占める。

次にそれぞれの共伴遺物についてみるとバーガ森北斜面遺跡では凹線文を施した甕、高杯が出土している。一方、北高田遺跡では退化した凹線文を施した土器は数点出土してはいるものの、凹線文を施した土器は出土していない。口縁部が「く」の字状を呈し、拡張が行われず凹線文もみられない甕が共伴する。頸部直下まで内面へラ削りされた甕も認められる。また、後期前葉と考えられる高杯B類が出土している。

以上のことから北高田遺跡出土資料はバーガ森北斜面遺跡出土資料より一段階新しく、後期前葉に位置付けることができる。

#### 5. まとめ

北高田遺跡出土土器群の編年的位置付けについて、バーガ森北斜面遺跡出土資料との比較、共伴土器から後期前葉に位置付けることができる。高知平野西部では櫛描直線文、浮文などによる加飾性に富んだ地域色が強い土器群が後期前葉まで残存することが判明した。無文化を指向する高知平野東部<sup>5</sup>とは大きく土器様相が異なることが明らかとなった。また、南四国は銅矛と銅鐸が高知平野東部においてその分布域が相接している。以前から神西式土器の分布と銅矛の分布が重複することが指摘され、その関連について述べられている<sup>6</sup>。北高田遺跡と近接する天崎遺跡からも中広形の銅矛が4本出土しており<sup>7</sup>、強い関連を伺わせる。銅矛を共有する地域圏の成立および解体を含め、今後神西系土器を検討しなければならない。

小稿の作成にあたっては、梅木謙一（（財）松山市生涯学習振興財団 埋蔵文化財センター）・信

里芳紀（香川県埋蔵文化財調査センター）・出原恵三（高知県埋蔵文化財センター）の各氏よりご  
教示を賜った。未筆ながら記して感謝致します。（久家）

註1 岡本健児 「土佐神西遺跡調査外報」『上代文化第20輯』 1951年

註2 バーガ森北斜面遺跡出土資料は以下の文献で報告されている。

岡本健児 『高知県史』 1973年

岡本健児 「神西式土器文化の再検討」 1972年 『高知女子大紀要第20巻』

伊藤強 『バーガ森北斜面遺跡』 1999年 等

註3 壺、甕の中には器種特定の困難な資料が含まれているが、器種組成比による特徴は概ねあらわれて  
いると考えている。

註4 松村信博 「弥生時代中期の土器と集落」『弥生時代中期の土器と集落』 古代学協会四国支部  
第八回大会資料 1994年

註5 出原恵三 「第 章 考察 1.下ノ坪遺跡出土の弥生後期土器について」『下ノ坪遺跡  
』  
1997年

註6 岡本健児 「神西式土器文化の再検討」『高知女子大紀要第20巻』 1972年

註7 山本哲也・田坂京子他 『天崎遺跡』（財）高知県文化財団埋蔵文化財センター 1999年

### 3. 高知平野における弥生時代の掘立柱建物と溝状土坑

今次検出された掘立柱建物群は、弥生時代ではまとまった例に乏しかった本県において注目すべき事例である。以下、これまで県下唯一のまとまった事例であった田村遺跡群の事例とともに検討する<sup>(1)</sup>。対象地域は、両遺跡が所在する本県中央部（以下当地域と呼称）となる。

#### A. 掘立柱建物の分類と諸様相

##### 1. 掘立柱建物の分類

本遺跡と田村遺跡群の事例は、時間的、空間的な隔りがあるので一旦分けて整理する。以下「建物」は特記しない場合、掘立柱建物をさすこととする。

##### (1) 田村遺跡群

###### 類

柱間は1.5mに満たない狭い部分が主で、平均でも1.25～1.4mと狭い建物がある。柱穴の直径や深さ、あるいは柱痕径は、同じ遺跡の同時期頃の建物を凌駕する値を示さず、むしろやや小さいものがある。田村遺跡群で抽出したものは梁間3間以上を数え、桁行長は梁間の2倍弱と、当地域の弥生時代掘立柱建物において卓越した平面積を測る。平面プランや柱通りから高い企画性をうかがえるものや、柱穴規模も比較的揃ったものがある。Loc.16SB 8、同SB 1、同SB 2、Loc.25SB 1は、全て梁間が4.0mを測るもので、桁行長に各々20cm、40cmの差がある。

###### 類

梁間が1間のもので、今次抽出できるものは桁行3間以上を数える。Loc.16SB 7の規模4.0m×6.4mは、類との共通性がある。

###### 類

柱穴径が36～88cmと大きく、確認できる柱痕跡も20数cmと大きめである。今次抽出できるものは、梁間の長さによって極めて細長い平面プランを呈する。

##### (2) 北高田遺跡

###### 類

梁間1間で、桁行は3間以上を数えるものが抽出できる。桁行の柱間距離は1.5mに満たない短いものが多く、その点でも後述の類と区別できる。桁行の柱間距離は田村遺跡群の類に近い。柱穴の直径や深さ、あるいは柱痕径も、同じ遺跡の同時期頃の建物と同程度か、やや小さい。また、全体の平面プランが正確な長方形を呈するものがある点も、類に類似する要素である。

###### 類

梁間1間、桁行2間のものである。桁：梁が約1.3強と、比較的正方形に近い平面プランを有するものが多い。例えば同じ桁行長を持つ類と比較した場合も、2間の柱間数を維持するため、より長い柱間距離となっている。柱穴は、比較的にしっかりした規模のものが多いが、これを本類の属性とすべきか否かについて考える場合、参考になるのがC区のSB 7である。SB 7付近は調査範囲内で地山の標高が最も高くなっており（Fig.100）、削平を考えた場合には最も影響を受けるが、

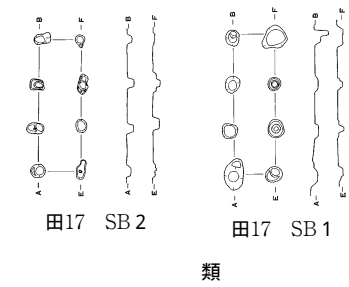
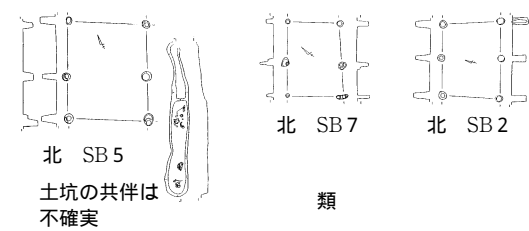
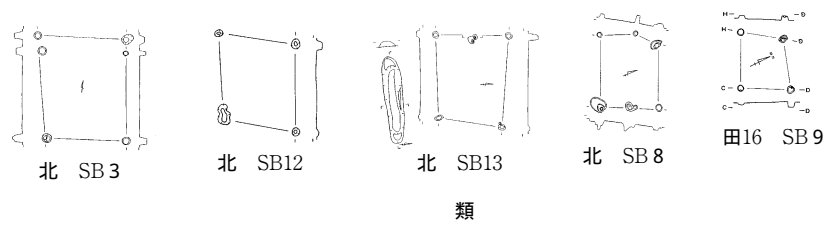
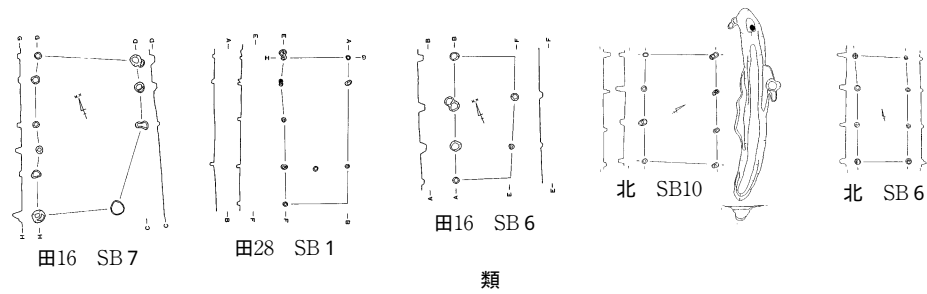
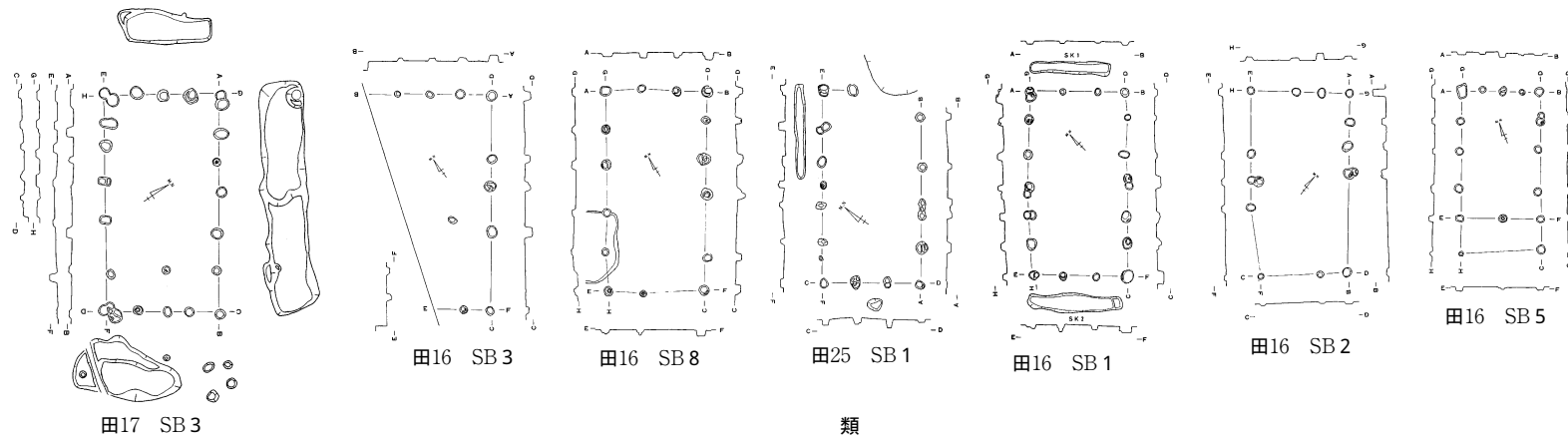


Fig.98 高知平野の弥生時代の掘立柱建物

田16は田村遺跡群loc.16、田17は同loc.17以下同様。北は北高田遺跡。



遺跡	遺構名	規模 (m)		間数	柱穴 (cm)		備考	企画性	溝状土坑の供伴	分類
		梁行	桁行		直径	深さ				
田	loc.17 SB 3	4.6	8.6	4×6	32~56	10~40	柱痕径20cm。柱間1.4m。			
	loc.16 SB 3	-	8.6	-	24~48	12~32				
	loc.16 SB 8	4	8	3×5	30~58	8~33				
	loc.25 SB 1	4	7.8	3×5	26~62	7~33				
	loc.16 SB 1	4	7.4	3×6	27~50	6~22	柱痕10~20cm。柱間1.25m。			
	loc.16 SB 2	4	7.4	3×4	27~48	6~22	建替え			
	loc.16 SB 5	3.2	6.6	4×5	21~67	8~23	柱間1.3m。柱痕径8~15cm。			
	loc.16 SB 7	4	6.4	1×5	27~60	9~37		×か		
	loc.28 SB 1	2.6	5.8	1×4	16~28	8~24				
村	loc.16 SB 6	2.16と2.4	4.9	1×3	22~45	6~25				
	loc.17 SB 1	1.68	5.3	1×3	36~56	12~36	大径の柱穴。			
	loc.17 SB 2	1.68	5.6	1×3	52~88	16~56	大径の柱穴、柱痕。建替え。			
	loc.16 SB 9	1.76と2.0	2.0と2.2	1×1	27~37	7~22				
北高田	loc.25 SB 3	1.8	2.6	1×1	40~76	9~22				
	loc.16 SB 4	2.16と2.24	4.2	1×1	23~35	11~17				
	SB10	2.8	4.4	1×3	22~24	11~38	柱間1.4m。			
	SB 6	2	4.2	1×3	16~24	8~38	柱穴は東側と西側で深さ異なる。柱間1.4m。			
	SB 5	3.2	3.8	1×2	26~48	42~62	柱穴深め。		か	
	SB 7	2.3	3	1×2	16~32	30~54	中央の柱穴に段部。土器、河原石埋納。			
	SB 2	2.2	2.8と3.0	1×2	26~34	58~64	柱根遺存。柱穴平面形・規模揃つ。柱穴深め。			
	SB 3	3.2と3.5	4.1	1×1	24~48	23~49	北側柱穴は2基ずつ。		か	
	SB12	2.8	3.4	1×1か	26~36	8~40			か	
	SB13	3	3.6	1×1	14~40	10~38				
田	SB 8	3	2.4	1×1又は2	22~40	11~39	柱穴列接す。			
	SB 1	1.8	3.4	1×1	22~43	30~62	北側柱穴は2基ずつ検出。柱穴内傾。			

企画性欄の記号はその度合いを示す。溝状土坑の供伴欄の は供伴が認められることを示す。文献は註参照。

表1 高知平野の掘立柱建物

柱穴は深い部類である。その柱穴は最大級の深さを測る。この点に注意しつつ、今後資料の蓄積を待ちたい。

### 類

比較的貧弱な柱穴規模で、多くは歪みのある平面プランを有す。今次は長辺：短辺が1.2強と比較的正方形に近いものを抽出する。長辺が3mに満たないごく小規模なものをさらに分離できるが、これを別類とすべきかどうかは、現段階では判断できない。本類には小屋掛け風の遺構が含まれると考えられる。

## 2. 掘立柱建物についての検討

### (1) 掘立柱建物の規格

田村遺跡群の掘立柱建物のうち、梁間が4.0mを測るものが5棟存在する。全て 類である。この梁間長は正確で、 類の整った平面プランから考えて、何らかの規格が推察される。この5棟の桁行を、長いものから順に挙げると、各々8.0m、7.8m、7.4m、7.4m、6.4mを測る。他に、 類で桁行が8.6mを測るものが2棟みられる。また、 類に属する2棟をみれば、梁間はどちらも1.6mで、その桁行長は5.4mと5.6mである。次に北高田遺跡では、2.2m、2.8m、3.0m、3.4mの長さが、複数の例で使用されている。表1もみれば当地域の弥生時代掘立柱建物は、両遺跡内あるいは双方にわたって共通する規格を持っていた可能性がある。上記の各寸法の最大公約数からその基本尺度を0.2

mとすれば、ほぼ全ての建物において適用可能だが、当該期にそのような尺度が存在したかどうかについては、現段階では明言できない。

## (2) 各掘立柱建物類型の特徴

両遺跡の事例は時間的、空間的な隔た

りが大きいものであるが、上記のように関連を持つ可能性がある。また、近年調査された田村遺跡群の「中期後半から後期初頭」にかけての集落でも、既述した建物分類に合致する見通しを持てる掘立柱建物群が検出されている<sup>(2)</sup>。これらのことから、既述の資料を総合して比較・検討をおこなうことも、意味の無いことではないと考える。

### 類について

柱穴が小規模で、各柱の強度は弱い。床を有する場合は、梁間の広さも許容重量を小さくする。よって、土間あるいは低床で、背の高くない構造が考えられる。北高田遺跡では検出されず、近年の田村遺跡群の調査でも、現時点では未確認であることから、田村遺跡群前期初頭集落での群出が目立つ。つまり、当地域では前期から中期後半頃に至る間に、衰退あるいは変容した形態である可能性がある。なお、田村遺跡群では前期「前葉・中葉に至って」、掘立柱建物自体が「一斉に姿を消している」とされる<sup>(3)</sup>。さて、田村遺跡群の類(以下本類)の西日本における類例を、管見ながら目にとまるままに求めてみる<sup>(4)</sup>(表2)。それによれば、本類と全く一致する建物が群出している例は弥生時代を通して知らず、本類自体が少数といえる。以下、梁間2間のもも含めて考える。例えば梁間2間で長棟の建物と、3×4間の建物などは同じ建物形式とは言えないであろうが、一旦一緒に扱う。まず前期に絞れば、若江北遺跡13cトレンチ<sup>(5)</sup>や南溝手遺跡<sup>(6)</sup>の例が挙げられる。若江北遺跡の掘立柱建物1は、諸属性が本類と合致する希少な例である。また次に、弥生時代を通してみると、まず北九州、中国地方、淡路島、大阪府の事例を挙げることができる。その多くは、平面プランや柱穴の掘形・規模などに本類とは一致しない点を有するが、寺中遺跡例は本類と同類視することも可能であり、一ノ口遺跡では平面プランが本類と一致する例がある<sup>(7)</sup>。また鹿児島県を中心に、柱穴の配置や規模では本類との共通性を見出せる一群がある。多くは棟持柱を持ち、長棟にならない特徴があるが、前畑遺跡では注目すべき成果が報告されている<sup>(8)</sup>。すなわち、遺構の特徴が近似し、位置からも建替の関係にあるとみられる2棟の掘立柱建物が、棟持柱の有無という相違のみを示している例がある。しかもその棟持柱を持たない方、即ち類の系譜ともみられる建物は、屋内の炉状の焼土面や屋外の溝状土坑の存在といった特徴が、他の棟持柱付き建物と一致するのである。これらの事象は、類の構造や機能に関して重要な示唆を与える。すなわち、前畑遺

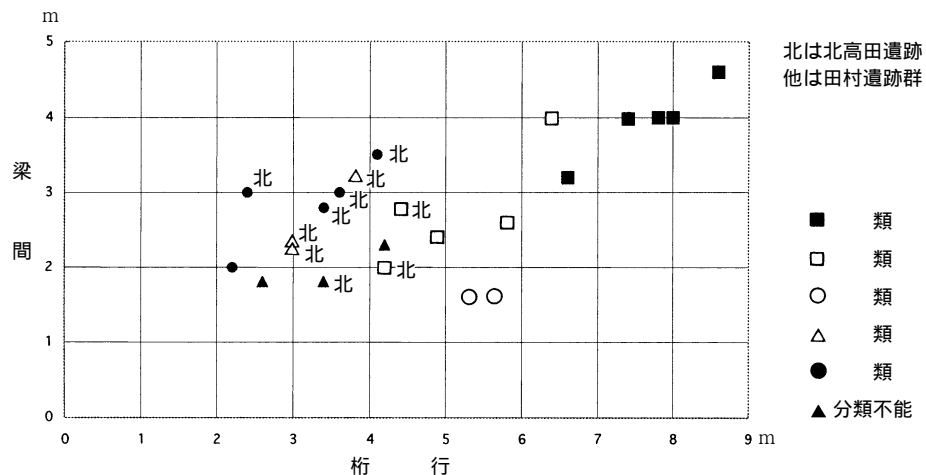


Fig.99 高知平野の掘立柱建物の平面規模

所在地	遺跡名	間数	時期	備考
東大阪市	若江北	3×5	前期前葉	類に酷似。柱痕10数cm。
		2×4	前期前葉	柱痕10数cm
総社市	南溝手	2×5	前期	
小郡市	一ノ口	3×5	前期後葉～中期前葉	深さ72cmの柱穴あり
	北松尾口地点	3×4	中期前半	溝あり
佐賀県	立野	4×5	期	棟持柱。小型柱穴。
	村徳永	5×5	期か	布掘風。正方形。
	牟田辺	4×5	不明	
福岡県	駿河	3×4、4×4	十数棟	後期
	竹並	約3×4	弥生	床に焼土
北九州市	守恒	3×3と3×4か	中期	
福岡市	比恵	2×4以上	後期～古墳前期	柱穴浅い
鳥取県	青木	2×7他多数	期	
	上中ノ原	2×6	期	柱穴列伴う
	布施グラウンド第2	3×4	期古	建替。コの字状溝で囲まれる。一辺52cmの方形柱穴含む。
		3×4	"	
広島県	岡の段A	2×4他	前期か	
洲本市	寺中	4?×5	～期	類に酷似。企画的。
神戸市	舞子・東石ヶ谷	3×7他	～期	
守口市	八雲	2×6前後か	期頃	棟持柱。建替。土坑付属か。
		3×4	"	土坑付属か
鹿児島県	前畑	3×4	中期末	棟持柱。企画的。溝あり。
		梁3	"	棟持柱
		3×4	"	建替か。溝あり。
	王子	3×4と5	中期末後期初	棟持柱
		3×4	"	棟持柱
		3×4	"	棟持柱
		2×2	"	棟持柱
		4	"	棟持柱か。建替か。
	上野原	3×3	中期末	棟持柱

文献は註参照。時期は各文献による。

表2 掘立柱建物 類の類似例

跡のこれら建物は、構造的には張り床を持たず、機能的には収納施設ではない。また、これらの例においては、棟持柱の有無に関わらず平面プランなどに共通性が強い。なお屋内床面の焼土跡は、竹並遺跡でも検出されている。さて、以上でとりあげた各例を概観すると、同位置で建て替えたり、溝状土坑や溝などを伴う例がある。溝状土坑を伴う掘立柱建物の報告例は、かつては希少であったが近年蓄積されており、確かな数をつかむことができないが、上記のような数的に限られた例の中に、溝状遺構を伴う例を散見する。また、他類の建物がしばしば群をなすのに対してこれらの建物は、多数の建物が検出されている場合でも、一時期に存在する棟数は1～2棟とみられる場合が多い。ただし、青木遺跡、王子遺跡、駿河遺跡は例外であり、この種の建物のあり方が異なるものとみられる。青木遺跡では長大な建物が集中する地区がある。また、江辻遺跡<sup>(9)</sup>の例は本類の大型のものと共通する面もあり、コーナー部で小規模な柱穴が弧を描く配置や、僅かに胴張りの平面プランといった特徴が、その時期とも相俟って興味深い。なお、東日本でも本類の属性を有する例があるが、その中に梁中央の柱穴が張り出し、「亀甲形」と呼ばれる類型が存在する。これが棟持柱を持つものとすれば、九州の棟持柱を持つ類型との関係が興味深い。以上、類の特徴とした属性を有する例についてみてきたが、規模や時期の差による分析ができず、棟持柱などの相違点についても関係を明らかにできない。今後検討を重ねたい。

#### 類について

田村遺跡群の例は平面プランが整わないものであるが、北高田遺跡例は整った柱配置である。北高田遺跡や近年の田村遺跡群の調査で類が未検出であることと、遺構の特徴からみて、類と何らかの関係を持っている可能性がある。北高田遺跡SB10は大型の溝状土坑を伴うが、近年の田村遺跡群の調査でも、その概要をみる限り、一見して溝状土坑を伴うもののほとんどは本類に属する。同調査では、本類と目される建物址が多数検出されている模様であり、今後本類の詳細もさらに明らかになるであろう。

#### 類について

他類型と比較して柱穴の大きさが明らかであり、より強く高い柱を使用したとみられ、許容重量も大きいであろう。高床構

造にも、より適する。狭い梁間はさらに強度を高めると解釈でき、収納施設である可能性も十分にある。田村遺跡群では、最大級の平面積を持つLoc.17SB3と近接かつ企画性を持って配置される。なお、近年の田村遺跡群の調査でも本類とみられる建物が検出されているが、その付近は集落の中でも特に大型の掘立柱建物が集中する地区である。これらから本類は、その存在と配置が集落の構造にも関わる性格のものとみられる。

## B．掘立柱建物に伴う溝状土坑

### 1．機能について

両種の遺構に関連を認める例があることは、当地域でも田村遺跡群の調査で明らかになっていた。今回の北高田遺跡の調査でもこの関連が認められるが、結論を先に述べれば、今次もその機能を明らかにすることができない。類例は各地で着実に蓄積されており、全ては把握できないが、他地域にも資料を求めると次のような点が注意される<sup>(10)</sup>。

1) 傾斜地で山側に溝状土坑や溝が位置するなど、水切りあるいは防湿の機能を考えられる例がある。東広島市下上戸遺跡、鳥取県下山南通遺跡、小郡市北松尾口遺跡 地点、春日市須玖永田遺跡、鹿児島県前畑遺跡<sup>(8)</sup>。

2) 先述の建物 類または 類に類する建物に付属する場合が多い。

3) 長さが短く、桁行の一部にしか及ばない例や、溝状ではなく土坑としてのプランを有するものが伴っている例がある。田村遺跡群Loc.17、守口市八雲遺跡、八尾市山賀遺跡、彦根市馬場遺跡。

1) や2) は水切り機能案を補強するが、しかしその機能を全く無視した例が存在するのも事実である(北高田遺跡SD5、田村遺跡群前期初頭集落でのほとんどの事例、広島県岡の段A地点遺跡<sup>(11)</sup>、岡山県西吉田遺跡、同野田遺跡、神戸市玉津田中遺跡南大地点<sup>(12)</sup>)。また岡山県奥坂遺跡に、排水機能が想定できながら長さが桁行の一部にしか及ばない例があることが注意されるものの、3) は現時点では水切り機能に否定的な要素と考えられる。このようにみれば、建物に伴う溝状土坑などには、その性格にバリエーションがある可能性がある。今後竪穴住居との関係も含めて検討して行く必要がある。なお、東日本の報告例はあまり管見に入っていないが、静岡県瀬名遺跡の後期前半の例を知る。

### 2．高知平野における諸様相

田村遺跡群と北高田遺跡について、気付く点を簡単にまとめる。全てに共通するのは、遺物が埋土中あるいは底より若干浮いた位置から出土していることで、遺構が掘削されてから一定期間開口していた可能性が高い。建物との位置関係については、田村遺跡群では建物と端を揃えたり、正確に平行するなど全て企画性が高く、北高田遺跡では企画性を看取できるものと、それが困難なものがある。北高田遺跡では、溝状土坑の端部が建物の方にやや湾曲するものがある。田村遺跡群では長方形プランを呈するものがあるが、このような形態は他に見ない。さて、これらの分類ができる段階ではないが、いくつかの視点を試みる。まず既述した、建物に対する水切り機能に着目すれば、その可能性があるものとしては、北高田遺跡SD17が最も適当である。やや建物を抱くような平面形を有し、標高の高い側に位置する。伴う建物は典型的な 類である。同遺跡SD7も標高の低い側に

遺跡	調査区	遺構名	規模			横断面形	細部形状等	埋土分層	遺物	建物との関係
			全長(m)	幅(m)	深さ(cm)					
田村	loc.16	SK 1	3.28	0.44 ~ 0.48	5 ~ 15	逆台形			浮く	SB 1
	"	SK 2	3.89	0.48 ~ 0.56	28	八コ形	一端に段	1層	片方底に集中	SB 1
	loc.17	SK 6	3.8	0.9 ~ 1.25	20	緩いU字	平面長方形	2層	多。数cm浮く。	SB 3か
	"	SK 7	9.44	1.56 ~ 1.68	40	扁平逆台形	平面長方形。一方が深い。中央に段。片端にビット。	2層	多。底から浮く。	SB 3か
	"	SK12	4.32	1.26 ~ 2.10	25	逆台形(有段)	段有り。平面不整形。一端にビットと焼土。	1層	極多	SB 3か
	loc.25	SK 2	3.80	0.36 ~ 0.44	24	逆台形		2層	土器数片	SB 1
	"	SK 9	3.24	0.52	32	逆台形	両端に段	2層		SB 2か
北高田	A	SD 3	3.84	0.42 ~ 0.82	12	浅いU字か	北部が膨らむ	1層	中央と北部に多	
	"	SD 4	4.36	0.76	44			2層	南部に多	か
	"	SD 5	6.2	0.36 ~ 0.94	38		南部が膨らみ、落ち込む。	1層	中央と南部に多	SB 5か
	B	SD16	4.8	0.7 ~ 0.9	29	逆台形	片端と片側に段	3層	セクションで全層に遺物・炭	SB 8か
	"	SD17	7.7	0.86 ~ 1.6	62	舟底 ~ 逆台形	片端と両側に段	3 ~ 6層	中層に遺物と炭	SB10
	"	SD19	(2.8)	0.41 ~ 0.82	22	扁平逆台形	端部と側縁に小段	2層	下層に炭。細片9点のみ。	
	"	SK10	6.64	1.4 ~ 1.54	65		片端に段	3層	最下層中に土器多し。下層に炭。	
	C	SD14	(3.74)	0.52 ~ 0.66	(43)			3層	中層から上層。やや多。	
	"	SD15	3.52	0.62 ~ 0.82	15	U字		2層		
	A	SD 1	(2.24)	0.3 ~ 0.35	30	逆台形	端に小段	2層	土器、炭が各層より。総破片数16点。	SB 1
	"	SD 2	5.48	0.3 ~ 0.88	40	逆台形		2層	土器は主に 層下層	
	B	SD18	-	(0.9)	39	逆台形(段部あり)	端に段	2層	土器は主に 層下層	
	B	SD 6	3.34	0.38 ~ 0.58	32		片端に段	1層		
	"	SD 7	7.12	0.78	50		やや弓なり。中央部へ弱い段をなして落ちる。片端に小溝か。	1層	西半に多し。床から浮く。	
	"	SD 8	3.92	0.54 ~ 0.76	42		底面に段差	3層	少ない	
	"	SD 9	5.06	0.68 ~ 0.89	60		片端から片側へつながる段	3層		
C	SD11	4.32	0.7 ~ 0.9	46			5層			
"	SD12	3.48	0.74	30	U字	両端に段	1層		SB12か	
"	SK 8	6.18	1.10 ~ 1.56	52		南東に段	3層	中央と東半部に多し。床からやや浮く。		

表3 田村遺跡群・北高田遺跡の溝状土坑

のみピット群が存在することを確認できるが、建物構造は不明である。因みに、SD17の深さと壁の傾斜は、人が転落すればやや危険な場合があると感じられるものであった。対する水切り機能を認めることが難しいものについては、既に挙げた。次に、規模や出土遺物量に着目すれば、形態も含めて突出したものとして田村遺跡群Loc.17SK 7、比較的大きいものとして北高田遺跡SD 2・7・14・17を挙げるができる。対する小規模で遺物量も少ないものは、田村遺跡群Loc.25SK 2・SK 9、北高田遺跡SD15・SD19を挙げるができる。

以上、現段階で気付く点を挙げたのみである。課題として、建物では同類でありながら溝状土坑が伴うものと伴わないものがあることの意味、溝状土坑でみれば、全く同じ内容を持ちながら建物に伴うものと伴わないものの機能差、さらに、どちらも建物に伴う溝状土坑と土坑の違いといった問題点を抽出できる。

## C．集落について

### 1．田村遺跡群

出原氏の総括に基づいて概観する<sup>(3)</sup>。集落は自然堤防の長軸に沿いながら弧を描いている。弧の内側に掘立柱建物、外側に竪穴住居を配する規則性がある。また、自然堤防の長軸方位は、掘立柱建物などの企画方位となっている。一部の遺構に重複があり、竪穴住居10棟、掘立柱建物16棟は「前期初頭」の中で一定の時間幅を持っているとみられる。しかし建物のほとんどは、少なくともその場では建て替えられることがない。竪穴住居は「大型5棟、小型5棟」に分けられ、掘立柱建物では 類が7棟と、近似した棟数を示す。住居・建物の配置は連続的で、位置関係からは基礎的単位を抽出することが困難である。つまり、大型竪穴住居・小型竪穴住居・掘立柱建物 類あるいは 類が一組となって、しかも各单位が空間的には一体のものとなって集落を形成しているとの解釈が可能である。ただ、集落北部には最大級の掘立柱建物が存在する。この建物は、桁と梁に沿う長方形の土坑を伴っているが、桁側の土坑は同種の遺構のなかで卓越した規模を持つ。また、この建物に近接かつ企画的な位置関係を持って、先述の掘立柱建物 類が検出されている。さらに、これらの遺構をはじめとする近辺の諸遺構の配置には、他と比較して強い企画性が看取できる。それらに時期差があることを考慮しても、この地点がやや特異な様相を示しているということ是可以する。なお集落東部北寄りでは、住居・建物が存在せず、様々な平面形の土坑群が検出された区域がある。

### 2．北高田遺跡 (Fig.100)

調査区北端部で地山が急激に落ち込んで湿地となり、南西へ向かっても緩やかに標高を下げている。第 章の試掘結果からも、湿地や低地が入り組むなかの高まりに、集落を形成していることが分かる。各遺構の配置や方位は、地形に基づいて企画されている。遺構密度は調査区東部が高く、西部は低く、標高との関係が認められる。集落を構成する基礎的単位を求めれば、まず単位Bを想定できる。建物はSB10、SB 8、SB 9からなり、さらにSB 5などを含む可能性がある。掘立柱建物 類 1棟、 類 1～2棟で、これに 類 1棟が加わる可能性のある構成である。各遺構の配置や方位に強い企画性を看取できる単位である。空間bは地形的には建物に不適な要素はないので、意図的な空閑である可能性がある。なおSB 5の位置には柱穴が集中し、建物が継続的に営まれたことが

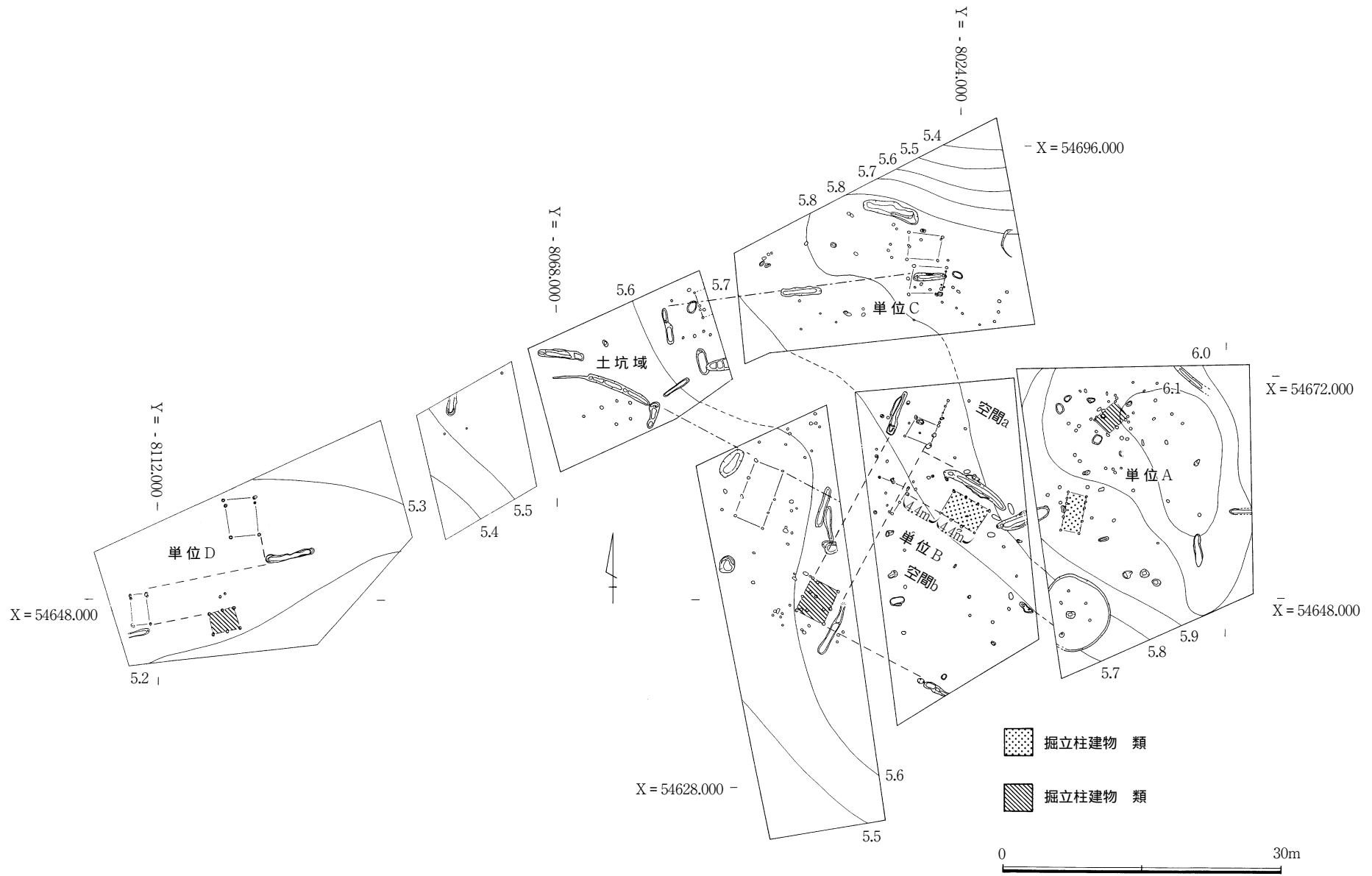


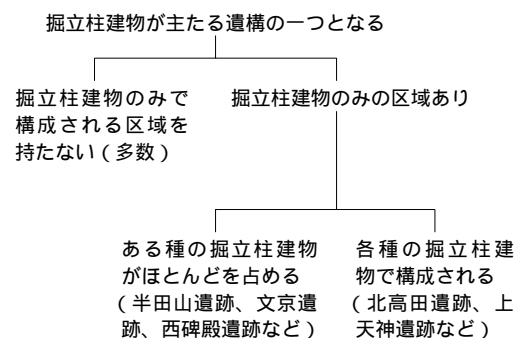
Fig.100 北高田遺跡 弥生時代集落の概念図

わかる。ST1の帰属については判断できない。次にSB6、SB7を擁する単位Aは、その南北両側が不明で全容に言及できないが、ST1を加えれば、3棟は中心間距離をほぼ等しくして弧状に並ぶ。

類1棟、類1棟で、さらに竪穴住居が加わる可能性のある構成である。SB7は柱穴で埋納行為が確認された唯一の例であり、柱穴の深さは最大級である。SB7の地点には柱穴が集中し、建物が継続的に営まれたことがわかる。次に、調査区北部の単位CではSB12、13を確認できる。位置関係と規模からみて、両棟は建替え関係にある可能性が強い。他にも柱穴が存在し、類1棟と何らかの建物2棟程度の構成である。次に、調査区西部に離れて単位Dが存在する。検出面の標高は南へ向かってごく緩やかに下っており、遺構の展開する可能性は北方にある。SB1は今次一類型を設定し得なかったものだが、柱穴の深さなどから考えて高床構造であった可能性がある。本単位も、遺構配置は企画的である。図示した以外の遺構は全く検出されておらず、一時期のみ遺構が営まれた区域とみられる。また、調査区中央部のB区には土坑のみが検出された区域がある。これらの土坑群が様々な主軸方位を持つことに注目すれば、この区域は各单位にとって縁辺部であり、そのような場所に土坑が営まれる場合があったという仮定も可能であろう。以上、北高田遺跡の成果からは、構造の異なる3種類程度の建物からなる、計3～4棟前後の基礎的単位を把握することができた。

### 3. 北高田遺跡と他遺跡の比較

検出された集落の全容を、まず田村遺跡群前期初頭集落と比較すると、田村遺跡群では地形に沿った共通の方位を基本としながら弧を描き、基礎単位間に粗密のない、一体性のある配置である。竪穴住居と掘立柱建物は、2列に別れて沿い合っている。翻って北高田遺跡では、各基礎単位が各々の占地場所の微地形に適した独自の企画方位を採用し、遺構に粗密があって、領域をある程度示している。因みに近年の田村遺跡群の調査による中期後半から後期初頭の成果に関する概要では、「中型住居1棟に小型住居3～4棟が一つの単位となる可能性がある」各单位に近接して、掘立柱建物類同様の平面プランのものが1～3棟、同類・類が各1棟程度検出されている例が多い。詳細な時期的関係が明らかになれば、当地域の集落構造の理解が飛躍的に進展することは間違いない。さて、北高田遺跡の集落の、複数の基礎的単位からなる掘立柱建物群のみの領域があり、且つ竪穴住居が検出される区域もあるといった特徴に類似する例として、管見では上天神遺跡を挙げる。各单位の掘立柱建物は、平面形や規模の異なる3種類程度からなり、掘立柱建物のみ区域と、竪穴住居と混在する単位が想定されている。掘立柱建物には、規模や平面形が北高田遺跡など当地域と類似するものが多い。各单位は「大型溝」や「河道」に分断され、各々独自の方位をとる<sup>(13)</sup>。このような例をみれば、北高田遺跡においても東部の調査区外に竪穴住居群が存在する可能性はある。なお、掘立柱建物のみ集中地区が存在する例は、四国では文京遺跡や半田山遺跡<sup>(14)</sup>、西碑殿遺跡<sup>(15)</sup>にもあるが、当然ながら北高田遺跡や上天神遺跡とは性格が異なるものである (Fig.101)。



以上、冗長かつ私見に終わっており、誤認も多い Fig.101 掘立柱建物を有する遺跡の分類概念図



ことと思われる。恐縮ながら、各方面のご叱正を賜りたい。また小稿を記すにあたって、高知県埋蔵文化財センターの諸兄の教示を得た。末尾ながら感謝の意を表します。(池澤俊幸)

註

- (1) 高地空港拡張整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書「田村遺跡群」第2分冊・第3分冊 高知県教育委員会 1986年。以下、単に田村遺跡群と記す場合、前期初頭の集落をさす。
- (2) 森田尚宏「高知県 田村遺跡群」『瀬戸内の弥生中期集落 - その機能と構造の研究 - 』古代学協会四国支部第13回大会資料 1999年。以下、近年の田村遺跡群の調査という場合、本資料による。
- (3) 出原恵三「弥生文化成立期の集落とその遺構」『第47回 埋蔵文化財研究集会 弥生文化の成立 - 各地域における弥生文化成立期の具体像 - 発表要旨集』埋蔵文化財研究会 / (財)高知県文化財団埋蔵文化財センター 2000年
- (4) 以下註記しない遺跡についてはすべて埋蔵文化財研究会の集成による。「弥生時代の掘立柱建物 - 本編 - 」埋蔵文化財研究会 1991年
- (5) 財団法人 大阪文化財調査研究センター調査報告書 第15集「巨摩・若江北遺跡発掘調査報告 - 第5次 - 都市計画道路大阪中央環状線巨摩橋交差点南行車線跨道橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」財団法人大阪府文化財調査研究センター 1996年
- (6) 岡山県埋蔵文化財発掘調査報告100 「南溝手遺跡1 岡山県立大学建設に伴う発掘調査」岡山県教育委員会 1995年
- (7) 三沢土地区画整理事業関係埋蔵文化財調査報告 - 8 - 「一ノ口遺跡 地点 小都市文化財調査報告書 第86集」小都市教育委員会 1994年
- (8) 鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(52)「一般国道220号鹿屋バイパス建設に伴う発掘調査報告書( )前畑遺跡」鹿児島県教育委員会 1990年
- (9) 『第47回 埋蔵文化財研究集会 弥生文化の成立 - 各地域における弥生文化成立期の具体像 - 発表要旨集』埋蔵文化財研究会 / (財)高知県文化財団埋蔵文化財センター 2000年
- (10) 以下註記しない遺跡については、全て埋蔵文化財研究会の集成による。註4文献に同じ。
- (11) 「岡の段A地点遺跡」広島県埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書第131集『中国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告( )』財団法人広島県埋蔵文化財調査センター 1993年
- (12) 兵庫県文化財調査報告 第121冊「一般国道175号線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 玉津田中遺跡南大山地点」兵庫県教育委員会 1993年
- (13) 大久保徹也「上天神遺跡の集落構成」高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第6冊『上天神遺跡第2分冊』香川県教育委員会 / (財)香川県埋蔵文化財調査センター / 建設省四国地方建設局 1995年
- (14) 柴田昌児「愛媛県東部の弥生集落」『瀬戸内の弥生中期集落 - その機能と構造の研究 - 』古代学協会四国支部第13回大会資料 1999年
- (15) 四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第十冊「金蔵寺下所遺跡・西碑殿遺跡」香川県教育委員会 / 財団法人香川県埋蔵文化財調査センター / 日本道路公団

# 第 章 高知：北高田遺跡における プラント・オパール分析

プラント・オパール研究会

藤原 宏志

## 1．プラントオパール分析について

プラントオパール分析法は農耕の起源や伝播を実証的に追求する手法として開拓された古代植生分析法であるが、古環境や古代人の生活復元にも応用できる。ここでは、まずプラント・オパール分析法の基本について説明する。

人類の主食は穀類である。穀類はイネ、コムギ、トウモロコシ、ヒエ、アワ、キビなど、すべてイネ科植物の種子である。また、イネ科植物は食用以外にもススキ、ヨシ、タケ類のように身近な植物として人間の生活に深くかかわっている。農耕の起源や伝播を解明するためには、イネ科植物遺物を的確に探索する手法の開拓が必要である。

イネ科植物は体内に珪酸を多量に含有することから珪酸植物とも呼ばれている。植物体内の珪酸は特殊な細胞の細胞壁に集中的に沈積している。このように、珪酸が沈積した細胞を植物学では植物珪酸体と呼んでいる。

イネ科植物の葉には、機動細胞と呼ばれる植物珪酸体が含まれている。一般に植物が水分を失うと、葉がしおれて垂れ下がるのに、イネ科の葉がくるっと巻くのは、この機動細胞の働きによる。機動細胞を詳しく調べると、イネ科植物の種類によって、大きさ、形、量（分布密度）に違いがあることがわかってきた。

イネ科植物が枯死すると、やがて土中に埋もれ有機物部分は分解してしまうが、植物珪酸体は科学的に安定な珪酸質（ $\text{SiO}_2$ ）であるため長期間土中に残留して一種の微化石になる。このような植物に由来する微化石のことを土壌学ではプラント・オパールと呼んでいる。

プラント・オパール分析法は遺跡の堆積土壌や植物遺物あるいは土器胎土などに含まれるプラント・オパールを検出し、古代の栽培植物（作物）や遺跡周辺植生を復元する古代植生分析法である。

## 2．分析試料

北高田遺跡の1区北側壁面で表層（現水田層）直下（2層）から8層まで9点の試料を採取した。試料の採取には50cc試料管を用い試料汚染のないように留意した。

## 3．分析法

プラント・オパール分析により土壌中に含まれる植物種の同定だけでなく、その量的関係が把握できれば古代植生復元に関する情報量は飛躍的に増えることになる。

効率と精度のよいプラント・オパール定量分析法として開拓されたのが、ガラス・ビーズ定量法である。この方法の特徴は、プラント・オパールと大きさ比重が近似している人工ガラス・ビーズ

を予め試料に添加し、これをインディケータとして相対的にプラント・オパール密度を計測する。ところにある。

鏡検に際し、まず視野の中にあるガラス・ビーズの数を計測する。この値から、もとの試料の何%がプレパラートの上に展開されているかが求められる。その後、同じ視野にあるプラント・オパールを植物種ごとに計測することにより、もとの試料の中に含まれていたプラント・オパール数を植物種ごとに知ることができる。

ガラス・ビーズ定量分析法の開拓により、プラント・オパールの定量精度と効率は著しく改善され、大量の試料をルーチン処理することができるようになった。これら定量分析法の手順を図1に示した。

## 4．分析結果

分析結果を図2および表1に示した。

## 5．分析結果の検討

(1) 2層、3層、4 b層、6層および7層でイネ (*Oryza sativa*) のプラント・オパールが検出された。いずれの土層もイネのプラント・オパール量は少なく、周辺水田からの流入も考えられるが、ここで短期間(数年程度)栽培された可能性もある。

(2) 7層でイネが確認された結果、弥生時代に当該遺跡で稲作が行われていたことは確かであろう。

(3) 随伴する植生がタケ(ササ類)であるところもみると、この地は比較的乾燥した状態で堆積が進行したものと思われる。

(4) 7層では多量のキビ族プラント・オパールが検出されている。その形状から、これらのプラント・オパールはイヌビエ (*Echinochloa*属) とみてようかろう。イヌビエは現在、主要な水田雑草であるが栽培ビエと同属であり、両者は容易に交雑する近縁種である。したがって、プラント・オパールの形状から、栽培種(ヒエ)と野生種(イヌビエ)を判別することは出来ない。結局、両者を分別するとすれば、栽培の有無をもって判断する以外はないのが現状である。

弥生時代の水田からイヌビエのプラント・オパールが大量に検出されるのは通例であり、おそらく当時はイヌビエも収穫の対象になっていたと考える方が自然であろう。そうすれば、ここで検出された *Echinochloa* 属植物はヒエとみてもよかろう。

ここが水田であるとすれば、稲作よりも稗作の方が主であったと考えられる。

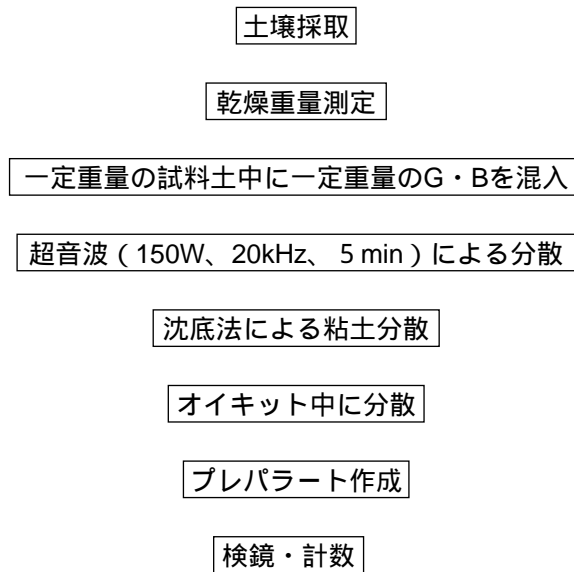


図1 ガラスビーズ法によるプラント・オパール定量分析ダイアグラム

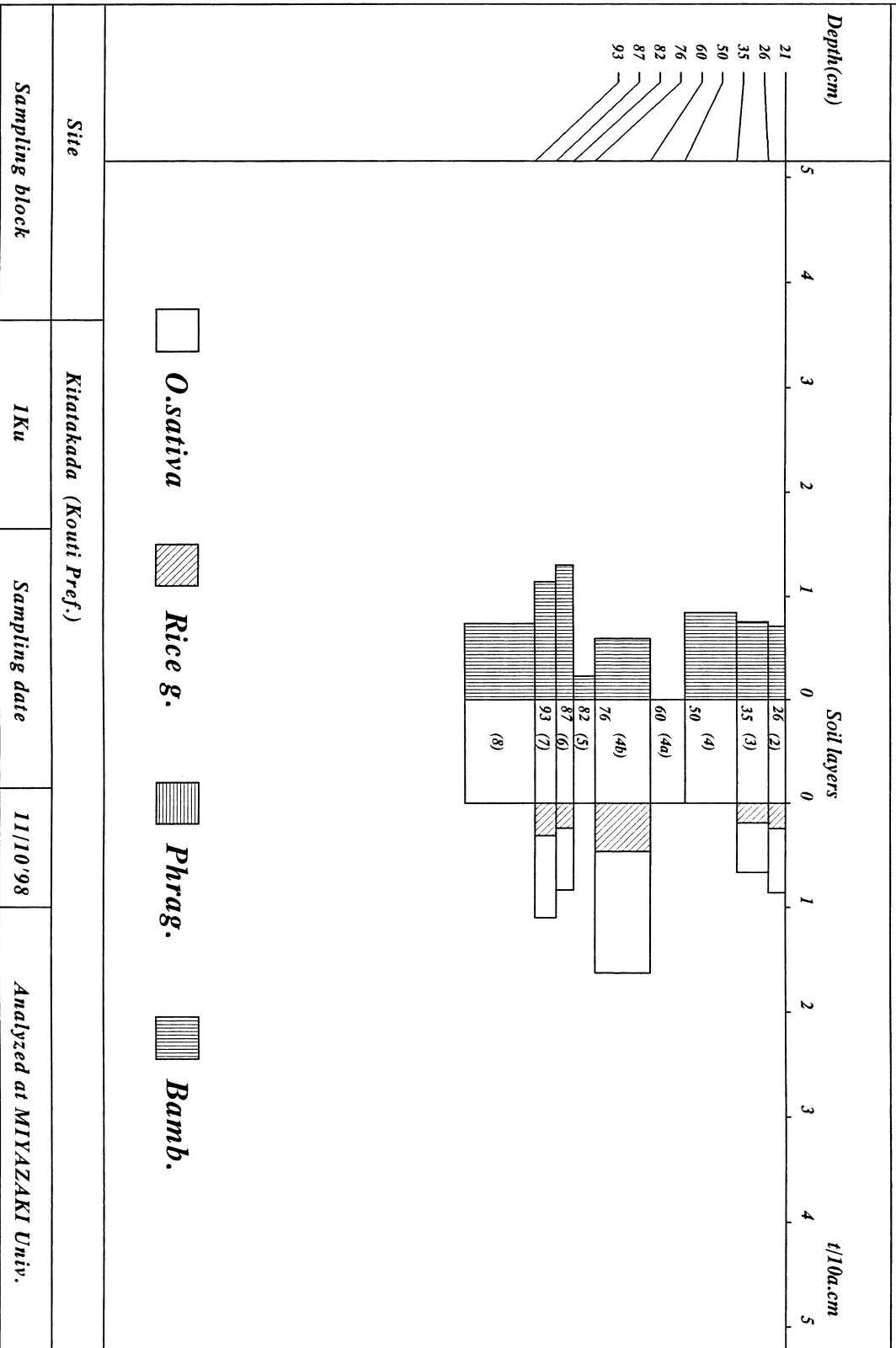
表1 北高田遺跡におけるプラント・オパール定量分析結果  
宮崎大学農学部 地域農学講座

Sampling block [ 1 Ku ] Sampling date [ 11/10'98 ]

層名	植物体乾燥重 (t/10a.cm)						
	イネ (O.sati.)	イネ籾 (Rice g)	キビ族 (Pani.)	キビ族種実 (Pani.seed)	ヨシ (Phrag.)	タケ亜科 (Bamb.)	ススキ (Andoro.)
2	0.863	0.247	0.000	0.000	0.000	0.714	0.461
3	0.666	0.191	0.000	0.000	0.000	0.757	0.178
4	0.000	0.000	9.431	4.233	0.000	0.842	0.000
4a	0.000	0.000	9.262	4.157	0.000	0.000	0.000
4b	1.634	0.468	15.142	6.796	0.000	0.592	0.000
5	0.000	0.000	10.445	4.688	0.000	0.233	0.000
6	0.839	0.240	7.772	3.488	0.000	1.301	0.224
7	1.102	0.316	40.857	18.338	0.000	1.140	0.295
8	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.737	0.000

図 2

- Estimation of plant products with plant opal analysis -





# 遺物觀察表

遺物観察表（弥生土器）

Fig. No.	図版番号	出土地点・層位	器種	法量（cm）				胎土	特徴	備考
				口径	器高	胴径	底径			
11	3	SK 1	壺					チャートの粗粒砂を多く含む。	内外面茶色。上胴部外面に八ヶ状原体による右下がりの列点文。内面は強い横方向のナデ。	
"	4	"	"					チャートの風化礫の粗粒を多く含む。	内外面茶色。口縁部外面に幅 1 cm 余りの断面台形状の粘土帯を貼付。	
"	5	"	甗				7.3	チャートの粗粒砂を多く含む。	内外面淡茶色。外面縦方向の八ヶ調整。	
"	6	"	"				5.7	チャートの粗粒砂を多く含む。	内外面淡茶色。外面縦方向の八ヶ調整。外面被熱変色、内面は底より 2 ~ 3 cm 上から激しく煤ける。	
"	7	"	甗	28.8		35.0		チャートの小礫を多く含む。	内外面淡桃色。口縁部外面に 2.5 ~ 3 cm の粘土帯を貼付。頸部外面櫛描文帯（単位不詳）、上胴部外面は棒状浮文、列点文、櫛描直線文、列点文を配する。口唇部は横方向の強いナデ調整。器表の荒れが激しく調整不明。下胴部外面及び内面下部に煤け。	
12	8	SK 2	壺	12.6				チャートの粗粒砂を多く含む。	内外面灰褐色。内外面ナデ調整。	
"	9	"	"	14.0				チャートの粗粒砂を多く含む。	口縁部内外面横方向のナデ、頸部外面縦方向のナデ調整。	
"	10	"	"	21.0				チャートの粗粒砂を多く含む。	内外面茶色。口縁部を下方に肥厚さす。口唇強い横方向のナデ調整。	
"	11	"	"					チャートの粗粒砂、小礫を多く含む。	内外面灰茶色。外面櫛描直線文。木理の細かい原体による縦方向の八ヶ調整。内面指ナデ。	
"	12	"	"	18.0				チャートの粗粒砂を多く含む。	内外面茶色。口縁部は僅かに肥厚し口唇に斜格子目を配す。頸部外面は復帯構成の櫛描直線紋を全面に施す。外面縦方向の八ヶ調整、内面ナデ調整。	
"	13	"	"	16.5				チャートの粗粒砂を多く含む。	内外面灰茶色。口唇部外面斜格子目を配す。内面ナデ調整。	
"	14	"	"	25.8				チャート、頁岩の粗砂粒を多く含む。	内外面灰色。口縁部下垂。内外面ナデ調整。	
13	15	"	"					チャートの粗粒砂を多く含む。	内外面暗灰色。頸部と胴部上端に櫛描文+浮文を配し、その下に八ヶ状原体による右下がりの列点文を配す。	
"	16	"	"					チャートの粗粒砂を含む。	内外面灰茶色。上胴部外面に櫛描直線文+浮文、その下に八ヶ状原体による右下がりの列点文。外面及び頸部内面八ヶ調整、胴部内面ナデ調整。	
"	17	"	"					チャートの粗粒砂を多く含む。	内外面褐灰色。肩部に右上がりの列点文。内外面横方向のナデ調整。	
"	18	"	甗	15.0				チャートの粗粒砂を多く含む。	内外面桃色。口縁部外面に 1.5 幅の粘土帯を貼付。口唇に右下がりの刻み目を配す。頸部下端に櫛描直線紋。頸部外面縦方向の八ヶ調整。	



遺物観察表（弥生土器）

Fig. No.	図版番号	出土地点・層位	器種	法量 (cm)				胎土	特徴	備考
				口径	器高	胴径	底径			
"	19	"	"	19.0				チャートの粗粒砂を多く含む。	内外面暗茶色。口縁部は僅かに肥厚、口唇は横方向のナデ調整。頸部外面縦方向のハケ、内面横方向のハケ調整。	
"	20	"	"	18.0				チャート、風化礫の小礫を多く含む。	内外面茶色。口縁部外面に2cm幅の粘土帯貼付し外面指頭圧痕。口唇に右上がりの刻み目。上胴部に櫛描直線文を2帯配し、その間にハケ状原体による列点文を格子に施文。内面ナデ調整。外面全面煤ける。	
"	21	"	"					チャートの粗粒砂を多く含む。	内外面灰茶色。肩部に右上がりの列点文。内面ナデ調整。	
"	22	"	"	23.0				チャートの粗粒砂を多く含む。	内外面黄灰色。口唇横方向のナデ調整。	高熱により一部海綿状を呈す。
"	23	"	壺	31.0				チャートの粗粒砂を多く含む。	内外面灰～茶色。口唇は横方向のナデにより凹を呈す。外面に櫛描直線文帯。	
"	24	"	甕	21.0		22.0		チャートの小礫を多く含む。	内外面暗茶褐色。口唇面取り。上胴部に右下がりの列点文を配す。頸部外面縦方向のハケ、内面横方向のハケ調整。胴部外面右下がりのハケ調整。内面ナデ調整。	
"	25	"	壺					チャートの粗粒砂を多く含む。	内外面灰褐色。頸部下端に櫛描直線文2帯+浮文、その下に同原体による波状文、さらに櫛描直線文帯を全面に施文。	
"	26	"	"	28.0				チャートの粗粒砂を多く含む。	内外面茶色。口唇は横方向の強いナデによって凹状を呈す。頸部外面櫛描直線文帯を連続施文。肩部に楕円形浮文を貼付、上胴部に右下がりの列点文を配す。	
"	27	"	"			31.1	7.1	チャートの粗粒砂を多く含む。	内外面灰褐色。外面中位横方向、下半斜めのハケ調整。内底から2～3cmうえが煤け、底付近は煤けなし。	
"	28	"	"			30.6		チャートの粗粒砂を多く含む。	内外面茶灰色。胴上半部に櫛描文を駆使した文様を配す。上から右下がりの列点紋+櫛描直線文+櫛描波状文+櫛描直線文+櫛描波状文+櫛描直線文+羽状文+櫛描直線文。外面ハケ調整、内面ナデ調整。	
14	29	"	ミニチュア				2.0	チャートの粗粒砂を含む。	内外面暗灰色。ナデ調整。	
"	30	"	甕				6.8	チャートの粗粒砂を含む。	内外面暗茶褐色。内外面剥離顕著。外面煤け。	
"	31	"	"				9.0	チャートの粗粒砂を多く含む。	内外面灰茶色。ナデ調整。	
14	32	SK 2	甕				5.4	チャート・他の粗粒砂を多く含む。	内外面灰黒色。内外面ナデ調整。外面煤け。	
"	33	"	"	20.8				チャートの細・粗粒砂を多く含む。	内外面茶灰色。口縁部外面に1.5cm幅の粘土帯貼付し指頭圧痕。口唇刻み目。頸部外面横方向のハケ、内面ナデ調整。	
"	34	"	壺	9.6		16.4		チャートの粗粒砂、風化礫を多く含む。	内外面茶色。口唇面取り。口縁部に径4mmの円孔を穿つ。内外面ナデ調整、内面指頭圧痕顕著。	

遺物観察表（弥生土器）

Fig. No.	図版番号	出土地点・層位	器種	法量（cm）				胎土	特徴	備考
				口径	器高	胴径	底径			
"	35	"	甕	14.7				チャートの小礫、粗粒砂を多く含む。	内外面灰色。口唇横方向のナデ調整。口縁部内面横方向の八ケ、外面指頭圧痕。外面煤け。	
"	36	"	"	17.4				チャートの粗粒砂を多く含む。	外面赤褐色、内面灰黄色。口唇は横方向の強いナデにより凹状を呈す。口縁部内外面横方向の八ケ調整。	
"	37	"	高杯	14.8	10.4		9.4	チャートの細粒砂を多く含む。	外面桃色、内面灰褐色。坏部内面立ち上がり横方向のヘラミガキ、底部内面縦方向のヘラミガキ。脚部外面縦方向のヘラミガキ。脚内面にしぼり目。脚中位に径9mmの円孔（外内）	
"	38	"	器台	23.8				チャートの小礫・粗粒砂を多く含む。	外面桃色、内面褐灰色。口縁部外面横方向のナデ、体部外面八ケ+ナデ調整。	
"	39	"	鉢	10.0				チャートの粗粒砂を含む。	内外面にぶい桃色。口唇面取り、横方向のナデ調整。体部内外面ナデ調整。	
15	42	SK 3	"	14.0		12.0		チャート、長石の粗粒砂を多く含む。	内外面茶色。口唇面取り。内外面ナデ調整。	
"	43	"	壺	24.0				チャートの小礫、粗粒砂、風化礫を多く含む。	内外面灰～茶色。口縁部幅3cmで段状部を形成。口唇部に櫛描直線文+円形浮文。口縁部外面、頸部外面に右下がりの圧痕あり。	
"	44	"					7.0	チャート、風化礫、長石の粗・細粒砂を含む。	内外面灰褐色。内面下上のヘラ削り。	
"	45	"					9.7	チャートの粗粒砂を多く含む。	内外面灰褐色。外面縦方向の八ケ+ナデ調整。内面は底から2～5cmほど上が煤けている。	
16	47	SD 3	壺	5.5				チャート、片岩の粗砂粒を多く含む。	内外面にぶい橙色。内面指ナデ。	
"	48	"	"	11.1				風化礫の小礫を多く含む。	内外面灰～茶色。口縁部外面2cm幅の粘土帯を貼付し棒状浮文を貼付。外面櫛描のような横方向の八ケ調整。頸部下端にも棒状浮文。内面指ナデ。	
"	49	"	鉢	22.0				チャートの粗粒砂を多く含む。	内外面暗灰色。口縁部内外面横方向のナデ調整。胴部内外面ナデ調整。	
"	50	"					6.0	風化礫、チャート、石英粗面岩	内外面灰褐色。外面被熱変色。	
16	51	SD 3	甕				6.6	チャートの小礫、粗粒砂を多く含む。	内面褐灰色、外面灰黄褐色。	
"	52	"	"				6.0	チャートの粗粒砂を多く含む。	内外面茶色。外面縦方向の八ケ、内面ナデ調整。外面煤け被熱変色。	
"	53	"	"				6.0	チャートの粗粒砂を多く含む。	内外面灰茶色。外面縦方向の八ケ調整。外面煤け。胴部内面は煤けるが底は煤けない。	
17	54	SD 4	壺	20.0				チャートの小礫、粗粒砂を多く含む。	内面灰褐色、外面茶色。口縁部外面に3cm幅の粘土帯を貼付、僅かに下垂。口唇横方向の強いナデ調整。頸部外面不規則な右下がりの列点文を配す。	

遺物観察表（弥生土器）

Fig. No.	図版番号	出土地点・層位	器種	法量（cm）				胎土	特徴	備考
				口径	器高	胴径	底径			
"	55	"	甕	19.0				チャートの粗粒砂を多く含む。	内外面にぶい橙色。口縁部外面に2cm幅の粘土帯貼付、口唇面取り。肩部に右上がりの列点文。頸部外面縦方向、内面横方向のハケ調整。胴部外面右下がりのハケ調整、内面ナデ調整。外面煤ける。	
"	56	"	壺			21.0		チャート、石英粗面岩、風化礫の粗粒砂を多く含む。	内外面にぶい橙色。内外面ナデ調整。	
18	57	"	甕	12.4		11.5		チャート、結晶片岩などの小礫、粗粒砂を含む。	口縁部外面に2cm幅の粘土帯貼付。口唇横方向のナデ調整。胴部外面ナデ調整、内面指頭圧痕顕著。被熱赤変。	
"	58	"	"	11.0		12.0		チャートの小礫、粗粒砂を多く含む。	内外面暗灰色。外面ハケ調整、内面指頭圧痕顕著。外面煤け。	
"	59	"	"	16.0				結晶片岩、石英粗面岩、チャートの粗粒砂を多く含む。	内外面橙色。口唇は横方向の強いナデにより凹状を呈す。内外面器表の剥離が激しい。	
"	60	"	"	29.4				チャートの小礫、粗粒砂、風化礫を多く含む。	内外面灰～茶色。口唇に2条の沈線化した凹線文、肩部に2段の列点紋を配す。頸部内面横方向のハケ、外面縦方向のハケ調整。胴部内外面横方向のハケ調整。口唇の一部に黒斑あり。	
"	61	"	"	16.0		19.6		チャートの小礫、粗粒砂を多く含む。	内外面茶色。口縁部外面に2cm幅の粘土帯を貼付。口唇横方向のナデ調整、面取り。胴部内外面ナデ調整。外面煤け。	
"	62	"	"	18.9		21.6		チャートの小礫、粗粒砂を多く含む。	内外面茶色。口縁部下方に拡張、口唇は面取り。肩部に右下がりの圧痕。頸部外面縦方向のハケ調整。胴部外面中位右下がり、下半縦方向のハケ調整。胴部内面ナデ調整。外面煤け。	
18	63	SD 4	"	19.4		20.1		チャート、風化礫を多く含む。	内外面茶色。口縁部外面に2cm幅の粘土帯貼付。口唇に沈線化した凹線文3条、肩部に浮文、上胴部に右上がりの列点文を配す。頸部内面横方向のハケ、胴部内面横方向のナデ調整。	
"	64	"	"				6.0	チャートの小礫、粗粒砂を多く含む。	内外面灰茶色。外面縦方向のハケ調整、内面下上のヘラ削り。外面煤け、内面端点部付近煤けなし、それより上が煤ける。	
"	65	"	"				6.0	チャートの粗粒砂多量、石英粗面岩他	内外面茶色。外面縦方向のハケ+ナデ調整。内面ナデ調整。	
"	66	"	"				5.2	チャートの粗粒砂を多く含む。	内外面暗灰色。外面縦方向のハケ+ナデ調整、内面ナデ調整。外面煤け。	
"	67	"	"				7.0	チャート、石英粗面岩の粗粒砂を含む。	内外面灰褐色。外面縦方向のハケ、内面ナデ調整。	
"	68	"	"	17.3	25.9	18.0	6.0	チャート、風化礫を多く含む。	内外面灰褐色。口唇は凹状を呈す。肩部に列点文。頸・胴部外面縦方向のハケ調整。外面煤けが顕著。	
19	69	SD 5						チャートの粗粒砂を多く含む。	内外面茶色。口縁部外面の粘土帯貼付部が剥離したもの。	
"	70	"						チャートの粗粒砂を多く含む。	内外面茶色。口縁部外面に2.5cm幅の粘土帯を貼付。口縁部外面に右上がりの列点文を配す。	

遺物観察表（弥生土器）

Fig. No.	図版番号	出土地点・層位	器種	法量（cm）				胎土	特徴	備考
				口径	器高	胴径	底径			
"	71	"	壺	13.0				チャートの小礫、粗粒砂を多く含む。	内外面淡茶色。口縁部外面に1.5cm幅の粘土帯を貼付し、ハケ原体で右上がりの列点文を配す。頸部外面胴原体で格子状圧痕文。内外面ナデ調整。	
"	72	"		18.6				チャート・他の粗粒砂を多く含む。	口縁部外面2.5cm幅の右上がりの列点文。頸部外面櫛描直線文。	
"	73	"	壺	12.6				チャートを殆ど含まない。風化礫の粗粒砂を多く含む。	内外面灰茶色。頸部内面にシボリ目あり、爪状の圧痕あり。内外面ナデ調整。	
"	74	"	"					チャートの粗粒砂を多く含む。	内外面灰褐色。頸胴部界に櫛描直線文+浮文。内外面ナデ調整。	
"	75	"	"	12.0		15.6		チャートの粗粒砂を多く含む。	内外面暗茶色。頸部外面櫛描直線文2帯、肩部に右上がりの列点文。胴部外面縦方向のハケ、内面ナデ。	
"	76	"	"	11.6		19.0		チャート、風化礫を多く含む。	内外面灰茶色。口縁部断面三角。外面ハケ調整、上胴部内面指頭圧痕顕著。	
"	77	"	甗	16.4		22.0		チャート・他の粗粒砂を多く含む。	内外面灰褐色。口唇に2条の凹線文、肩部に刺突文を配す。内外面ナデ調整。	
"	78	"	"	16.1	27.5	18.1	6.8	チャートの粗粒砂を多く含む。	内外面茶褐色。口縁部外面2.5cm幅の粘土帯を貼付、口唇下端に刻み目。上胴部に5条単位の櫛描直線文+浮文、その下に右上がりの圧痕。口唇凹状を呈す。頸胴部外面縦方向のハケ調整、頸部内面横方向のハケ、胴部内面ナデ調整。胴部外面被熱変色煤け、内面は底以外は煤け。	
19	79	SD 5					8.0	チャートの粗粒砂を多く含む。	内外面灰茶色。	
"	80	"					8.0	チャートを多く含む。石英粗面岩を含む	内外面橙色。外面縦方向のハケ調整。	
"	81	"					7.0	チャートの粗粒砂を多く含む。	内外面灰褐色。内外面ナデ調整。内面底部付近煤けなし、やや上から煤ける。	
"	82	"	甗	21.0	33.0	23.0	6.4	チャートの粗粒砂を多く含む。	内外面灰褐色。口縁部外面2.5cm幅の粘土帯貼付、口唇下端刻み目、頸部下端に櫛描直線文+浮文。頸部外面縦方向のハケ、内面横方向のハケ、胴部外面中・上位は右下がり、下半は縦方向のハケ調整。胴部外面煤け。	
"	83	層	"				6.6	チャートの粗粒砂を多く含む。	内外面灰褐色。外面煤け、内面は底部以外が煤ける。	
20	85	"	壺	23.6				チャートの小礫を多く含む。	内外面灰桃色。口縁部上端を僅かに摘み上げる。口唇に斜格子文。頸部外面に櫛描直線文帯。	
"	86	"	"	18.9				チャートの小礫・粗粒砂を多く含む。	内外面桃色。口縁部を上下に拡張し櫛描直線文を配す。口縁部外面にハケ原体による列点文+横方向のナデ調整。頸部外面櫛描直線文。	
"	87	SB 5 P 3	"	30.0				チャートの小礫を多く含む。	内外面灰褐色。口縁部は幅3cmの段状を呈す。凹状の口唇に斜格子目文、口縁部外面右上がりの列点文。頸部外面縦方向のハケ、内面横方向のハケ調整。	

遺物観察表（弥生土器）

Fig. No.	図版番号	出土地点・層位	器種	法量（cm）				胎土	特徴	備考
				口径	器高	胴径	底径			
"	88	層	甗	14.8				チャートの小礫・粗粒砂を多く含む。	内外面桃色。口縁部外面に2cm幅の粘土帯を貼付し列点文。口唇面取り。上胴部に棒状浮文と列点文を配す。外面縦方向のハケ調整、内面横方向のハケ+ナデ調整。	
"	89	"	"					チャートの小礫・粗粒砂を多く含む。	内面灰色、外面茶色。外面叩き、断面に接合痕を明瞭に認む。	
"	90	"	"				5.0	チャートの小礫を多く含む。	内外面茶色。外面縦方向のハケ調整、内面指ナデ要請。	
"	91						7.0	チャートの小礫・粗粒砂を多く含む。	内外面灰黄色。内面にハケ状原体の圧痕あり。	
23	92	SB 8-P 6						チャートの円・角粒、砂岩円粒を含む。	にぶい黄橙色。貼付口縁の破片か。口縁部外面に右上がりの列点文。	
25	93	SK10	壺					チャートの円・角粒を多く含む。	黒色。頸部から上胴部、櫛描直線文の間に右上がり、右下がりの列点文。頸胴境に楕円形浮文列。	
"	94	"	甗か				4.0	チャートの角粒を含む。	黒色。外面縦ハケ。	摩耗。
"	95	"					6.0	チャートの角粒を多く含む。	にぶい黄橙色（外にぶい橙色）。内外面ハケ痕あり。外底に線条圧痕。	外面剥離。
"	96	"	甗				6.2	チャートの角・円粒を含む。石英角粒を少量含む。	にぶい黄橙色。外面縦ハケ。	外面剥離、ススケ。
"	97	"	"	17.0				チャートの円粒を含む。	にぶい褐色。口縁部外面に2段の強い横ナデ。口縁端部に2条の凹線。	外面ススケ顕著。
"	98	"	"	14.0	22.6	15.4	4.8	チャートの角粒を多く含む。泥岩円粒を含む。	内面橙色。外面褐色。体部外面タタキ+ハケ+ナデ。頸部外面斜方向ハケ。口縁部内面横ハケ。口縁端部強い横ナデ。上胴部にハケ状原体による右上がり列点文。	胴部と口縁部外面ススケ顕著。
"	99	"	"	18.1				チャートの角・円粒を多く含む。	暗灰黄色。外面胴部以下は粗目、口縁から頸部は細目の縦ハケ。内面下位ハラケズリ。	内面摩耗。外面ススケ、特に胴部以下は顕著。
26	100	"	"					チャートの角粒を含む。砂岩円粒を少量含む。	褐灰色。櫛描直線文間に6条の櫛描波状文。頸胴境には棒状浮文。	硬質。二次被熱。
"	101	"	"	16.1				チャートの角粒を多く含む。	にぶい黄褐色。外面縦ハケ。	内面摩耗。外面ススケ。
"	102	"	壺					チャートの角・円粒を多く含む。	にぶい橙色。口縁部外面に巾約3cmの粘土帯貼付。口縁端部2条の凹線。口縁外面ハケ状原体による右上がり列点文。	
"	103	"	"	21.6				チャートの角・円粒を多く含む。泥岩円粒を含む。	にぶい橙色。口縁端部強い横ナデ。	摩耗顕著。
"	104	"	鉢	10.8				チャートの角粒を多く含む。	内面にぶい黄橙色。外面にぶい黄褐色。外面、口縁部内面ハケ。	摩耗顕著。外面ススケ。

遺物観察表（弥生土器）

Fig. No.	図版番号	出土地点・層位	器種	法量（cm）				胎土	特徴	備考
				口径	器高	胴径	底径			
27	105	SK15	甕か				6.6	チャートの角粒を多く含む。円粒を少量含む。	にぶい橙色。	外面剥離。内面摩耗顕著。二次被熱か。
"	106	"	甕	16.4				チャートの角粒を含む。	にぶい褐色。口縁部外面巾2cm程の粘土帯貼付。口縁部内外面強い横ナデ。胴部外面強い横ナデ。内面指頭圧痕。	胴部外面ススケ。
28	107	SD16	"	13.0				チャートの角粒を多く含む。	にぶい黄橙色。内面ナデ。	口縁端部下外面に若干のススケ。
"	108	"	壺					チャートの角粒を多く含む。	にぶい黄橙色。上胴部に八ケ状原体による列点文を一面に施す。櫛描直線文。内面ナデ。	
"	109	"	"					チャートの角粒を多く含む。	にぶい黄橙色。外面、櫛描直線文と櫛状原体による列点文の文様帯を複数単位。内面ナデ。	外面黒斑。
"	110	"	"				6.4	チャートの角粒を含む。	にぶい褐色。外面縦八ケ。内面丁寧なナデ。	底部外面に黒斑。
"	111	"	"					チャートの角・円粒を多く含む。	灰白色。頸部から胴部にかけて櫛描直線文帯+八ケ状原体による右上がりの列点文+櫛描直線文+八ケ状原体による斜格子状の圧痕+櫛描直線文を配す。頸部下端には棒状浮文。内面ナデ。	
"	112	"	"	20.0				チャートの角粒を多く含む。赤色風化礫を含む。	にぶい橙色。口縁部は下方に肥厚。口縁端部は強い横ナデにより凹状をなし、八ケ状原体による右上がりの列点文をめぐらす。頸部外面横八ケ、内面横ナデ。	
"	113	"	"	17.0				チャートの角粒を多く含む。	黒色。外面縦八ケ。	器表が脆弱化。
"	114	"	甕	15.5				チャートの角粒を多く含む。	にぶい褐色。口縁部外面に巾2cmの粘土帯貼付。八ケ状原体による列点文をめぐらす。口縁部横ナデ。外面八ケ。頸部内面横方向八ケ。	外面ほぼ全面ススケ。
29	117	SD17	甕か	14.4				チャートの角粒を多く含む。砂岩円礫を少量含む。	にぶい黄褐色。口縁端部及び口縁内面強い横ナデ。口縁外面横ナデ。	外面若干ススケか。
"	118	"		18.0				チャートの円・角大粒、石英角粒を多く含む。	橙色。口縁部巾約2.8cmの粘土帯貼付。櫛描直線文。頸胴境に櫛描直線文+楕円形浮文列。	摩耗顕著。
"	119	"	甕					砂岩円粒を含む。	にぶい黄褐色。上胴部櫛描直線文。頸胴境に棒状浮文列。	外面若干ススケ。
"	120	"	"	19.0				チャートの角粒、泥岩円粒を多く含む。	黄灰色。口縁外面巾2cmの粘土帯貼付。頸部下端に浮文。口縁内面横八ケ。	外面器表剥離。外面ススケ。
"	121	"		19.4				チャートの円粒、石英角粒を多く含む。	灰黄褐色。口縁内面及び端部強い横ナデ。口縁外面横ナデ。頸部内面横八ケ後ナデ、棒状浮文。	口縁外面ススケ。頸部外面著しいススケ。
"	122	"	甕	19.0		21.5		チャートの円・角粒を多く含む。泥岩円粒を含む。	橙色。口縁外面に巾約1.9cmの粘土帯貼付。端部つまみ上げ。外面及び頸部以上の内面八ケ。	摩耗。胴部外面ススケ。口縁部一部二次被熱、赤変。
30	123	"	壺					チャートの円粒を多く含む。	にぶい橙色。胴部斜方向の木理の粗い八ケ+ナデ、内面ナデ。頸胴境に櫛描直線文。その下端に1条の深い沈線。その下方に櫛状原体による列点文。	

遺物観察表（弥生土器）

Fig. No.	図版番号	出土地点・層位	器種	法量 (cm)				胎土	特徴	備考
				口径	器高	胴径	底径			
30	124	SD17	壺			24.0		チャート、結晶片岩の角・円粒を多く含む。	にぶい黄色。胴部に2条の凹線。内面横ナデ。	外面器表の荒れ顕著。
"	125	"	"			34.4		チャートの円・角粒を多く含む。	内面灰黄褐色。外面にぶい褐色。胴部外面横及び斜方向ハケ。上胴部櫛描直線文+右上がり列点文。胴部内面板ナデ。	
"	126	"	甕	20.0				チャートの円・角粒を多く含む。	にぶい黄褐色。口縁部巾約1.5cmの粘土帯貼付。外面に右上がりの圧痕。頸部から上胴部、櫛描直線文+右上がり列点文。最下帯は簾状文か。	全面摩耗顕著。胴部外面ススケ。
"	127	"	"	16.5		17.5		チャートの円粒を含む。	灰黄褐色。口縁部巾約1.5cmの粘土帯貼付。外面及び内面の頸部以上は木理粗めのハケ。胴部内面ナデ仕上。	外面剥離、若干のススケ。
"	128	"				6.5		チャートの角粒を多く含む。	にぶい黄橙色。	内外とも剥離。摩耗顕著。
"	129	"				6.9		砂岩円大粒含む。	黄灰色。剥離した円盤状の底部。内底指頭圧痕と工具圧痕。外面指頭圧痕並ぶ。	
32	130	包含層	壺	22.0				チャートの角粒を多く含む。	橙色。口縁部は1.7cmを折り返し、指頭圧根。端部は面取り。	口縁内面黒斑。摩耗。
"	131	"	"	26.0				チャートの角粒を含む。砂岩円粒少量含む。	黄灰色。口縁部外面巾2cmの粘土帯を貼付。ハケ状原体で刺突列点文。口縁端部3条の凹線。	
"	132	"		11.0				チャートの角粒を多く含む。砂岩円粒、赤色風化礫を含む。	橙色。	器表脆弱。素地は粗。
"	133	"	壺			8.0		チャートの大角・円粒を多く含む。	明黄褐色。	外底黒斑。
"	134	"	甕	19.0				チャートの角粒を多く含む。	にぶい黄橙色。口縁部内面横ハケ。口縁端部強い横ナデ後下方に右上がりの刻み目。	外面ススケ。
"	135	"	鉢	20.6				チャートの角・円粒を多く含む。	にぶい橙色。口縁部内外面及び口縁端部強い横ナデ。口縁部内面下地に横ハケ。胴部内面ナデ。	外面剥離。外面ススケ。
36	138	ST 1		19.9				チャートの粗粒砂を多く含む。	内外面にぶい橙色。口縁部外面に幅3cm弱の粘土帯を貼付。粘土帯外面に斜格子文。	
"	139	"	甕	26.0				チャートの粗粒砂を多く含む。	内面橙色、外面にぶい黄褐色。口縁部外面に幅約2.5cmの粘土帯を貼付する。粘土帯外面に簾状文。	外面煤付着。
"	140	"	"	22.8				チャートの粗粒砂を多く含む。	内面暗灰黄色、外面灰色。口縁部外面に幅約3cmの粘土帯を貼付する。	
"	141	"	"	21.0				チャートの粗粒砂を多く含む。	内面灰色、外面オリーブ黒色。幅約1.5cmの粘土帯を貼付する。	
"	142	"	"	18.0				チャートの中粒砂を多く含む。	内面にぶい橙色、外面橙色。口縁部外面を僅かに肥厚させ、端部をヨコナデにより外傾させる。	
"	143	"	"	13.4				チャートの粗粒砂を多く含む。	内外面暗褐色。口縁部外面を僅かに肥厚させる。	外面煤付着。

遺物観察表（弥生土器）

Fig. No.	図版番号	出土地点・層位	器種	法量（cm）				胎土	特徴	備考
				口径	器高	胴径	底径			
"	144	"	"	8.0				直径1mm大の細粒砂を多く含む。	内外面にぶい橙色。櫛描波状文と櫛描直線文を交互に配置する。焼成は堅致である。	搬入土器。
"	145	"	壺					チャートの粗粒砂を多く含む。	内面灰色、外面明黄褐色。楕円形浮文を不規則に貼付する。	
"	146	"	"					チャートの粗粒砂を多く含む。	外面オリーブ黒色。櫛描直線文と列点文を交互に配置される。頸部と胴部の境には直線文の下地に円形浮文を密に貼付する。	
"	147	"	底部				4.9	チャートの粗粒砂を多く含む。	内外面にぶい橙色。	
"	148	"	"				6.0	チャートの粗粒砂を多く含む。	内外面黄灰色。	
"	149	"	"				5.5	チャートの粗粒砂を多く含む。	内面オリーブ黒色、外面にぶい黄褐色。	外面被熱変色。
"	150	"	"				7.0	チャートの粗粒砂を多く含む。	外面橙色。	底部外面に黒斑がみられる。
"	151	"	"				6.0	チャートの粗粒砂を多く含む。	内面にぶい黄橙色、外面褐灰色。	
"	152	"	"				10.0	チャートの粗粒砂を多く含む。	内面黒褐色、外面にぶい黄橙色。	
"	153	"	高杯	24.8				チャートの粗粒砂を多く含む。	内外面橙色。	
39	154	SD13	壺	14.0				チャートの粗粒砂を多く含む。	内外面にぶい橙色。口縁端部をヨコナデにより外傾させる。	
"	155	"	"	22.0				チャートの粗粒砂を多く含む。	内面褐灰色、外面にぶい褐色。口縁端部を上下に若干肥厚させ、口唇部に凹線文を2条巡らす。口縁部外面横方向のナデ調整、体部外面縦方向のハゲ調整、口縁部内面横方向のハゲ調整。	
"	156	"	甕	11.0				チャートの粗粒砂を多く含む。	内面暗灰黄色、外面灰オリーブ色。口縁部外面に幅約2cmの断面形涙形の粘土帯を貼付する。	
40	158	SD14	"	20.0		24.0		チャートの粗粒砂を多く含む。	内面にぶい黄橙色、外面褐灰色。	外面煤付着。
"	159	"	"	13.5				チャートの小礫を多く含む。	内外面橙色。口縁部外面に幅約1.5cmの粘土帯を貼付する。頸部付近に櫛描直線文を施し、楕円形浮文を貼付する。	外面煤付着。
"	160	"	"	15.6		15.8		チャートの粗粒砂を多く含む。	内面褐灰色、外面にぶい褐色。	外面煤付着。
"	161	"	"	17.6				チャートの中粒砂を多く含む。	内外面にぶい橙色。口縁部外面に幅約2cmの粘土帯を貼付する。頸部と胴部の境に櫛描直線文の上に楕円形浮文を貼付する。	



遺物観察表（弥生土器）

Fig. No.	図版番号	出土地点・層位	器種	法量 (cm)				胎土	特徴	備考
				口径	器高	胴径	底径			
"	162	"	甕	20.4		20.2		チャートの粗粒砂を多く含む。	内面灰黄色、外面にぶい橙色。	外面被熱変色。
"	163	"	壺			22.8		チャートの粗粒砂を多く含む。	内面オリーブ黒色、外面にぶい黄橙色。方向を違えた列点文を交互に配置。	
"	164	"	甕					チャートの粗粒砂を多く含む。	内面褐色、外面灰褐色。頸部と胴部の境に列点文を配置。	
"	165	"	底部				4.4	チャートの粗粒砂を多く含む。	内面明赤褐色、外面褐灰色。	
"	166	"	"				7.4	チャートの粗粒砂を多く含む。	内面灰色、外面赤褐色。	外面被熱変色。
"	167	"	"				8.0	チャートの粗粒砂を多く含む。	内面灰色、外面灰黄色。	
"	168	"	ミニチュア	6.3	4.3		3.3	チャートの粗粒砂を多く含む。	外面黄褐色。	
41	170	SD15	甕	19.0				チャートの粗粒砂を多く含む。	内外面にぶい赤褐色。	
"	171	"	"	16.0				チャートの粗粒砂を多く含む。	内面橙色、外面にぶい褐色。	外面煤付着。
"	172	"	"	26.0				チャートの粗粒砂を多く含む。	内面明褐灰色、外面にぶい赤褐色。	
"	173	"	底部				6.6	チャートの粗粒砂を多く含む。	内外面にぶい橙色。	
"	174	"	"				5.6	チャートの粗粒砂を多く含む。	内面にぶい褐色、外面黄灰色。	
42	176	P 1	甕	9.6	11.9	9.5	4.4	チャートの粗粒砂を多く含む。	内外面黒褐色。	外面煤付着。
"	177	P 2	底部				5.3	チャートの粗粒砂を多く含む。	内面橙色、外面にぶい褐色。	
"	178	P 3	"				7.0	チャートの粗粒砂を多く含む。	内面灰色、外面褐灰色。	
"	179	P 6	壺	15.0				チャートの粗粒砂を多く含む。	外面橙色。	
43	181	SK12	"					チャートの粗粒砂を多く含む。	内外面黒色。	
"	182	SK15	甕	20.0				チャートの粗粒砂を多く含む。	内面浅黄橙色、外面にぶい黄褐色。	

遺物観察表（弥生土器）

Fig. No.	図版番号	出土地点・層位	器種	法量（cm）				胎土	特徴	備考
				口径	器高	胴径	底径			
"	183	包含層	壺	16.9				チャートの粗粒砂を多く含む。	外面橙色。	
"	184	"	甗	19.8				チャートの粗粒砂を多く含む。	内面にぶい橙色、外面明赤褐色。	
"	185	"	底部				8.0	チャートの粗粒砂を多く含む。	内面黄灰色、外面灰黄色。	
"	186	"	"				6.0	チャートの粗粒砂を多く含む。	内外面にぶい橙色。	
"	187	"	"				1.7	チャートの粗粒砂を多く含む。	外面にぶい橙色。	
52	190	SB 2 - P 6	壺					チャートの角粒を多く含む。	にぶい黄橙色。内面ナデ。上胴部5~6条単位の櫛描直線文とその間の右上がり列点文からなる文様帯を複数単位施文。頸胴境に棒状浮文列。	摩耗。
"	191	SD 1					4.8	チャートの角礫を多く含む。砂岩円礫を含む。	にぶい黄橙色。	大黒斑あり。炭化物と共に出土。
"	192	"	"	15.0				チャート、石英の角粒を多く含む。結晶片岩角粒、チャートの円粒を含む。	にぶい褐色。頸部下端に4条単位の櫛描直線文 + 棒状浮文 + 右上がりの刺突列点文。口縁外面に4条単位の櫛描直線文帯。内外面ナデ。口縁端部強い横ナデ。	
"	193	SD 2	"					チャートの角粒を多く含む。チャート・泥岩の円粒を含む。	灰黄色。頸部外面に櫛描直線文を連続してめぐらす。頸胴境に右上がりの列点文をめぐらす。内面ナデ。	器表剥離。
"	194	"	"	26.0				チャートの角粒を多く含む。	黒色。口縁外面に巾2cmの粘土帯を貼付、外面に平行圧痕をめぐらす。口縁端部には2条のにぶい凹線文。外面縦ハケ、内面ナデ。	
"	195	"	"		21.8	6.0		チャートの角・円礫を多く含む。	にぶい橙色。胴中央部は斜方向のハケ。下胴部は縦方向基調のハケ。底部外面不定方向のハケ。ハケの木理の粗さは2種あり。内面ナデ仕上げ。外面上胴部、上よりハケ状原体による斜格子圧痕、2巡の櫛描直線文、斜格子圧痕、約3巡の櫛描直線文。	外面大黒斑あり。ススケありか。
"	196	"	甗	13.7				チャートの角大粒を多く含む。円粒を少量含む。	にぶい黄橙色。口縁端部強い横ナデ後平行圧痕。胴部外面ハケ後上胴部弱いナデ。胴部内面ナデ仕上げ。口縁内面横方向ハケ。頸胴境に太い列点文。	摩耗。外面ほぼ全面ススケ。
"	197	"	"					チャートの角粒を多く含む。	灰黄褐色。上胴部棒状浮文列と右下がりの列点文。胴部外面縦ハケ後ナデ。他はナデ。	外面激しいススケ。
"	198	"	"	15.0				チャート・砂岩の円・角粒を多く含む。	にぶい黄橙色。口縁端部面取り。口縁内面横方向、外面縦方向のハケ。上胴部外面にハケ状原体による右上がりの列点文。胴部外面縦方向ハケ。内面ナデ。	外面全面ススケ。
"	199	"	"				6.0	チャートの角粒を多く含む。	灰黄色。外面縦ハケ。	摩耗。外面ススケか。

遺物観察表（弥生土器）

Fig. No.	図版番号	出土地点・層位	器種	法量（cm）				胎土	特徴	備考
				口径	器高	胴径	底径			
52	200	SD 2	壺	30.0				チャートの円大粒・角粒を多く含む。	にぶい橙色。口縁内面及び頸部外面横ナデ。口縁端部内外とも強い横ナデ。	
56	204	SD18	"					砂岩・頁岩の円粒、チャート角粒を含む。	にぶい黄橙色。上胴部に櫛描直線文と右上がり列点文。頸胴境に棒状浮文列。	
"	205	"	"					砂岩の円粒、チャート角粒を含む。	黒色。約6条単位の櫛描直線文と波状文。	
"	206	"	壺				8.4	チャートの角粒を多く含む。砂岩円粒を少量含む。	にぶい黄橙色。外面縦ハケ。内面ハケ、ナデ。	内面底部から少し上がったところから上が激しいススケ。外面のススケ、変色なし。
"	207	"	甗					チャートの角・円大粒を多く含む。	にぶい橙色。上胴部右上がりの列点文。	摩耗顕著。
"	208	"	壺				16.7	チャートの粗粒を多く含む。	内面灰黄色、外面にぶい橙色。櫛描直線文帯を上下に配し、その間にハケ状原体による斜格子圧痕を施す。外面胴部下半木理の細いハケ調整。内面指頭圧痕。	
"	209	包含層	甗					チャートの角・円粒、砂岩円粒を含む。	にぶい橙色。外面縦方向基調のハケ。楕円形浮文列貼付部のみ横ハケ。	頸胴境を除きススケ。
"	210	"		36.6				チャートの角粒を多く含む。	にぶい黄橙色。口縁端部に2条の凹線。口縁部～頸部外面縦ハケ+ナデ。内面ハケ。	
59	212	P 1	壺					チャートの粗粒砂を多く含む。	内外面褐色。櫛描直線文・斜高格子文・櫛描波状文を施す。頸部と体部の境に楕円形浮文を貼付する。	
"	213	"	鉢	11.4	7.2		6.0	チャートの粗粒砂を多く含む。	内外面褐色。内面斜め方向のハケ調整、外面ナデ調整。	
60	214	SK 4	壺	9.2				チャートの粗粒砂を多く含む。	口縁部外面に幅約1.8cmの粘土帯を貼付。粘土帯外面に列点文。粘土帯下端に楕円形浮文。頸部に櫛描直線文。	
"	215	"	"	15.0				チャートの粗粒砂を多く含む。	内面黄灰色、外面明赤褐色。口縁部外面に幅約1.8cmの粘土帯を貼付する。粘土帯外面に列点文を施す。焼成は堅致である。	
"	216	"	甗	24.0				チャートの粗粒砂を多く含む。	内面黄橙色、外面橙色。口縁部外面に幅約2.2cmの粘土帯を貼付する。粘土帯外面に列点文を施す。	
"	217	"	"	18.0			19.4	チャートの粗粒砂を多く含む。	内外面にぶい黄褐色。口縁部外面に幅約1.8cmの粘土帯を貼付。肩部に櫛描直線文、その上に浮文、櫛描直線文の下に列点文。内外面ナデ調整。	外面煤付着。
61	218	SK 5	壺	15.4				チャートの粗粒砂を多く含む。	内面褐灰色、外面にぶい黄褐色。口縁部外面に幅約3.5cmの粘土帯を貼付。口唇部に円形浮文を2個1対で貼付。粘土帯外面に格子目文。頸部～肩部に櫛描直線文。肩部に浮文。内面ナデ調整。	
"	219	SK 6	甗	17.4				チャートの粗粒砂を多く含む。	内外面灰色。口縁部外面に幅約1.4cmの粘土帯を貼付。	

遺物観察表（弥生土器）

Fig. No.	図版番号	出土地点・層位	器種	法量（cm）				胎土	特徴	備考
				口径	器高	胴径	底径			
"	220	SK 6	甗	14.3				チャートの小礫を多く含む。	内面にぶい黄色、外面にぶい黄橙色。口縁部外面に幅約1.5cmの粘土帯を貼付。	
"	221	"	壺					チャートの粗粒砂を多く含む。	外面にぶい黄褐色。上胴部外面に列点文。	
"	222	"	甗	25.0				チャートの粗粒砂を多く含む。	内面にぶい黄色、外面にぶい橙色。口縁部外面に幅約2.2cmの粘土帯を貼付。	
"	223	"	底部				6.0	チャートの粗粒砂を多く含む。	内外面灰色。	
62	225	SK 7	甗	15.0				チャートの粗粒砂を多く含む。	内外面にぶい黄褐色。口縁部外面に幅約1.5cmの粘土帯を貼付。内外面ナデ調整。	外面煤付着。
"	226	"	"	19.0				チャートの粗粒砂を多く含む。	外面にぶい褐色。口唇部下端に粘土紐を貼付し、口唇部を拡張。頸部外面に縦方向の八ヶ調整。	外面煤付着。
"	227	"	壺	16.8				チャートの粗粒砂を多く含む。	内外面にぶい橙色。口唇部下端に粘土紐を貼付し、口唇部を拡張。頸部外面に縦方向の八ヶ調整。	外面煤付着。227と同一個体であると考えられる。
"	228	"	底部				8.8	チャートの粗粒砂を多く含む。	内面黒褐色、外面にぶい黄褐色。体部外面には縦方向の八ヶ調整、内面は横方向の八ヶ調整。底部外面中央が若干凹む。	
63	229	SD 6	壺	12.8				チャートの小礫を多く含む。	内面灰黄色、外面にぶい黄褐色。口縁部外面に幅約1.5cm粘土帯を貼付。粘土帯外面には列点文。	
"	230	"	鉢	8.6				チャートの粗粒砂を多く含む。	内面黒褐色、外面黄褐色。	
"	231	"	底部				10.4	チャートの粗粒砂を多く含む。	内面黄灰色、外面黄褐色。	
"	232	"	"				7.0	チャートの粗粒砂を多く含む。	内面灰褐色、外面にぶい褐色。	外面被熱変色。
64	233	SD 7	壺	12.0				チャートの粗粒砂を多く含む。	外面にぶい黄褐色。頸部に凹線文。内外面ナデ調整。	
"	234	"	"				13.7	チャートの粗粒砂を多く含む。	内面褐灰色、外面にぶい黄褐色。頸部下半～胴部上半に櫛描直線文。	
"	235	"	"	24.8				チャートの小礫を多く含む。	内外面にぶい黄褐色。口縁部を大きく外反させ、口縁部内外面に粘土帯を貼付。頸部外面には粗い櫛描沈線文。口唇部に円形浮文を2個1対で貼付。	
"	236	"	甗	17.4				チャートの粗粒砂を多く含む。	内外面灰黄褐色。口縁部外面に幅約2.7cmの薄い粘土帯を貼付後、口唇部をヨコナデ調整。	
"	237	"	"	12.0				チャートの粗粒砂を多く含む。	内面黄灰色、外面にぶい黄色。口縁部外面に幅約1.2cmの粘土帯を貼付し、僅かに肥厚させる。頸部外面に粗い櫛描沈線。	
"	238	"	"	16.0				チャートの粗粒砂を多く含む。	内外面にぶい黄褐色。口縁部外面に幅約2cmの粘土帯を貼付。肩部に櫛描直線文、その下に列点文。	

遺物観察表（弥生土器）

Fig. No.	図版番号	出土地点・層位	器種	法量 (cm)				胎土	特徴	備考
				口径	器高	胴径	底径			
"	239	"	甗				6.6	チャートの粗粒砂を多く含む。	内面黄灰色、外面橙色。底部には焼成後、穿孔。	
"	240	"	底部				8.0	チャートの小礫を多く含む。	内外面灰色。	
"	241	"	"				7.2	チャートの粗粒砂を多く含む。	内外面灰黄色。	
"	242	"	"				8.0	チャートの粗粒砂を少量含む。	内面褐灰色、外面にぶい黄橙色。	
"	243	"	"				4.4	チャートの粗粒砂を多く含む。	内外面にぶい橙色。	
66	245	SD 9	甗	24.2				チャートの粗粒砂を多く含む。	内面にぶい黄橙色、外面にぶい褐色。口縁部外面に幅約1.5cmの粘土帯を貼付。	外面煤付着。
"	246	"	"	29.0		35.4		チャートの粗粒砂を多く含む。	外面橙色。口縁部外面に幅約2cmの粘土帯を貼付。粘土帯外面に列点文。外面ハケ調整。	内面おこげ付着。
"	247	"	壺					チャートの小礫を多く含む。	内外面灰黄色。頸部に櫛描直線文+浮文。その下には格子目文、直線文、波状文、直線文、格子目文、直線文を配する。	
"	248	"	"					チャートの粗粒砂を多く含む。	内面灰黄色。肩部に櫛描直線文+浮文、列点文。	
"	249	"	底部				7.8	チャートの小礫を多く含む。	外面灰黄色。外面タテハケ調整。内面ナデ調整。	内面におこげ付着。
"	250	"	"				6.0	チャートの粗粒砂を多く含む。	内面黒褐色、外面にぶい褐色。	内面におこげ付着。
"	251	"	"				6.6	チャートの粗粒砂を多く含む。	内面にぶい黄橙色、外面暗灰黄色。	内面におこげ付着。
72	252	SK 8	甗	15.6	27.8	16.7	5.4	チャートの粗粒砂を多く含む。	内外面黄灰色。	外面被熱変色。
"	253	"	"					チャートの粗粒砂を多く含む。	内面にぶい黄橙色、外面にぶい褐色。口縁部外面に幅約1.8cmの粘土帯を貼付。肩部に櫛描直線文、その下に列点文。	
"	254	"	"	17.0				チャートの粗粒砂を多く含む。	内面灰黄褐色、外面明赤褐色。口縁部外面に幅約2.5cmの粘土帯を貼付。内外面ナデ調整。	外面煤付着。
"	255	"	"	13.7				チャートの粗粒砂を多く含む。	外面黄橙色。口縁部外面に幅約2.5cmの粘土帯を貼付。粘土帯を含め外面はタテハケ調整。内面口縁部・肩部はヨコハケ調整。	
"	256	"	"	19.0				チャートの粗粒砂を多く含む。	内面暗灰黄色、外面明赤褐色。口縁部外面に幅約1.8cmの粘土帯を貼付。肩部に列点文。	外面煤付着。
"	257	"	"	29.0		31.8		チャートの小礫を多く含む。	内外面にぶい黄色。口縁部外面に幅約3.5cmの粘土帯を貼付。粘土帯外面に右上がりと右下がりの列点文。頸部に櫛描直線文+浮文。その下に右上がりと右下がりの列点文。	外面煤付着。

遺物観察表（弥生土器）

Fig. No.	図版番号	出土地点・層位	器種	法量（cm）				胎土	特徴	備考
				口径	器高	胴径	底径			
"	258	"	壺	16.0				チャートの粗粒砂を多く含む。	内面黄褐色、外面灰色。口縁部外面に断面形三角形の粘土帯を貼付。肩部に列点文。	
"	259	"	甕	20.0				チャートの粗粒砂を多く含む。	内面灰黄色、外面にぶい橙色。口縁部外面に幅約2cmの粘土帯を貼付。内外面ナデ調整。	外面煤付着。
"	260	"	"	17.0				チャートの粗粒砂を多く含む。	内面黄灰色、外面灰黄褐色。口縁部外面に幅約2cmの粘土帯を貼付。内外面ナデ調整。	外面被熱変色、煤付着。
"	261	"	"	16.2		16.6		チャートの粗粒砂を多く含む。	内面にぶい褐色、外面明赤褐色。口縁部外面に幅約1.5cmの粘土帯を貼付し、下端に刻目。体部内外面はハケ状工具によるナデ調整。	外面被熱変色、煤付着。やや激しく煤ける部分あり。
"	262	"	"	14.0				チャートの粗粒砂を多く含む。	内面黄灰色、外面にぶい黄色。口縁部外面に幅約1.6cmの粘土帯を貼付する。粘土帯外面には指頭圧痕残る。外面はハケ状工具によるナデ調整を施す。	
"	263	"	"	16.8				チャートの粗粒砂を少量含む。	外面にぶい橙色。口縁部外面に粘土紐を貼付。肩部に右下がりの列点文。内外面ハケ調整。	外面煤付着。
"	264	"	壺	11.7				チャートの粗粒砂を多く含む。	外面灰白色。口縁端部に円形浮文。口縁部外面タテハケ調整。肩部に櫛描直線文+浮文。	
"	265	"	"	16.2				チャートの粗粒砂を多く含む。	外面にぶい橙色。口縁部外面に幅約2.2cmの粘土帯を貼付し、下半部にヘラ状工具により刻目を施す。口縁端部はヨコナデにより外反させる。	
"	266	"	"	10.3				チャートの粗粒砂を多く含む。		
"	267	"	"	8.0				直径5mm大の砂粒を含む。	外面橙色。	
"	268	"	底部				5.2	チャートの粗粒砂を多く含む。	内面にぶい赤褐色、外面灰赤色。	
"	269	"	鉢	9.4		11.0		チャートの中粒砂を多く含む。	内面灰色、外面浅黄色。	
73	270	SK 9	甕	16.0				チャートの粗粒砂を多く含む。	内外面にぶい黄橙色。口縁部外面に幅約1.5cmの粘土帯を貼付し、口唇部にヨコナデ調整を施す。	
74	271	SX 1	"			18.0		チャートの粗粒砂を多く含む。	外面にぶい黄橙色。肩部に櫛描直線文を施し、櫛描直線文直下に列点文を施す。	
75	272	SD11	壺	13.0				チャートの中粒砂を多く含む。	内面灰色、外面明褐色。	
"	273	"	"	18.0				チャートの粗粒砂を多く含む。	内面褐灰色、外面にぶい黄橙色。口縁部外面に幅約1cmの粘土帯を貼付。粘土帯外面に列点文。	
"	274	"	"	23.0				直径5mm大の砂粒を含む。	内面橙色、外面にぶい黄橙色。内外面横方向のナデ調整。口唇部に退化した凹線を2条巡らす。	
"	275	"	底部				3.0	チャートの粗粒砂を少量含む。	内面オリーブ色、外面にぶい黄橙色。底部外面中央は若干上げ底。内外面ナデ調整。	

遺物観察表（弥生土器）

Fig. No.	図版番号	出土地点・層位	器種	法量 (cm)				胎土	特徴	備考
				口径	器高	胴径	底径			
"	276	"	底部				5.0	チャートの粗粒砂を多く含む。	内面にぶい黄橙色。外面にぶい橙色。	
"	277	"	"				4.0	チャートの粗粒砂を多く含む。	内外面橙色。	
"	278	"	"				5.6	チャートの粗粒砂を多く含む。	内面にぶい橙色、外面灰褐色。	外面は被熱変色。
76	279	SD12	甕	12.0				チャートの粗粒砂を多く含む。	内面浅黄色、外面橙色。口縁部外面に幅約1.2cmの粘土帯を貼付。	
"	280	"	"	17.0				チャートの粗粒砂を多く含む。	内外面灰色。口縁部外面に幅約1.6cmの粘土帯を貼付。頸部に櫛描直線文。	
"	281	"	"	17.8				チャートの粗粒砂を多く含む。	内外面灰色。口縁部外面に幅約1~1.7cmの粘土帯を貼付。頸部~肩部に櫛描文+浮文。内面ナデ調整。	
"	282	"	"	17.4				チャートの小礫を多く含む。	内外面橙色。口縁部外面に幅約2cmの粘土帯を貼付する。内外面ナデ調整。	外面の一部に煤が付着。
"	283	"	底部				7.0	チャートの粗粒砂を多く含む。	内面灰色、外面橙色。外面ナデ調整。	
77	285	P6	壺	17.0				チャートの粗粒砂を多く含む。	内面にぶい褐色、外面橙色。口縁端部に断面形三角形の粘土帯を貼付。	
"	286	P5	"	18.0				チャートの粗粒砂を多く含む。	内外面にぶい黄橙色。口縁端部に断面形三角形の粘土帯を貼付。	
"	287	包含層	甕	16.0				チャートの中粒砂を多く含む。	内面灰白色、外面黄灰褐色。外面縦方向のハゲ調整。内面横方向のナデ調整。	外面煤ける。
"	288	"	壺	14.5				チャートの粗粒砂を多く含む。	内面外面にぶい褐色。外面横方向のナデ調整。	
"	289	"	甕	18.2				チャートの粗粒砂を多く含む。	外面オリーブ黒色。口縁部外面に幅約1.8cmの粘土帯を貼付。粘土帯外面に列点文。	外面煤付着。
"	290	"	壺	12.2				チャートの粗粒砂を多く含む。	内面にぶい橙色、外面橙色。口縁部外面に幅約1.4cmの粘土帯を貼付。内外面横方向のナデ調整。	外面煤ける。
"	291	"	甕	16.0				チャートの中粒砂を多く含む。	内外面にぶい黄色。口縁部外面に幅約2cmの扁平な粘土帯を貼付。内外面横方向のナデ調整。	
"	292	"	"	26.6				チャートの粗粒砂を多く含む。	内外面褐灰色。口縁部外面に幅約2.5cmの粘土帯を貼付。粘土帯外面に列点文、口唇部には2条の凹線文。頸部と胴部の境に列点文。内外面横方向のナデ調整。	
"	293	"	"	18.8				チャートの中粒砂を多く含む。	内外面橙色。口縁部外面に断面形扁平な三角形の粘土帯を貼付。頸部と胴部の境に列点文。	
"	294	"	壺	14.8				チャートの粗粒砂を多く含む。	外面オリーブ黒色。口縁部外面に幅約2.2cmの粘土帯を貼付。	

遺物観察表（弥生土器）

Fig. No.	図版番号	出土地点・層位	器種	法量（cm）				胎土	特徴	備考
				口径	器高	胴径	底径			
"	295	"	壺	12.0				チャートの粗粒砂を多く含む。	外面にぶい橙色。口縁部外面に幅約2cmの粘土帯を貼付。粘土帯外面に列点文。外面縦方向のハケ調整。	
"	296	"	底部				8.0	チャートの粗粒砂を多く含む。	内面にぶい黄橙色、外面灰黄色。内外面ナデ調整。	
"	297	"	底部				7.0	チャートの粗粒砂を多く含む。	内面にぶい橙色、外面黄褐色。	外面若干煤ける。
"	298	"	底部				6.0	チャートの粗粒砂を多く含む。	内面灰色、外面暗灰黄色。外面ナデ調整。	外面被熱変色。
"	299	"	底部				8.0	チャートの粗粒砂を多く含む。	内外面にぶい黄橙色。内外面ナデ調整。	
"	300	"	底部				10.4	チャートの粗粒砂を多く含む。	内外面にぶい橙色。内面ナデ調整。外面底部付近縦方向のハケ調整、その他はナデ調整。	
"	301	"	底部				6.4	チャートの粗粒砂を多く含む。	内外面明黄褐色。上げ底。	
"	302	"	底部				8.0	チャートの粗粒砂を多く含む。	内外面オリーブ黒色。	
"	303	"	底部				6.0	チャートの粗粒砂を比較的多く含む。	内面灰色、外面灰白色。内外面ナデ調整。	
"	304	"	底部				6.0	チャートの粗粒砂を多く含む。	内外面にぶい黄橙色。内外面ナデ調整。	
"	305	"	底部				6.0	チャートの粗粒砂を多く含む。	内面にぶい黄橙色、外面灰褐色。内外面ナデ調整。	外面被熱変色、煤付着。
"	306	"	底部				5.4	チャートの粗粒砂を多く含む。	内面褐灰色、外面灰黄褐色。内外面ナデ調整。	外面被熱変色。
"	307	"	高杯				11.0	チャートの粗粒砂を多く含む。	内面黒色、外面浅黄橙色。	

遺物観察表（木製品）

Fig.No.	図版番号	出土地点・層位	器種	法量（cm）			特徴	備考
				長さ	幅	厚さ		
51	189	SB 2 -P 4	柱痕	64.1	11.3	11.2		



遺物観察表（弥生石器）

Fig. No.	図版番号	出土地点・層位	器種	法量 (cm・g)				石材	特徴	備考
				長さ	幅	厚さ	重さ			
5	1	試掘 (13G)	石包丁	7.5	5.0	0.7	48.3	粘板岩	3分の1が欠損。両刃風片刃、両主面とも部分的に研磨による擦痕が見られる。	
"	2	" (2G)	石鏃	3.6	2.1	0.5	3.3	サヌカイト	凹基式。	
14	40	A区 SK 2	叩石	11.6	7.9	3.2	428	石英粗面岩	両主面中央部に叩き痕あり。	
"	41	"	"	12.3	5.7	5.5	1160	"	一方の主面と先端部に叩き痕あり、他の主面に研磨痕。	
15	46	A区 SK 3	磨石	7.8	6.8	2.4	209	"	両主面に研磨痕。	
19	84	A区 SD 5	石鏃	3.1	1.6	0.4	2.0	サヌカイト	基部欠損。	
28	115	B区 SD16	叩き石	13.0	10.6	5.6	1120.0			
"	116	B区 SD16	砥石	16.7	9.7	4.5	1050.0	砂岩製	全面打割り。一面の一部が使用により平滑。	
32	136	B区 包含層	石鏃	2.3	1.9	0.3	2.0	結晶片岩	石鏃欠損品か。両面に主剥離面を残す。	
"	137	"	扁平片刃石斧			1.0		砂岩	刃部は鋭く研ぎ出されている。	
39	157	c区 SD13	砥石	10.0	5.8	4.4	380	石英粗面岩	両面に使用痕あり。	
40	169	c区 SD14	叩石	11.0	6.9	3.1	370	"	両面中央部に叩き痕あり。側縁の一部にも叩き痕あり。	
41	175	c区 SD15	砥石	25.0	12.3	3.8	2030	砂岩	両主面・片側面に使用痕あり。	
42	180	c区 P 4	砥石	10.9	9.2	5.7	715	石英粗面岩	主面のみに使用痕あり。	
43	188	c区 包含層	叩石	9.8	6.5	3.0	270	"	両面中央部に叩き痕あり。	
52	201	区	石鏃	5.0	2.2	0.6	7.1	サヌカイト	平基式。片面に主剥離面を残す。刃部は両面から押圧剥離を行う。	
"	202	A区	"	2.0	1.8	0.3	1.9	"	凹基式。基部の一部が欠損。両面に主剥離面を残す。刃部は両面から押圧剥離を行う。	
"	203	A区	砥石	13.8	10.1	6.0	1000.0			
56	211	B区 表採		5.8	3.8	0.5	18.1	緑泥片岩	もとは磨製石包丁か。再利用。長側縁に研磨面がわずかに残る。	
61	224	b区 SK 5	石包丁	11.6	4.8	0.8	70.9	粘板岩		
64	244	b区 SD 8	叩石	11.3	9.4	5.2	820	石英粗面岩	両面中央部に叩き痕あり。	
76	284	c区 SD12	叩石	10.8	8.8	3.3	407	"	"	
77	308	c区 包含層	叩石	15.3	10.5	4.5	1120	"	片面中央部に叩き痕あり。	
77	309	c区 包含層	叩石	11.0	9.5	3.2	515	"	両面中央部に叩き痕あり。	
77	310	c区 包含層	叩石	13.8	5.0	4.7	520	"	両先端部に叩き痕あり。	

遺物観察表（縄文土器）

Fig. No.	図版番号	出土地点・層位	器種	分類	法量（cm）			胎土	特徴	備考
					口径	胴径	底径			
80	311	B区層	浅鉢	類	25.3			石英、チャートの細粗粒砂、雲母を含む。	内外面灰黒色、断面白。極めて堅致。口縁部内外面、胴部外面丁寧なヘラミガキ。胴部内面削り+ナデ調整。	
"	312	"	"	"	25			石英、チャート、長石、雲母の細粒砂を含む。	内外面茶色、断面黒。極めて堅致。外面磨耗、胴部内面横方向のヘラ削り+ナデ。	
"	313	"	"	"	36			チャートの細粒砂、雲母を多く含む。	口縁部内外面、胴部外面丁寧なヨコヘラミガキ。	
"	314	"	"	類				チャートの細粒を多く含む。	内外面黒、断面灰色。外面ヘラミガキ、内面横方向のナデ調整。	内面煤け
"	315	"	"	類				チャートの細粒を多く含む。	内外面茶、断面黒。蝶ネクタイ状の突起を有す。外面ヘラミガキ。	
"	316	"	"	類	36	37		チャート、頁岩、雲母の細粒を含む。	内外面茶色。口縁部内面に段を有す。内外面丁寧なヘラミガキ。	
"	317	"	"	類				精選された胎土、雲母細粒を多く含む。	内外面黒。	
"	318	"	"	類	30.3	29.8		チャートの細粒、雲母を多く含む。	内外面黒。口縁部内面にしっかりした沈線。口縁部内外面横位条痕後にヘラミガキ、体部外面縦方向の丁寧なヘラミガキ。	
"	319	"	"	b類				石英粒を含む。	内外面黒。内外面ヘラミガキ。	
"	320	"	"	a類	32.0			石英粒を多く含む。雲母少量、シャーモットあり。	内外面灰黄色。内外面丁寧な横方向ヘラミガキ。	
"	321	"	"	a類				長石、角閃石の細砂粒を多く含む。	内外面茶色。内外面横方向のナデ調整。	
"	322	"	"	"				精選された胎土。	内外面淡茶色、断面黒。内外面横方向のヘラミガキ。	
"	323	"	"	類				精選された胎土、雲母細粒を多く含む。	内外面濃茶色。内外面横方向のヘラミガキ。	
"	324	"	"	"	36.0			精選された胎土、角閃石、雲母細粒を多く含む。	内外面黒。内外面横方向のヘラ削り+丁寧な横方向のヘラミガキ。	
"	325	"	"	a類	30.0			精選された胎土、雲母細粒を多く含む。	内外面黒。内外面ヘラミガキ+赤彩。	全面赤彩
"	326	"	"	a類				チャートの砂粒を含む。	内外面灰褐色。山形突起あり。内外面横方向のヘラミガキ。	内外面煤け
"	327	"	"	類	26.6			精選された胎土、雲母細粒を多く含む。	内外面黒褐色。内外面横方向のヘラミガキ。	
"	328	"	"	類				精選された胎土、雲母細粒を多く含む。	内外面茶色。鱗状突起を有す。内外面横方向のヘラミガキ。	

遺物観察表（縄文土器）

Fig. No.	図版番号	出土地点・層位	器種	分類	法量 (cm)			胎土	特徴	備考
					口径	胴径	底径			
"	329	"	"	b類				石英、雲母、角閃石を含む。	内外面暗灰黄色。内外面丁寧な横方向のヘラミガキ。	
"	330	"	"	c類				チャート、雲母の砂粒を含む。	内外面灰黒色、断面黒。内面横方向のヘラ削り+横方向ヘラミガキ。外面体部上位右 左のヘラ削り。下位左上がりのヘラ削り。	
80	331	B区層	浅鉢			28		チャート、他の砂粒を含む。	内外面灰茶色。内外面横方向のヘラミガキ。外面火襷状を呈す。	
"	332	B区層	"	a類				チャート、石英粒を含む。	内外面灰黄色。波状口縁部を有し波頂部に太い刺突文あり。波頂部下に径3mmの焼成後穿孔あり。内外面丁寧な横方向のヘラミガキ。	
81	333	"	"	類	26.6			チャート、他の砂粒を含む。	内外面黄灰色。内外面ヘラミガキ。	
"	334	"	"			16.0		石英、チャート、雲母を多く含む。	外面黒褐色、内面茶褐色、断面灰茶色。外面ヘラミガキ、内面ナデ調整。	
"	335	"	"	類				精選された胎土。角閃石、雲母を含む。	内外面黒。内面横方向のヘラ削り+ナデ、外面横方向のヘラ削り+横方向のヘラミガキ。	
"	336	"	"	類	26.6			精選された胎土、雲母を含む。	内面にぶい黄褐色、外面灰黄褐色。内外面ナデ調整。	
"	337	"	"	類	14.5			石英砂粒、雲母を多く含む。	内外面黒。外面丁寧なヘラミガキ、内面横方向のナヘラ削り+ヘラミガキ。	
"	338	"	"	類				精選された胎土。	内外面黒。山形突起を有す。内外面丁寧なヘラミガキ。	
"	339	"	"	"	30.0			精選された胎土、雲母を多く含む。	内外面黒褐色。内外横方向のヘラミガキ。	
"	340	"	"			20.0		チャート、他の細粗粒砂を含む。	内外面灰色。下胴部に段あり。内面横方向の擦痕+ヘラミガキ、外面ヘラミガキ。	外面煤け
"	341	"	"	類	32.0			チャートの細粒・雲母を多く含む。	内外面茶灰色。内外面横方向のヘラミガキ。	
"	342	"	深鉢	B類	25.0			チャートの粗粒砂を多く含む。	内外面灰褐色。内面横位条痕+ナデ、外面横位条痕	外面煤け
"	343	"	"	A類				チャートの粗粒砂を多く含む。	内外面灰褐色。口唇細い刻み目。内外面ナデ調整。	外面煤け
"	344	"	"	B類				"	内外面黄灰色。外面二枚貝条痕。	
"	345	"	"	A類				"	内外面黄灰色。口唇には押圧による刻み目。内外面ナデ調整。	
"	346	"	"	"				"	内外面灰白色。口唇は棒状工具によるしっかりとした刻みを施す。外面ナデ、内面は最大1.3cm幅の強いナデのあとが残る。	

遺物観察表（縄文土器）

Fig. No.	図版番号	出土地点・層位	器種	分類	法量（cm）			胎土	特徴	備考
					口径	胴径	底径			
"	347	"	"	A類	32.6			"	内外面灰白色。口唇刻みは棒状工具で深くしっかりと刻む、口縁部内面沈線。内面横位条痕+ナデ、外面横位条痕。	
"	348	"	"	"				"	内外面灰色。内面ナデ、外面横位の荒いハケ調整。	
"	349	"	"	B類	37.0			チャート、風化礫を多く含む。	内外面灰色。外面横位条痕、内面ナデ調整。	外面煤け
"	350	"	"	A類				チャートの粗粒砂を多く含む。	口唇刻みは刺突状をなす。外面横位条痕、内面横方向のナデ。	内外面煤け
"	351	"	"	B類				チャート、他の砂粒を含む。	内外面暗灰黄色。内面横位擦痕（左右）、外面条痕調整。	
"	352	"	"	"	36.0			チャートの粗粒砂を多く含む。	内外面灰白色。内外面ナデ調整。	外面煤け
"	353	"	"	"				チャート、他の砂粒を含む。	内外面灰黄色。外面木目の荒いハケを横位に施す。	
82	354	B区層	深鉢	B類	14.0			チャート、他の砂粒を含む。	内外面灰色。内外ナデ調整。外面にヘラ描き文様あり。	
"	355	"	"	"	22.0			チャート、他の砂粒を多く含む。	内外面灰白色。口縁端部を摘み出す。内面ナデ、外面板状原体による横方向のナデ。	
"	356	"	"	A類	17.0			チャート、他の砂粒を多く含む。	内外面灰色。口唇刻みは間隔をあけた弱いもの。外面（左右）の擦痕、内面ナデ調整。	
"	357	"	"	B類	25.4			チャートの砂粒を多く含む。	内外面灰褐色。口唇面取り。外面細かい条痕が横に走る。	
"	358	"	"	"	30.0			チャートの粗粒、小礫を多く含む。	内面にぶい黄橙色。外面横方向条痕、内面条痕+ナデ調整。	外面煤け
"	359	"	"	A類	25.0			チャートの粗粒砂を多く含む。	内外面黄灰色。口唇刻みは横方向に弱く付ける。口縁部内面刺突文。内外面ナデ調整。	
"	360	"	"	B類	15.0			チャートの粗粒砂を多く含む。	内外面褐灰色。内面ナデ、外面横方向の条痕。	
"	361	"	"	"				チャートの粗粒砂を多く含む。	内外面灰黄色。内外面横方向のナデ調整。	外面煤け
"	362	"	"	A類				チャートの粗粒砂を多く含む。	内外面灰色。口唇内外面に楕円形状の極浅い押圧あり。外面横方向の条痕、内面ナデ調整。	
"	363	"	"	A類	16.0			チャートの粗粒砂を多く含む。	内外面黄褐色。口唇刻みは棒状工具。外面横位条痕、内面ナデ調整。	
"	364	"	"	A類				チャートの粗粒砂を多く含む。	内外面灰黄色。口縁部内面沈線。外面横方向の条痕、内面ナデ調整。	

遺物観察表（縄文土器）

Fig. No.	図版番号	出土地点・層位	器種	分類	法量 (cm)			胎土	特徴	備考
					口径	胴径	底径			
"	365	"	"	B類	11.0			チャートの粗粒砂を多く含む。	内外面褐灰色。内外面横方向のナデ調整。	外面煤け
"	366	"	"	A類				チャートの粗粒砂を多く含む。	内面暗灰色、外面オリーブ黒色。口唇刻みは太く深い。外面右下がりの条痕、内面ナデ調整。	"
"	367	"	"	B類				チャート、他の砂粒を多く含む。	内外面黒褐色。外面横位条痕、内面ナデ調整。	
"	368	"	"	A類				石英粒の砂粒を多く含む。	内外面灰色。口唇刻みはヘラ状原体で口唇に垂直に施す。断面に内傾接合による幅2cmの粘土紐の単位を認める。	外面煤け
"	369	"	"					石英の粗・細粒砂を含む。	外面暗灰色、内面オリーブ黒色。上胴部に 状の列点文。	内外面煤け
"	370	"	"	深鉢底部			5.5	チャートの粗粒砂を多く含む。	内外面灰褐色。上げ底。内外面ナデ調整。	
"	371	"	"	"			6.0	チャートの粗粒砂を多く含む。	内外面灰褐色。上げ底。内面八ヶ状原体による八ヶ調整、外面ナデ調整。	
"	372	"	"	浅鉢底部			4.0	石英、他の細粗粒砂を多く含む。	内面黒褐色、外面茶色、断面黒褐色。内面ナデ、外面下 上のヘラ削り。	外面煤け
"	373	"	"	深鉢底部			6.2	チャート、他の砂粒を多く含む。	上げ底。	
83	374	B区 斜面堆積	浅鉢	類				チャート、雲母砂粒を多く含む。	内外面黒色。外面ヘラミガキ。	
"	375	"	"	"			15.4	角閃石を多く含む	内外面黒色。内外面横方向のヘラミガキ。	
"	376	"	深鉢	B類				チャートの粗粒砂を多く含む。	内外面ナデ調整。	外面煤け
"	377	"	浅鉢	c類	28.0			精選された胎土、雲母を多く含む。	内外面暗灰黄色。内外面ヘラミガキ。	
"	378	"	"	"				精選された胎土、雲母を多く含む。	内外面灰褐色。内外面ヘラミガキ。	
"	379	"	"	類			30.0	精選された胎土、雲母を多く含む。	"	
"	380	"	"	"			23.6	チャート、他の粗粒砂を多く含む。	内外面黒色。頸部内外面、胴部内面横方向ヘラミガキ。胴部外面左 右削り。	
"	381	"	"	類			30.0	精選された胎土、雲母を多く含む。	内面黄灰色、外面黄褐色。内外面ヘラミガキ。	
"	382	"	"	"			32.0	角閃石、雲母を多く含む。	内外面黄灰色。	

遺物観察表（縄文土器）

Fig. No.	図版番号	出土地点・層位	器種	分類	法量 (cm)			胎土	特徴	備考
					口径	胴径	底径			
"	383	"	浅鉢	類	25.0	26.0	精選された胎土	内外面暗褐色。内外面ヘラミガキ。		
"	384	"	"	類	26.6	31.0	チャート、雲母砂粒を多く含む。	内外面黄茶色、断面黒色。横方向ヘラミガキ、肩部内面擦痕。		
"	385	"	"	a類	38.0		精選された胎土	内外面黄灰色。内外面ヘラミガキ。		
"	386	"	"	類	39.0		チャート、雲母を含む	内外面黒色。外面丁寧なヘラミガキ、内面ナデ調整。		
"	387	"	"	類	44.0		精選された胎土	内外面黒色。内外面横方向ヘラミガキ。		
"	388	"	深鉢	A類			チャートの砂粒を多く含む。	内外面黄灰色。口唇刻みは棒状工具による。口縁部内面沈線。外面横位条痕、内面ナデ調整。	外面煤け	
"	389	"	"	"			"	口唇刻みは深くしっかり刻む。外面横位条痕、内面横位擦痕。		
"	390	"	"	B類			"	内面灰色、外面灰黄色。口縁部内面に刺突文。内外面横方向のナデ調整。		
"	391	"	"	A類			"	内外面灰色。口唇刻みは深くしっかり施す。口縁部内面に沈線。外面横位条痕。	外面煤け	
"	392	"	"	"			"	内外面灰黄色。口唇刻みは外側にしっかりと施す。外面横位条痕、内面条痕をナデ消す。	"	
"	393	"	"	B類			"	内外面にぶい橙色。外面擦痕、内面横方向のナデ。	"	
84	394	"	"	A類	26.6		"	内面灰白色、外面黄橙色。口唇刻みは深くしっかりしている。内外面調整不明。		
"	395	"	"	"	20.0		"	口唇刻みは深くしっかりしている。口縁部内面沈線。外面横位条痕、内面ナデ調整。焼成後2ヶ所に穿孔。		
"	396	"	"	"	28.2		"	内外面灰色。口唇刻みは棒状工具で深くしっかりと施す。外面横位条痕、内面繊維状の原体で横方向のナデ調整。	外面煤け	
"	397	"	"	B類	19.4		"	内外面灰色。断面に2~3cm幅の粘土紐の単位を認める。横方向のハケ調整。	"	
"	398	"	"	"	25.0		"	内外面灰褐色。外面横位条痕+ナデ調整、内面ナデ調整。	外面煤け	
"	399	"	"	"	27.8		"	内面灰白色、外面橙色。内外面繊維状の原体で横方向のナデ。		
"	400	"	"	A類	22.0		チャート、長石の細粒を含む。	内外面明灰黄色。口唇部内外面に細く弱い刻みを施す。口縁部内面に弱い沈線。横位条痕、内面ナデ調整。		

遺物観察表（縄文土器）

Fig. No.	図版番号	出土地点・層位	器種	分類	法量 (cm)			胎土	特徴	備考
					口径	胴径	底径			
84	401	"	深鉢	B類	22.0			チャートの砂粒を多く含む。	内外面灰褐色。内外面ナデ調整。	内外面被熱赤変
"	402	"	浅鉢	類	18.0			チャート、風化礫の粗粒を多く含む。	暗灰色。外面に沈線による文様を施す。	
"	403	"	深鉢	A類	39.0			チャートの小礫を含む。	内外面褐灰色。口唇刻みは細い。外面横位捺痕、内面ナデ調整。	外面煤け
"	404	"	"	類				チャートの砂粒を多く含む。	内外面黄灰色。刻目突帯文、口唇刻みを有し両者ともにD状にしっかり刻む。外面ハケ状原体による横方向のナデ	
"	405	"	"	"	44.4			チャートの小礫、砂粒を含む。	内面黄灰色、外面明黄褐色。刻目突帯の刻みは棒状工具で深くしっかりと施す。突帯の上端に細い沈線あり、口唇刻みなし。口縁部内外面ナデ、胴部外面横位捺痕。	
"	406	"	"	"				チャートの砂粒を多く含む。	内外面灰黒色。刻目突帯は半截竹管状工具で刺突。口唇刻みなし。内外面横方向のナデ調整。	
"	407	"	"	"				チャート、風化礫の粗粒を多く含む。	内外面灰黄褐色。刻目突帯は逆D字の刻み、口唇刻みあり。内外面横方向のハケ調整。	
"	408	"	"	"				チャートの砂粒を多く含む。	内外面灰黄色。刻目突帯、口唇刻みともにD字でしっかり施文。調整不明。	
"	409	"	"	"				"	内外面灰黄色。刻目突帯、口唇刻みともにD字でしっかり施文。外面横位の擦痕が。	
"	410	"	底部				9.3	"	淡茶色。弥生前期壺底部の可能性大。	深鉢胎土とは異なる。
88	422	C区 斜面堆積	浅鉢	c類				チャート、雲母を含む。	内面灰黄褐色、外面黒褐色。内外面横方向ヘラミガキ。	
"	423	"	"	"				チャート、石英、他の砂粒を含む。	内外面横方向ヘラミガキ。	
"	424	"	"	"				石英、角閃石、雲母粒を多く含む。	内面灰黄褐色、外面灰褐色。内外面丁寧な横方向ヘラミガキ。	
"	425	"	"	"				精選された胎土、雲母を多く含む。	内外面茶色。	外面煤け
"	426	"	"	a類				チャート、長石、他の砂粒を多く含む。	内外面茶色。内外面横方向ヘラミガキ。	
"	427	"	"	類				精選された胎土	内外面黒色。口縁部内外面、胴部外面横方向ヘラミガキ、胴部内面横方向擦痕。	
"	428	"	"	b類				精選された胎土	内外面茶色。内外面横方向ヘラミガキ。	
"	429	"	"	類				精選された胎土、雲母を多く含む。	内外面黒色。外面横方向ヘラミガキ、内面横位擦痕。	

遺物観察表（縄文土器）

Fig. No.	図版番号	出土地点・層位	器種	分類	法量（cm）			胎土	特徴	備考
					口径	胴径	底径			
"	430	C区 斜面堆積	"	類				精選された胎土	内外面黒色。内外面横位擦痕+横方向ヘラミガキ。	
"	431	"	"	a類				チャートの粗・細粒砂を含む。	内外面灰色。内外面丁寧な横方向ヘラミガキ。鱗状突起を有する。	
"	432	"	"	類				精選された胎土	内外面黒褐色。内外面横方向ヘラミガキ。	
"	433	"	"	a類				チャート、他の砂粒を多く含む。	内面褐灰色、外面灰黄褐色。内外面横方向ヘラミガキ。	
"	434	"	"	b類				石英、雲母を含む。	内外面暗灰色。内外面横方向ヘラミガキ。	外面煤け
"	435	"	"	類				チャート、雲母粒を含む。	内外面にぶい黄橙色。鱗状突起を有す。調整不明	
"	436	"	"	"				精選された胎土	内外面灰黄色。内外面横方向ヘラミガキ。	
"	437	"	"	b類				チャート、他の砂粒を多く含む。	内外面灰褐色。内外面やや幅広い横方向ヘラミガキ。	
"	438	"	"	c類				チャート、雲母粒を含む。	内外面暗灰褐色。内外面横方向ヘラミガキ。	
"	439	"	"	b類	33.0			チャートなし、角閃石、長石の細粒砂を多く含む。	内外面黄灰色。内外面横方向の丁寧なヘラミガキ。	
"	440	"	"	"	21.6			精選された胎土、雲母を多く含む。	内外面褐灰色。内外面丁寧な横方向ヘラミガキ。	
"	441	"	"	類	25.4			"	内外面灰褐色。口縁部に鱗状突起と山形の突起を有す。内外面横方向の丁寧なヘラミガキ。	
"	442	"	"	類	24.0			角閃石、雲母、石英粒を多く含む。	内外面褐灰色。口縁部沈線。内外面丁寧なヘラミガキ。	
"	443	"	"	"		24.0		チャートなし、雲母、長石の細粒砂を多く含む。	内面灰褐色、外面黒褐色。外面縦方向ヘラミガキ、内面ナデ調整。	
"	444	"	"	c類	26.6			精選された胎土、雲母を多く含む。	内面暗黄灰色、黒褐色。外面横方向丁寧なヘラミガキ。	
"	445	"	"	類	35.0	39.0		雲母を多く含む	内外面黒色。内外面丁寧な横方向ヘラミガキ。	
"	446	"	"	類	39.2			精選された胎土、雲母を多く含む。	内外面黒褐色。鱗状突起を有す。口縁部内外面、胴部外面横方向ヘラミガキ。胴部内面横方向擦痕。	
89	447	"	"	a類	36.0			長石、風化礫、雲母を多く含む。	内外面茶色。内外面横方向ヘラミガキ。	



遺物観察表（縄文土器）

Fig. No.	図版番号	出土地点・層位	器種	分類	法量（cm）			胎土	特徴	備考
					口径	胴径	底径			
89	448	"	深鉢	類	36.0			チャートなし、雲母の細粒砂を多く含む。	内外面黒褐色。内外面横位擦痕+横方向へラミガキ。断面に内傾接合による2cm幅の粘土紐を認める。	
"	449	"	"	A類				長石細粒、チャートの粗粒を多く含む。	内外面暗灰色。口縁部内面に沈線。外面横位条痕、内面ナデ調整。	
"	450	"	"	"				チャートの粗粒砂を多く含む。	内外面灰茶色。外面横位条痕、内面横方向ナデ調整。	
"	451	"	"	A類				チャート、他の粗粒砂を多く含む。	内外面灰黄褐色。内外面横位条痕+ナデ調整。	
"	452	"	"	"				チャートの細粒砂を多く含む	内外面灰白色。口縁部内面に沈線。画面横位条痕、内面ナデ調整。	
"	453	"	"	"				チャート、他の粗粒砂を多く含む。	外面黄褐色、内面灰褐色。外面横位条痕、内面ナデ調整。	
"	454	"	"	"				チャートの粗粒砂を多く含む。	内外面暗灰褐色。口縁部内面に沈線。外面左 右の条痕、内面左 右の条痕+ナデ調整。	外面煤け
"	455	"	"	"				チャートの細粒砂を多く含む	内外面灰色。外面横位条痕、内面ナデ調整。	外面煤け
"	456	"	"	"				チャート、他の粗粒砂を多く含む。	内外面灰色。外面横位条痕、内面横位条痕+ナデ調整。	
"	457	"	"	"				チャートの粗粒砂を多く含む。	内外面灰色。波状口縁で内面に沈線。外面荒い横方向のナデ、内面横方向のナデ調整。	
"	458	"	"	"				チャート、他の粗粒砂を多く含む。	内外面灰色。口縁部内面沈線。内外面ナデ調整。	
"	459	"	"	"	27.0			チャート、他の粗粒砂を多く含む。	内外面灰色。口縁部内面半截竹管による双線。内外面横方向のナデ調整。	
"	460	"	"	"	33.5			"	内外面灰色。波状口縁。外面左 右の擦痕。	
"	461	"	"	"			6.0	石英、チャート、長石の小礫、粗粒砂を多く含む。	内外面灰白色。	外面煤け
"	462	"	"	"			6.0	チャートの小礫、粗粒砂を多く含む。	内外面にびい灰黄褐色。外面条痕。	"
"	463	"	"	"			6.5	チャート、他の小礫を多く含む。	内外面灰茶色。	外面煤け、被熱変色。
"	464	"	"	"			5.0	チャートの小礫、粗粒砂を多く含む。	内外面灰白色。内外面ナデ調整。	外面煤け

遺物観察表（縄文石器）

Fig. No.	図版番号	出土地点・層位	器種	法量 (cm・g)				石材	特徴	備考
				長さ	幅	厚さ	重さ			
85	411	C区 斜面	磨製 石斧	7.7	5.5	3.5	195	結晶片岩	基部欠損。全面に研磨痕あり。	
"	412	B区 層	"	11.2	6.9	1.9	206	緑色片岩	片方の主面に剥離痕を残す。	
"	413	"	"	8.9	4.6	1.7	96.5	蛇紋岩	刃部欠損。基部は丸みを帯びる。	
"	414	"	"	10.1	5.7	2.03	175	"	"	
"	415	"	"	10.4	6.5	2.3	265	"	基部・刃部ともに欠損。全面に成形時の剥離痕を残す。	
"	416	"	"	14.65	6.4	4.57	650	"	刃部欠損。主面に成形時の剥離痕を残す。基部に使用による叩き痕あり。	
"	417	B区 斜面	"	8.0	6.1	1.6	154.0	"	基部欠損。側縁部の一部に使用による叩き痕あり。	
86	418	B区 層	砥石	24.0	14.6	8.5	3500.0	砂岩	3面に使用痕。	
"	419	"	"	13.4	10.0	8.0	1135.0	"	2面に使用痕。	
"	420	"	叩石	13.6	10.4	5.9	1160.0	砂岩	一方の主面の中央部に叩き痕あり。	
"	421	"	"	8.1	10.9	5.7	740.0	"	側縁の一部に叩き痕あり。	
91	469	C区 斜面	磨製 石斧	5.3	4.3	1.0	41.3	蛇紋岩	基部欠損	
"	470	"	"	10.4	6.4	2.1	231.0	"	基部欠損。器面は丁寧に研磨されている。	
"	471	"	打製 石斧	13.3	5.4	2.1	200.0	頁岩	側縁に細かな調整剥離あり。	
"	472	"	"	12.0	5.1	1.8	153.0	緑色片岩	基部欠損、側縁に細かな調整剥離あり。	
"	473	"	石錘	11.0	7.3	2.2	275.0	片岩	両端を打欠く。	
"	474	"	"	10.4	6.9	1.6	178.0	石英粗面岩	両端を打欠く。	
"	475	"	砥石	10.5	9.7	7.7	1195.0	砂岩	1面に使用痕。	
92	476	"	叩石	12.0	9.8	3.4	585.0	"	領主面中央部に叩き痕あり。	
"	477	"	"	12.5	8.8	3.2	554.0	"	"	

# 写真图版





北高田遺跡周辺の航空写真（1960年代）

PL.2



調査前風景（東から）



同上（西から）



調査前風景（南から）



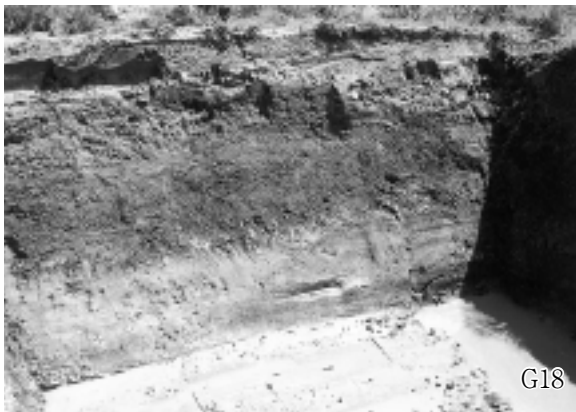
同上（西から）

PL.4

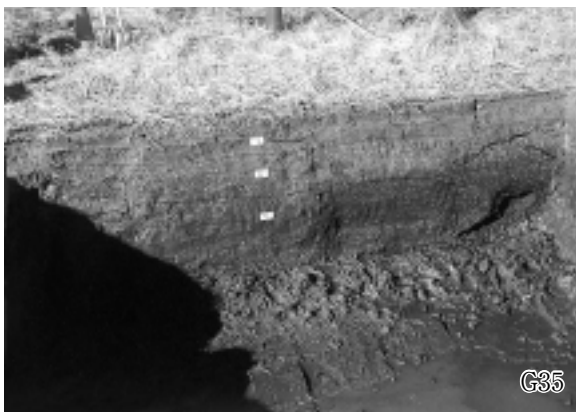


試掘グリッド - 1

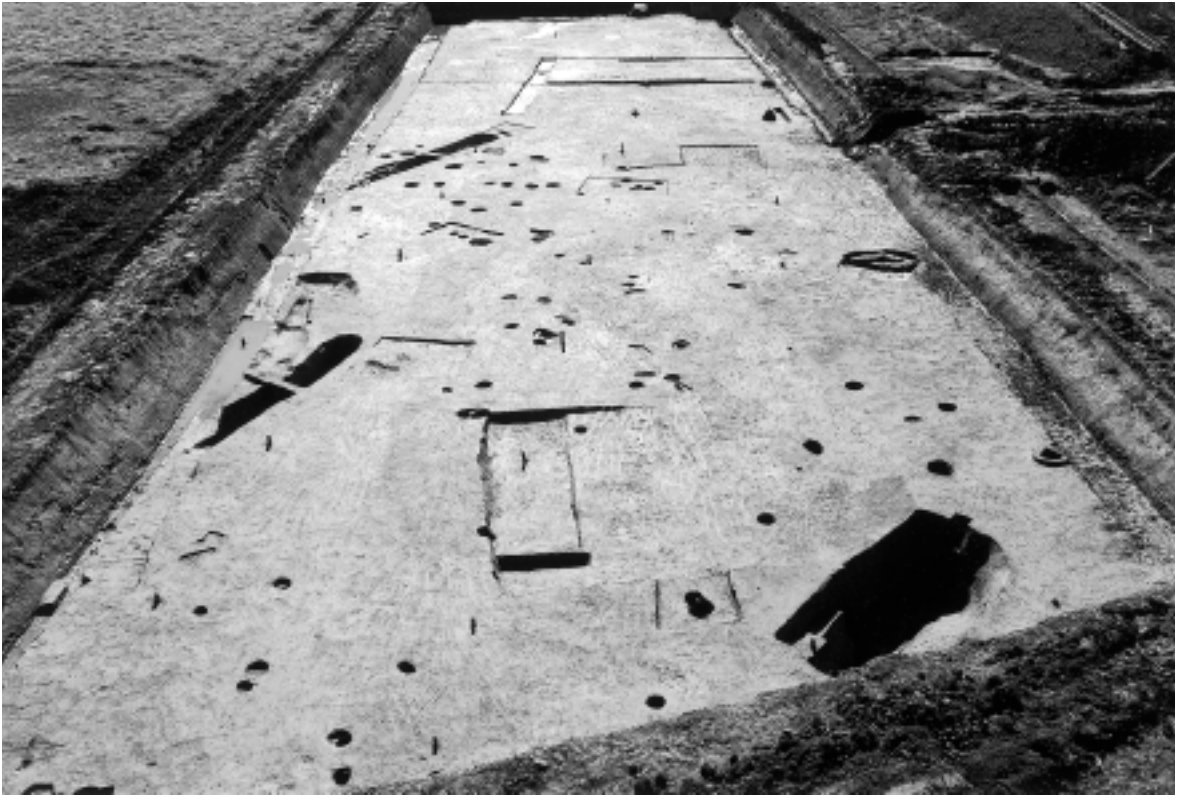




PL.6



試掘グリッド - 3



A区検出遺構全景（北から）



A区東壁セクション

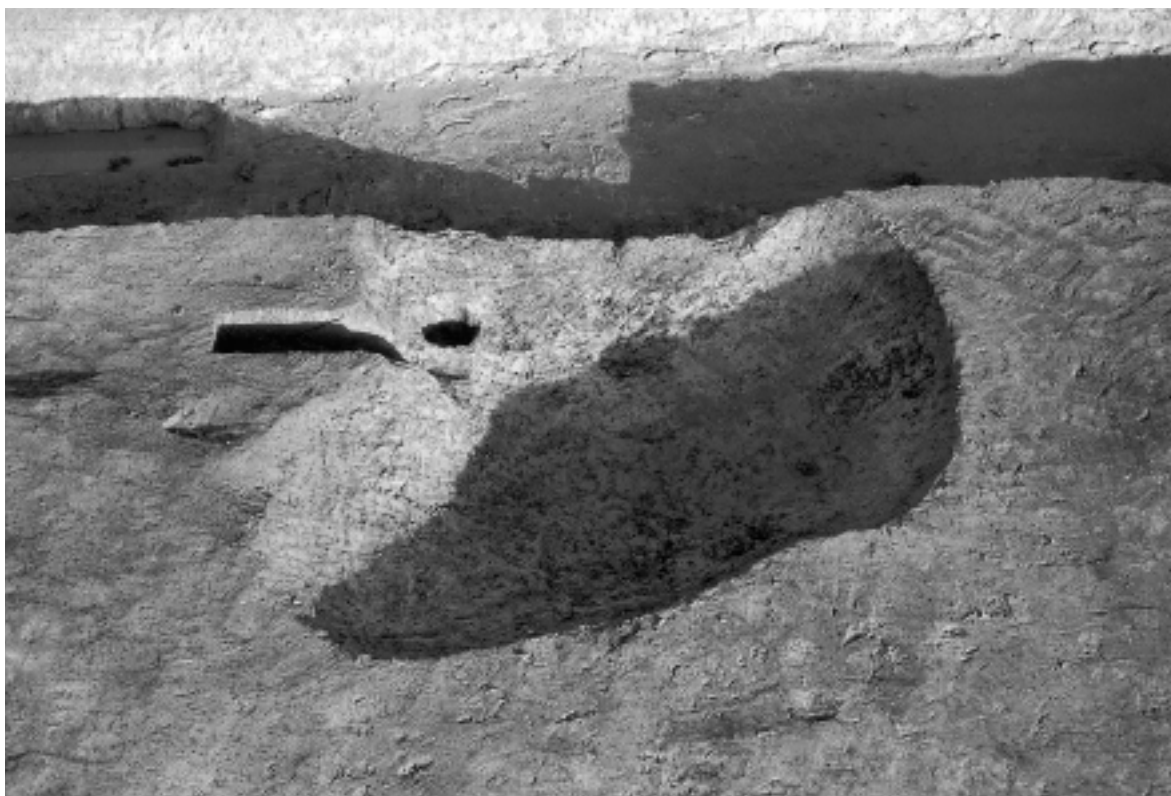
PL.8



A区北壁セクション



SK 1 遺物出土状況



SK 1 完掘状況



SK 2 遺物出土状況

PL.10



SD 3 遺物出土状況



同上



SD 4 遺物出土状況



同上

PL.12

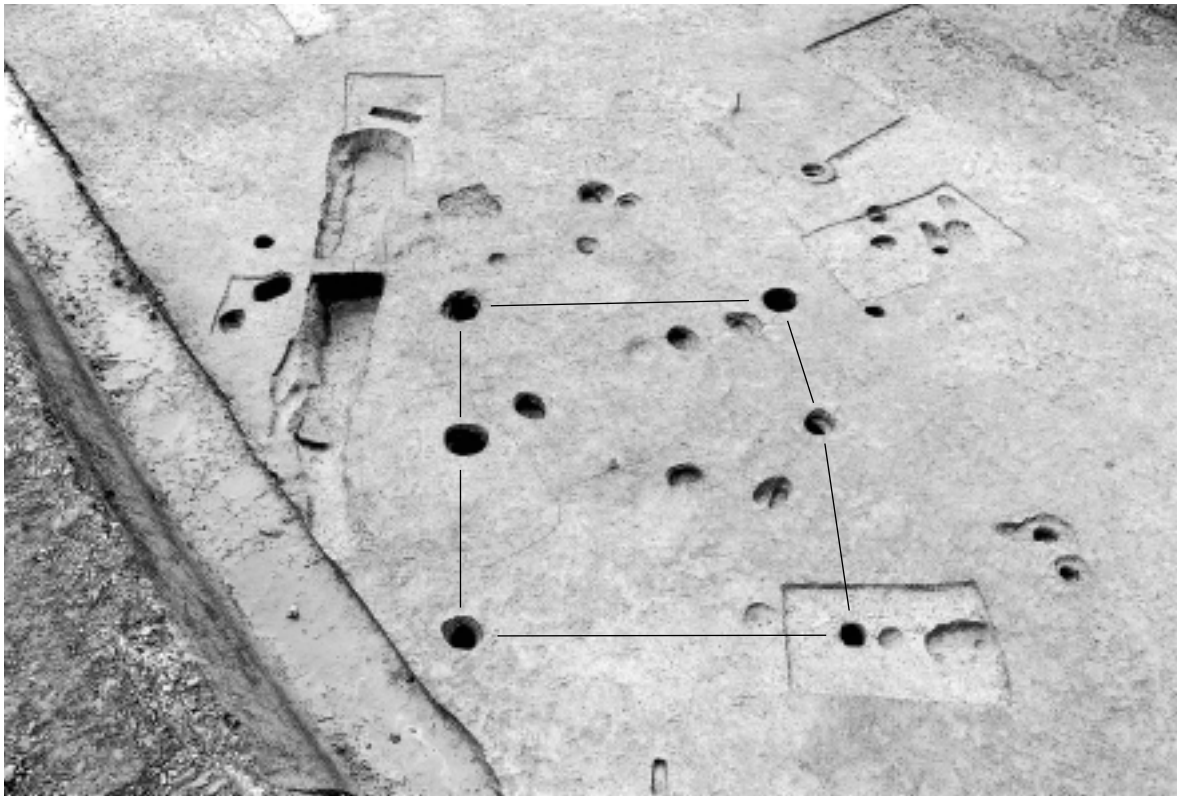


SD 5 遺物出土状況



SD 5 遺物出土状況





SD 5・SB 5 完掘状況



B区検出遺構全景（南から）

PL.14



B区SD19及びSP3 完掘状況（東から）



SD17遺物出土状況（北東から）



SD17遺物出土状況（北東から）



C区検出遺構全景（南西から）

PL.16



C区ST 1 完掘状況



C区ST 1 セクション



C区SD14遺物出土状況



C区SD15遺物出土状況

PL.18



C区P6 遺物出土状況



A区検出遺構全景（東から）



SB 1・SD 1 検出状況及び A区西壁

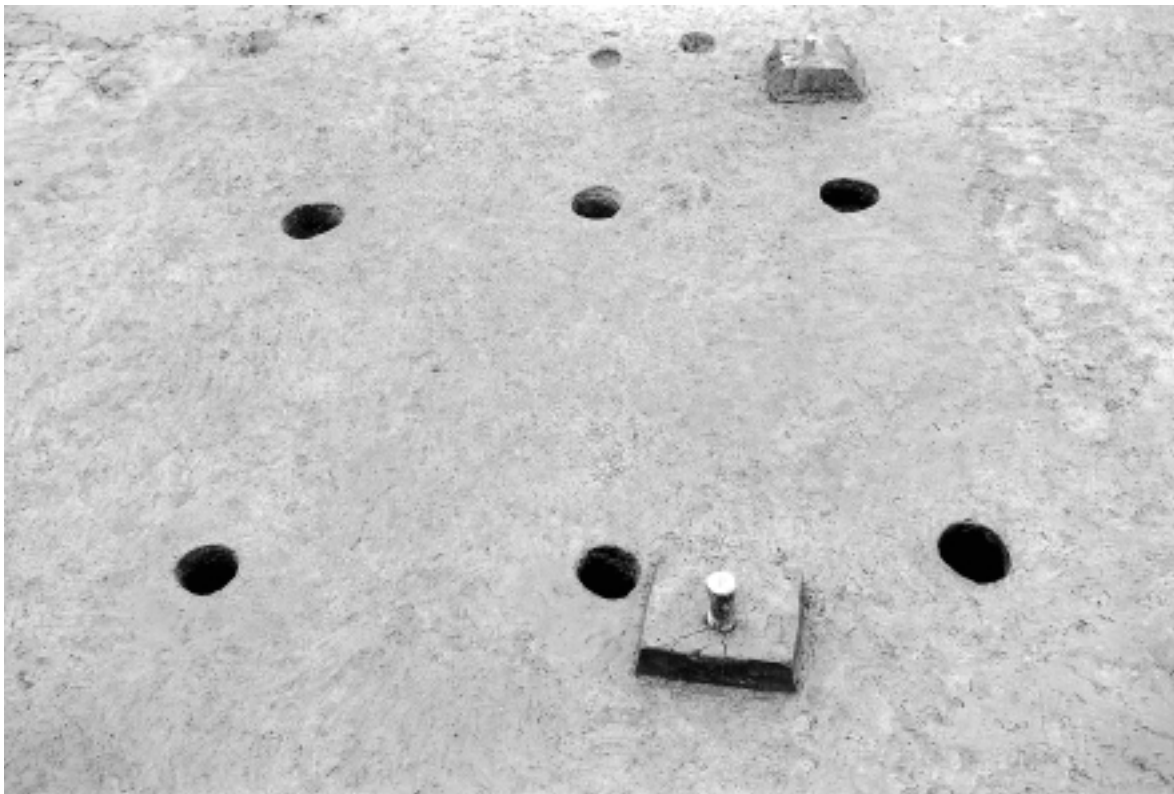


SD 2 遺物出土状況（北から）

PL.20

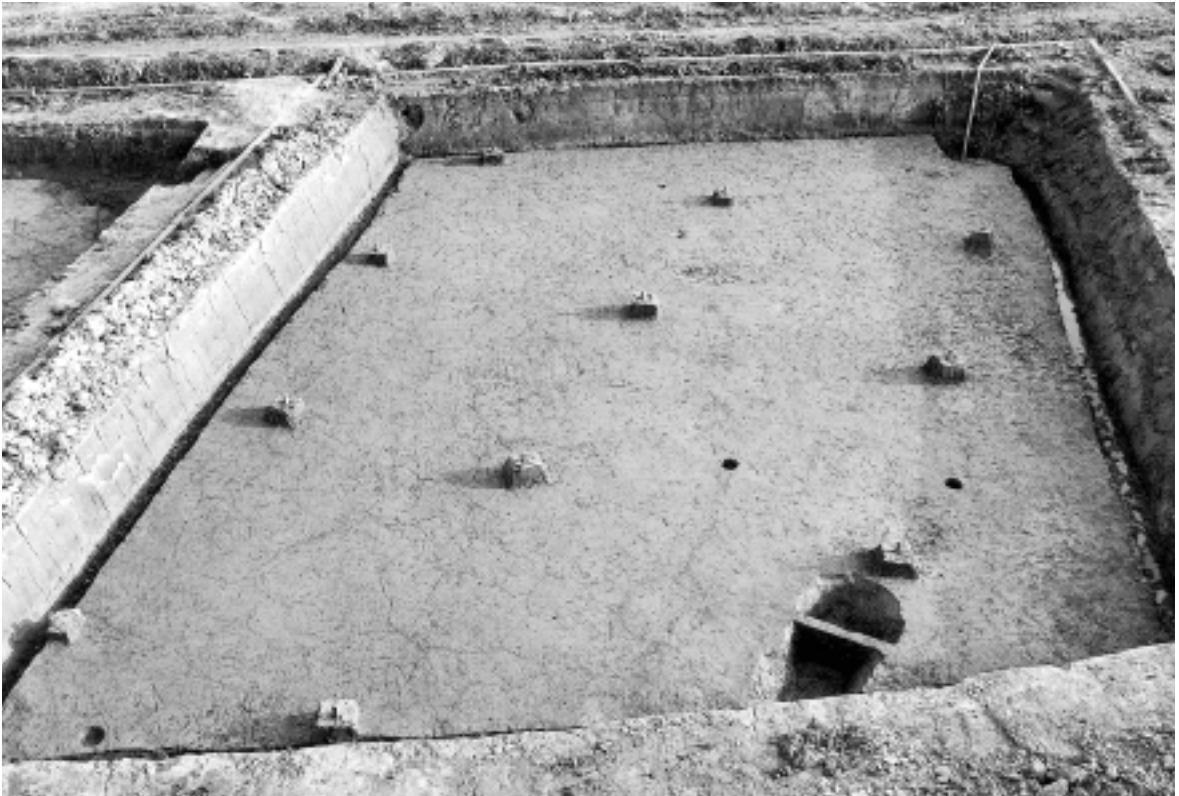


SD 2 遺物出土状況（北から）



SB 2 完掘状況（南から）





B区検出遺構全景（北から）



SD18（西から）

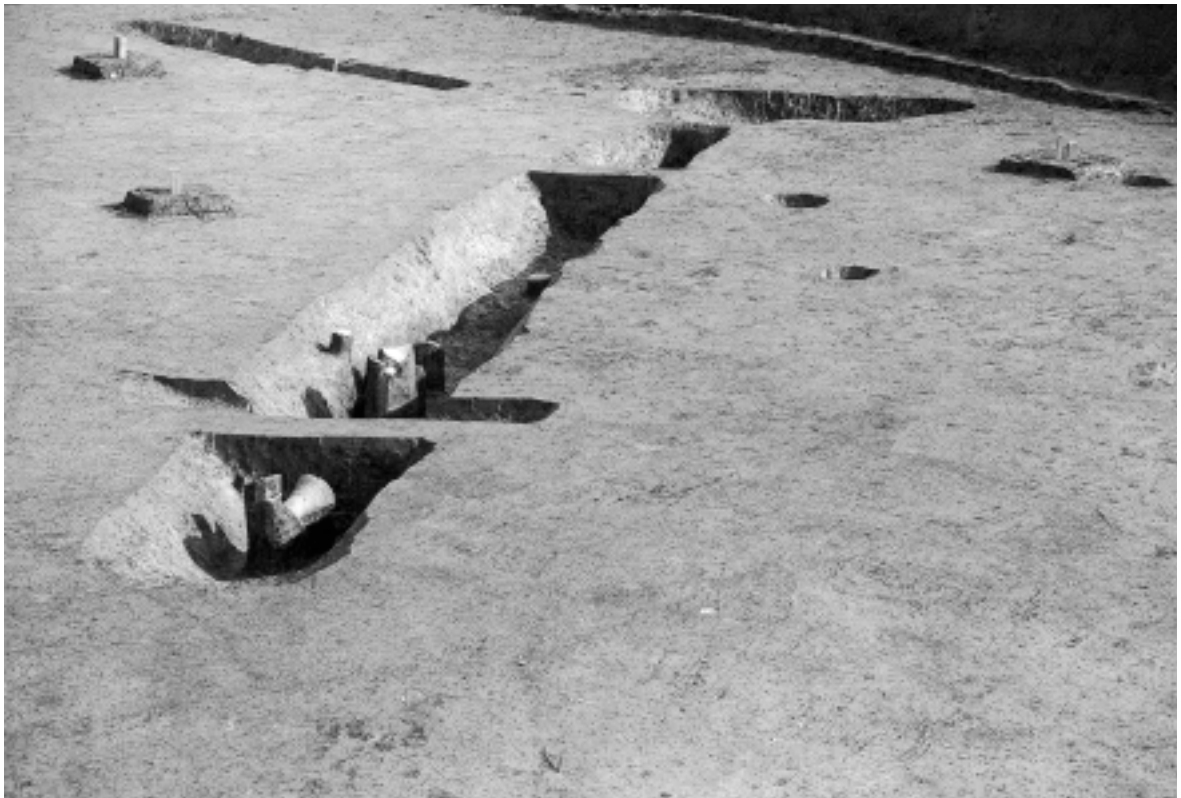
PL.22



B区検出遺構全景



B区東壁セクション



B区SD 7 遺物出土状況



同上

PL.24



B区SD7セクション



B区SD9遺物出土状況

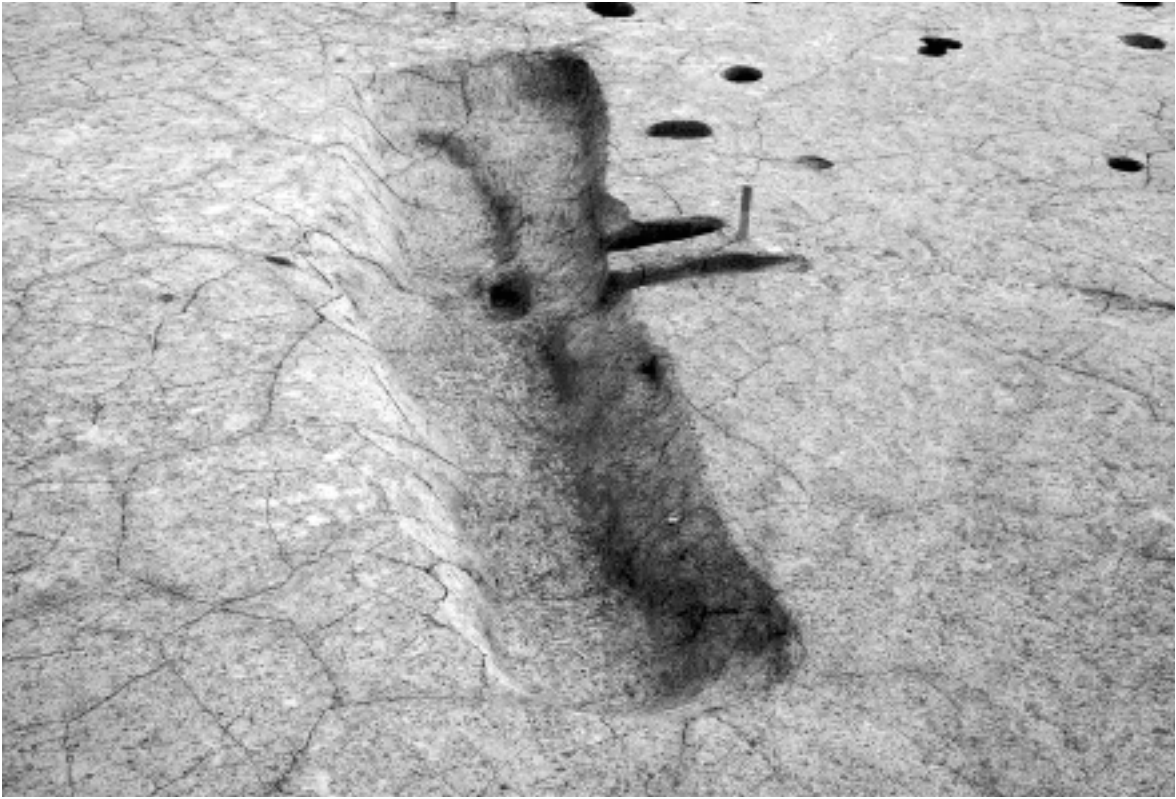


C区検出遺構全景

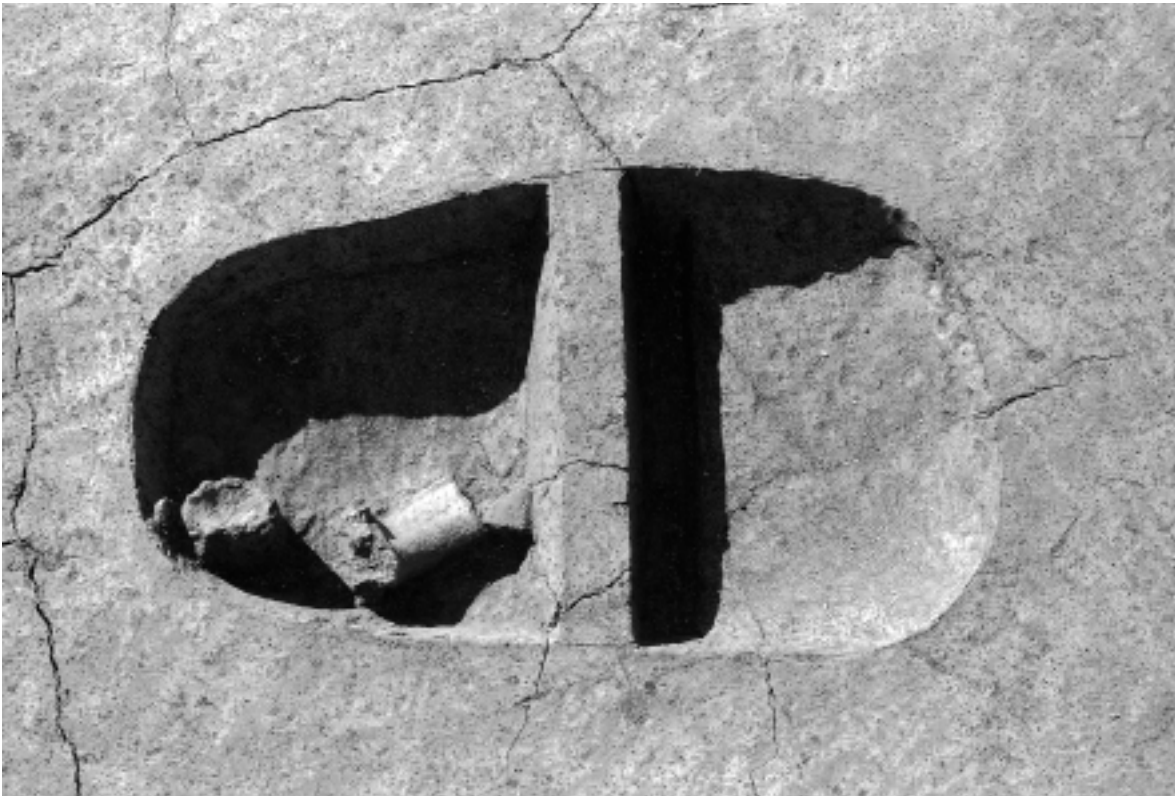


C区SK 8 遺物出土状況

PL.26



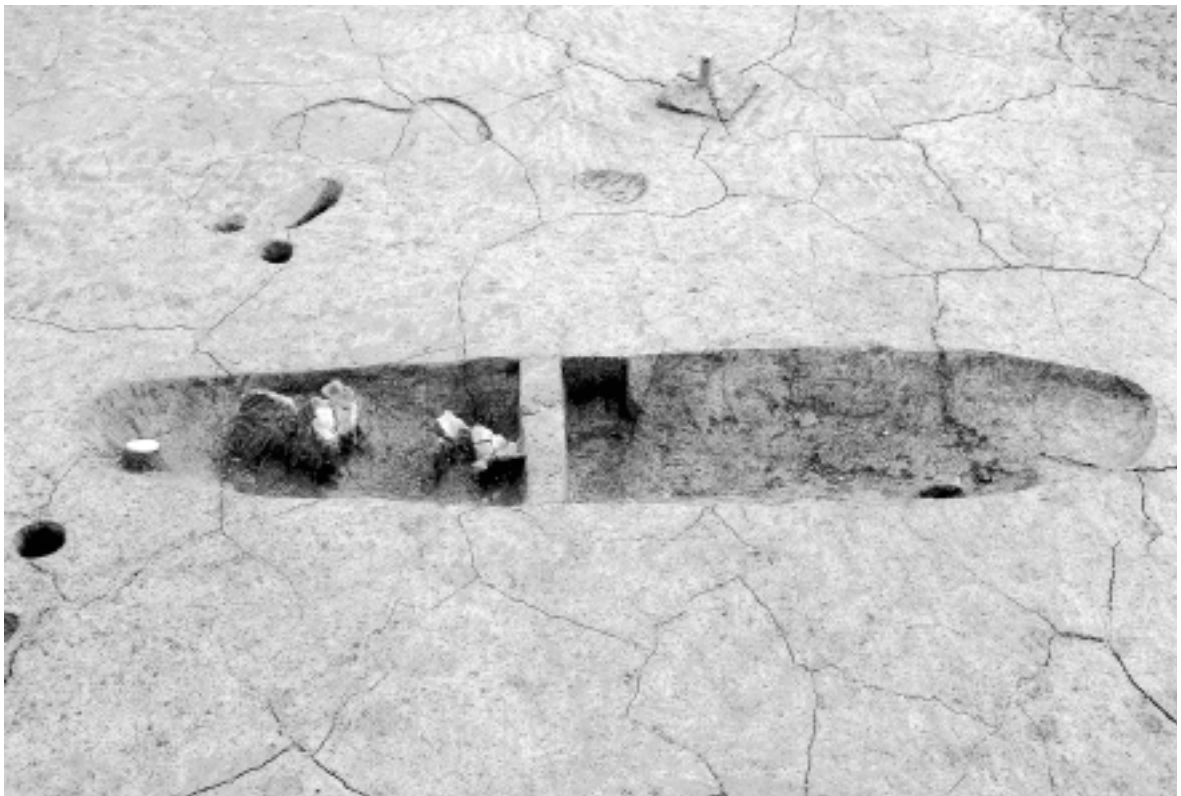
C区SK 8 完掘状况



C区SK 9 遺物出土状况



C区SD11遺物出土状況



C区SD12遺物出土状況



C区SD15



B区SK 4



B区SK 5



B区SD 7



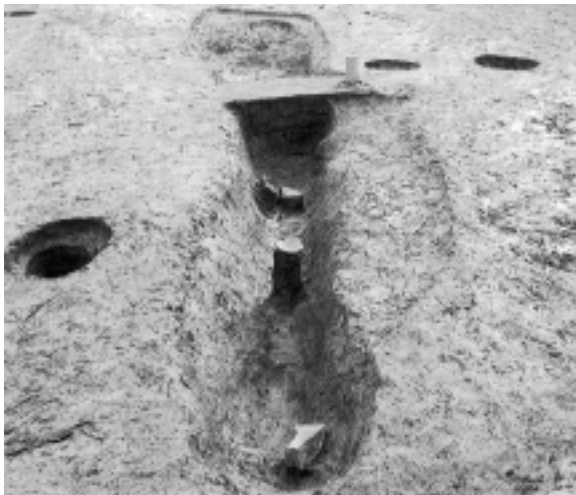
B区SD 7



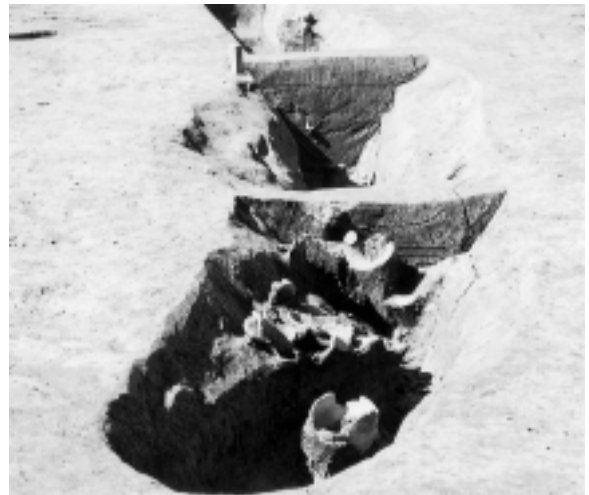
C区SK 8

・ 区各遺構遺物出土状況





SD16 (北より)



SD17遺物出土状況 (東より)



SK10 (手前)・SD17・SB10付近完掘状態



SD17セクション



SK10セクション (西より)



SK10遺物出土状況 (北より)

B区各遺構遺物出土状況

PL.30



B区完掘状況（南から）



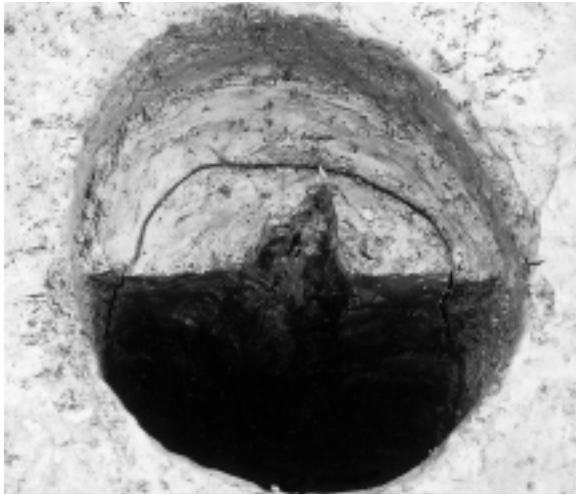
B区西壁セクション



C区完掘状況（南から）



C区西壁セクション



A区SB 2 - P 4 半截状态



A区SK 2 土器出土状况



A区SK 2 土器出土状况



B区土器出土状况

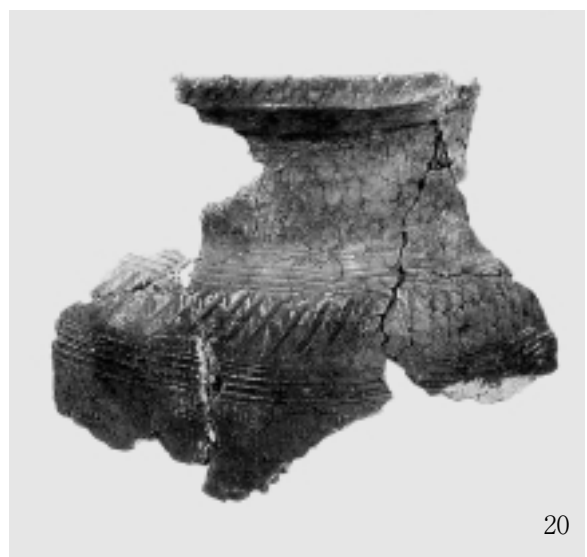
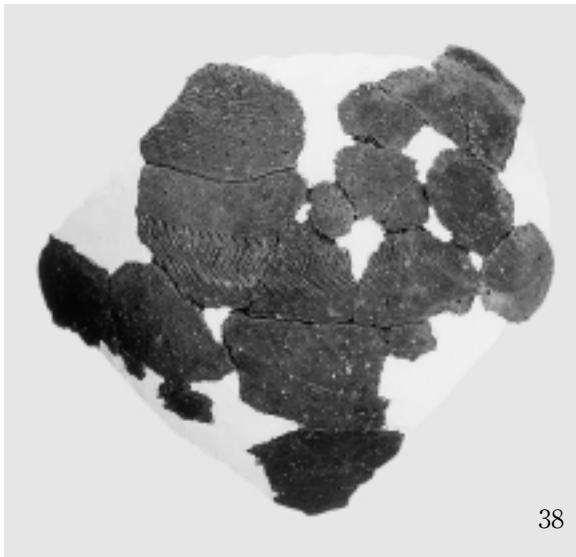


区石器出土状况

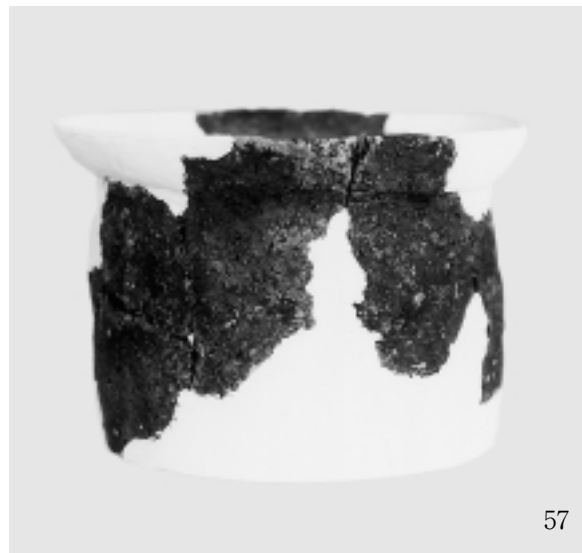
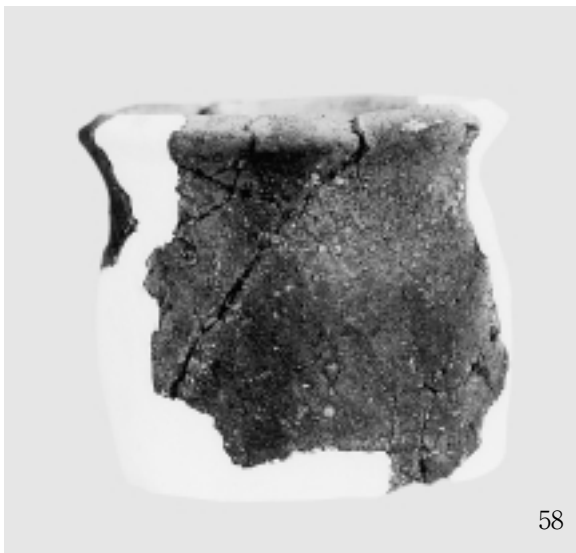


区石器出土状况

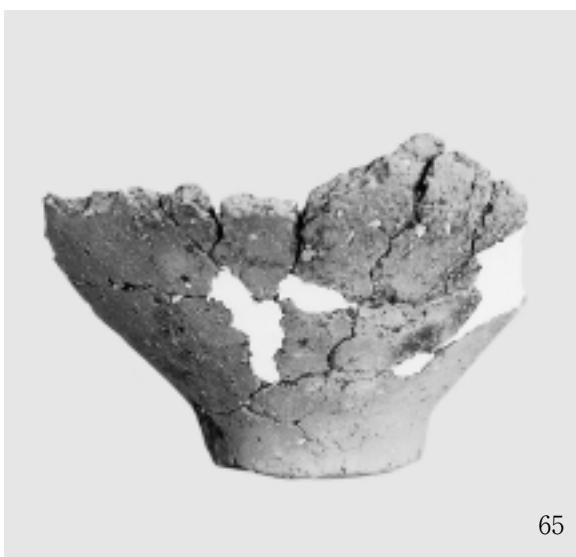
· · 区遺物出土状况



A区出土の弥生土器



A区出土の弥生土器

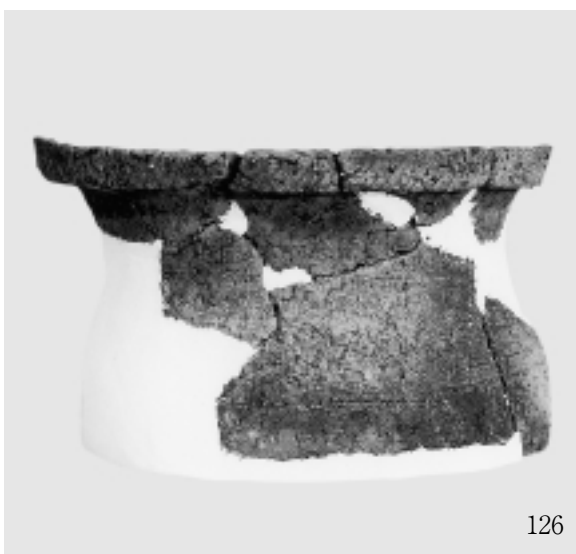
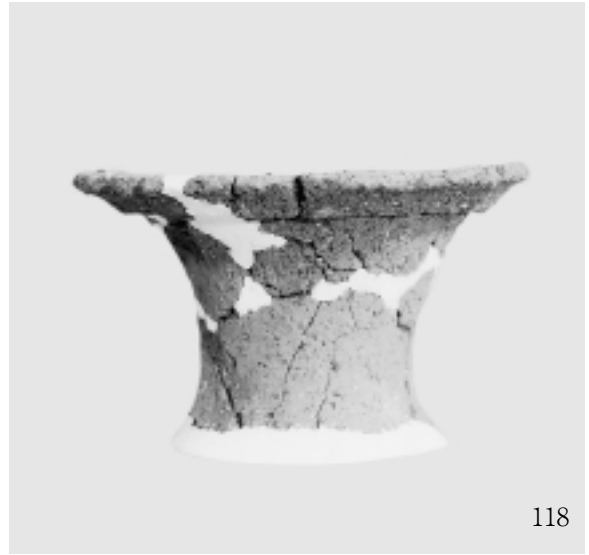


A区出土の弥生土器

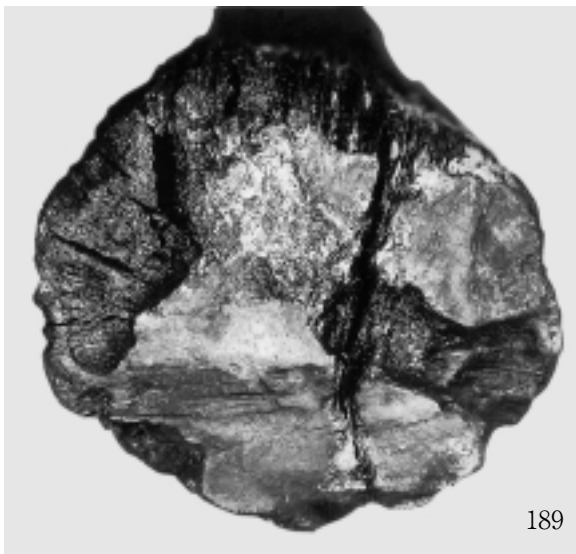


A区出土の弥生土器

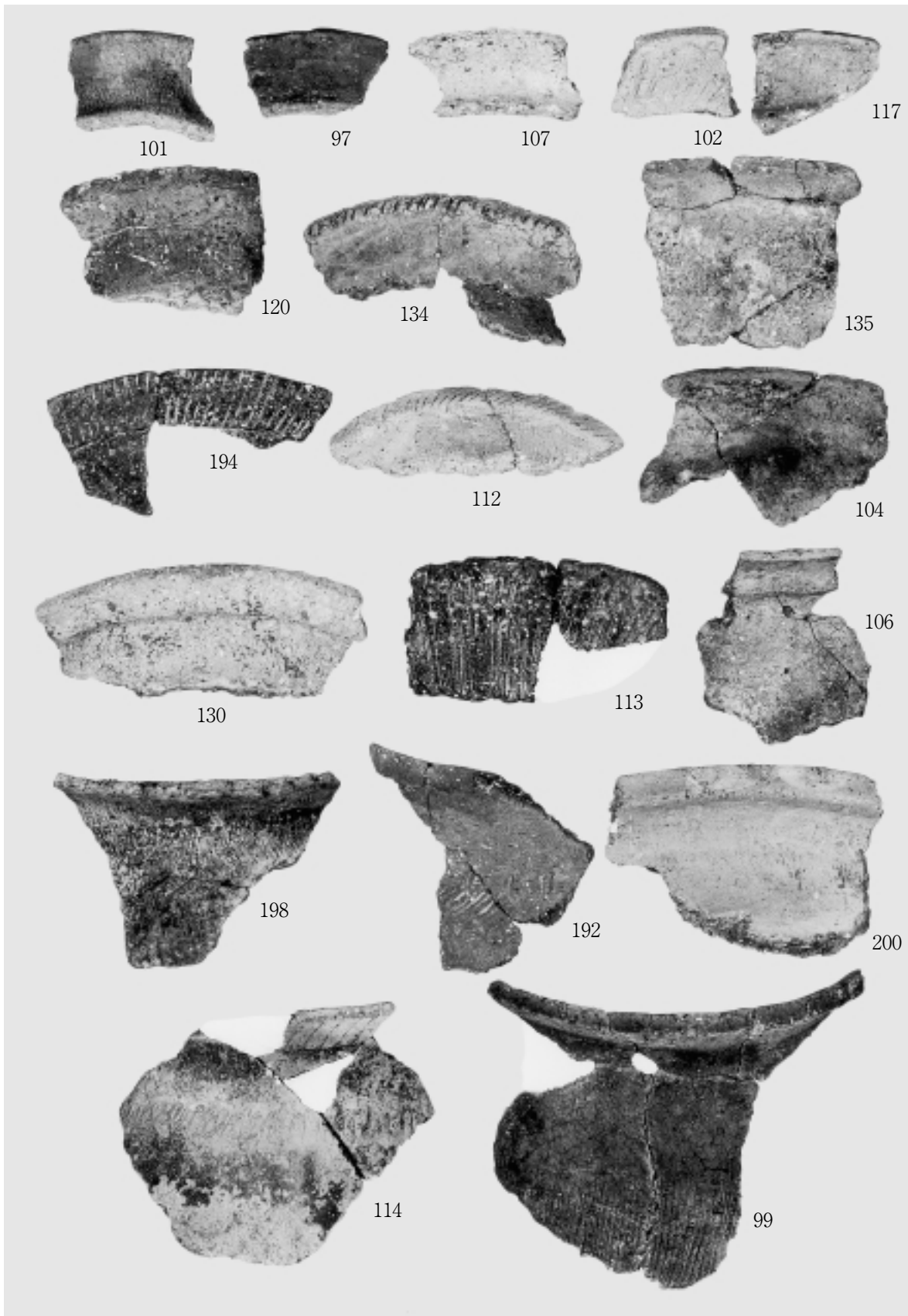




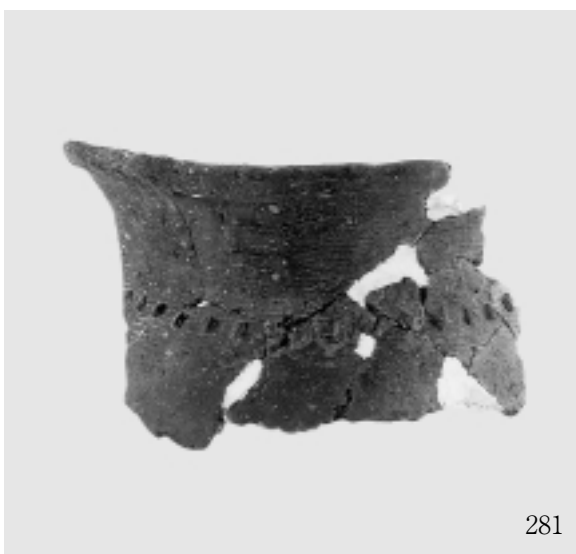
B・ A区出土の弥生土器



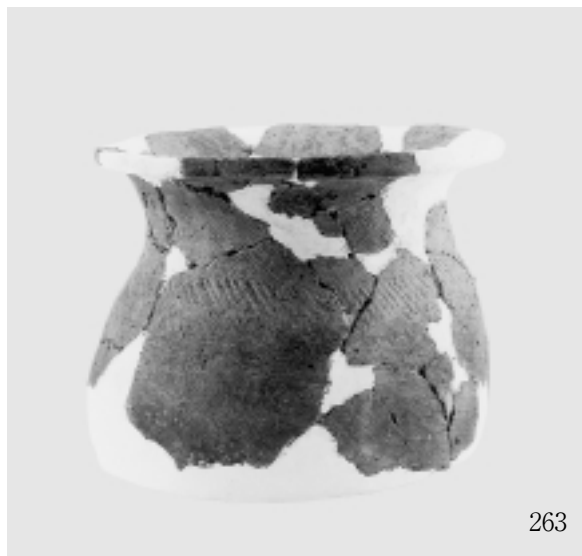
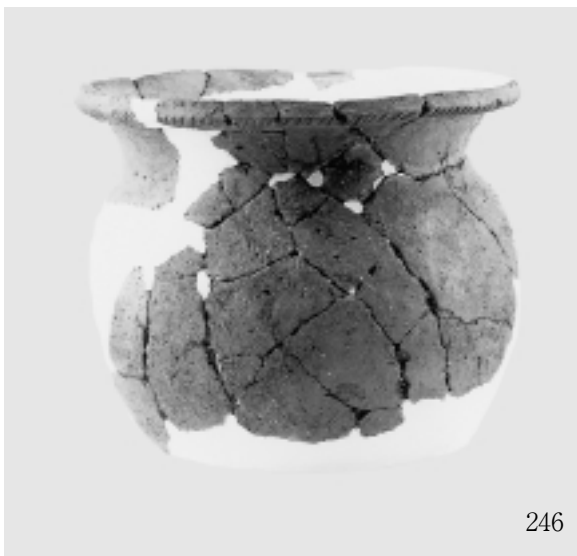
A区出土の柱根・弥生土器



B区・ A区出土の弥生土器



C・B・C区出土の弥生土器



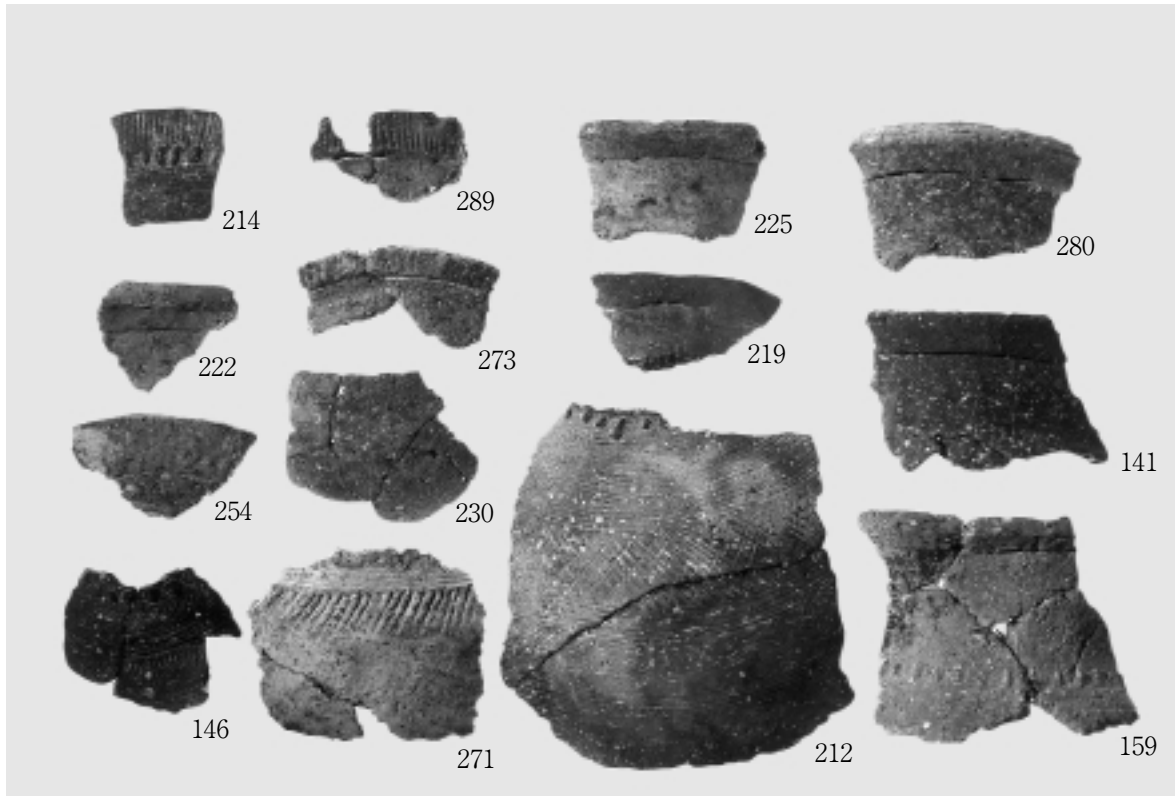
C・B・C区出土の弥生土器



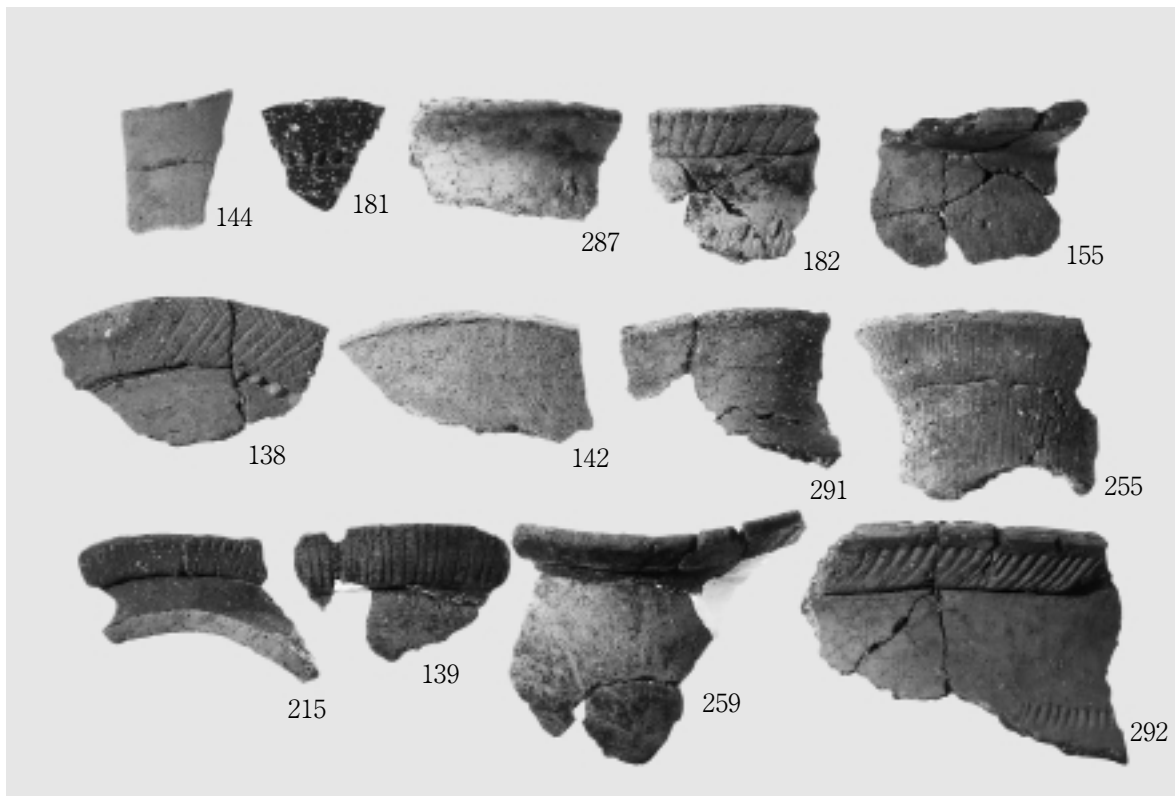
C・B・C区出土の弥生土器



B・C区 出土の弥生土器

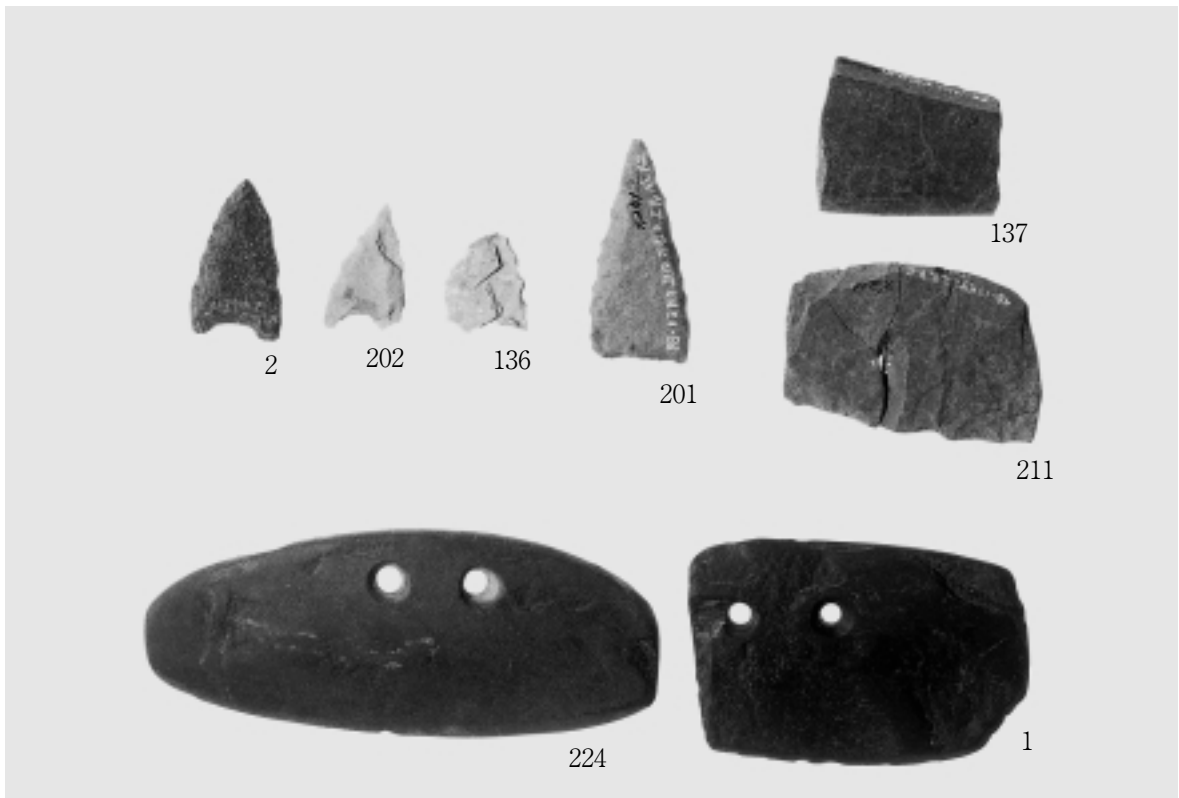


C・B・C区の弥生土器

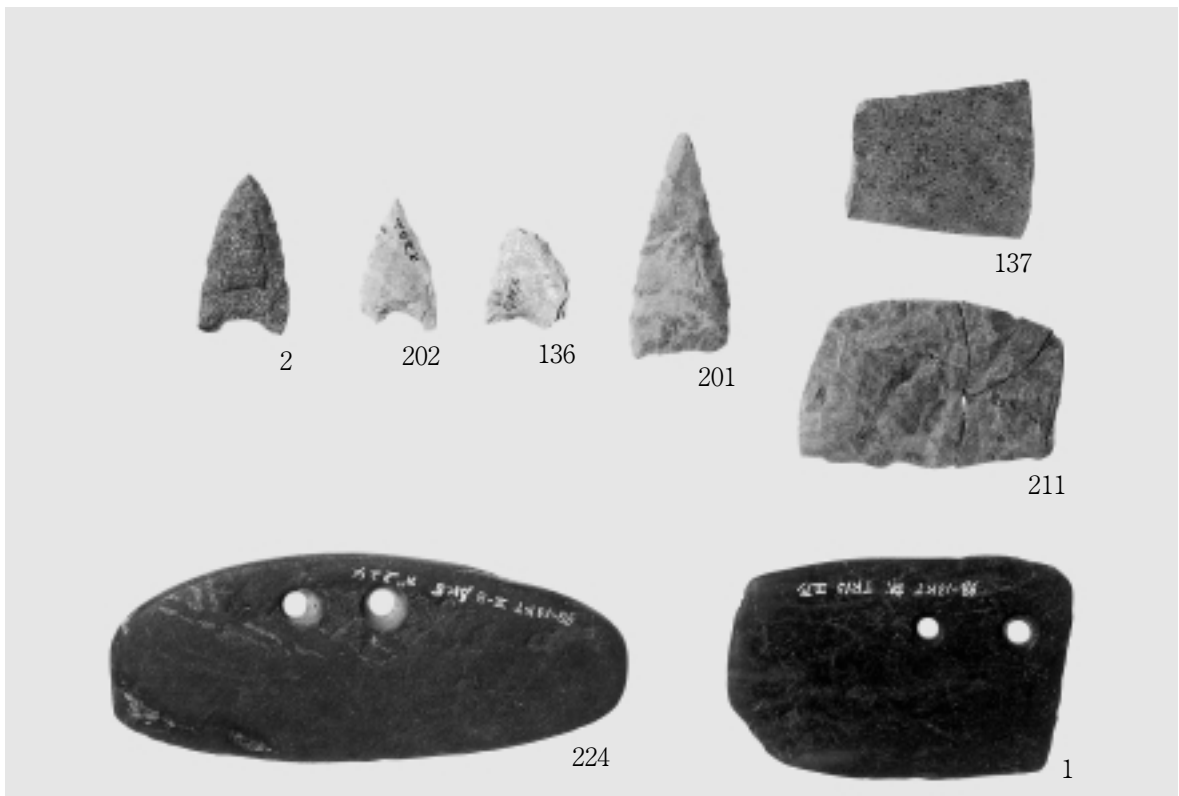


同上

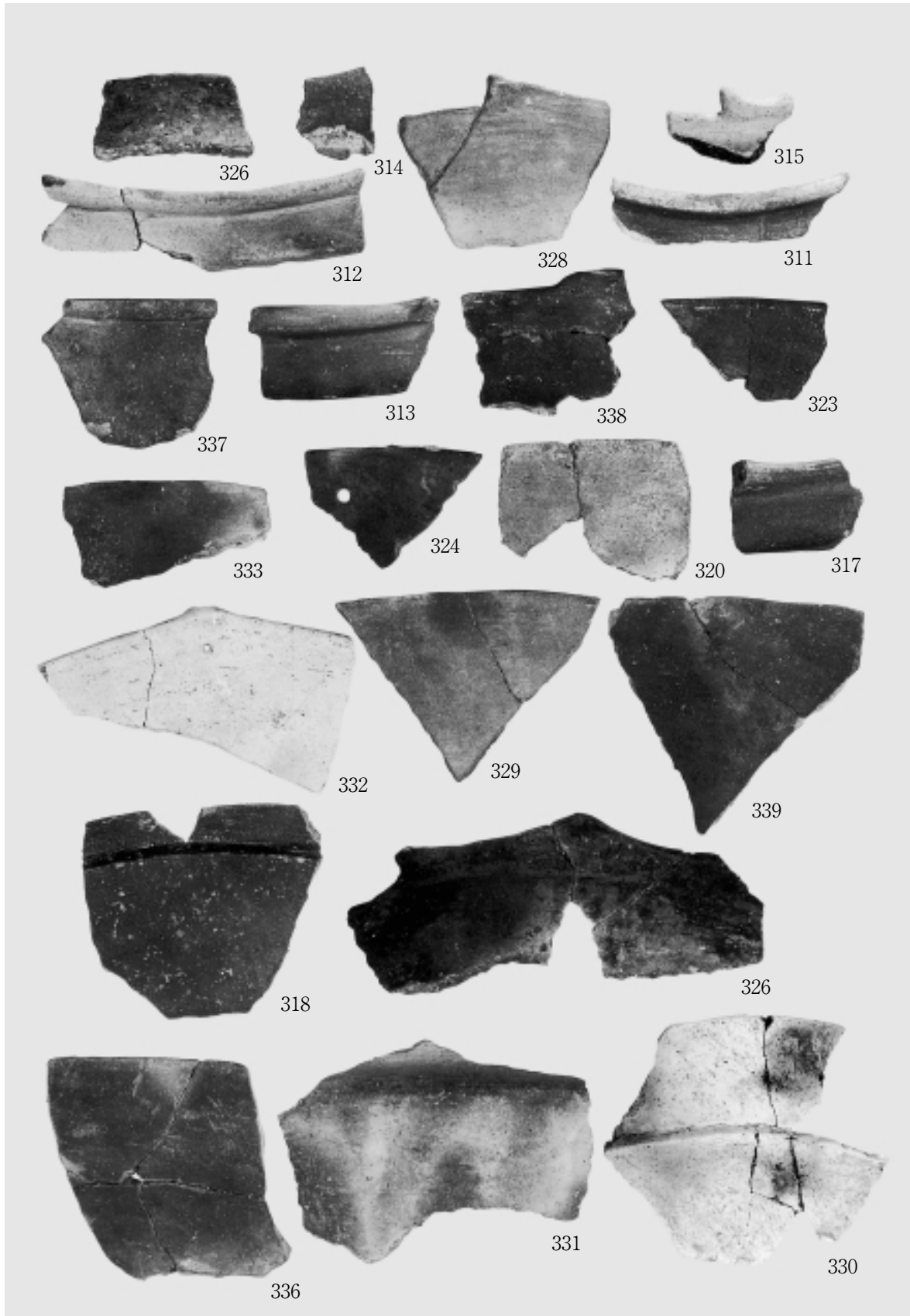




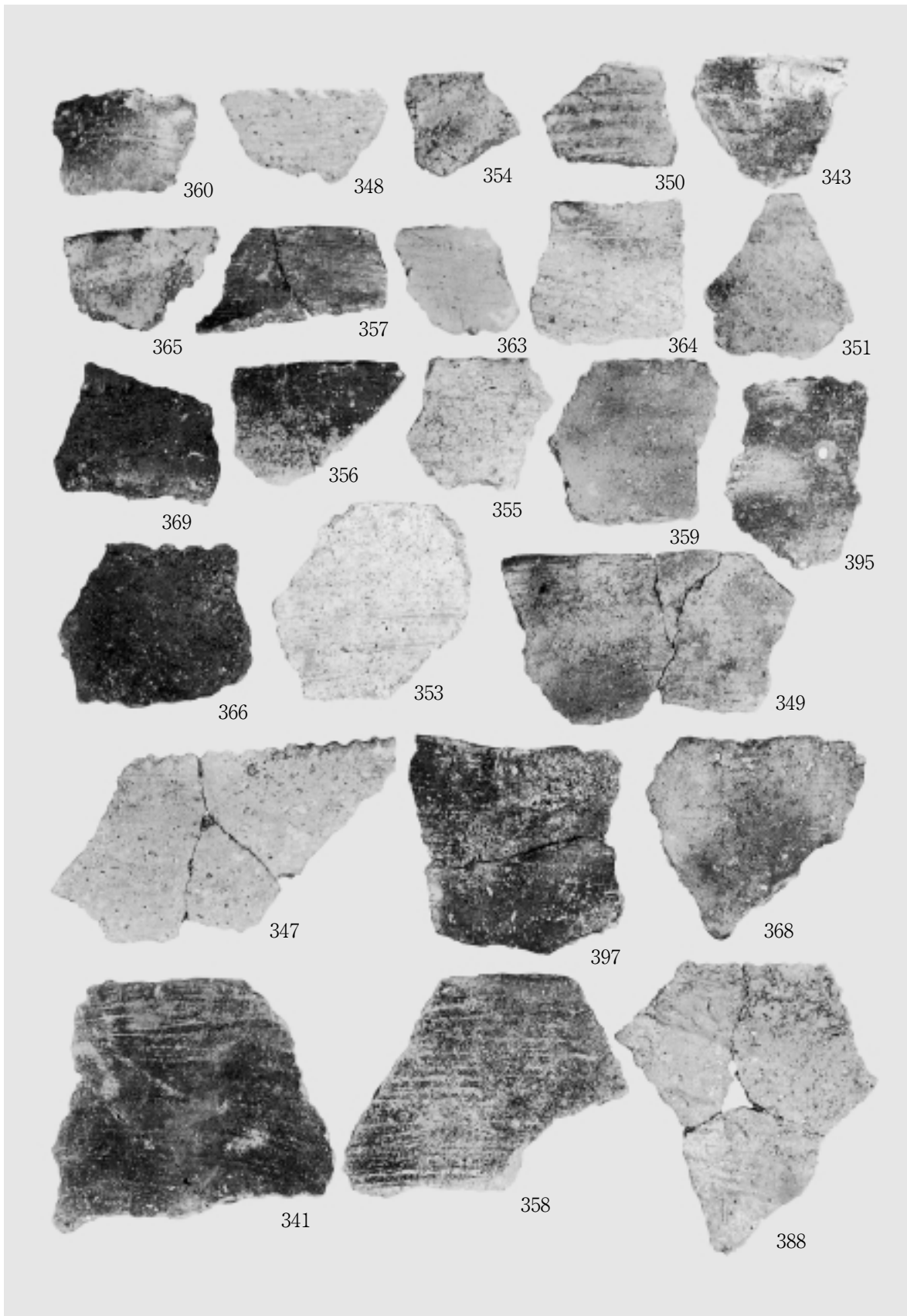
～ 区の石器



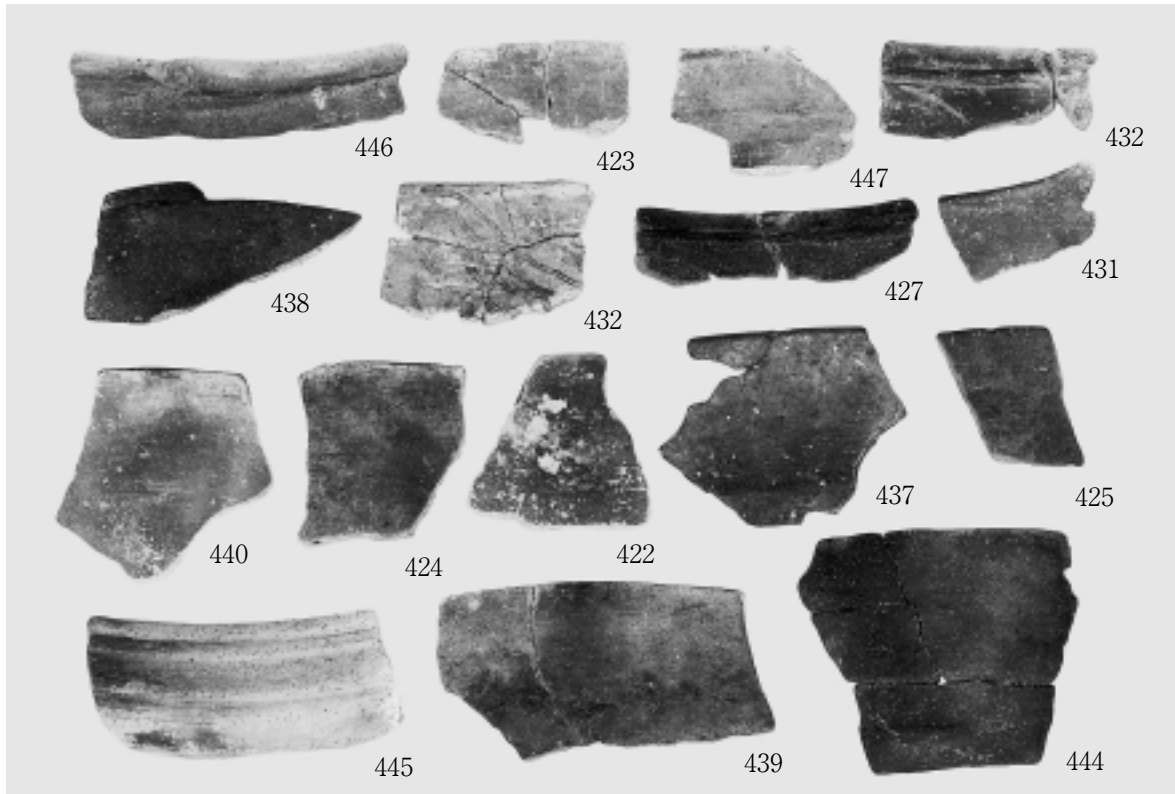
同上裏面



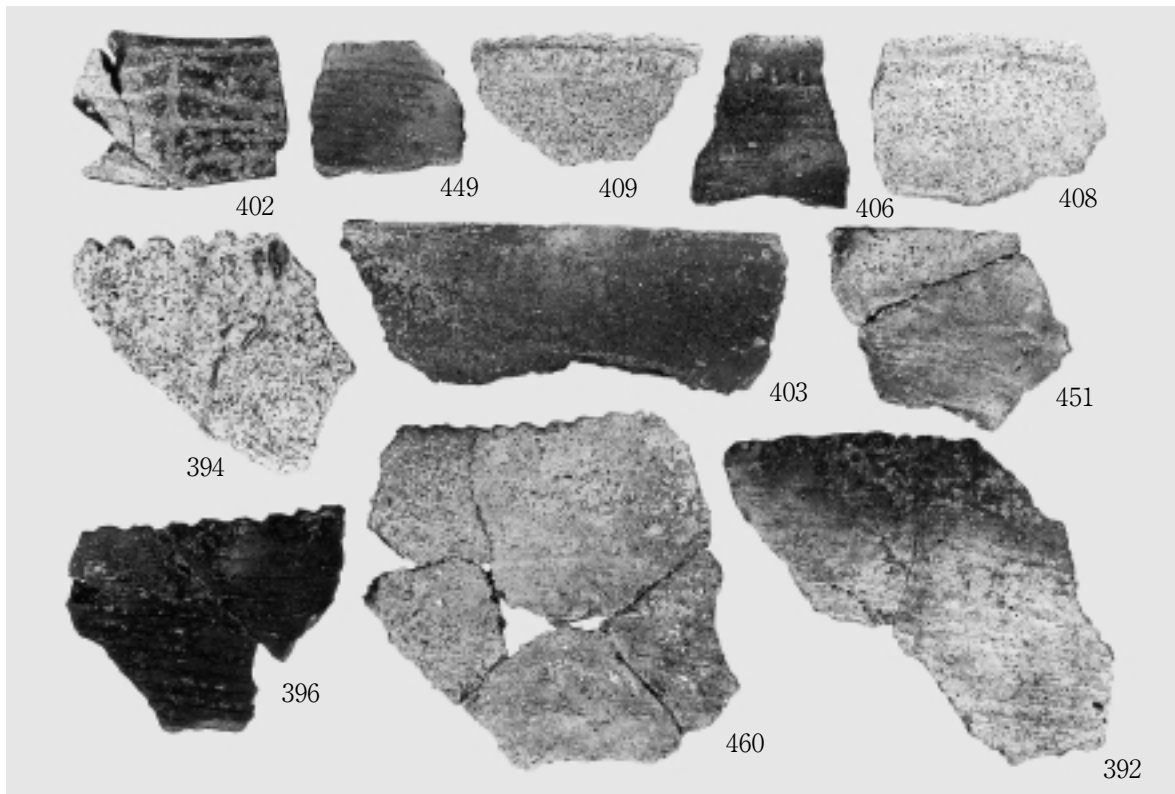
B区 層出土の縄文晩期浅鉢



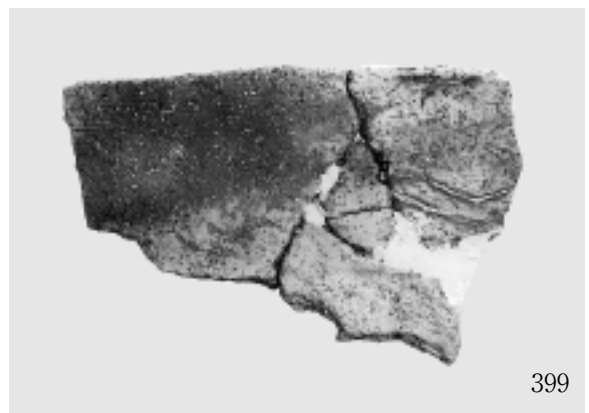
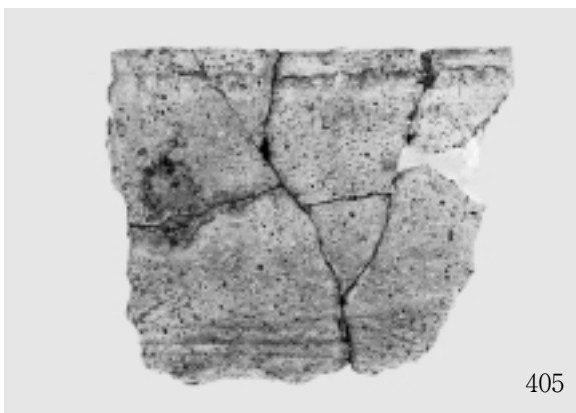
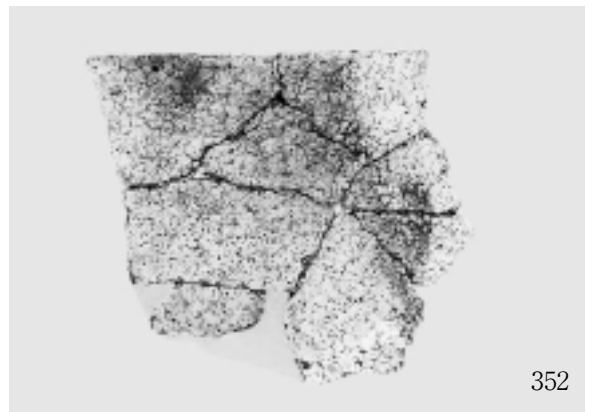
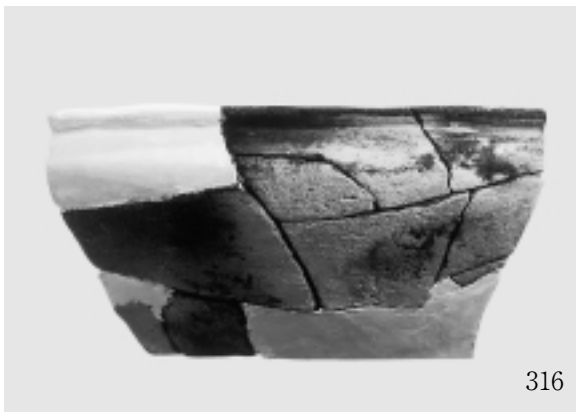
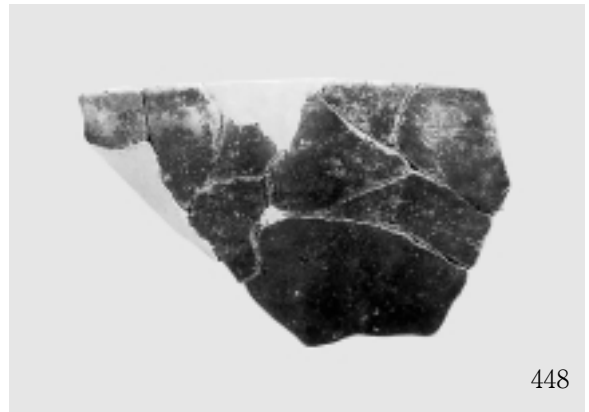
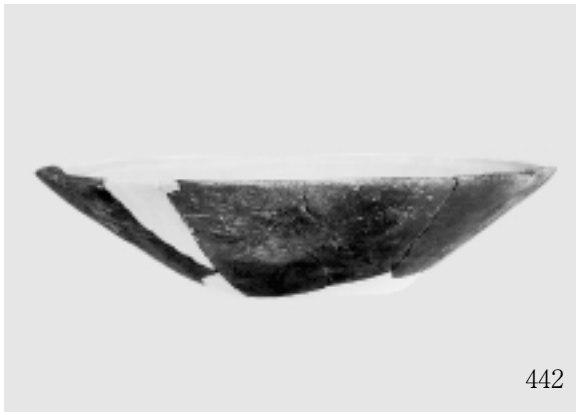
区出土の縄文晩期深鉢



区出土の縄文晩期浅鉢

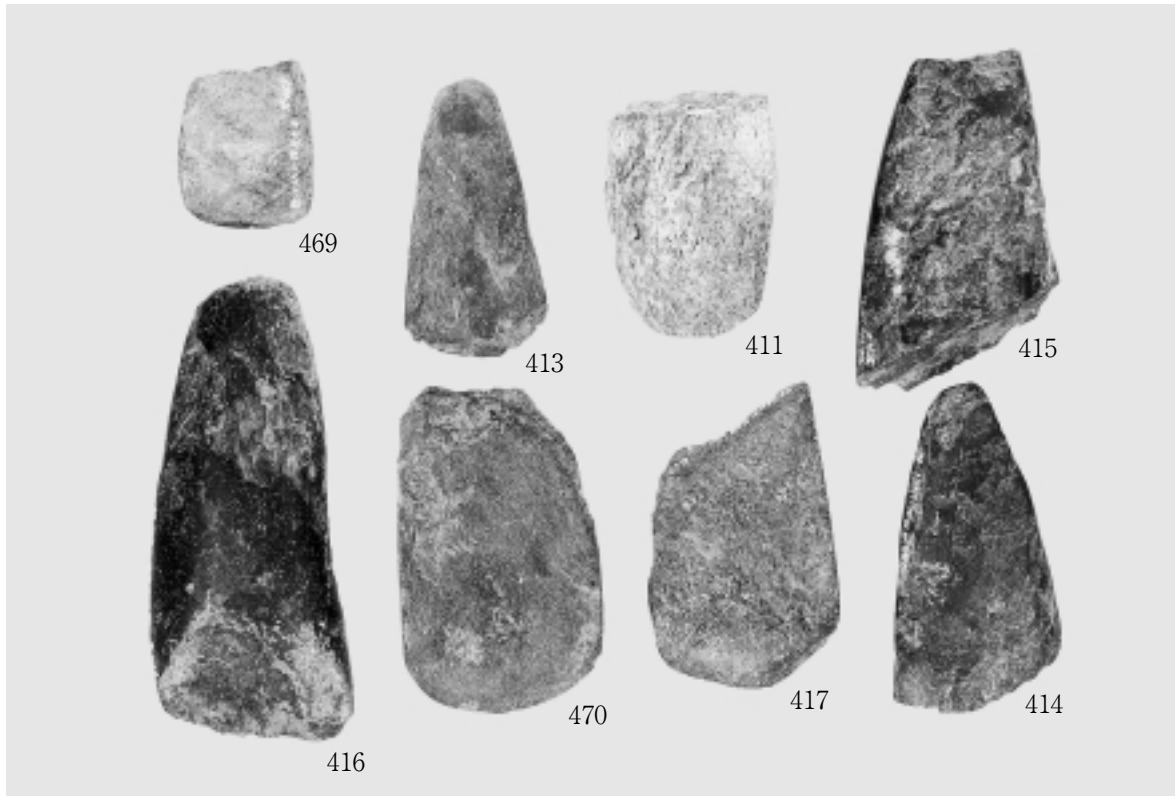


区出土の縄文晩期浅鉢(402)・同深鉢

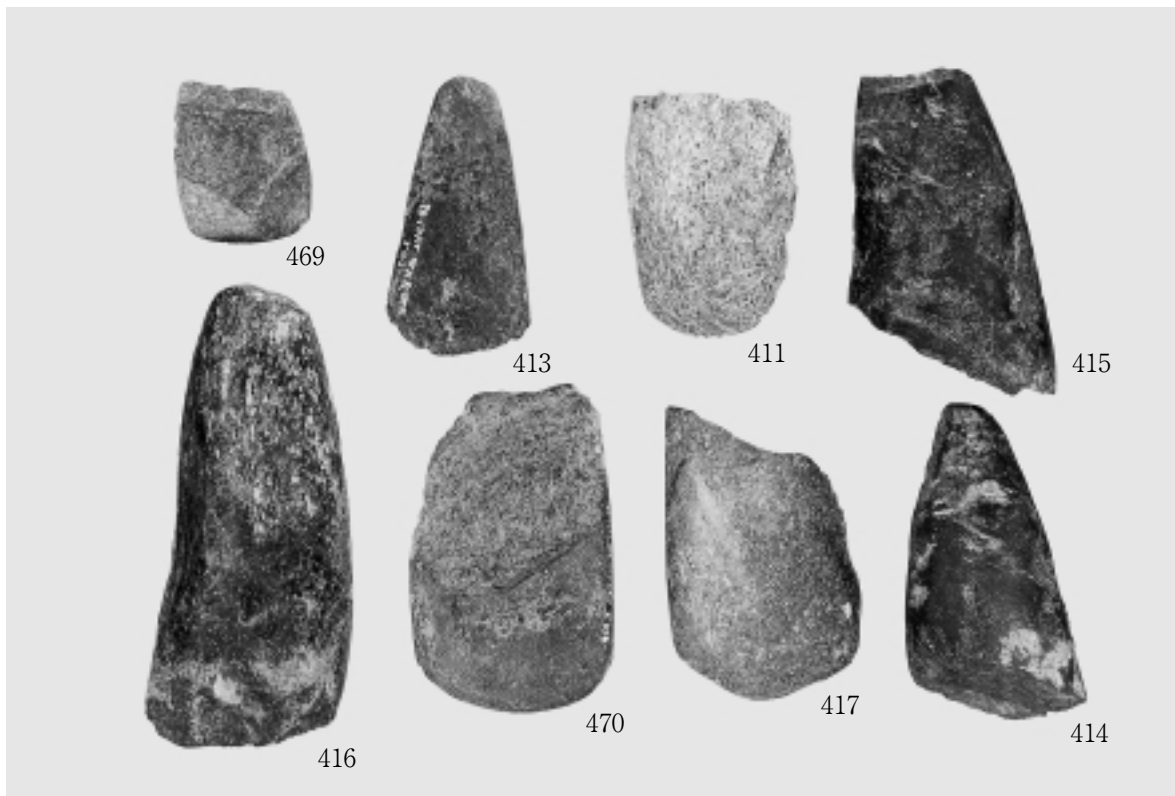


区出土の縄文晩期土器

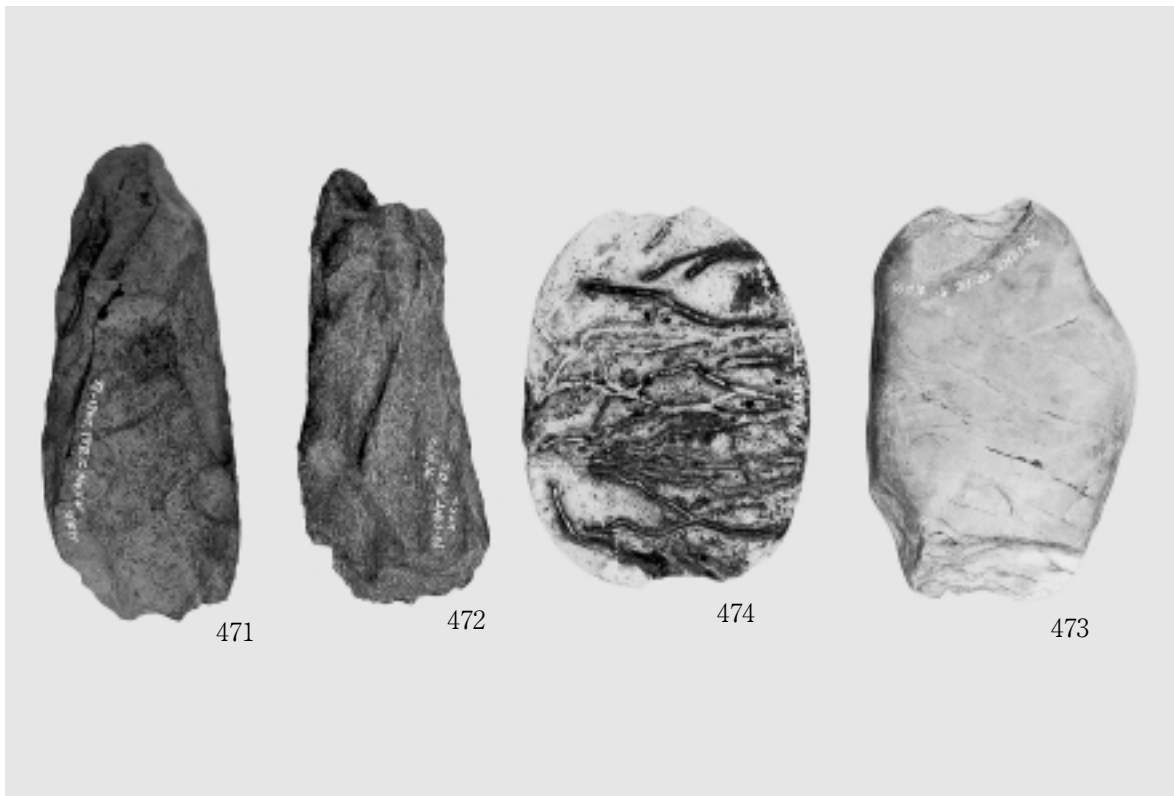
PL.50



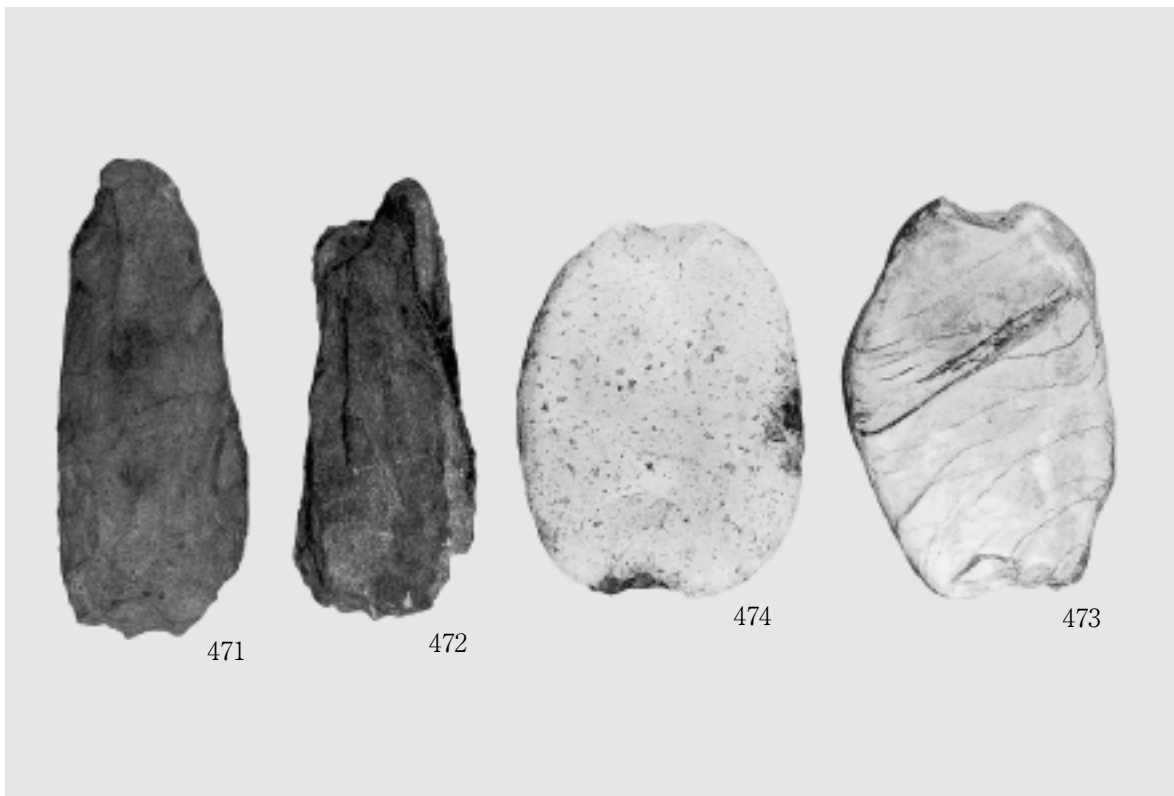
区出土の磨製石斧



同上裏面



区出土の打製石斧と石錘



同上裏面

ふりがな	きたたかだいせき							
書名	北高田遺跡							
副書名	高知自動車道（伊野～須崎）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書							
シリーズ番号	第50集							
編著者名	出原恵三・池澤俊幸・久家隆芳							
編集機関	(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター							
所在地	〒783 - 0006 高知県南国市篠原南泉1437 - 1 TEL(088 - 864 - 0671)							
発行年月日	2000年3月31日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
		市町村	遺跡番号	。	。			
北高田遺跡	高知県土佐市	39381	050089	33° 29 30	133° 18 21	1998年5月25日 ） 1999年12月1日	5400	高知自動車道（伊野～須崎）建設に伴う事前の発掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
北高田遺跡	集落跡	縄文時代 晩期 弥生時代 後期	竪穴住居跡・ 掘立柱建物柱 跡・土坑等	縄文晩期土器 ・弥生土器等				



高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第50集

---

## 北 高 田 遺 跡

- 四国横断自動車道(伊野～須崎間)建設に伴う文化財発掘調査報告書 -

---

2000年3月

編集 (財)高知県文化財団 埋蔵文化財センター

発行 高知県南国市篠原南泉1437-1

Tel. 088 - 864 - 0671

印刷 共和印刷株式会社